

茨城県教育財団文化財調査報告第164集

主要地方道つくば真岡線緊急地方道路
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

明石遺跡
明石北原遺跡
上白畑遺跡
(上巻)

平成12年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第164集

主要地方道つくば真岡線緊急地方道路 整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

あけし 遺跡
明石

あけし きたはら 遺跡
明石北原

かみ しらはた 遺跡
上白畑

(上 卷)

平成 12 年 3 月

寄贈	平成
歴史・人類学系	年
	月
	日

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

00605672



明石遺跡遠景



明石遺跡発掘全景



重なり合う住居跡群 (第122号住居跡他)



罎の補強材として使われていた甔 (第163号住居跡)

序

茨城県は、長期的な展望のもとに、県土の基盤整備を行っております。道路網につきましても、県土60分構想の具体化や円滑な都市交通確保を図るなど、ゆとりある社会の実現をめざして快適な道路の整備を進めております。

主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備事業は、つくば市から真岡市にかけての交通渋滞の緩和を目的として計画されたものであります。その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である明石遺跡、明石北原遺跡及び上白畑遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査について委託を受け、平成9年4月から平成10年3月、平成11年1月から3月にかけて実施してまいりました。

本書は、明石遺跡、明石北原遺跡及び上白畑遺跡の成果を収録したものであり、本書が学術的な資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会、明野町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成12年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成9年度及び平成10年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字明石に所在する明石遺跡及び明石北原遺跡、茨城県真壁郡明野町大字向上野に所在する上白畑遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

明石遺跡	平成9年4月1日～平成10年3月31日
明石北原遺跡	平成9年4月1日～平成10年3月31日
上白畑遺跡	平成11年1月1日～平成11年3月31日
整 理	平成11年4月1日～平成12年3月31日
- 3 明石遺跡、明石北原遺跡、上白畑遺跡の発掘調査は、調査第一課長沼田丈夫の指揮のもと、明石遺跡・明石北原遺跡を調査第3班長海老澤稔、主任調査員渡辺幸雄、副主任調査員大関武が、上白畑遺跡を調査第2班長中山忠久、主任調査員真崎紀雄、寺門千勝が担当した。
- 4 明石遺跡・明石北原遺跡・上白畑遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理課長川井正一の指揮のもと、主任調査員寺門千勝、副主任調査員大関武が担当した。第1章・第2章・第3章第1節～第3節1～3・4(2)～(4)・5(2)～(4)・6・7、第4節(旧石器～弥生時代、中世～近・現代)、第4章及び第5章は寺門が、第3章第3節4(1)・5(1)、第4節(古墳時代、奈良・平安時代)は大関が執筆した。
- 5 本書の作成にあたり、「墨書土器の文字解読」については国立歴史民俗博物館教授の平川南氏に、「平安時代後期」の土器変遷については宮城県文化財保護課技術主査の村田晃一氏に、「施釉陶器産地同定及び時期について」は文化庁美術工芸課の齋藤孝正氏に、「茨城県弥生時代後期の土器変遷」については大洗町立祝町小学校教諭の海老澤稔氏に、それぞれ御指導をいただいた。
- 6 明石遺跡から出土した鉄製品の分析及び保存処理については、岩手県立博物館に委託した。
- 7 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を用いて区画した。明石遺跡はX軸 = +20,120m Y軸 = +20,080m、明石北原遺跡ではX軸 = +20,600m Y軸 = +19,900m、上白畑遺跡はX軸 = +22,600m Y軸 = +19,680mの交点を基準点とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、その組み合わせで「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに、小調査区も同様に北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」「B2b2区」のように呼称した。

2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

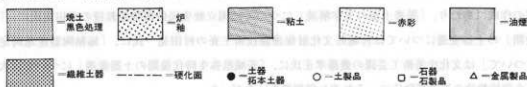
遺構 住居跡・方形竈穴状遺構 - S I 土坑・大型土坑 - S K 陥し穴 - T P

堀・溝 - S D 井戸跡 - S E 不明遺構・格納壕跡 - S X

遺物 土器 - P 土製品 - D P 石器・石製品 - Q 金属製品 - M 拓本土器 - T P

土層 擾乱 - K

3 遺構及び遺物の実測図中の表示



4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、以下のとおりである。

- 遺跡全体図は縮尺600分の1とし、各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- 遺物は、原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。
- 「主軸方向」は、炉・竈を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N-10°-E N-10°-W)なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。
- 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台(脚)径 E-高台(脚)高 F-つまみ径 G-つまみ高とし、単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。
- 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測(P)番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。
- 「弥生時代の遺構と遺物」の項では、弥生時代後期の住居跡と遺物が説明されている。ここでいう弥生時代後期は前葉・中葉・後葉の3時期区分とし、那珂川下流域における土器型式(海老澤 稔氏の編年)をあてるものとする。

抄 録

ふりがな	しやうちほうどうつくばもつかせんきんきゆうちほうとうるせいびじぎょうちないまいぞうふんかざちようざうこくしよ									
書名	主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書									
副書名	明石遺跡, 明石北原遺跡, 上白畑遺跡									
巻次										
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告									
シリーズ番号	第164集									
編著者名	寺門千勝 大岡武									
編集機関	財団法人 茨城県教育財団									
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587									
発行機関	財団法人 茨城県教育財団									
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587									
発行年月日	2000(平成12)年3月21日									
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因		
あけし 明石遺跡	あけし 茨城県つくば市 大字明石字北の坪 334番地の2いほか	08220	36度 10分 171	140度 03分 47秒	27m~ 30m	19970401 ~ 19980331	8,115㎡	主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備に伴う事前調査		
あけしたはら 明石北原遺跡	あけしたはら 茨城県つくば市 大字明石字北原 616番地の3いほか	08220	36度 11分 221	140度 03分 04秒	30m	19970401 ~ 19980331	4,503㎡			
あかしはた 上白畑遺跡	あかしはた 茨城県真壁郡明野町 大字向上野字白畑遺跡 1526番地の2いほか	08502	36度 12分 145	140度 03分 07秒	29m	19990101 ~ 19990331	3,396㎡			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項			
明石遺跡	その他	旧石器時代		石器(尖頭器・ナイフ形石器・削器・石核・削片)			旧石器時代から近世まで長期にわたる生活跡が確認できた複合遺跡である。筑波地域では数少ない弥生時代の集落跡が確認されている。集落跡の中では、特に奈良・平安時代の集落が中心となっている。			
		縄文時代	陥し穴 土坑	4基 1基	縄文土器(深鉢片), 石器(石鏃・打製石斧・燧石・凹石)					
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡	13軒	弥生土器(広口盤片), 石器(石鏃), 礫石					
		古墳時代	竪穴住居跡 土坑	40軒 3基 1条	土器器(坏・椀・鉢・高坏・器台・甕・壺・甌・ミニチュア土器・手捏土器), 須恵器(坏・坏蓋・甕), 土製品(球状土罐), 石製品(管玉・双孔円板), 石器(礫石), 鉄製品(刀子・鉄鏃・鉄先)					

		奈良・平安時代	竪穴住居跡 106軒 大形土坑 2基 土坑 8基	土師器(坏・片口坏・皿・片口 鉢・高台付碗・鉢・蓋・甕羽釜・ 甕・ミニチュア土器・手捏土器)、 須恵器(坏・高台付坏・盤・蓋・ 長腹瓶・鉢・甕・瓶)、灰釉陶器、 緑釉陶器、土製品(土玉・球状土 師・管状土師・紡錘車・置き甕)、 ガラス製品(丸玉)、石製品(紡錘 車)、石器(砥石)、鉄製品(紡錘 車・刀子・鉄線・鉄釘)、銅製品、 古鏡(和銅開元)	
	その他	中・近世	方形竪穴状遺構 2軒 土坑 3基 堀 2条 溝 8条	土師質土器(皿)、陶器(片口鉢・ 甕)、白磁(高台付碗)、青磁(櫻 梅文碗)、磁器(皿)、土製品(筒 掛け)、鉄製品(刀子・鉄釘)、古 銭(元祐通寶・寛永通寶)	
		近・現代	格納壕跡 1基	鉄製品(缶)	
		時期不明	竪穴住居跡 23軒 (含竪穴状遺構) 土坑 222基 井戸跡 1基 溝 10条 埋没谷 1か所	土師器・須恵器・土師質土器	
明石北原遺跡	その他	時期不明	土坑 6基 溝 3条	縄文土器・土師器・須恵器・土師 質土器・陶器、石器(礫石)、銅製品 (煙管)	方向が南北の溝 3条を確 認した。
上白畑遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 1軒 陥し穴 1基 土坑 2基 不明遺構 1基 遺物包含層 1か所	縄文土器(無鉢、浅鉢、大形深鉢)、 石器(尖頭器、打製石斧、磨石、 四石、石鏡)	遺物包含層から縄文時代 中期の遺物が豊富に出土 している。
	その他	時期不明	土坑 16基 溝 2条 焼土遺構 3基	縄文土器、土師器、陶器、土師質 土器。	

目 次

—上 卷—

序

例言

凡例

抄録

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 明石遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序の検討	9
第3節 遺構と遺物	11
1 旧石器時代の遺物	11
2 縄文時代の遺構と遺物	13
(1) 陥し穴	13
(2) 土坑	16
(3) 遺構外出土遺構	16
3 弥生時代の遺構と遺物	20
(1) 竪穴住居跡	20
(2) 遺構外出土遺物	44
4 古墳時代の遺構と遺物	47
(1) 竪穴住居跡	47
(2) 土坑	150
(3) 溝	152
(4) 遺構外出土遺物	157
5 奈良・平安時代の遺構と遺物	161
(1) 竪穴住居跡	161
第159号住居跡	369
第162号住居跡	373
(2) 大形土坑	415
(3) 土坑	423
(4) 遺構外出土遺物	429

—下 卷—

6	中・近世の遺構と遺物	433
	(1) 方形堅穴状遺構	433
	(2) 土坑	435
	(3) 堀	439
	(4) 溝	440
	(5) 遺構外出土遺物	447
7	その他の遺構と遺物	449
	(1) 堅穴住居跡・堅穴状遺構	449
	(2) 土坑	471
	(3) 井戸跡	503
	(4) 溝	504
	(5) 格納壕跡	505
	(6) 埋没谷	506
	(7) 遺構外出土遺物	507
第4節	まとめ	509
第4章	明石北原遺跡	529
第1節	遺物の概要	529
第2節	基本層序の検討	530
第3節	遺構と遺物	530
	1 土坑	530
	2 溝	532
	3 遺構外出土遺物	535
第4節	まとめ	536
第5章	上白畑遺跡	539
第1節	遺物の概要	539
第2節	基本層序の検討	539
第3節	遺構と遺物	540
	1 縄文時代の遺構と遺物	540
	(1) 堅穴住居跡	540
	(2) 陥し穴	543
	(3) 土坑	543
	(4) 不明遺構	546
	(5) 遺物包含層	549
	2 その他の遺構と遺物	559
	(1) 土坑	559
	(2) 溝	562
	(3) 焼土遺構	565
	(4) 遺構外出土遺物	566
第4節	まとめ	567

插图目录

—上卷—

第1图	明石遺跡・明石北原遺跡・ 上白畑遺跡周辺遺跡分布図	6	第33图	第135号住居跡実測図	42
第2图	明石遺跡・明石北原遺跡・ 上白畑遺跡調査区位置図	8	第34图	第135号住居跡出土遺物実測図	43
明石遺跡			第35图	第156号住居跡・出土遺物実測図	43
第3图	明石遺跡基本土層図	9	第36图	遺構外出土遺物実測図	45
第4图	明石遺跡調査区設定図	10	第37图	第2号住居跡実測図	47
第5图	旧石器遺構外出土遺物実測図(1)	11	第38图	第2号住居跡出土遺物実測図	48
第6图	旧石器遺構外出土遺物実測図(2)	12	第39图	第5号住居跡実測図	49
第7图	第1~3号陥し穴実測図	14	第40图	第5号住居跡出土遺物実測図	51
第8图	第4号陥し穴・出土遺物実測図	15	第41图	第11号住居跡実測図	53
第9图	第56号土坑・出土遺物実測図	16	第42图	第11号住居跡出土遺物実測図	55
第10图	遺構外出土遺物実測図(1)	17	第43图	第13号住居跡実測図	57
第11图	遺構外出土遺物実測図(2)	18	第44图	第13号住居跡出土遺物実測図	59
第12图	遺構外出土遺物実測図(3)	19	第45图	第16号住居跡実測図	61
第13图	第26号住居跡・出土遺物実測図	20	第46图	第16号住居跡出土遺物実測図	62
第14图	第33号住居跡・出土遺物実測図	22	第47图	第21号住居跡実測図	63
第15图	第36号住居跡実測図	23	第48图	第21号住居跡出土遺物実測図	64
第16图	第36号住居跡出土遺物実測図	23	第49图	第31・32号住居跡実測図	65
第17图	第37号住居跡実測図	24	第50图	第31号住居跡出土遺物実測図	66
第18图	第37号住居跡出土遺物実測図	25	第51图	第32号住居跡出土遺物実測図	67
第19图	第59号住居跡実測図	26	第52图	第34号住居跡実測図	68
第20图	第59号住居跡出土遺物実測図	27	第53图	第34号住居跡出土遺物実測図	69
第21图	第61号住居跡実測図	29	第54图	第35号住居跡実測図	71
第22图	第61号住居跡出土遺物実測図	30	第55图	第35号住居跡出土遺物実測図	72
第23图	第62号住居跡実測図	32	第56图	第38号住居跡実測図	73
第24图	第62号住居跡出土遺物実測図	32	第57图	第38号住居跡出土遺物実測図	74
第25图	第71号住居跡実測図	34	第58图	第43号住居跡実測図	76
第26图	第71号住居跡出土遺物実測図	34	第59图	第43号住居跡出土遺物実測図	77
第27图	第77号住居跡実測図	35	第60图	第50号住居跡実測図	78
第28图	第77号住居跡出土遺物実測図	36	第61图	第51号住居跡実測図	80
第29图	第90号住居跡実測図	38	第62图	第51号住居跡出土遺物実測図	80
第30图	第90号住居跡出土遺物実測図	39	第63图	第54号住居跡実測図	81
第31图	第94号住居跡実測図	40	第64图	第54号住居跡出土遺物実測図	82
第32图	第94号住居跡出土遺物実測図	41	第65图	第55号住居跡実測図	82
			第66图	第55号住居跡出土遺物実測図	84
			第67图	第56号住居跡実測図	86

第68图	第56号住居跡出土遺物実測図	87	第106图	第122号住居跡出土遺物実測図(1)	139
第69图	第65号住居跡実測図	88	第107图	第122号住居跡出土遺物実測図(2)	140
第70图	第65号住居跡出土遺物実測図	89	第108图	第160号住居跡実測図	143
第71图	第66号住居跡実測図	90	第109图	第160号住居跡出土遺物実測図	145
第72图	第66号住居跡出土遺物実測図	92	第110图	第161号住居跡実測図	146
第73图	第68号住居跡実測図	94	第111图	第161号住居跡出土遺物実測図	146
第74图	第68号住居跡出土遺物実測図	96	第112图	第164号住居跡実測図	147
第75图	第69号住居跡実測図	97	第113图	第177号住居跡実測図	149
第76图	第69号住居跡出土遺物実測図	97	第114图	第177号住居跡出土遺物実測図	150
第77图	第74号住居跡実測図	98	第115图	第44・57・182号土坑実測図	150
第78图	第74号住居跡出土遺物実測図	100	第116图	第44・57・182号土坑出土遺物実測図	152
第79图	第78号住居跡実測図	101	第117图	第14号溝実測図(1)	153
第80图	第84号住居跡実測図	103	第118图	第14号溝実測図(2)	154
第81图	第84号住居跡出土遺物実測図	104	第119图	第14号溝出土遺物実測図(1)	155
第82图	第86号住居跡実測図	106	第120图	第14号溝出土遺物実測図(2)	156
第83图	第86号住居跡出土遺物実測図	106	第121图	遺構外出土遺物実測図	158
第84图	第97号住居跡実測図	108	第122图	第1号住居跡実測図	162
第85图	第97号住居跡出土遺物実測図	109	第123图	第1号住居跡出土遺物実測図	163
第86图	第102号住居跡実測図	110	第124图	第3・15号住居跡実測図	165
第87图	第102号住居跡出土遺物実測図	111	第125图	第3号住居跡出土遺物実測図	166
第88图	第105号住居跡・出土遺物実測図	113	第126图	第4号住居跡実測図	167
第89图	第107号住居跡実測図(1)	115	第127图	第4号住居跡出土遺物実測図	168
第90图	第107号住居跡実測図(2)	116	第128图	第6号住居跡実測図	170
第91图	第107号住居跡出土遺物実測図	117	第129图	第6号住居跡出土遺物実測図	170
第92图	第110号住居跡・出土遺物実測図	118	第130图	第7号住居跡実測図	171
第93图	第111号住居跡実測図(1)	120	第131图	第7号住居跡出土遺物実測図	172
第94图	第111号住居跡実測図(2)	121	第132图	第8号住居跡実測図	173
第95图	第111号住居跡出土遺物実測図(1)	122	第133图	第8号住居跡出土遺物実測図(1)	175
第96图	第111号住居跡出土遺物実測図(2)	123	第134图	第8号住居跡出土遺物実測図(2)	176
第97图	第112号住居跡実測図	125	第135图	第9号住居跡実測図	178
第98图	第112号住居跡出土遺物実測図	127	第136图	第9号住居跡出土遺物実測図	179
第99图	第115号住居跡・出土遺物実測図	129	第137图	第10号住居跡実測図	181
第100图	第116号住居跡実測図(1)	131	第138图	第10号住居跡出土遺物実測図	182
第101图	第116号住居跡実測図(2)	132	第139图	第12・113号住居跡実測図(1)	184
第102图	第116号住居跡出土遺物実測図	133	第140图	第12・113号住居跡実測図(2)	185
第103图	第119号住居跡実測図	134	第141图	第12号住居跡出土遺物実測図(1)	187
第104图	第119号住居跡出土遺物実測図	135	第142图	第12号住居跡出土遺物実測図(2)	188
第105图	第122号住居跡実測図	138	第143图	第12号住居跡出土遺物実測図(3)	189

第144图	第12号住居跡出土遺物実測図(4)	190	第182图	第48号住居跡実測図	239
第145图	第12号住居跡出土遺物実測図(5)	191	第183图	第48号住居跡出土遺物実測図(1)	240
第146图	第14号住居跡実測図	195	第184图	第48号住居跡出土遺物実測図(2)	241
第147图	第15号住居跡竪土層断面図	196	第185图	第52号住居跡実測図	243
第148图	第15号住居跡出土遺物実測図	197	第186图	第53号住居跡実測図	243
第149图	第18号住居跡実測図	198	第187图	第58号住居跡実測図	245
第150图	第18号住居跡出土遺物実測図	199	第188图	第58号住居跡出土遺物実測図	246
第151图	第19・20・153号住居跡実測図	201	第189图	第60号住居跡実測図	248
第152图	第19号住居跡出土遺物実測図	202	第190图	第60号住居跡出土遺物実測図	248
第153图	第20号住居跡出土遺物実測図	204	第191图	第73号住居跡実測図	250
第154图	第22・124号住居跡実測図	205	第192图	第73号住居跡出土遺物実測図	251
第155图	第22号住居跡出土遺物実測図	207	第193图	第75号住居跡実測図	252
第156图	第23号住居跡実測図	208	第194图	第75号住居跡出土遺物実測図	253
第157图	第23号住居跡出土遺物実測図	209	第195图	第79号住居跡実測図	254
第158图	第24号住居跡実測図	211	第196图	第79号住居跡出土遺物実測図	255
第159图	第24号住居跡出土遺物実測図	211	第197图	第80号住居跡実測図	255
第160图	第28号住居跡実測図	213	第198图	第80号住居跡出土遺物実測図	256
第161图	第28号住居跡出土遺物実測図	214	第199图	第81号住居跡実測図	257
第162图	第30号住居跡実測図	216	第200图	第81号住居跡出土遺物実測図	257
第163图	第30号住居跡出土遺物実測図	217	第201图	第87号住居跡実測図(1)	258
第164图	第39号住居跡実測図	218	第202图	第87号住居跡実測図(2)	259
第165图	第39号住居跡出土遺物実測図	219	第203图	第87号住居跡出土遺物実測図	260
第166图	第40号住居跡実測図	221	第204图	第88号住居跡実測図	263
第167图	第40号住居跡出土遺物実測図(1)	223	第205图	第88号住居跡出土遺物実測図	264
第168图	第40号住居跡出土遺物実測図(2)	224	第206图	第89号住居跡実測図	265
第169图	第41号住居跡実測図	226	第207图	第92号住居跡実測図	266
第170图	第41号住居跡出土遺物実測図	227	第208图	第92号住居跡出土遺物実測図	267
第171图	第42号住居跡実測図	228	第209图	第93号住居跡実測図	269
第172图	第42号住居跡出土遺物実測図	228	第210图	第93号住居跡出土遺物実測図	270
第173图	第44号住居跡実測図	229	第211图	第98号住居跡実測図	271
第174图	第44号住居跡出土遺物実測図(1)	231	第212图	第98号住居跡出土遺物実測図	272
第175图	第44号住居跡出土遺物実測図(2)	232	第213图	第99号住居跡実測図	273
第176图	第45号住居跡実測図	233	第214图	第100号住居跡実測図	275
第177图	第45号住居跡出土遺物実測図	234	第215图	第100号住居跡出土遺物実測図	275
第178图	第46号住居跡実測図	235	第216图	第101号住居跡・出土遺物実測図	276
第179图	第46号住居跡出土遺物実測図	236	第217图	第103・104号住居跡実測図	278
第180图	第47号住居跡実測図	237	第218图	第106号住居跡実測図	280
第181图	第47号住居跡出土遺物実測図	238	第219图	第106号住居跡出土遺物実測図	282

第220图	第108号住居跡実測図	283	第254图	第136号住居跡実測図	328
第221图	第108号住居跡出土遺物実測図	284	第255图	第136号住居跡出土遺物実測図	329
第222图	第109号住居跡実測図	285	第256图	第139号住居跡実測図	330
第223图	第109号住居跡出土遺物実測図	287	第257图	第139号住居跡出土遺物実測図	332
第224图	第113号住居跡出土遺物実測図	288	第258图	第140号住居跡実測図	333
第225图	第117・118号住居跡実測図	289	第259图	第140号住居跡出土遺物実測図	335
第226图	第117号住居跡出土遺物実測図	289	第260图	第141号住居跡実測図	336
第227图	第118号住居跡出土遺物実測図	290	第261图	第141号住居跡出土遺物実測図	336
第228图	第120・121号住居跡実測図	292	第262图	第142号住居跡実測図	337
第229图	第120号住居跡出土遺物実測図	293	第263图	第142号住居跡出土遺物実測図	338
第230图	第123・152号住居跡実測図	296	第264图	第143・145号住居跡実測図	340
第231图	第123号住居跡出土遺物実測図	296	第265图	第143号住居跡出土遺物実測図	341
第232图	第124号住居跡出土遺物実測図	298	第266图	第144号住居跡出土遺物実測図	343
第233图	第125・126・127号住居跡実測図	299	第267图	第145号住居跡竈七層断面図	345
第234图	第125号住居跡出土遺物実測図	301	第268图	第147号住居跡実測図	346
第235图	第126号住居跡竈土層断面図	302	第269图	第147号住居跡出土遺物実測図	347
第236图	第126号住居跡出土遺物実測図	303	第270图	第148号住居跡実測図	348
第237图	第127号住居跡竈土層断面図	304	第271图	第148号住居跡出土遺物実測図(1)	349
第238图	第127号住居跡出土遺物実測図	305	第272图	第148号住居跡出土遺物実測図(2)	350
第239图	第128号住居跡実測図	307	第273图	第149号住居跡実測図	352
第240图	第128号住居跡出土遺物実測図	308	第274图	第150号住居跡実測図	353
第241图	第129号住居跡実測図	309	第275图	第150号住居跡出土遺物実測図	355
第242图	第129号住居跡出土遺物実測図	310	第276图	第154号住居跡実測図	357
第243图	第130号住居跡実測図	311	第277图	第154号住居跡出土遺物実測図	358
第244图	第130号住居跡出土遺物実測図(1)	313	第278图	第155号住居跡実測図	359
第245图	第130号住居跡出土遺物実測図(2)	314	第279图	第155号住居跡出土遺物実測図(1)	361
第246图	第131号住居跡実測図	316	第280图	第155号住居跡出土遺物実測図(2)	362
第247图	第131号住居跡出土遺物実測図	317	第281图	第155号住居跡出土遺物実測図(3)	363
第248图	第132号住居跡実測図	319	第282图	第157号住居跡実測図	365
第249图	第132号住居跡出土遺物実測図(1)	320	第283图	第157号住居跡出土遺物実測図	366
第250图	第132号住居跡出土遺物実測図(2)	321	第284图	第158号住居跡実測図	367
第251图	第133号住居跡実測図	323	第285图	第158号住居跡出土遺物実測図	368
第252图	第133号住居跡出土遺物実測図	325	第286图	第159号住居跡実測図	370
第253图	第134・144号住居跡実測図	327	第287图	第159号住居跡出土遺物実測図	371

表 目 次

一上 卷一

表1 明石遺跡・明石北原遺跡・上白畑遺跡周辺 遺跡一覽表	7	表2 明石遺跡竈七層一覽表	16
---------------------------------	---	---------------	----

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

主要地方道谷田部明野線は、つくば市と明野町を南北に結ぶ重要な役割を果たしてきた道路である。

しかしながら、沿線地域の近年における目覚ましい発展は交通量の増加を招き、さらなる発展を目指していくには道路の整備を図る必要性が生じてきた。そうした中、茨城県は、主要地方道谷田部明野線の沿線のつくば市から真岡市にわたる部分に、主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備事業を計画した。

工事に先立ち、茨城県土木部道路建設課（土浦土木事務所）は、平成7年10月25日に、茨城県教育委員会に対し、この予定地内であるつくば市明石地区内及び明野町向上野地区内における埋蔵文化財包蔵地の有無及び取り扱いについて照会した。これを受け、茨城県教育委員会は、平成7年12月11日に現地踏査を実施し、平成8年10月28日に事業予定地内に明石遺跡、明石北原遺跡及び上白畑遺跡が所在することを茨城県土木部道路建設課（土浦土木事務所）あてに回答した。平成9年2月20日から、茨城県土木部道路建設課（土浦土木事務所）と茨城県教育委員会は、文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を重ねてきた。その結果、平成9年3月17日、茨城県教育委員会は明石遺跡、明石北原遺跡及び上白畑遺跡については、現状保存することが困難であると判断し、記録保存とする旨を茨城県土木部道路建設課（土浦土木事務所）に回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成9年4月から同年12月まで明石遺跡、明石北原遺跡、上白畑遺跡の発掘調査を実施することとなった。

その後、調査の進捗に伴い予想されたよりも明石遺跡の遺構が多いことが確認されたため、平成9年11月10日に財団法人茨城県教育財団と茨城県教育委員会とで上白畑遺跡の調査計画変更協議が行われた。平成9年11月25日には茨城県、茨城県教育委員会との協議を行い、明石遺跡、明石北原遺跡の調査期間を3か月延長し、1年間となった。上白畑遺跡の調査は次年度に送り、平成11年1月から3月までの3か月の調査期間となった。

第2節 調査経過

明石遺跡、明石北原遺跡の発掘調査は、平成9年4月1日から平成10年3月31日までの1年間にわたって実施し、上白畑遺跡の調査は次年度の平成11年1月1日から3月31日までの3か月実施した。以下、調査経過について、その概要を記述する。

- 4月 明石北原遺跡の発掘調査を開始するため、現場事務所や倉庫の設置、調査器材の搬入・調査補助員募集等の諸準備を行った。17日から補助員を雇用し、諸施設の整備、遺跡内の清掃作業を開始した。22日には発掘調査の円滑な推進と安全を祈願して、安全祈願祭を挙行し、同日午後にはトレンチ試掘を開始した。28日からはグリッド試掘を開始し、土師器片、陶器片が少量出土した。
- 5月 1日はグリッド試掘を継続し、遺構を確認した。2日から遺構を中心に人力による表土除去を行い、土坑5基、溝3条を確認した。継続して9日まで人力による表土除去及び遺構確認作業を行い、さらに土坑1基を確認した。12日には方眼杭打ち測量（茨城県技術公社）を実施した。同日午後から遺構調査を開始し、29日に調査を終了した。並行して23日からは明石遺跡の樹木伐間と試掘を始め、29日には明石北原遺

跡の調査を終了し、明石遺跡のⅠ・Ⅱ・Ⅲ区の試掘を行った。

6月 2日には、明石遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の試掘に入った。6日には方眼杭打ち測量を実施し、Ⅱ区南西部について人力による表土除去を開始した。10日からはⅡ区の人力による表土除去と同時に遺構確認作業も行った。12日にはⅡ区のテストピットを掘り込むとともに、今まで確認した遺構の調査を行った。16日にはⅣ区で、18日からはⅢ区、23日からはⅡ区、26日からはⅠ区も含めて重機による表土除去を行い遺構確認も併せて行った。

7月 1日には、重機による表土除去及び遺構確認作業を終了した。その結果、竪穴住居跡185軒、土坑245基、井戸跡1基、溝21条、格納壕跡1基、埋没谷1か所を確認した。遺構確認後、引き続きⅡ区の調査とⅢ区の遺構調査を開始した。遺構数が当初予想していたよりも多いため、10日に期間延長について業務内打ち合わせを行った。

8月 引き続きⅡ・Ⅲ区の住居跡、土坑、溝の調査を実施した。

9月 引き続きⅡ・Ⅲ区の住居跡、土坑、溝の調査を実施した。

10月 引き続きⅡ・Ⅲ・Ⅳ区の住居跡、土坑、溝の調査を実施した。

11月 引き続きⅡ・Ⅲ・Ⅳ区の遺構調査を実施し、18日にはⅢ区の調査を終了した。

12月 1日には包含層の調査を除いてⅣ区の遺構調査を終了し、引き続きⅡ区の遺構調査を実施した。16日には鉄製品の保存処理を、岩手県立博物館に依頼した。17日、県教育庁文化課から、調査期間の延長についての、通知があった。

1月 引き続きⅡ区の遺構調査を実施し、6日からⅠ区の遺構調査を開始した。

2月 引き続きⅠ・Ⅱ区の遺構調査を実施した。18日からⅣ区の埋没谷の調査を開始し、20日には調査を終了した。

3月 引き続きⅠ・Ⅱ区の調査を実施した。7日には167名の参加者を集めて現地説明会を開催した。10日に航空写真撮影を実施し、11日にはⅠ区の旧石器集中地点の調査を開始し、引き続きⅡ区の遺構調査も実施した。13日からは補足調査を行い、20日には安全対策を含め現地調査をすべて終了した。現場事務所では帳簿や諸記録の点検を行い、22日には現場事務所を閉鎖した。

平成11年度

1月 4日から上白畑遺跡を発掘するための事前準備に取りかかった。続いて発掘器材の搬入など発掘調査の諸準備を行った。12日に調査補助員を雇用して、諸設備の整備、調査区域内の清掃を行った。午後からグリットを設定し、試掘を実施した。25日からはトレンチ試掘も実施し、28日には人力による表土除去・遺構確認作業を行った。29日からは重機による表土除去を開始し、並行して遺構確認作業を進めた。表土中からは多くの遺物が確認されたが、遺構は確認されなかった。

2月 引き続き重機による表土除去を実施し、表土中の主な遺物を光波測距機によって計測し取り上げた。12日には重機による表土除去を終了した。15日からは方眼杭打ちを開始した。17日までに遺構確認作業を終了し、住居跡1軒、土坑19軒、溝2条、不明焼土遺構3基を確認した。18日からはⅠ・Ⅱ区の遺構調査を開始した。

3月 引き続き遺構調査を進めた。18日にはⅠ・Ⅱ区の遺構調査を終了し、遺跡全景写真を撮影した。19日にはすべての現地調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

明石遺跡は、茨城県つくば市明石字北の坪334番地の2ほかに、明石北原遺跡はつくば市明石字北原616番地の3ほかに、上白畑遺跡は真壁郡明野町向上野字白畑遺越1526番地の2ほかにそれぞれ所在する。

これら3遺跡は、現在の行政単位でつくば市と明野町に分かれているが、西を南流して利根川に合流する小貝川と東の東流して霞ヶ浦に流入する桜川に挟まれた、筑波・稲敷台地上の至近距離にある。

当遺跡群周辺の地形は小貝川と桜川に挟まれ、洪積台地と沖積低地からなっている。洪積台地は常総台地の一部であり、筑波・稲敷台地と呼ばれている。台地の基本土層は竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし、その上に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層(0.3~5.0m)、その上に関東ローム層(0.5~2.5m)が堆積し、最上部は腐食土層となっている。標高は河川流域に展開する沖積低地や浸食谷を除けばどこも20~30mである。沖積低地は地質上最新の地層で、河川が運ぶ土砂や洪積台地の腐食土が雨により流され、それが低地に堆積したものである。

明石遺跡は、つくば市の北西部、桜川西岸の筑波・稲敷台地上に立地している。遺跡の標高は、27~30mで、台地上と沖積低地面との比高は12~15mである。遺跡は、東側を桜川沖積地に、西側を南から入り込んだ小支谷によって挟まれた南に面する舌状台地上に位置している。調査前の現況は畑地である。明石北原遺跡は、明石遺跡から北へ約500m離れた同一の台地上に立地しており、台地の標高は30mである。調査前の現況は畑地である。上白畑遺跡は、明石遺跡から北へ約3km離れた同一の台地上に立地しており、台地の標高は28~29mである。調査前の現況は畑地及び陸田である。

第2節 歴史的環境

明石遺跡<1>、明石北原遺跡<2>、上白畑遺跡<3>の周辺には縄文時代から中世にかけての遺跡が多数存在している。明石・明石北原両遺跡はつくば市に存在しているが、上白畑遺跡は明野町に入る。3遺跡とも筑波・稲敷台地上に存在しており、遺跡は隣接している。当遺跡周辺は桜川と小貝川などの水系に恵まれ、古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台となってきた。ここでは、3遺跡と同時代の遺跡を中心に、分布状況等の概要を述べることにする。

縄文時代の遺跡としては、滝ノ上遺跡<6>、作合遺跡<34>、香取遺跡<35>、西原南遺跡<37>などの遺跡が、上白畑の遺跡周辺に広がっている。特に、西原南遺跡からは中期、滝ノ上遺跡からは後期の土器や石器が出土している。桜川西岸の台地縁辺部に存在している福王地A遺跡<11>、福王地B遺跡<12>、洞下遺跡<14>、戻窪遺跡<15>、谷越遺跡<16>明石南遺跡<20>などは、阿玉台、加曾利E式を中心とした、中期の遺物が数多く確認されている。琴平遺跡<18>、寺具遺跡<19>、など台地上の遺跡でも阿玉台、加曾利E式を中心とした中期の遺物が確認されている。なお、上白畑遺跡も同様な遺構・遺物が出土しており中期の遺跡と考えられる。沼田遺跡<7>は桜川東岸台地上に位置し後期の遺跡と考えられているが、発掘調査が実施されていないので詳細は不明である。

縄文時代の遺跡は数多く存在しているが桜川西岸の微高地や台地縁辺部においては、弥生時代の遺跡は激減し

ている。桜川西岸台地縁辺部にある明石遺跡を含め福王地A遺跡、山木古墳<22>、桜川西岸の微高地にある中菅間遺跡<8>、桜川東岸の低地にある神郡条里跡<27>で確認されているのみである。当地域の弥生時代の遺跡は桜川低地に面する台地際に立地する傾向があり、稲作との関係も考えられる。調査例としては、山木古墳と神郡条里跡がある。山木古墳の調査では墳丘の下から後期の住居跡が1軒確認され、弥生土器片や土製紡錘車などが出土した。神郡条里跡の調査では、壺形土器や甕形土器、土製紡錘車などが出土している。

古墳時代の遺跡数は、急激に増加する。上白畑遺跡周辺では乾屋前東遺跡<31>、塚ノ上遺跡<32>、作合遺跡、百目畑遺跡<36>、西原南遺跡などで古墳時代の遺物の散布が確認されている。桜川西岸の台地縁辺部にある水守遺跡<21>と桜川西岸の微高地にある上菅間遺跡<9>、芭夷堂遺跡<10>では、土師器が多く出土している。福王地A遺跡周辺の台地縁辺部、道光寺遺跡<13>、河下遺跡、灰塚遺跡、安森遺跡<17>などは古墳時代の集落跡と考えられるが、詳細は不明である。中菅間遺跡は手捏土器を含む多数の土師器が出土しており、古墳時代後期の祭祀遺跡として注目されている。なお、明石遺跡では前期から後期にかけての遺構や遺物が出土している。

当時の有力者の墓である古墳の分布を見ると、桜塚古墳<29>は全長30mほどの前方後円墳で、埋葬施設は長大な割竹形木棺を内蔵する粘土槨である。変形四畝鏡、玉類、短剣などが出土し、当地域ではもっとも古い4世紀末の築造である。山木古墳は、全長48mの柄鏡式前方後円墳である。築造は5世紀初頭と思われる。水守古墳群<4>は2基からなり、直刀1、刀子1、玉類が出土している。築造は5世紀後半と考えられる。沼田古墳群<5>の八幡塚古墳は筑波山の南西麓、桜川東岸の標高20m前後の台地上に構築された前方後円墳で、墳頂部に八幡神社が祀られている。県指定史跡であり、近辺では全長94mと最大級の古墳である。埴輪の出土があり、築造は6世紀前半と考えられる。その他、筑波山麓にある国松古墳群<23>は、現在でも径5m前後の小古墳が点在し、古くは相当数の古墳が築造されていたとみられる。筑波小学校庭にあった円墳からは、馬具・勾玉・埴輪が出土している。築造は6世紀後半と考えられる。その他、稲荷塚古墳<24>は中菅間集落の東側に、菅間大塚山古墳<25>は、河下の桜川西岸台地縁辺に位置している。亀ノ子塚古墳<26>は福王地の畑中に、池田古墳<30>は池田の桜川西岸よりわずか20mの距離に位置している。

奈良・平安時代の遺跡は、滝ノ上遺跡、乾屋前東遺跡、塚ノ上遺跡、窪合遺跡<33>、作合遺跡、百目畑遺跡、西原南遺跡、山ノ神遺跡<38>など上白畑遺跡周辺に広がっている。なお、明石遺跡も同時期の遺構・遺物が数多く確認されており、大規模な集落であったものと思われる。条里の跡も確認され、特に筑波山と城山に挟まれた低地は神郡条里跡と呼ばれている。平安時代中期、つくば市域をその舞台の一部に巻き込んだ平将門の乱が起こった。はじめは単なる一族間の私闘だったが、国衛を攻め国府を焼くに及んで国家への反乱となった。この乱を詳細に記実した「将門記」には、平良兼が平良正の要請で上総から出兵、承平6年6月27日水守の宮所到着、ここで良正・貞盛らと対将門戦の協議を行った、という記事が載っている。この記事にある「水守の宮所」は北に条里水田をひかえた舌状台地上にあり、その立地条件のよさから中世城郭に転用され、水守城跡<28>として残ったものと思われる。明石北原遺跡からは南北に走る3条の溝を確認した。溝の覆土からは平安時代終末期の土師器が出土し、古代から中世にかけての遺跡と思われる。

※文中の< >内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表中の該当遺跡番号と同じである。

註

- (1) 明野町史編さん委員会 『明野町史』1985年7月
- (2) 筑波町史編纂専門委員会 『筑波町史 上巻』1989年9月

参考文献

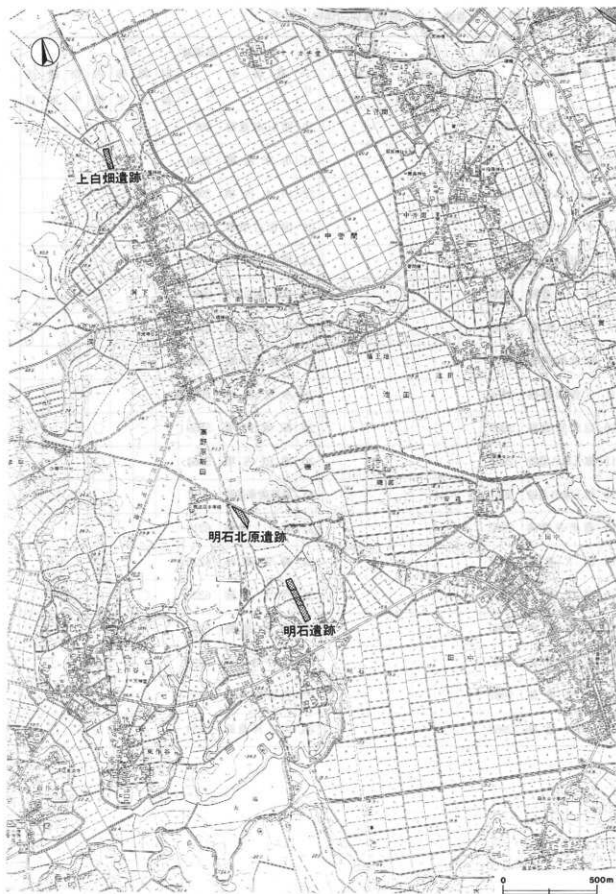
- ・茨城県教育委員会 「筑波研究学園都市地区埋蔵文化財保存度調査報告-昭和41年度-」 1967年3月
- ・茨城考古学会 「茨城県筑波町山木古墳」 1972年3月
- ・藤田清・中村盛吉 「常総古文化研究-故藤田清・中村盛吉遺稿集-」 1972年6月
- ・茨城県史編さん原始古代史部会 「茨城県史料 考古資料編 古墳時代」 1974年3月
- ・筑波ライオンズクラブ 「筑波町の遺跡と文化財」 1974年3月
- ・茨城県史編さん原始古代史部会 「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」 1979年3月
- ・筑波町教育委員会 「常陸八幡塚古墳整備報告書-博物館相当地施設の整備-」 1979年3月
- ・筑波大学筑波古代地域史研究グループ 「筑波古代地域史の研究-昭和54~56年度文部省特定研究経費による調査研究概要-」 1982年6月
- ・茨城県農地部農地計画課 「土地分類基本調査 真壁」 1983年1月
- ・明野町史編さん委員会 「明野町の遺跡と遺物」 1983年2月
- ・茨城県農地部農地計画課 「土地分類基本調査 土浦」 1983年12月
- ・角川日本地名大辞典編纂委員会 「角川日本地名大辞典8 茨城県」 1983年12月
- ・明野町史編さん委員会 「明野町史」 1985年7月
- ・峰須紀夫 「茨城県 地学のガイド」 1986年11月
- ・つくば市教育委員会 「神郡糸里遺跡」 1988年3月
- ・大徳町史編纂委員会 「大徳町史」 1989年3月
- ・茨城町史編纂専門委員会 「筑波町史 上巻」 1989年9月
- ・茨城県教育委員会 「茨城県遺跡地図-国・県指定史跡・名勝・天然記念物及び埋蔵文化財包蔵地地図-」 1990年3月
- ・茨城県立歴史館 「茨城県史料 考古資料編 弥生時代」 1991年3月
- ・茨城県教育財団 「一般県道長高野筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 小泉館跡」 「茨城県教育財団文化財調査報告」第97集 1991年3月
- ・茨城県立歴史館 「茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代」 1995年3月
- ・茨城県教育財団 「(仮称)北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台遺跡」 「茨城県教育財団文化財調査報告」第102集 1995年12月
- ・千代川村史編さん委員会 「村史 千代川村生活史 第一巻 自然と環境」 1998年8月



第1図 明石遺跡・明石北原遺跡・上白畑遺跡周辺遺跡分布図(筑波・上郷)

表1 明石遺跡・明石北原遺跡・上白畑遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡 番号	時代						番号	遺跡名	県遺跡 番号	時代					
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室				江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平
①	明石遺跡	2970	○	○	○	○	○	○	20	明石南遺跡	2971		○				
②	明石北原遺跡						○	○	21	水守遺跡	2980				○		
③	上白畑遺跡	6229		○				○	22	山木古墳	2983			○	○		
4	水守古墳群	2152				○		○	23	国松古墳群	2984				○		
5	沼田古墳群	2153				○			24	稲荷塚古墳	2986				○		
6	滝ノ上遺跡	2225		○		○	○	○	25	菅間大塚山古墳	2987				○		
7	沼田遺跡	2955		○					26	亀ノ子塚古墳	2988				○		
8	中菅間遺跡	2957			○	○			27	神郡桑里跡	2994			○		○	
9	上菅間遺跡	2958				○			28	水守城跡	2998					○	○
10	毘美堂遺跡	2959				○			29	桜塚古墳	5859				○		
11	福王地A遺跡	2960		○	○	○			30	池田古墳	5864				○		
12	福王地B遺跡	2961		○					31	統屋前東遺跡	6217				○	○	○
13	道光寺遺跡	2962				○			32	塚ノ上遺跡	6219				○	○	
14	洞下遺跡	2963		○		○			33	篠合遺跡	6225				○	○	
15	辰窪遺跡	2964		○		○			34	作合遺跡	6226		○		○	○	○
16	谷越遺跡	2965		○					35	香取遺跡	6227		○			○	○
17	安森遺跡	2966				○			36	百目畑遺跡	6228				○	○	○
18	琴平遺跡	2967		○					37	西原南遺跡	6233		○		○	○	○
19	寺具遺跡	2968		○					38	山ノ神遺跡	6234				○	○	○



第2図 明石遺跡・明石北原史跡・上白畑遺跡調査区位置図

第3章 明石遺跡

第1節 遺跡の概要

明石遺跡は、つくば市の西北部、桜川西岸の筑波・稲敷台地上の小貝川、桜川など水系に恵まれた地域に立地している。遺跡の存在する台地の標高は27~30mで、台地上と沖積低地面との比高は12~15mである。遺跡は、東側を桜川沖積地に、西側を南から入り込んだ小支谷によって挟まれた南に面する舌状台地上に位置している。調査区域の面積は8,115㎡であり、現況は畑地である。当遺跡は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。

今回の調査によって、縄文時代の土坑1基及び陥し穴4基、弥生時代の竪穴住居跡13軒、古墳時代の竪穴住居跡40軒、土坑3基及び溝1条、奈良・平安時代の竪穴住居跡106軒、大形土坑2基及び土坑8基、中・近世の方形竪穴状遺構2軒、土坑3基、堀2条及び溝8条、近・現代の格納壕跡1基、時期不明の竪穴住居跡(含竪穴状遺構)23軒、土坑222基、井戸跡1基、溝10条、埋没谷1か所を検出した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に180箱出土した。旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器、尖頭器、削器、石核、剥片が出土している。縄文時代の遺物は縄文土器片、石鏃、磨石、敲石、石錘、凹石である。弥生時代の遺物は弥生土器、石鏃及び埴石である。古墳時代の遺物は土師器(坏・高坏・甕・甔)、須恵器(坏・坏蓋・甕)、土製品(球状土錘)、石製品(紡錘車)、鉄製品(刀子)等である。奈良・平安時代の遺物は土師器(坏・高台坏・甕)、須恵器(坏・高台付坏・蓋・甔・甕)、灰釉陶器、緑釉陶器、土製品(土玉・球状土錘・管状土錘・紡錘車・置き甕)、石製品(紡錘車)、石器(砥石)、鉄製品(紡錘車・鉄鏃・刀子・釘)、銅製品、古銭(和同開珎)等である。中世の遺物は土師質土器及び陶器であり、近世の遺物は磁器である。

第2節 基本層序の検討

調査2区北部(C2区)にテストピットを掘り、基本層序の観察を行った。(第3図)

第1層は、14~18cmの厚さの耕作土で暗褐色をしている。

第2層は、14~18cmの厚さのソフトローム層で暗褐色である。

第3層は、31~37cmの厚さの暗褐色をした第2黒色帯である。

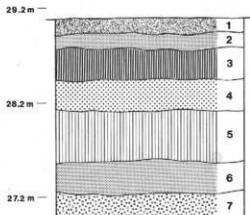
第4層は、30~35cmの厚さのハードローム層で暗褐色である。

第5層は、50~57cmの厚さのハードローム層で褐色である。

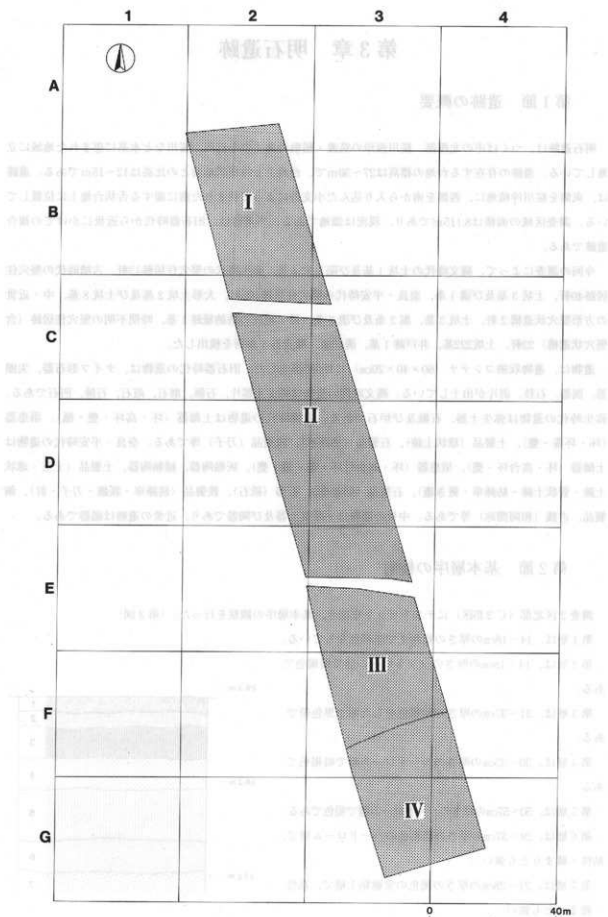
第6層は、29~37cmの厚さの暗褐色のハードローム層で、粘性・締まりとも強い。

第7層は、21~28cmの厚さの褐色の常総粘土層で、粘性・締まりとも強い。

遺構は第2層上面で確認され、第2層から第4層にかけて掘り込まれている。



第3図 明石遺跡基本土層図

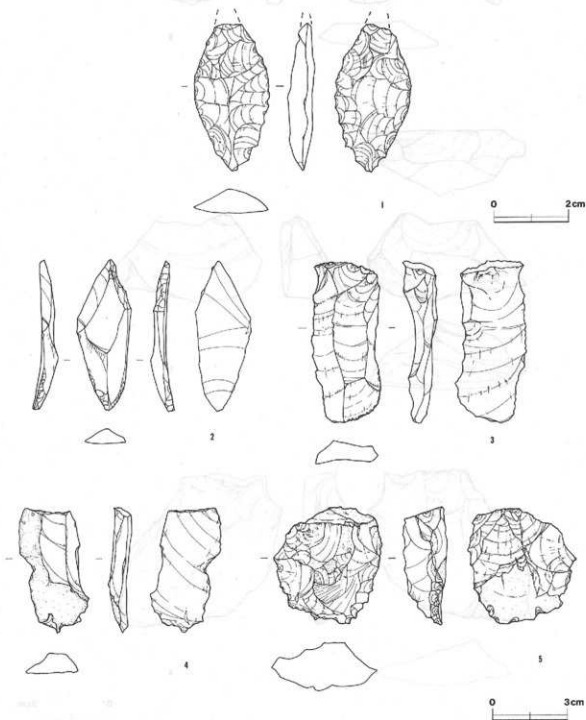


第4図 明石遺跡調査区設定図

第 3 節 遺構と遺物

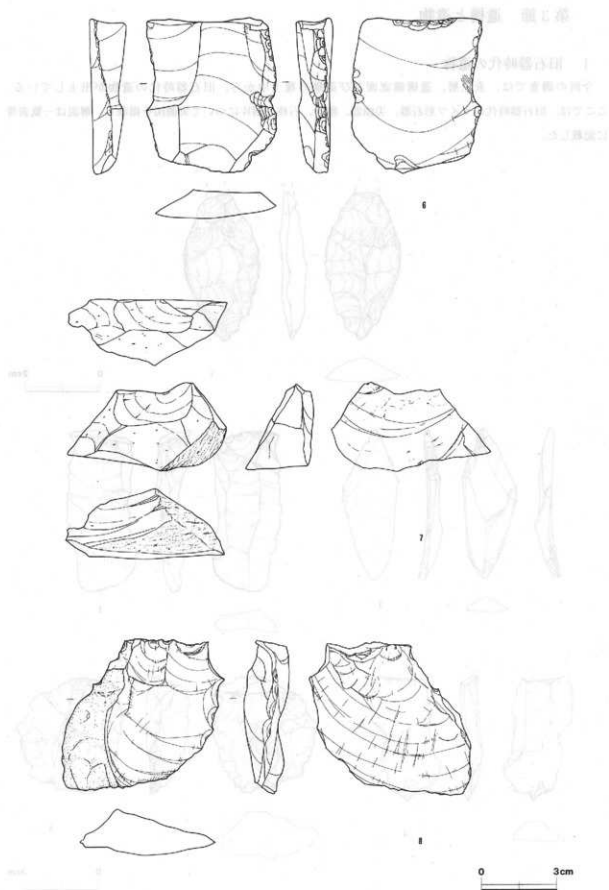
1 旧石器時代の遺物

今回の調査では、表土層、遺構確認面及び遺構の覆土中から、旧石器時代の遺物が出土している。ここでは、旧石器時代のナイフ形石器、尖頭器、削器、石核、剥片について実測図を掲載し、解説は一覧表等に記載した。



第 5 図 旧石器遺構外出土遺物実測図 (1)

2. 調査区南側出土の燧石製石器 (図 5 参照)



第6図 旧石器遺構外出土遺物実測図(2)

旧石器遺構外出土遺物観察表

図版番号	種 別	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考	
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第5図1	尖頭器 (40)	2.1	0.8	(45)	黒曜石	第174号住居跡覆土中	Q106	PL110	
2	ナイフ形石器	6.0	2.3	1.0	頁 岩	第108号住居跡溝内底	Q105	PL110	
3	破片断片	6.5	2.8	1.2	頁 岩	第155号住居跡覆土中	Q110	PL110	
4	断 片	5.1	2.9	0.8	頁 岩	第28号住居跡覆土中	Q112	PL110	
5	断 器	4.7	4.3	1.7	黒曜石	第39号住居跡覆土中	Q107	PL110	
第6図6	断 器	6.3	5.3	1.2	頁 岩	第161号住居跡覆土中	Q108	PL110	
7	石 核	3.4	6.4	2.7	安 山 岩	第38号住居跡覆土中	Q109	PL110	
8	断 片	6.1	6.4	1.8	頁 岩	第48号住居跡覆土中	Q111	PL110	

2 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で、陥し穴4基、土坑1基を検出した。以下、検出した遺構と遺物について記載する。

なお、陥し穴については、調査中に土坑（SK）としていたため、その番号も併記しておく。

(1) 陥し穴

第1号陥し穴（SK-4）（第7図）

位置 調査IV区，F 3h9区。

重複関係 第45号住居，第1号堀に掘り込まれており，これらの遺構より古い。

規模と平面形 長径2.06m，短径0.54mの楕円形である。第45号住居，第1号堀に掘り込まれているため，深さは24cmであるが，当初の深さは70cm前後であったと考えられる。

長径方向 N-69°-E

壁面 緩やかに外傾して立ち上がり，短径方向の断面は「U」字形である。

底面 皿状を呈している。

覆土 第2号堀に掘り込まれているため，検出されなかった。

遺物 遺物は出土していない。

所見 本跡は，遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第2号陥し穴（SK-18）（第7図）

位置 調査IV区，F 4h2区。

重複関係 本跡は，第9号土坑に掘り込まれており，第9号土坑より古い。

規模と平面形 長径2.44m，短径(0.8)mの楕円形で，深さ88cmである。

長径方向 N-66°-W

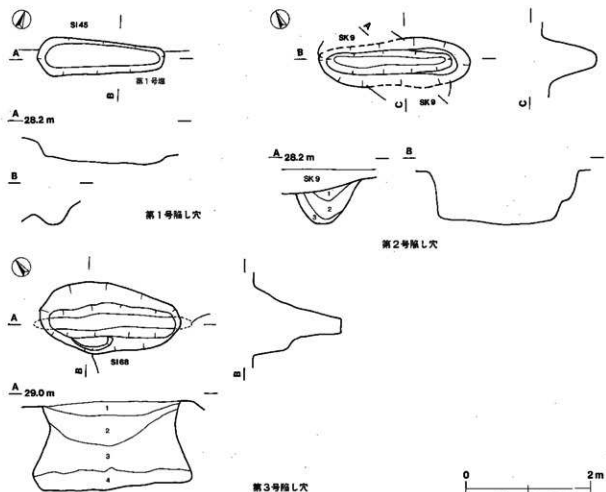
壁面 ほぼ垂直に立ち上がり，短径方向の断面は「U」字形である。

底面 平坦である。

覆土 3層からなる。ロームブロックの含有量が多いことから人為地積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量
- 3 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量



第7図 第1～3号埋し穴実測図

遺物 遺物は出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の埋し穴と考えられる。

第3号埋し穴 (SK-179) (第7図)

位置 調査I区, B 2j4区。

重複関係 本跡は、第168号住居に掘り込まれており、第168号住居より古い。

規模と平面形 長径2.24m, 短径1.13mの楕円形で、深さ141cmである。

長径方向 N-51°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。短径方向の断面形は「V」字形であるが、長径方向の断面形は袋状を呈している。

底面 平坦である。

覆土 4層からなる。分層された土層が厚く堆積状況が不自然なことから、ロームブロックの含有量が多いことから人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム大・小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子多量, ローム大・小ブロック少量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子多量, ローム大ブロック少量 |

遺物 遺物は出土していない。

虎ノ穴(縄文遺跡) 25

所見 本跡は、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第 4 号陥し穴 (SK-242) (第 8 図)

位置 調査Ⅱ区の中央部, C 2J0区。

規模と平面形 長径2.33m, 短径1.27mの隅丸長方形で、深さ75cmである。

長軸方向 N-55°-E

壁面 ほほ垂直に立ち上がり、短径方向の断面は逆台形である。

底面 平坦で、逆木を立てた跡と思われる5か所ピットが検出された。ピットは径15~25cmの円形で、底面からの深さは26~33cmである。

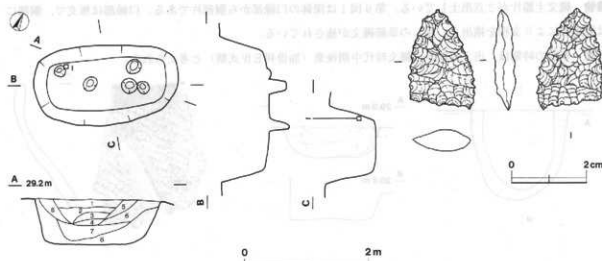
覆土 8層からなる。不自然な堆積状況とロームブロックの含有量が多いことから人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 7 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 8 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量

遺物 石鏃が1点出土している。第8図1は西コーナー寄り覆土下層から出土している。

所見 本跡は、逆木を立てたとと思われるピットが検出されていること等、遺構の形態から陥し穴と思われる。時期は出土遺物から縄文時代と考えられる。



第 8 図 第 4 号陥し穴・出土遺物実測図

第 4 号陥し穴出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第8図1	石鏃	2.7	1.8	0.6	2.0	黒曜石	西コーナー寄り覆土下層	Q104 PL110

表2 明石遺跡陥し穴一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)	附SK番号
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)						
1	F3b0	N-69°-E	楕円形	2.06×0.54	24	傾斜	凹状	人為		本跡→S145, 第1号溝	SK 4
2	F4b2	N-66°-W	楕円形	2.44×0.8	88	垂直	平坦	人為		本跡→SK 9	SK 18
3	B2j4	N-51°-W	楕円形	2.24×1.13	141	垂直	平坦	人為		本跡→S1108	SK179
4	C2j9	N-35°-E	隅丸長方形	2.33×1.27	75	垂直	平坦	人為	石器(石鏃)		SK242

(2) 土坑

第56号土坑(第9図)

位置 調査Ⅲ区, E3j0区。

重複関係 第65号住居に掘り込まれており, 第65号住居より古い。

規模と平面形 東部が調査区域外となっているが, 長径(1.5)m, 短径1.55mで楕円形と思われる, 深さ44cmである。

長径方向 [N-72°-E]

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり, 短径方向の断面は逆台形である。

底面 ほぼ平坦である。

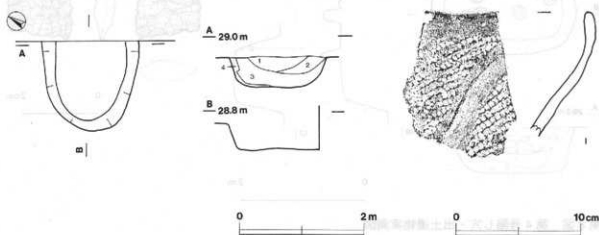
覆土 4層からなる。不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 灰色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

遺物 縄文土器片が2点出土している。第9図1は深鉢の口縁部から胴部片である。口縁部は無文で, 胴部には微隆帯により文様を描出し, R.L.の単節縄文が施されている。

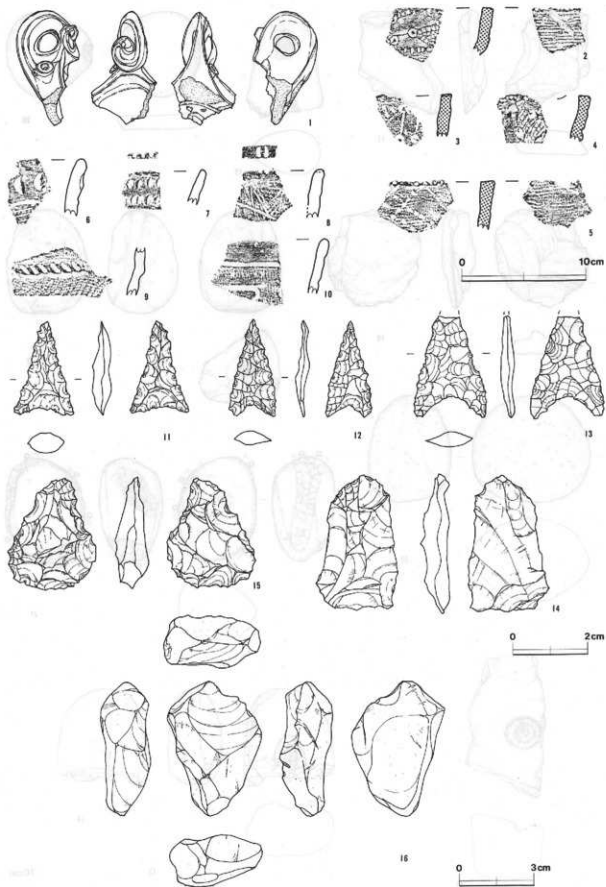
所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後葉(加曾利EIV式期)と考えられる。



第9図 第56号土坑・出土遺物実測図

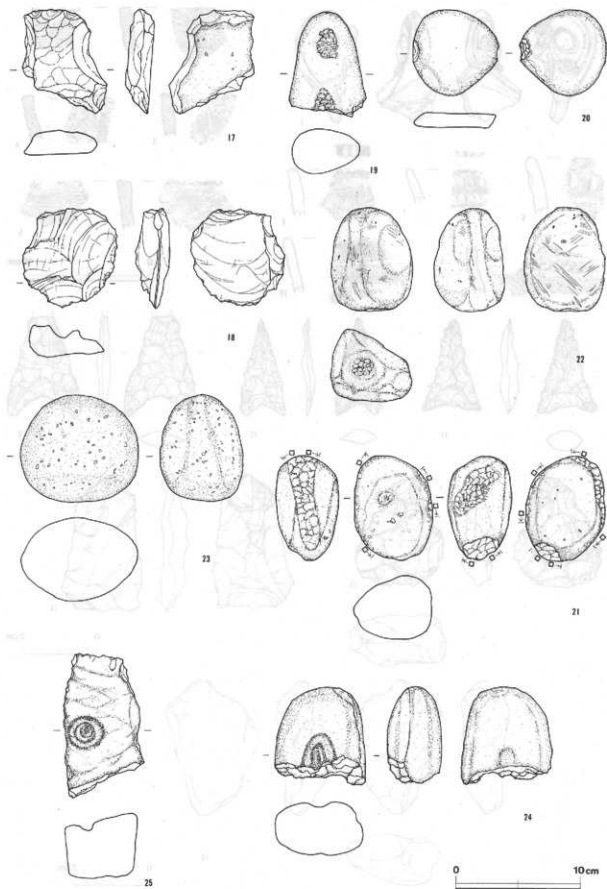
(3) 遺構外出土遺物

今回の調査で, 表土層, 遺構確認面及び遺構の覆土中から, 遺構に伴わない縄文時代の遺物が出土している。ここでは, 縄文土器など特徴的な遺物について実測図及び拓影図を掲載し, 解説は一覧表等に記載した。

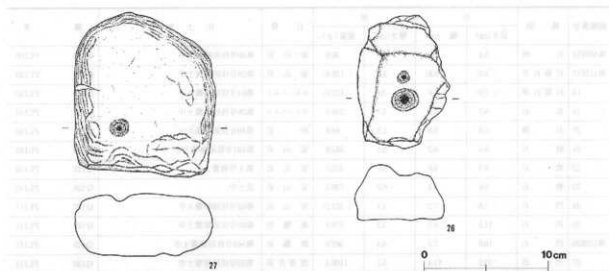


第10图 遺構外出土遺物実測図(1)

15、16 同前実測出土遺物(1) 17、18



第11圖 遺構外出土遺物実測図(2)



第12図 遺構外出土遺物実測図(3)

第10図1は深鉢の把手部片である。2~10は縄文土器片の拓影図である。2~8・10は口縁部である。2, 3は微隆起線文、沈線文で幾何学的な区画がなされており、区画された交点には円形竹管による刺突文が施されている。さらに、2は内面に貝殻条痕文が施されており、3は口唇部に棒状工具による押圧がなされている。4は波状口縁を呈し貝殻条痕文により文様が描出され、文様の交点には半月形刺突文が施されている。5は口唇部に棒状工具による押圧がなされ、口縁部には貝殻条痕文が施されている。2~5は早期後葉の土器である。2~4は縄島台式期の土器で、5は茅山式期の土器と思われる。6は爪形文が施され、下端には横位の沈線が施されている。7は口唇部に棒状工具による押圧がなされ、口縁部には2段に渡って、爪形文が施されている。8は口唇部に棒状工具による押圧がなされ、口縁部には条痕文が施されている。6~8は前期後葉の興津式期の土器と思われる。9は胴部片で、隆帯にキザミが施され、その直下に縄文が施されている。9は後期前葉の称名寺式期併行の土器である。10は沈線により区画された中に、条線が充填されている。10は後期前葉の称名寺式期の土器である。11~27は石器である。11~13は石鏃、14, 15は石鏃未製品、16は石核である。第11図17, 18は打製石斧、19は敲石、20は石錘、21~23は磨石、第11・12図24~27は凹石である。

縄文時代遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図1	深鉢 縄文土器	片(9.8)	把手部片。把手は頂点が尖り、凹孔を有し沈線により渦巻文が施されている。把手部下端は沈線により区画され、中に凹孔が充填されている。	石灰・長石・雲母 褐色 普通	P1025 5% PL60 第14号遺構土中

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第10図11	石鏃	2.5	1.7	0.6	1.3	チャート	第19号住居跡土中	Q113 PL110
12	石鏃	2.6	1.2	0.4	0.6	チャート	第122号住居跡土中	Q114 PL110
13	石鏃	(2.7)	2.0	0.4	(1.8)	チャート	第206号土坑遺土中	Q115 PL110
14	石鏃	3.7	2.2	0.7	3.2	チャート	第40号住居跡付近表土	Q116 未製品 PL110
15	石鏃	3.0	2.3	0.8	5.2	頁岩	第68号住居跡土中	Q117 未製品 PL110

図版番号	種類	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第10図16	石 杖	5.4	3.7	2.1	36.9	安山岩	第40号住居跡覆土中	Q115 PL110
第11図17	打製石斧	(8.3)	(6.8)	2.0	(138.4)	安山岩	第59号住居跡覆土中	Q119 PL110
18	打製石斧	(7.9)	7.6	2.6	(172.6)	ホムンヘルス	第84号住居跡覆土中	Q120 PL110
19	磨石	8.5	6.2	3.7	249.5	ホムンヘルス	第28号住居跡覆土中	Q122 PL110
20	石 錘	6.9	6.9	1.3	89.8	砂 岩	第49号住居跡覆土中	Q123 PL110
21	磨石	8.4	6.2	3.1	383.8	安山岩	第181号住居跡覆土中	Q124 PL110
22	磨石	8.3	6.6	5.9	415.2	安山岩	第3号溝覆土中	Q125 PL110
23	磨石	8.6	9.5	6.8	739.3	安山岩	表土中	Q126 PL110
24	凹石	(7.8)	7.2	4.4	(321.2)	安山岩	第62号住居跡覆土中	Q127 PL111
25	凹石	11.5	6.5	5.3	579.8	斑 巖	第62号住居跡覆土中	Q128 PL111
第12図26	凹石	10.8	7.5	4.4	567.0	斑 巖	第119号住居跡覆土中	Q129 PL111
27	凹石	13.2	11.4	5.1	1106.4	雲母片岩	第59号住居跡覆土中	Q130 PL111

3 弥生時代の遺構と遺物

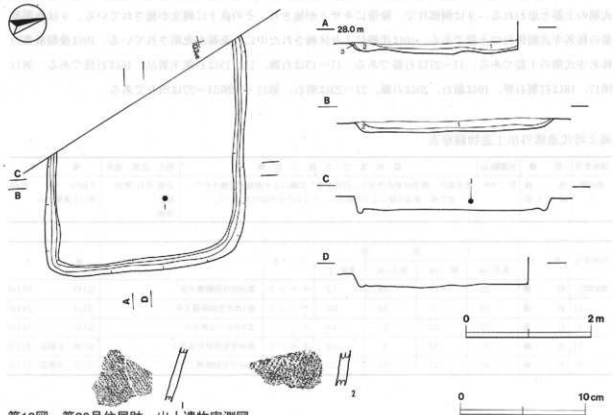
今回の調査で、弥生時代の竪穴住居跡13軒を検出した。竪穴住居跡は他の遺構に掘り込まれ、また、調査区域外に延びている場合があり、住居跡及び遺物の遺存状況は、あまり良くない。以下、検出した遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第26号住居跡 (第13図)

位置 調査IV区、G 3 e6区。

規模と平面形 西部は調査区域外となっているが、長軸(3.5)m、短軸3.23mで長方形と思われる。



第13図 第26号住居跡・出土遺物実測図

主軸方向 N-76°-W

壁 壁高は20~28cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を巡っている。上幅15~25cm、下幅4~10cm、深さ3~6cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦であり、特に踏み固められたところは検出できなかった。

炉 検出されなかった。

覆土 3層からなる。1層から3層まで、ロームブロックの含有量が多いことから人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック少量

遺物 弥生土器及びその小破片3点が出土している。第13図1・2は本跡から出土した弥生土器の拓影図である。1は中央部付近で覆土中層、2は覆土中からそれぞれ出土している。1・2は胴部片で、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。

所見 本跡は、西部が調査区域外に延びており、主柱穴、炉なども検出されず遺物も少ないため、時期の限定は難しい。しかし、出土遺物や近接する弥生時代の住居跡が後期中葉であることから、本跡の時期も、弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と思われる。

第33号住居跡（第14図）

位置 調査Ⅳ区、G3C0区。

規模と平面形 長軸4.48m、短軸3.24mの長方形である。

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高は2~5cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦であり、中央から北西部に向かってやや高まりが見られる。主柱穴の内側及び炉にかけて特に踏み固められている。

ピット 4か所（P1~P4）。P1~P4は径25~40cmの円形、深さ9~31cmで規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 中央に付設されており、長径73cm、短径57cmの楕円形で、床面を6cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈しており、火熱を受けてやや赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 褐色 焼土粒子・ローム粒子・粘土ブロック少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、山砂少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・山砂少量
- 4 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 炭化粒子多量、ローム粒子中量、焼土粒子少量

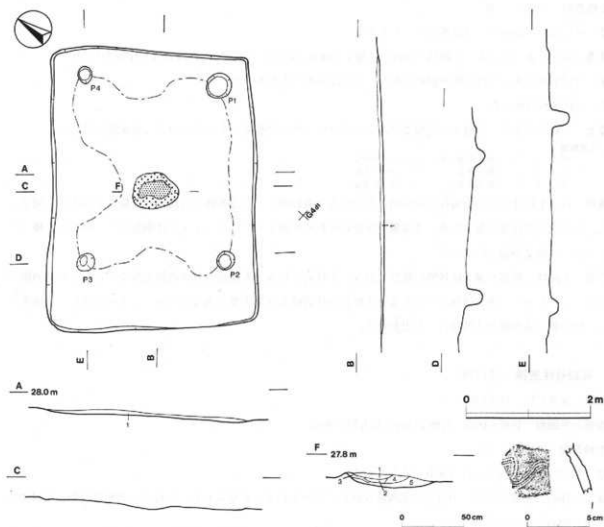
覆土 単一層からなる。ロームブロックや焼土の含有量が多いことから人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック・焼土粒子少量

遺物 弥生土器及びその小破片4点が出土している。第14図1は口縁部片で、覆土中から出土した弥生土器の拓影図である。口縁部には4本の櫛歯状工具による波状文が施されている。

所見 出土土器は、二軒屋式の流れを組む在地の土器である。本跡の時期は、出土土器から弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。



第14図 第33号住居跡・出土遺物実測図

第36号住居跡 (第15・16図)

位置 調査N区, G 3 b5区。

重複関係 第1号堀に掘り込まれており, 第1号堀より古い。

規模と平面形 東部は調査区域外となっているため, 検出できたのは長軸(2.7)m, 短軸(1.2)mで平面形は不明である。

主軸方向 N-21°-W

壁 壁高は24~38cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

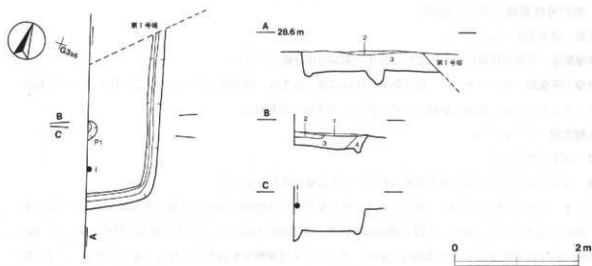
壁溝 壁下を巡っている。上幅18~25cm, 下幅3~9cm, 深さ3~5cmで, 断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦であり, 特に踏み固められたところは検出されなかった。

ピット P1は径(30)cmの円形, 深さ13~21cmで, 性格は不明である。

炉 検出されなかった。

覆土 4層からなる。ローム粒子やロームブロックが多量に含まれており, 1層から4層まですべて人為堆積と思われる。



第15図 第36号住居跡実測図

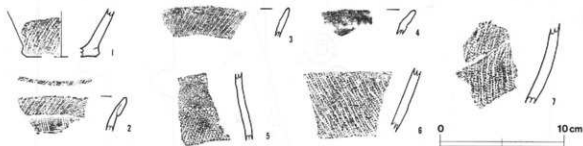
土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, ローム大・中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム大ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック・ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量

遺物 弥生土器及びその小破片94点が出土している。第16図1は底部から胴部の破片で、P1と南壁の中間の調査区域際の覆土上層から出土している。

2～7は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。2は口縁部から頸部の破片で、口唇部には縄文の押圧が、複合口縁部には附加条一種（附加2条）の縄文、頸部には4本の縞描文がそれぞれ施されている。3・4は口縁部片である。3は附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。4は棒状工具による押圧文が施されている。5は頸部から胴部の破片で、頸部には円形の押圧文、胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。6・7は胴部片で、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。

所見 本跡は、第1号堀に掘り込まれており、また、大部分が調査区域外に延びているため、住居跡の全容をとらえられなかった。出土土器は二軒屋式の流れを組む在地の土器である。本跡の時期は、出土土器から弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。



第16図 第36号住居跡出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	広口甕 弥生土器	B (4.3) C (3.6)	底部から胴部ト平にかけての破片。胴部は外転して立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部は掘り出し気味の平底である。	石英・長石・雲母 褐色 普通焼	P1001 5% PL09 覆土上層

第37号住居跡 (第17・18図)

位置 調査Ⅳ区, G3b7区。

重複関係 第38号住居に掘り込まれており, 第38号住居跡より古い。

規模と平面形 東コーナーの一部は第38号住居に掘り込まれ, 壁が削平されているため住居の正確な範囲は確認できなかったが, 床面の範囲は一辺(4.7)m, の方形と思われる。

主軸方向 N-48°-W

壁 削平されている。

床 ほほ平垣であり, 特に踏み固められたところは検出されなかった。

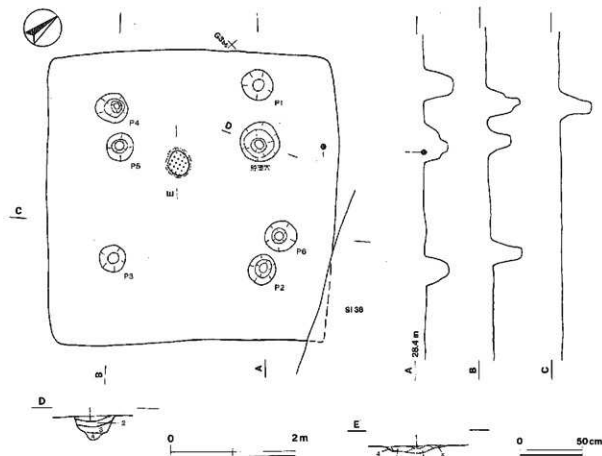
ピット 6か所(P1~P6)。P1~P3・P5及びP6は径43~50cmの円形, 深さ38~53cmである。P4は二段掘り込みになっており, 上段は径50cmの円形, 深さ30~43cmで, 下段は径20cmの円形, 深さ12~25cmで, 床面から下段底面までの深さは56cmである。P1~P4は規模や配列から支柱穴と考えられる。P4に隣接してP5があり, また, P2に隣接してP6があり, それぞれ補助柱穴と思われる。

貯蔵穴 P1とP2を結ぶライン上のP1寄りに付設されている。二段掘り込みになっており, 上段は径63cmの円形, 深さ26cmで, 下段は径25cmの円形, 深さ14cmで, 床面から下段底面までの深さは40cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック少量

炉 中央部からやや北西側に付設されており, 長径50cm, 短径40cmの楕円形で, 床面を5cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈しており, 火熱を受けてやや赤変硬化している。



第17図 第37号住居跡実測図

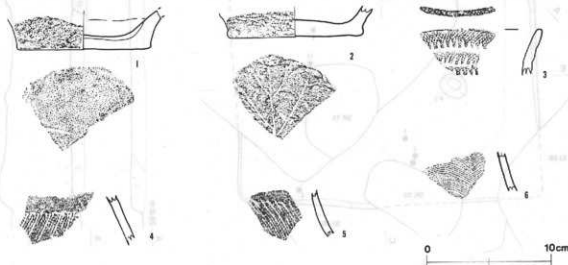
炉土層解説

- 1 にぶい赤色 焼土粒子中量、ローム大ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗赤色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
- 3 にぶい赤色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 5 にぶい赤色 焼土粒子・ローム粒子少量

遺物 弥生土器及びその小破片71点が出土している。第18図1・2は底部から胴部の破片である。1は北東壁中央付近の床面から出土している。

3～6は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。3は口縁部片で、複合口縁部には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、ヘラ状工具によるキザミが3段に渡って施されている。4・5は頸部から胴部の破片で、頸部は無文であり、胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。6は頸部片で6本の歯歯状工具による連弧文が施されている。

所見 本跡は、主軸方向に対して縦長に炉が付設されており、炉の北西部、主柱穴と主柱穴の間に貯蔵穴が設けられていることが特徴的である。出土土器は二軒屋式の流れを組む在地の土器である。本跡の時期は、出土土器から弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。



第18図 第37号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表

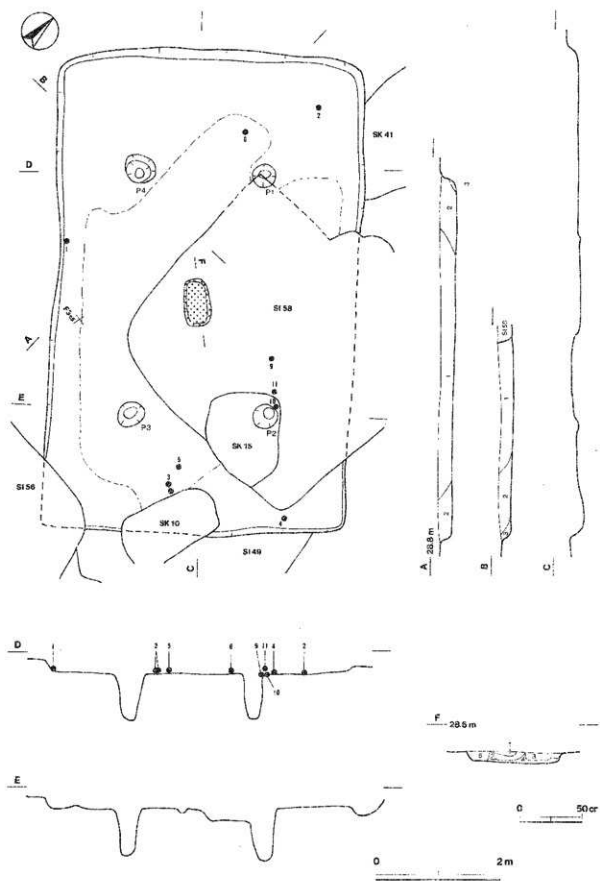
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・硬感	備考
第18図 1	広口壺 弥生土器	B (3.1) C (10.4)	底部から胴部下位にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には附加条縄文が施されている。底部には、木炭痕が残る。	石英・長石・雲母 明黄褐色 普通	P1002 5% PL69 覆土上層
2	広口壺 弥生土器	B (2.4) C (10.6)	底部から胴部下位にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には附加条縄文が施されている。底部には、木炭痕が残る。	石英・長石・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	P1003 5% PL69 覆土上層

第59号住居跡 (第19・20図)

位置 調査Ⅲ区, F 3b6区。

重複関係 第49・56・58号住居, 第10・15・41号土坑に掘り込まれており, これらの遺構より古い。

規模と平面形 長軸7.91m, 短軸4.90mの長方形と思われる。



第19図 第59号住居跡実測図

主軸方向 N-52°-W

壁 壁高は20~55cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

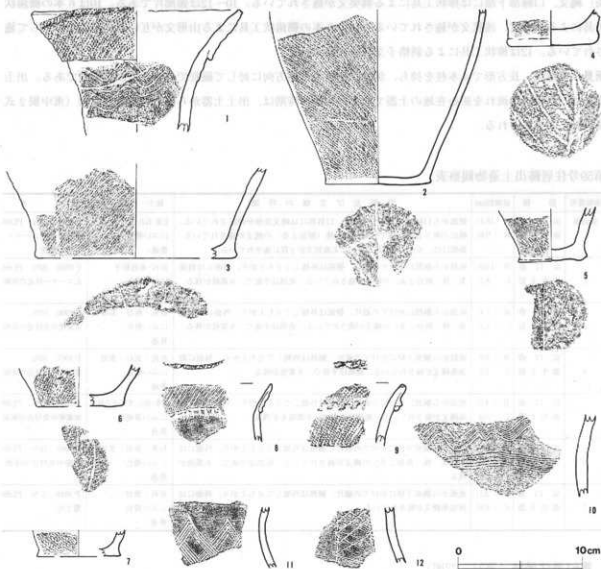
床 ほぼ平坦である。中央部及びその周辺は踏み固められている。

ピット 4か所(P1~P4)。P1~P3は径18~22cmの円形、深さ69~75cmである。P4は長径27cm、短径22cmの楕円形で、深さ80cmである。P1~P4は規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 中央部に付設されており、長径76cm、短径23cmの楕円形で、床面を17cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈しており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量
- 3 黒褐色 焼土粒子少量、焼土大ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック・焼土粒子少量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量



第20図 第59号住居跡出土遺物実測図

覆土 3層からなる。1層から3層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量

遺物 弥生土器及びその小破片198点が出土している。第20図1は広口壺の口縁部から頸部片で、西壁の中央からやや西コーナー寄りの床面から出土している。2～7は広口壺の底部から胴部片である。2は北コーナー付近、3・5は南東壁の中央付近、4は東コーナー付近、6は北壁中央付近の、それぞれ床面から出土している。7は覆土中から出土している。

8～12は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。8・9は口縁部から頸部片である。8は口唇部・口縁部に附加条一種（附加2条）の縄文、その下端に棒状工具による刺突文が施されている。9は炉から東へ110cm前後の位置、10はP2の近くで、それぞれ床面から出土している。11はP2のやや西側で覆土下層から出土している。9は複合口縁で、口唇部に棒状工具による押圧、口縁部から頸部にかけて附加条一種（附加2条）縄文、口縁部下端には棒状工具による刺突文が施されている。10～12は頸部片である。10は6本の櫛歯状工具による横波文、波状文が施されている。11は5本の櫛歯状工具による山形文が互い違いに重なりあって施されている。12は棒状工具による斜格子文が施されている。

所見 本跡は、長方形で4本柱を持ち、竈跡が住居の主軸方向に対して縦長であることが特徴的である。出土土器は二軒屋式の流れを組む在地の土器である。本跡の時期は、出土土器から弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。

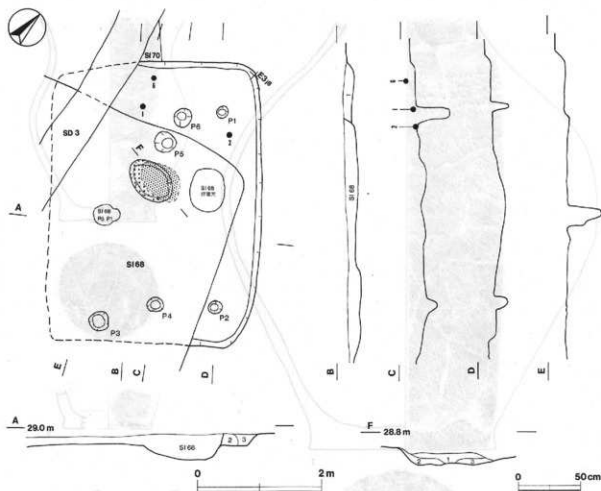
第59号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	広口壺 弥生土器	A (16.4) B (9.8)	頸部から口縁部にかけての破片。口唇部には縄文単体が押圧されている。幅広の折り返し口縁で、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。胴部には、6本の櫛歯状1具による波状文が2段に施されている。	石英・長石・雲母・白色粒子 にぶい褐色 普通	P1004 10% PL69 西壁中央西コーナー 寄りの床面
2	広口壺 弥生土器	B (14.0) C (8.4)	底部から胴部にかけての破片。胴部は外ねじで立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部は平底で、木炭痕が残る。	長石・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P1005 20% PL69 北コーナー付近の床面
3	広口壺 弥生土器	B (7.4) C (5.8)	底部から胴部にかけての破片。胴部は外ねじで立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部は平底で、木炭痕が残る。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P1006 10% 南東壁中央付近の床面
4	広口壺 弥生土器	B (2.9) C 7.0	底部から胴部下部にかけての破片。胴部は外ねじで立ち上がり、外面に附加条縄文が施されている。底部は平底で、木炭痕が残る。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P1007 10% 東コーナー付近の床面
5	広口壺 弥生土器	B (4.2) C 5.0	底部から胴部にかけての破片。胴部は外ねじで立ち上がり、外面には附加条縄文が施されている。底部は平底で、木炭痕が残る。	石英・長石・雲母・白色粒子 にぶい褐色 普通	P1008 15% PL69 南東壁中央付近の床面
6	広口壺 弥生土器	B (3.3) C (7.0)	底部から胴部下部にかけての破片。胴部は外ねじで立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部は平底で、木炭痕が残る。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P1009 10% PL69 北壁中央付近の床面
7	広口壺 弥生土器	B (2.1) C (6.8)	底部から胴部下部にかけての破片。胴部は外ねじで立ち上がり、外面には附加条縄文が施されている。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P1010 5% PL69 覆土中

第61号住居跡（第21・22図）

位置 調査Ⅱ区、E 3 e8区。

重複関係 第68・70号住居、第3号溝に掘り込まれており、これらの遺構より古い。



第21図 第61号住居跡実測図

規模と平面形 長軸4.54m、短軸(3.4)mの長方形と思われる。

主軸方向 N-45°-W

壁 壁高は20~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。

ビツト 6か所(P1~P6)。P1、P2及びP4は径20~26cmの円形、深さ20~28cmである。P1、P2は規模や配列から主柱穴と考えられる。P4は位置から出入り口施設に伴うビツトと考えられる。P3、P5、P6は径30~34cmの円形、深さ29~58cmで、性格は不明である。

炉 中央部からやや南西側に付設されており、長径80cm、短径58cmの楕円形で、床面を9cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は、やや火熱を受けている程度で赤変硬化面は検出できなかった。焼土粒子が散在している範囲は炉跡からやや北東側にずれている。

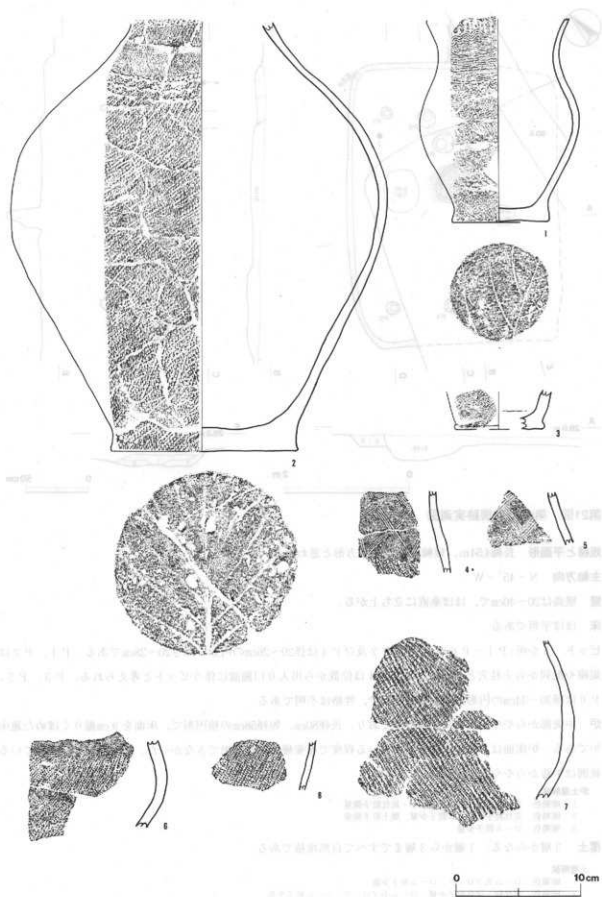
炉土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

覆土 3層からなる。1層から3層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 炭化材・炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 褐色 炭化粒子、ローム粒子中量、焼土粒子微量



第22図 第61号住居跡出土遺物実測図

遺物 弥生土器及びその小破片130点が出土している。第22図1～3は弥生土器の壺である。1は口唇部欠損の広口壺でやや北西壁中央寄り、2は口縁部欠損の大形広口壺でP1の南東側、北コーナー付近のそれぞれ床面から出土している。3は広口壺の底部から胴部の破片で、覆土中から出土している。

4～8は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。4、5は頸部片、6は頸部から胴部片、7、8は胴部片である。4は3本、5は6本の歯状工具によって、互い違いに山形文が施されている。6は頸部が無文帯で、胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。7、8は附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。6は北西壁中央付近の覆土上層から出土している。

所見 本跡は、第68住居、第3号溝に掘り込まれており、住居の全容をとらえられなかった。土器は頸部に多条櫛歯文が、胴部に附加条一種（附加2条）の縄文が施されており、二軒屋式の流れを組む在地の土器である。本跡の時期は、出土土器から弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。

第61号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 1	広口壺 赤赤土器	B (16.3) C 7.8	底部から口縁部にかけての破片。口縁部下端には櫛歯文が施され、胴部には櫛歯状工具による痕状文が4条単位で、4段に施されている。胴部外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には、木炭痕が残る。全体的に若干曇面が現れている。	石英・長石・雲母 黄灰色 普通	P1011 60% PL69 北西壁中央寄りの床面
2	広口壺 赤赤土器	B (34.7) C 14.9	頸部上位から口縁部欠損。胴部中に附加条一種（附加2条）の縄文を地文にへう状工具による縦区画がなされ、区画内には斜格子文が施されている。頸部下位は無文である。胴部上位には附加条の縄文の北端部の変化が3段に渡って施されている。胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には木炭痕が残る。	石英・長石・白色粒子 ぶい黄褐色 普通	P1012 80% PL69 北コーナー付近の床面
3	広口壺 弥生土器	B (3.3) C (7.0)	底部から胴部下位にかけての破片。胴部は外縁して立ち上がり、外面には附加条縄文が施されている。底部には、木炭痕が残る。外面はやや薄塗している。	石英・長石・雲母・白色粒子 ぶい黄褐色 普通	P1013 5% PL69 覆土中

第62号住居跡（第23・24図）

位置 調査Ⅲ区、F 3 a8区。

重複関係 第68号住居、第31・32号土坑に掘り込まれており、これらの遺構より古い。

規模と平面形 長軸3.32m、短軸3.10mの方形と思われる。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は25～40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

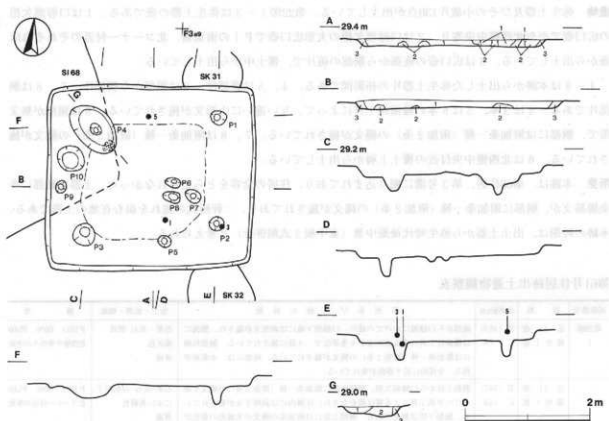
床 ほぼ平坦であり、中央部は踏み固められている。

ピット 10か所（P1～P10）。P1、P2、P5は径22～27cmの円形、深さ30cm前後である。P3、P10は径37～48cmの円形、深さ16～26cmである。P4は二段掘り込みになっており、上段は長径93cm、短径69cmの楕円形、深さ16cmで、下段は径18cmの円形、深さ19cmで、床面から下段底面までの深さは35cmである。P1～P4は規模や配列から主柱穴と考えられ、P5は位置や配列から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P9は長径22～32cm、短径16～20cmの楕円形、深さ9～16cmである。P6～P10は、性格が不明である。

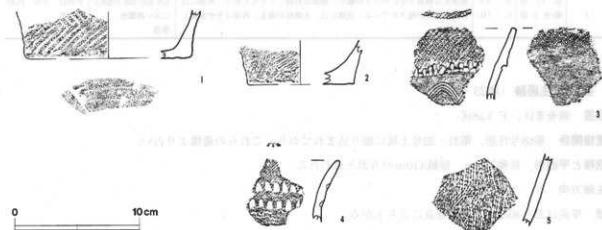
P4土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム大ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土大ブロック・ローム粒子少量

炉 検出されなかったが、P4の第3層に焼土が多く見られることから、炉の位置はP4から南東側の中央部に付設されていたと考えられる。



第23図 第62号住居跡実測図



第24図 第62号住居跡出土遺物実測図

覆土 3層からなる。ロームブロックの含有が多いことと、ブロック状の堆積をしていることから3層とも人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

遺物 弥生土器及びその小破片23点が出土している。第24図1・2は広口壺の底部から胴部片で、1は中央部南側のややP5寄りの床面から、2は覆土中からそれぞれ出土している。

3～5は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。3は口縁部から頸部片で、P2の覆土上層から出土している。複合口縁部には附加条一種（附加2条）の縄文、口縁部下端にはキザミが施されている。また、頸

部には5本の櫛歯状工具による連弧文が施されている。4は口縁部片で、附加条一種（附加2条）の縄文、その上から棒状工具による刺突文が2段に渡って施されている。5は胴部片で、P1とP4を結ぶ線上中央の覆土上層から出土しており、縄文が施されている。

所見 本跡は、中央部や西壁側で性格不明のピットが検出されていることが特徴的である。土器は、広口壺で頸部に多条櫛歯文が施文されており、二軒屋式の流れを組む在地の土器である。本跡の時期は、出土土器から弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。

第62号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	広口壺 弥生土器	B (39) C (12.7)	底部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外壁には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には、木葉痕が残る。	石英・長石・雲母にぶい橙褐色 普通	P1014 5% PL69 中央部背側の床面
2	広口壺 弥生土器	B (35) C (8.4)	底部から胴部下位にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外壁には附加条縄文が施されている。	石英・長石・雲母にぶい橙褐色 普通	P1015 5% PL69 覆土中

第71号住居跡（第25・26図）

位置 調査Ⅲ区，E 3 b6区。

重複関係 第73・74号住居，第37・38・57号土坑に掘り込まれており，これらの遺構より古い。

規模と平面形 長軸3.53m，短軸2.29mの隅丸長方形と思われる。

主軸方向 N-78°-E

壁 壁高は18~30cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的にほぼ平坦である。

ピット 2か所（P1・P2）。P1は長径21cm，短径13cmの楕円形，深さ15cmである。P2は径16cmの円形，深さ37cmである。P1，P2は規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 中央部が第73号住居に掘り込まれており，検出されなかった。

覆土 2層からなる。1層，2層ともロームの含有量が多いことから人為堆積と思われる。

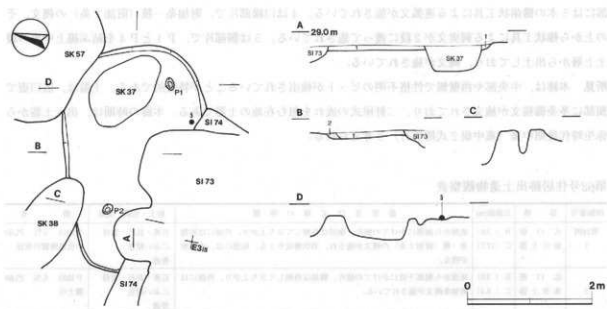
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量，ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

遺物 弥生土器及びその小破片38点が出土している。第26図1は広口壺の底部から胴部片で，覆土中から出土している。

2~6は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。2は口縁部片で，口唇部には縄文の押圧，複合口縁部には2段に渡って棒状工具による刺突文が，それぞれ施されている。3は頸部片で，3本の櫛歯状工具による連弧文が施されている。4は頸部から胴部片で，頸部には櫛歯状工具による山形文，胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が，それぞれ施されている。5は頸部から胴部片で，南東壁のやや東コーナー寄りの床面から出土しており，頸部は無文で，胴部は附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。6は胴部片で附加条縄文が施されている。

所見 出土土器は，二軒屋式の流れを組む在地の土器である。本跡の時期は，出土土器から弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。



第25図 第71号住居跡実測図



第26図 第71号住居跡出土遺物実測図

第71号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	広口壺 赤土生土	B (4.3) C (5.6)	底部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には附加条縄文が施されている。底部には、木炭痕が残る。	石英・長石・白色粒子 褐色 普通	P1016 5% P169 覆土中

第77号住居跡 (第27・28区)

位置 調査Ⅲ区, E 3 h9区。

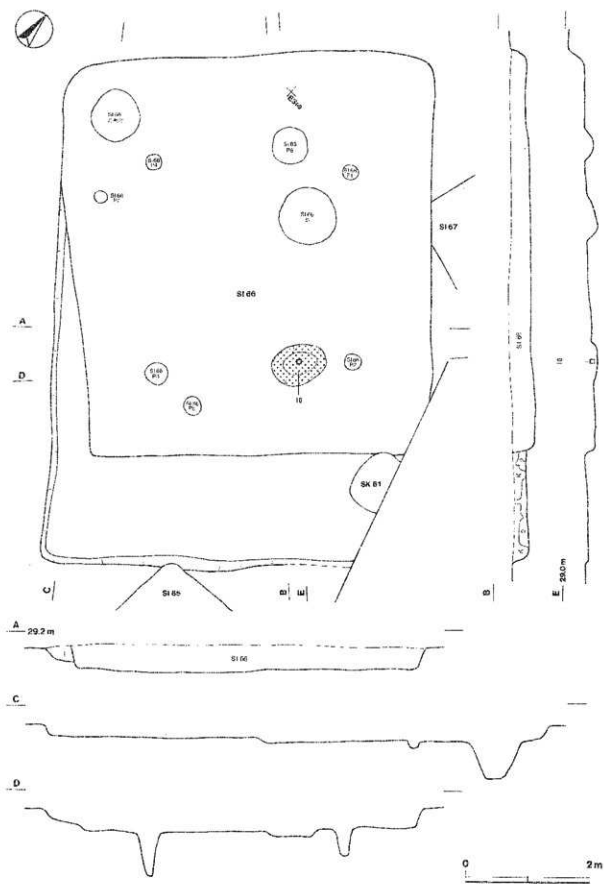
重複関係 第65・66号住居, 第61号土坑に掘り込まれており, これらの遺構より古い。
規模と平面形 東コーナー部は調査区域外となっているが, 長軸8.20m, 短軸6.03mの長方形と思われる。

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高は12~20cmで, 外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦であり, 特に踏み固められたところは検出されなかった。

炉 中央部から南東寄りに付設されており, 長径60cm, 短径45cmの楕円形で, 床面を10cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈しており, わずかに赤変硬化している程度である。炉石は, 炉の覆土中層から出土しており, 炉に付設されていたものと思われる。



第27图 第77号住居踏实测图

覆土 2層からなる。ロームブロックの含有量が多いため、2層とも人為堆積と思われる。

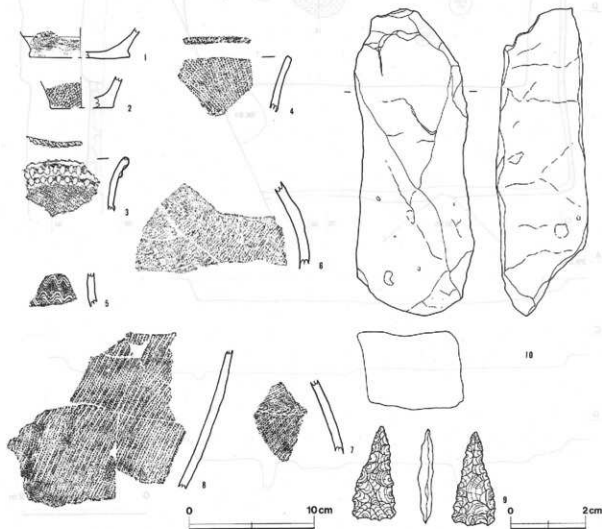
土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム大・小ブロック少量

遺物 弥生土器及びその小破片64点が出土している。第28図1・2は広口壺の底部から胴部の破片で、それぞれ覆土中から出土している。

3～8は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。3は口縁部から頸部片で、複合口縁部には2段になって棒状工具による刺突文が巡らされ、頸部には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。4は口縁部片で、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。5は頸部片で4本の櫛歯状工具による波状文が施されている。6・7は頸部から胴部の破片である。6は頸部が無文で、7は頸部に山形文、胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。8は胴部片で、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。9は石鏃で覆土中から出土している。10は炉石で、炉の覆土中層から出土している。

所見 本跡は、長辺が8m以上、短辺でも6m以上の比較的大形の住居跡と推測され、炉石や石鏃が出土するなど、特徴的なものが見られる。出土土器は二軒屋式の流れを組む在地の土器である。本跡の時期は、出土土器から弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。



第28図 第77号住居跡出土遺物実測図

第77号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	首周長(cm)	器形及び文様の特長	胎土・色調・組成	備考
第28図 1	広口壺	B (2.4)	底部から胴部下位にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には 附加糸縄文が施されている。底部には、木炭痕が残る。	石英・長石・雲母 に多い赤褐色 普通	P1017 5% PL69 覆土中
	赤生土器	C (7.8)			
2	広口壺	B (2.5)	底部から胴部下位にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には 附加糸縄文(附加2条)の縄文が施されている。底部は、磨滅している。	石英・長石・白色粒子 明赤褐色 普通	P1018 5% PL69 覆土中
	赤生土器	C [5.1]			

図版番号	類別	計 画 図 様				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第28図9	石 鏡	2.5	1.2	0.4	0.7	黒曜石	覆土中	Q102 PL110
10	砂 石	24.8	9.7	6.3	2488.0	炭 酸 鈣	炉の覆土中層	Q101 PL111

第90号住居跡 (第29・30図)

位置 調査Ⅲ区, E 312区。

規模と平面形 西コーナー部は調査区域外となっているが, 長軸5.42m, 短軸4.09mの長方形と思われる。

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高は14~28cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平沢で, 中央部付近が特に踏み固められている。

ピット 19か所(P1~P19)。P1~P3, P5は径25~30cmの円形, 深さ54~57cmである。P4は長径57cm, 短径26cmの楕円形, 深さ57cmである。P1~P4は規模や配列から主柱穴と考えられる。P5は南東壁の中央付近に位置しており, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2に隣接してP6があり, 径17cmの円形, 深さ33cmで補助柱穴と思われる。P7及びP8は炉に隣接した北側の中央部に位置し, 径20~33cmの円形及び楕円形, 深さ6~11cmである。P9~P17は炉から北西壁寄りに集中しており, 径13~29cmの円形, 深さ11~19cmである。P18及びP19は北西壁中央からやや北側の壁際に位置し, 長径30~43cm, 短径20~25cmの楕円形, 深さ15~30cmである。P7~P19の性格は不明である。

貯蔵穴 南西壁下の中央部に付設されており, 長径68cm, 短径49cmの楕円形, 深さ20cmで, 断面形は逆台形をしている。

炉 中央部に付設されており, 長径90cm, 短径63cmの楕円形で, 床面を16cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈しており, 火熱を受けて赤変硬化している。床面よりも上面の焼土が炉の掘り込み部分から, やや北側にずれて出土している。

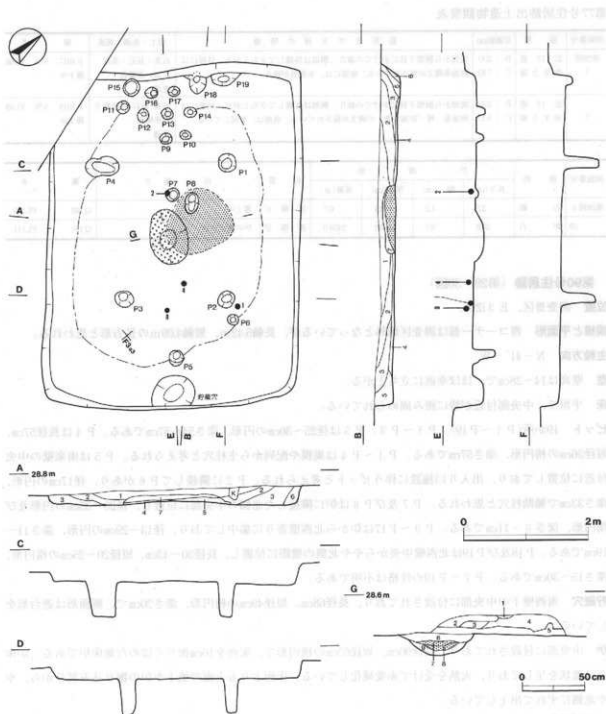
炉土層解説

- 黒 褐色 焼土粒子中量, 灰少量
- 極赤褐色 焼土粒子中量, 灰少量
- 赤 褐色 焼土粒子多量, 焼土大ブロック少量
- 赤 褐色 焼土粒子多量, 焼土大ブロック・焼土小ブロック中量
- 暗 褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 黒 褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・灰少量, ローム粒子微量
- 暗 赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 灰微量
- 赤 褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・ローム粒子少量, 灰微量
- 褐色 焼土粒子多量, ローム大・小ブロック・焼土粒子少量

覆土 7層からなる。1層から7層までロームの含有量が多いことからすべて人為堆積と思われる。

土層解説

- 暗 褐色 ローム粒子中量・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 暗 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 暗 褐色 ローム粒子中量, 炭化物・焼土粒子・炭化粒子少量
- 暗 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 暗 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック少量, 焼土粒子微量
- 暗 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量
- 暗 褐色 焼土粒子中量, 焼土大ブロック・ローム大ブロック・ローム粒子少量



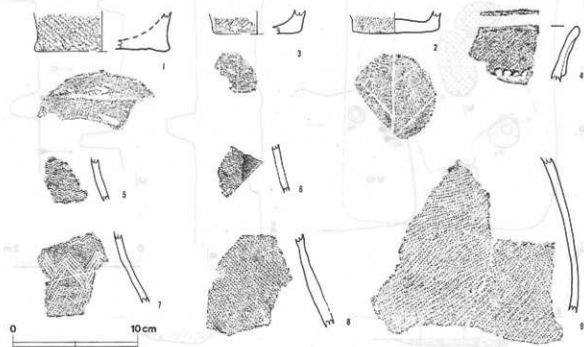
第29図 第90号住居跡実測図

遺物 弥生土器及びその小破片215点が出土している。第30図1～3は弥生土器広口壺の底部から胴部の破片である。1はP2の東側に隣接した覆土下層から出土している。2はP7の覆土中層から出土している。3は覆土中から出土している。

4～9は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。4は口縁部片で、炉東側の覆土下層から出土している。複合口縁部には縄文、その下端には棒状工具による押圧文がそれぞれ施されている。5は頸部片で、5本の櫛歯状工具による波状文が施されている。6は頸部片で、棒状工具による斜格子文が施されている。7は頸

部から胴部片で、南南西の覆土中から出土しており、5本の櫛歯状工具による山形文が施されている。8は胴部片で、P2とP3を結ぶライン中央の覆土下層から出土しており、縄文が施されている。9は胴部片で、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。

所見 本跡は、北西壁付近で性格不明のピット群が検出されたことが、特徴的である。土器は、多条櫛歯文の採用など二軒屋式の流れを組む在地の土器である。本跡の時期は、出土土器から弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。



第30図 第90号住居跡出土遺物実測図

第90号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	広口壺 弥生土器	B (3.2) C (10.6)	底部から胴部下段にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には、木炭痕が残る。内面は塗膜している。	石英・長石・白色粒子にふい塵色 普通	P1019 5% PL60 P2の東側に隣接した覆土下層
2	広口壺 弥生土器	B (1.7) C (7.0)	底部から胴部下段にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には、木炭痕が残る。	石英・長石・雲母にふい塵褐色 普通	P1020 10% PL60 P7の覆土中層
3	広口壺 弥生土器	B (1.9) C (6.4)	底部から胴部下段にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には、木炭痕が残る。	石英・長石にふい塵褐色 普通	P1021 5% PL60 覆土中

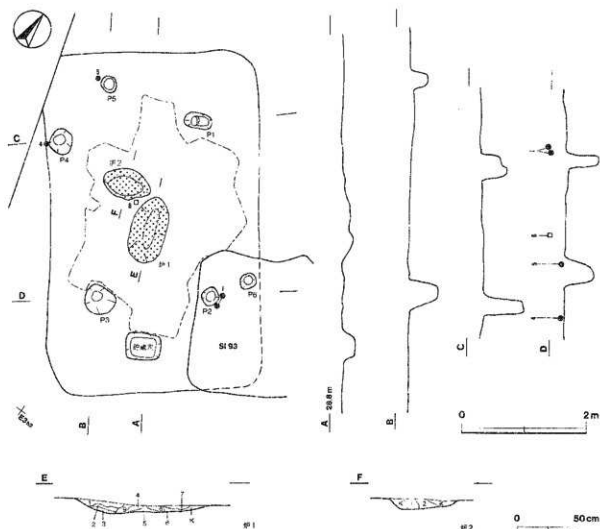
第94号住居跡（第31・32図）

位置 調査Ⅲ区、E3g1区。

重複関係 第93号住居に掘り込まれており、第93号住居より古い。

規模と平面形 西コーナー部は調査区域外となっており、また床面近くまで削平されていたため床面の平面形は長軸5.48m、短軸3.40mの長方形と思われる。

主軸方向 N-34°-W



第31図 第94号住居跡実測図

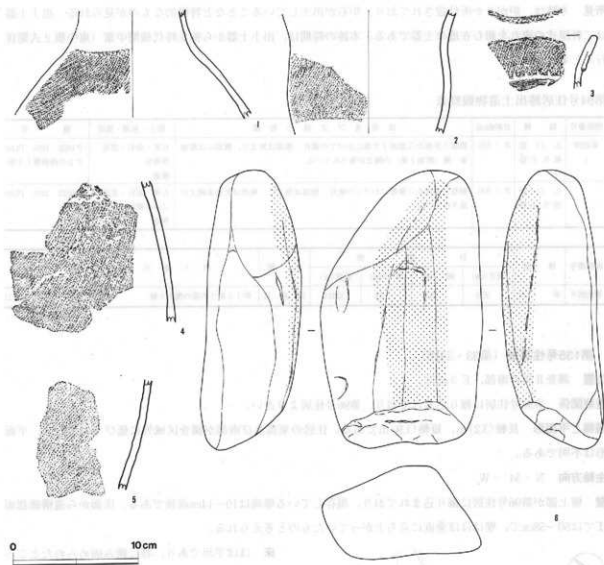
壁 床近くまで削平されているため、壁は検出できなかった。

床 ほぼ平坦であるが、小さな凹凸があり炉を中心とした中央部が踏み固められている。

ピット 6か所(P1～P6)。P1は二段掘り込みになっており、上段は長径25～45cmの楕円形、深さ33cmで、下段は径23cmの円形、深さ12cmで、床面から下段底面までの深さは45cmである。P3は長径50cm、短径45cm、深さ50cmである。P1～P3は規模や配列から土柱穴と考えられる。P4～P6は長径27～45cm、短径27～38cmの円形及び楕円形、深さ22～65cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 炉1の南東壁寄りに付設されており、長径57cm、短径43cmの円形、深さ20cmで、断面形は逆台形をしている。

炉 2か所。炉1はほぼ中央に付設されており、長径105cm、短径54cmの楕円形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈しており、火熱を受けて赤変硬化している。炉2は炉1の北西部に付設されており、長径77cm、短径48cmの楕円形、深さ7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈しており、火熱を受けてわずかに赤変している。炉に付設されていたと思われる炉石は、炉1と炉2の間の立ち上がり部分から出土している。



第32図 第94号住居跡図出土遺物実測図

炉1土層解説

- 1 黒褐色 焼土大ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土大・小ブロック中量
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム大ブロック少量
- 5 にぶい赤褐色 ローム大ブロック・焼土粒子少量
- 6 にぶい赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
- 8 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・焼土粒子少量
- 9 灰褐色 焼土粒子中量, 焼土大ブロック・ローム粒子少量

炉2土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量

遺物 弥生土器及びその小破片13点が出土している。第32図1・2は弥生土器広口壺の頸部から胴部の破片である。1はP2の東側で覆土上層から出土している。2は覆土中から出土している。

3～5は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。3は口縁部片で、南部覆土中から出土している。複合口縁には附加条一種（附加2条）の縄文、段の下端には棒状工具による刺突文が施されている。4・5は胴部片で、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。4はP4の南西側、5はP5の西側の、それぞれ覆土下層から出土している。6は炉石で炉1と炉2の間の立ち上がり部分から出土している。

所見 本跡は、炉が2か所付設されており、炉石が出土していることなど特徴的なものが見られる。出土土器は二軒屋式の流れを組む在地の土器である。本跡の時期は、出土土器から弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。

第94号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色別・造成	備考
第32図 1	広口壺 弥生土器	B (8.5)	胴部上半部から胴部下半部にかけての破片。胴部は無文で、胴部には附加糸一縷（附加2条）の縄文が施されている。	石英・長石・雲母 黒褐色 普通	P1022 10% PL69 P2の西側覆土層
2	広口壺 弥生土器	B (9.9)	胴部上半部から胴部にかけての破片。胴部は無文で、胴部には附加糸一縷の縄文が施されている。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P1023 10% PL69 覆土中

図版番号	種別	計測値			石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)			
第32図6	炉石	22.5	13.1	7.6	3303.0	西縁岩	炉1と炉2の間の覆土層 Q101 PL111

第135号住居跡（第33・34図）

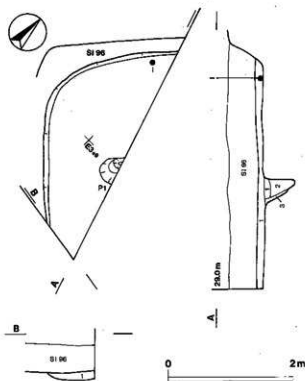
位置 調査Ⅱ区の南部，E 3 e9区。

重複関係 第96号住居に掘り込まれており，第96号住居より古い。

規模と平面形 長軸(3.2)m，短軸(1.9)mである。住居の東部及び南部が調査区域外に延びているため，平面形は不明である。

主軸方向 N-54°-W

壁 壁上部が第96号住居に掘り込まれており，現存している壁高は10~14cm前後である。床面から遺構確認面までは50~58cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がっていたものと考えられる。



第33図 第135号住居跡実測図

床 ほぼ平坦であり，特に踏み固められたところは検出されなかった。

ピット 長径(46)cm，短径(32)cmで，残りの東半分が調査区外になっているため，平面形は不明である。深さは37~52cmで，性格も不明である。

P1土層解説

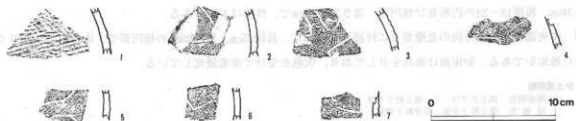
- 1 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土中・小ブロック・炭化粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量

覆土 単一層であり，自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量

遺物 弥生土器片12点が出土している。第34図1~7は弥生土器片の拓影図で，広口壺の胴部片である。1は北西壁付近の床面から出土しており，附加糸縄文が施されている。2~7は覆土中から出土しており，中期中葉の土器片で，沈線により区画された中に縄文が充填されている。



第34図 第135号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は、第96号住居に掘り込まれており、東部及び南部が調査区域外に延びているため、検出できた範囲が狭い。出土遺物は全体的に少なく、覆土中からは弥生時代中期中葉の土器片が6点ほど出土しているが流れ込みと思われる。本跡の時期は、床面の出土土器から弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。

■ 第156号住居跡（第35図）

位置 調査Ⅱ区の北部、C2d6区。

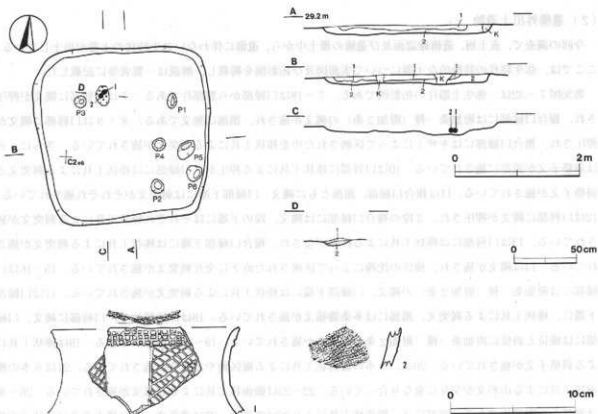
規模と平面形 長軸2.64m、短軸2.60mの隅丸方形である。

主軸方向 N-6°-W

壁 壁高は20~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり、特に踏み固められたところは検出されなかった。

ピット 6か所。（P1~P6）。P1は長径22cm、短径15cmの楕円形、深さ12cmである。P2及びP3は径18~22cmの円形、深さ14cmほどである。P1~P3は規模や配列から主柱穴と考えられる。P4~P6は長径20



第35図 第156号住居跡・出土遺物実測図

～34cm, 短径18～24の円形及び楕円形, 深さ28～32cmで, 性格は不明である。

炉 中央部から北西方向の北壁寄りに付設されており, 長径35cm, 短径20cmの楕円形で, 床面を4cm掘りくぼめた床炉である。炉床面は皿状を呈しており, 火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土大ブロック・焼土粒子中量
- 2 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量

覆土 2層からなり, 自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量

遺物 弥生土器片3点が出土している。第35図1は広口壺の口縁部から胴部片である。

2は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。2は胴部片で, 外面には附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。出土遺物は1・2とも, 炉の中央部下層から出土している。

所見 出土土器は, 二軒屋式の流れを組む在地の土器である。本跡の時期は, 出土土器から弥生時代後期前葉(東中根1式期併行)と考えられる。

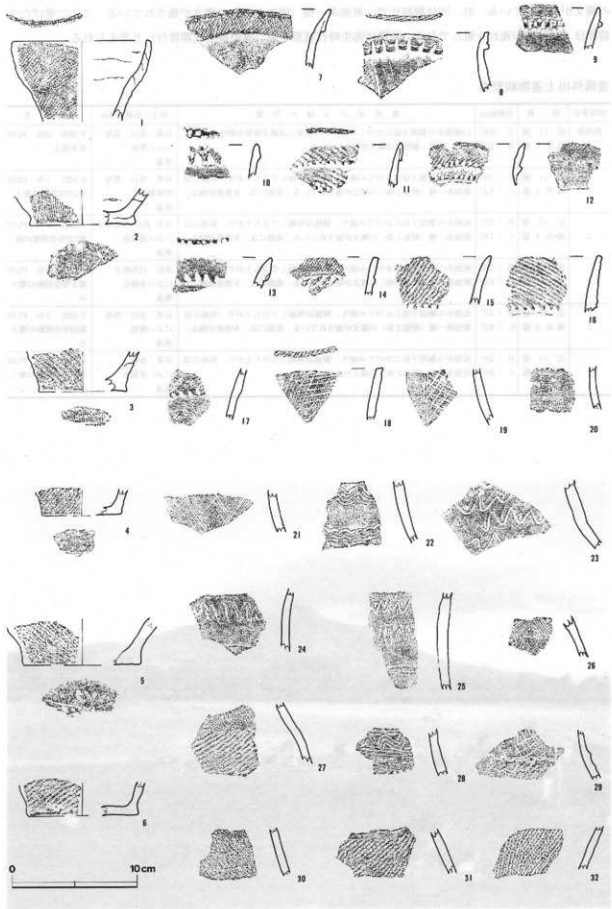
第156号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・構成	備考
第35図 1	広口壺 弥生土器	A (15.0) B (7.0)	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部には縄文が施されている。口縁部は楕円の複合口縁で、へう状上縁によりキザミが縦横に施されている。胴部には細歯状工具によって縦区画された中に、斜格子文が充填されている。	胎土・灰石・炭粉 にぶい黄褐色 普通	F1024 5% PL69 炉の中央部下層

(2) 遺構外出土遺物

今回の調査で, 表土層, 遺構確認面及び遺構の覆土中から, 遺構に伴わない弥生時代の土器が出土している。ここでは, 弥生時代の特徴的な土器について実測図及び拓影図を掲載し, 解説は一覧表等に記載した。

第36図7～32は, 弥生土器片の拓影図である。7～18は口縁部から頸部片である。7は口唇部に縄文が押圧され, 複合口縁部には附加条一種(附加2条)の縄文が施され, 頸部は無文である。8・9は口唇部に縄文が押圧され, 複合口縁部にはキザミによって区画された中を棒状工具による刺突文が施されている。さらに, 8は斜格子文が頸部に施されている。10は口唇部に棒状工具による押圧が, 口縁部には棒状工具による刺突文と斜格子文が施されている。11は複合口縁部, 頸部ともに縄文, 口縁部下端には刺突文がそれぞれ施されている。12は口唇部に縄文が押圧され, 2段の複合口縁部には縄文, 段の下端にはそれぞれ棒状工具による刺突文が施されている。13は口唇部には棒状工具による押圧がなされ, 複合口縁部下端には棒状工具による刺突文が施されている。14は縄文が施され, 横位の沈線によって区画された直下に交互刺突文が施されている。15・16は口縁部には附加条一種(附加2条)の縄文, 口縁部下端には棒状工具による刺突文が施されている。17は口縁部下端に, 棒状工具による刺突文, 頸部には多条歯指文が施されている。18は口縁部片で, 口唇部に縄文, 口縁部には横位と斜位に附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。19～25は頸部片である。19は棒状工具による斜格子文が施されている。20は, 5本の櫛歯状工具による縦区画や波状文が施されている。21は6本の櫛歯状工具による山形文が交互に重なり合っている。22～25は櫛歯状工具による連弧文が施されている。26～30は頸部から胴部片である。頸部には, 櫛歯状工具により26は波状文, 27は連弧文, 28は横位文及び波状文が施されている。29, 30は頸部に棒状工具による斜格子文が施されている。26～30の胴部には附加条一種(附加2



第36图 遺構外出土遺物実測図

実測図

の縄文が施されている。31, 32は胴部片で、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。ここに挙げた土器群は二軒屋式の流れを組んでおり、時期は弥生時代後期中葉（東中根2式期併行）と考えられる。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	広口壺 弥生土器	A [10.8] B (5.5)	口縁部から胴部上位にかけての破片。口唇部には縄文原体が押しこめられている。口縁部・胴部には縄文が施されている。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P1035 10% PL70 Ⅲ区表土
2	広口壺 弥生土器	B (2.8) C [8.4]	底部から胴部下位にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には、本葉痕が残る。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P1027 5% PL60 第175号住居跡の覆土 中
3	広口壺 弥生土器	B (3.2) C [7.0]	底部から胴部下位にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には、本葉痕が残る。	石英・長石・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	P1028 5% PL70 第112号住居跡の南 部表土中
4	広口壺 弥生土器	B (2.0) C [6.4]	底部から胴部下位にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には、本葉痕が残る。	長石・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	P1029 5% PL70 第5号住居跡の覆土 中
5	広口壺 弥生土器	B (3.7) C [9.2]	底部から胴部下位にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には、本葉痕が残る。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P1033 5% PL70 第34号住居跡の覆土 中
6	広口壺 弥生土器	B (2.6) C [8.6]	底部から胴部下位にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。	石英・長石 にぶい黄褐色 普通	P1034 5% PL60 第35号住居跡の覆土 中



作業風景

昭和三十八年出土物観察 昭和三十八年

4 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、調査区のほぼ全域から当該期の竪穴住居跡40軒、土坑3基、溝1条を検出した。大半の竪穴住居跡は、他の遺構との重複が激しく、住居跡の中には遺構及び遺物の遺存状況が良好とはいえないものもある。以下、検出した遺構と遺物について記載する。

なお、ここでいう古墳時代には、実年代でいうところの7世紀第4四半期～8世紀第1四半期を含めないものとする。

(1) 竪穴住居跡

第2号住居跡 (第37・38図)

位置 調査Ⅱ区の南部，E3d2区。

重複関係 本跡は第1・3・15・103・104号住居に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの住居跡よりも古い。

規模と平面形 南部は調査区域外に延びているため、確認できたのは長軸5.34m、短軸(0.9)mであるが、平面形は方形と思われる。

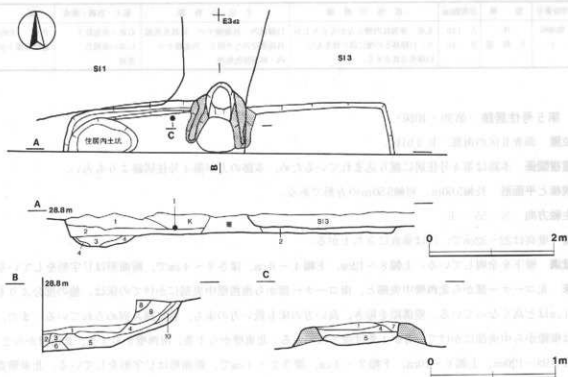
主軸方向 [N-1°-W]

壁 壁高は30～32cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁西側の壁下を巡っている。上幅10～16cm、下幅4～6cm、深さ6～10cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

住居内土坑 北西コーナー部に掘り込まれており、長径112cm、短径(54)cmの楕円形、深さ22cmで、断面形はU字形をしている。性格は不明である。



第37図 第2号住居跡実測図

住居内土坑層解説

- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土粒子微量

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ112cm、両袖幅108cmで、壁外への掘り込みは34cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面とはほぼ同じレベルで、浅い皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

覆土層解説

- 1 にぶい赤褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 にぶい赤褐色 焼土粒子・灰少量
3 にぶい赤褐色 粘土粒子・砂粒・灰少量、焼土粒子微量
4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・灰少量、焼土中・小ブロック微量
5 にぶい赤褐色 ローム粒子中量、焼土中・小ブロック・焼土粒子少量
6 にぶい赤褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
7 褐色 ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子微量
8 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、焼土中ブロック少量
9 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土中・小ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
10 にぶい赤褐色 粘土中・小ブロック・焼土粒子多量、砂粒少量

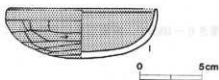
覆土 2層からなる。2層とも自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

遺物 土師器及びその小破片31点が出土している。第38図1の坏が竈の両側の覆土中層から正位の状態で出土している。

所見 本跡は、南部が調査区域外に延びているため、確認できたところが少なく、出土遺物も少なかった。本跡の時期は、出土遺



第38図 第2号住居跡出土遺物実測図

物から7世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

第2号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	坏 土師器	A 12.0 B 4.0	丸底。腰部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に割い接をもつ。 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部及底部外面横位のヘケ削り、内面横ナデ。 内・外面黒色処理。	石灰・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P 5 70% PL70 竈内覆土中層

第5号住居跡(第39・40図)

位置 調査Ⅱ区の南部, E 3 b1区。

重複関係 本跡は第4号住居に掘り込まれているため、本跡の方が第4号住居跡よりも古い。

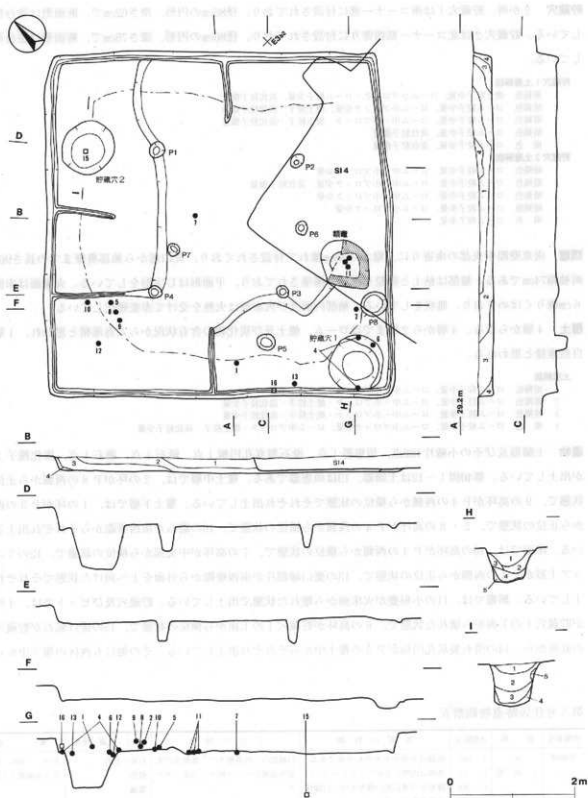
規模と平面形 長軸5.60m, 短軸5.50mの方形である。

主軸方向 N-55°-E

壁 壁高は22~32cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を全周している。上幅8~12cm, 下幅4~6cm, 深さ2~4cmで、断面形はU字形をしている。

床 北コーナー部から北西壁中央部と、南コーナー部から南西壁中央部にかけての床は、他の部分よりも4~6cmほど高くなっている。壁溝際を除き、高い方の床も低い方の床も、特に踏み固められている。また、床には壁際から中央部にかけて、溝が4条付設されている。北東壁から1条, 南西壁から1条, 北西壁から2条で、長さ98~120cm, 上幅6~10cm, 下幅2~4cm, 深さ2~4cmで、断面形はU字形をしている。北東壁寄りの床面を中心に、垂木と思われる炭化材が壁際から中央部に向かうような状態で遺存していた。



第39図 第5号住居跡実測図

ピット 8か所(P1～P8)。P1～P4は径20～28cmの円形、深さ38～44cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P5は径26cmの円形、深さ20cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6及びP7は径20～22cmの円形、深さ16～20cmで、性格は不明である。P8は直径40cmの円形、深さ14cmで、覆土中から双孔円板が出土しており、住居内祭祀に関連するピットと考えられる。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南コーナー部に付設されており、径86cmの円形、深さ62cmで、断面形は逆台形をしている。貯蔵穴2は北コーナー部西寄りに付設されており、径86cmの円形、深さ78cmで、断面形は逆台形をしている。

貯蔵穴1土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

貯蔵穴2土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子少量

類竈 南東壁際中央部の南寄りに、壁から38cm離れて付設されており、焚口部から袖部奥壁までの長さ96cm、両袖幅74cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されており、平面形はU字形をしている。火床面は床面を6cm掘りくぼめており、皿状をしている。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変炭化している。

覆土 4層からなる。4層から2層まではローム、焼土及び炭化物の含有状況から人為堆積と思われる、1層は自然堆積と思われる。

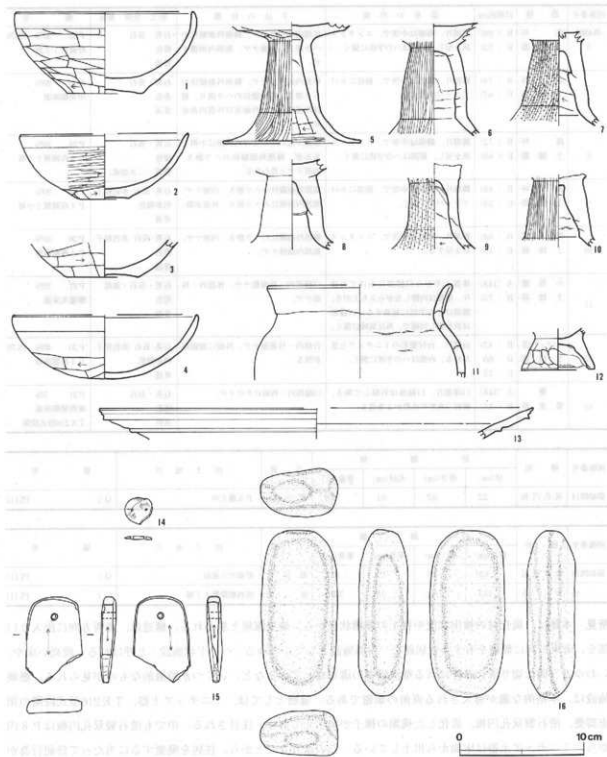
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器及びその小破片462点、須恵器1点、滑石製双孔円板1点、砥石1点、磨石1点、炭化種子1点が出土している。第40図1～12は土師器、13は須恵器である。覆土中層では、2の坏がP8の西側から正位の状態、9の高坏がP4の西側から横位の状態それぞれ出土している。覆土下層では、1の坏がP5の西側から正位の状態、5・8の高坏がP4の西側から横位の状態、16の磨石が南西壁際からそれぞれ出土している。床面では、10の高坏がP4の西側から横位の状態、7の高坏が中央部から横位の状態、12のミニチュア土器がP4の西側から正位の状態、13の焼土片が南西壁際から外面を上へ向けた状態でそれぞれ出土している。類竈では、11の小形甕が火床面から壊れた状態で出土している。貯蔵穴及びピットでは、4の坏が貯蔵穴1の上面から壊れた状態で、6の高坏が貯蔵穴1の上面から横位の状態、15の揚げ砥石が貯蔵穴2の底面から、14の滑石製双孔円板がP8の覆土中からそれぞれ出土している。その他にも西区の覆土中から3

第5号住居跡遺物観察表

図号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	造土・色調・焼成	備考
第40図 1	土師器 上 坏	A 14.4	底部は中央がやや凹む平底である。体部は内唇しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い段をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面滑ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石 褐色 普通	P16 30% PL70 P5西側覆土下層
		B 6.5				
		C 6.0				
2	土師器 上 坏	A [13.4]	底部は中央がやや凹む平底である。体部は内唇しながら立ち上がる。口縁部は外唇し、内面下層に弱い段をもつ。	口縁部内・外面滑ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。体部下層及び底部外面横位のヘラ削り。	石英・赤色粒子 明赤褐色 普通	P17 40% PL70 P8西側覆土中層
		B 5.2				
		C 3.8				
3	土師器 上 坏	B [3.0]	底部から体部下半にかけての破片。底部は中央がやや凹む平底である。体部は内唇しながら立ち上がる。	体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・雲母 褐色 普通	P18 30% 西区覆土中
		C 3.6				



第40図 第5号住居跡出土遺物実測図

図取番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 4	土 器	A [14.8]	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。体部下端及び底部外面横位のヘラ削り。	石灰・長石・雲母・赤鉄子 褐色 普通	P19 40% PL70 貯蔵穴1上面
		B 5.1				
5	高 土 器	B (0.6)	胴部から環部下端にかけての破片。環部下端に稜をもつ。胴部は中空で、胴部にかけてラッパ状に開く。	環部下縁位のヘラ削り、内面ヘラナデ。胴部外面縦位のヘラ磨き、内面縁位のヘラ削り。裾部内面横位のヘラ磨き。	長石・雲母 褐色 普通	P21 30% PL70 P4 西側腹上ノ縁
		D [11.2]				
		E 8.2				

明石遺跡

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第40図 6	高土師器 環形土師器	B (9.0) E (7.2)	脚部片。脚部は中空で、エンタシス状を呈し、裾部はハの字状に開く。	坏部内面ヘラナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き。内面ナデ。裾部内面横ナデ。	石英・長石 灰色 普通	P22 30% PL70 貯蔵穴1上面
7	高土師器 環形土師器	B (7.6) E (6.7)	脚部片。脚部は中空で、裾部にかけてラッパ状に開く。	坏部内面ヘラナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き。内面横位のヘラ磨り。裾部内面横ナデ。外面及び坏部内面赤彫。	石英・長石 灰色 普通	P23 20% 中央部床面
8	高土師器 環形土師器	B (7.2) E (6.0)	脚部片。脚部は中空で、エンタシス状を呈し、裾部はハの字状に開く。	器面が荒れているため調整は不明であるが、脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデと思われる。	石英・長石 灰色 普通 (二次焼成)	P24 20% P4 西側壁上下層
9	高土師器 環形土師器	B (6.9) E (5.5)	脚部片。脚部は中空で、裾部にかけてラッパ状に開く。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。脚部内面横位のヘラ磨り。外面赤彫。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P25 20% P4 西側壁土中層
10	高土師器 環形土師器	B (5.8) E (5.3)	脚部片。脚部は中空で、エンタシス状を呈する。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。脚部内面横ナデ。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P26 20% P4 西側床面
11	小形土師器 土師器	A (14.8) B (7.5)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。基部はくの字状に屈曲する。口縁部は折り返し口縁で、外反尖峰に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	石英・長石・雲母 内面褐色 普通	P27 10% 燗火床面
12	ミニチュア土師器 土師器	B (3.3) D 6.0 E 2.5	台部片。台形変形ミニチュアと認められる。台部はハの字状に開く。	台部内・外面横ナデ。外面に指痕痕が残る。	石英・長石・赤色粒子 明赤褐色 普通	P30 40% PL70 P4 西側床面
13	須恵器 須恵器	A (34.8) B (2.5)	口縁部片。口縁部は外傾して開き、断面三角形の凸部が2条走る。	口縁部内・外面クロコナデ。	石英・長石 灰色 良好	P31 5% 南西壁断床面 TK216型式段階

図版番号	種別	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第40図14	双孔円板	2.2	0.2	0.1	2.0	滑 石	P 8 覆土中	Q 2 PL112

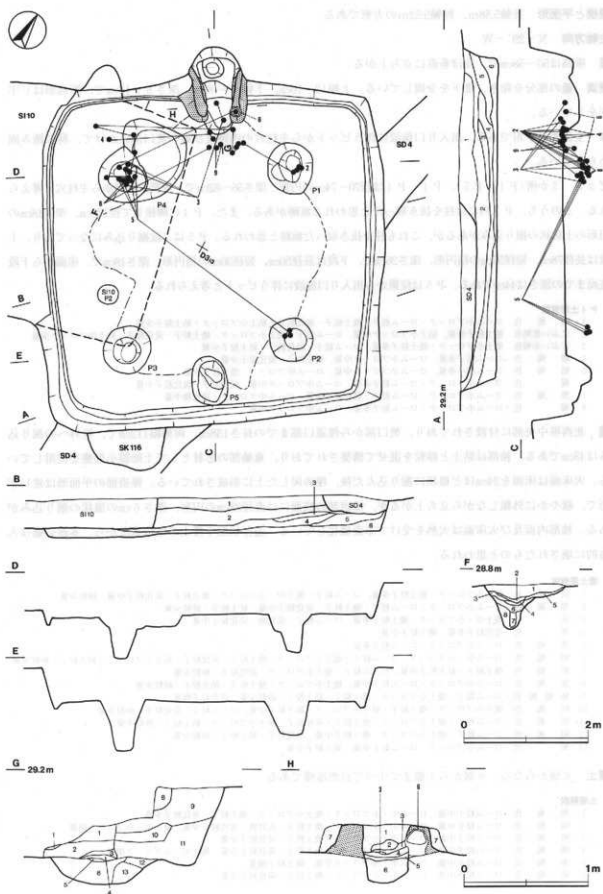
図版番号	種別	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第40図15	掘げ砥石	(6.9)	4.5	1.1	(49.7)	凝 灰 岩	貯蔵穴2底面	Q 3 PL111
16	磨 石	13.3	6.2	3.6	559.5	砂 岩	南西壁断覆土下層	Q 4 PL111

所見 本跡は、炭化材の検出状況や覆土の堆積状況から、焼失家屋と思われる。構造は、南西方向に出入口口部を、南東方向に頻度を有する住居跡で、内部施設としていわゆる「ベッド状施設」と呼ばれる一段高い床や、いわゆる「間仕切り溝」と呼ばれる壁溝以外の溝を有しているなど、いくつか特徴的なものが見られる。焼成施設は、本格的な竈が導入される直前の頻度である。遺物としては、ミニチュア土器、TK216型式段階の須恵器甕、滑石製双孔円板、炭化した焼酎の種子が出土しており、注目される。中でも滑石製双孔円板はP8内から、ミニチュア土器は床面から出土している。このようなことから、住居を廃棄するに当たって祭祀行為が行われ、その後上屋の焼却を行った可能性が考えられる。本跡の時期は、出土遺物から5世紀第3四半期と考えられる。

第11号住居跡 (第41・42図)

位置 調査Ⅱ区の南部、D3h2区。

重複関係 本跡は第10号住居、第116号土坑、第4号溝に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺構よりも古い。



第41图 第11号住居跡実測図

規模と平面形 長軸5.58m, 短軸5.52mの方形である。

主軸方向 N-29°-W

壁 壁高は50~58cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き, 壁下を全周している。上幅12~16cm, 下幅4~8cm, 深さ6~10cmで, 断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて, 特に踏み固められている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は径70~74cmの円形, 深さ56~82cmで, 規模や配列から主柱穴と考えられる。このうち, P1内には柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。また, P4に隣接して径120cm, 深さ18cmの円形の土坑状の掘り込みがあるが, これも柱を抜き取った痕跡と思われる。P5は二段掘り込みになっており, 上段は長径78cm, 短径56cmの楕円形, 深さ26cmで, 下段は長径50cm, 短径30cmの楕円形, 深さ18cmで, 床面から下段底面までの深さは44cmである。P5は位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

P4土層解説

1	暗 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量
2	近い黄褐色	粘土粒子多量, 焼土小ブロック中量, ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土中ブロック少量
3	近い赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子多量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
4	暗 褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
5	暗 褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・焼土粒子少量
6	暗 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
7	黒 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子多量, ローム中ブロック・炭化物中量
8	暗 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量

竈 北西壁中央部に付設されており, 焚口部から煙道口部までの長さ138cm, 両袖幅112cmで, 壁外への掘り込みは48cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されており, 東袖部の芯材として土師器小形甕を使用している。火床面は床面を24cmほど皿状に掘り込んだ後, 埋め戻した上に形成されている。煙道部の平面形は逆U字形で, 緩やかに外傾しながら立ち上がるが, 煙道部の底面には直径38cmの円形, 深さ6cmの皿状の掘り込みがある。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。遺存状況や覆土の堆積状況から, 本跡の竈は人為的に壊されたかと思われる。

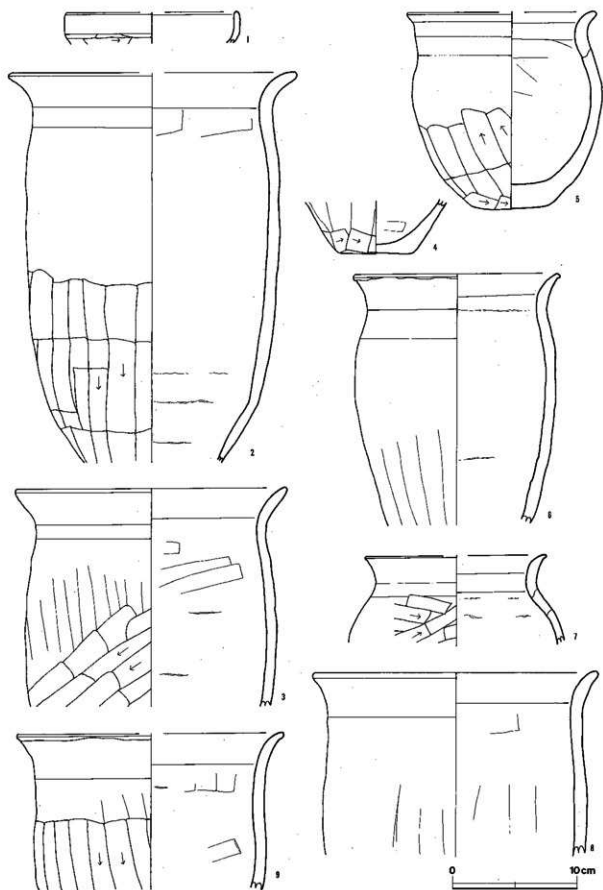
覆土層解説

1	灰 褐色	粘土小ブロック・粘土粒子多量, ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量, 砂粒少量
2	黒 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量, 粘土粒子・砂粒少量
3	赤 褐色	焼土中・小ブロック・焼土粒子多量, ローム粒子・炭化物・炭化粒子中量
4	黒 褐色	炭化粒子多量, 焼土粒子中量
5	黒 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量
6	暗 褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
7	暗 褐色	焼土粒子・粘土粒子中量, ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・砂粒少量
8	黒 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
9	暗 褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量
10	暗 褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量
11	黒 褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
12	暗 褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子中量, 炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
13	暗 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量, 焼土粒子少量

覆土 6層からなる。6層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

1	灰 褐色	ローム粒子中量, ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗 褐色	ローム粒子中量, ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量, 焼土中・小ブロック微量
3	暗 褐色	ローム粒子中量, ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4	暗 褐色	ローム粒子中量, ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, 焼土中・小ブロック微量
5	黒 褐色	ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量, 焼土粒子微量
6	暗 褐色	ローム粒子中量, ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量



第42图 第11号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器及びその小破片99点が出土している。床面では、第42図9の甔が甔の南側から壊れた状態で出土している。また、4の甔が甔の火床面及び甔の南側の床面から散乱した状態で出土している。さらに、2の甔が甔の南側の床面、P1の覆土中層及びP4の覆土中層から散乱した状態で、3の甔が甔の燃焼部及びP4の覆土中層から散乱した状態で、5の小形甔がP2の覆土中層及びP4の覆土中層から散乱した状態で、6の小形甔が甔の東袖芯部及びP4の覆土中層から散乱した状態で、8の甔が甔の南側の床面及びP4の覆土中層から散乱した状態でそれぞれ出土している。これら2・3の甔、5・6の小形甔及び8の甔は、住居廃絶時に、壊した甔の中や柱を抜き取った主柱穴の中に、それぞれ意図的に破砕して埋納したものと思われる。その他にも北区の覆土中から7の小形甔、南区の覆土中から1の甔がそれぞれ出土している。

所見 本跡の甔の東袖部からは、甔が芯材として使用されたままの状態でも出土しており、甔構築時の様子をうかがい知ることができる。また、床面、甔内及び主柱穴内から出土したそれぞれの甔の破片が接合関係にあることから、住居を廃棄するに当たって、意図的に破砕した甔を、壊した甔の中や柱を抜き取った主柱穴の中に埋納するという祭祀行為が行われた可能性が考えられる。本跡の時期は、出土遺物から7世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

第11号住居跡遺物観察表

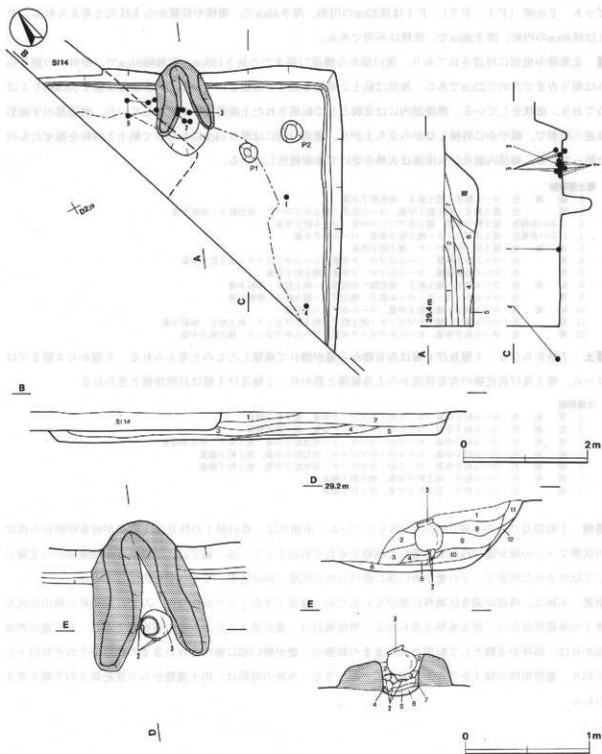
図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第42図 1	坏 土 師 器	A (13.8) B (2.5)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に鋭い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面横ナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P68 10% 南区覆土中
2	甔 土 師 器	A (20.0) B (31.4)	底部欠損。体部は長胴形を呈し、最大径を上位にもつ。頸部は緩やかに屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラナデ。下位縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P71 40% PL70 甔南側床面、 P1覆土中層、 P4覆土中層
3	甔 土 師 器	A 21.6 B (17.5)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は長胴形を呈し、最大径を上位にもつ。頸部は緩やかに屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラナデ。下位縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P72 30% PL70 甔燃焼部、 P4覆土中層
4	甔 土 師 器	B (4.3) C 6.0	底部片。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ。下縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P76 10% 甔火床面、 甔南側床面
5	小形甔 土 師 器	A (15.0) B 15.9 C 6.9	平底。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はコの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ。下位縦位のヘラ削り、下縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P70 50% PL70 P2覆土中層、 P4覆土中層
6	小形甔 土 師 器	A 15.4 B (21.2)	底部欠損。体部は長胴形を呈し、最大径を上位にもつ。頸部は緩やかに屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 赤色 普通	P69 60% PL70 甔東袖部、 P4覆土中層 甔袖部芯材として転用
7	小形甔 土 師 器	A (14.6) B (7.3)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。頸部はコの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石 褐色 普通	P75 10% 北区覆土中
8	甔 土 師 器	A 22.6 B (14.8)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部はほぼ直立しながら立ち上がり、頸部に入る。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P73 20% PL70 甔南側床面、 P4覆土中層
9	甔 土 師 器	A (21.4) B (12.5)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部はほぼ直立しながら立ち上がり、頸部に入る。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラナデ。下位縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色砂子 にぶい赤褐色 普通	P74 20% 甔南側床面

第13号住居跡 (第43・44図)

位置 調査Ⅱ区の南部, D 219区。

重複関係 本跡は第14号住居に掘り込まれているため, 本跡の方が第14号住居跡よりも古い。

規模と平面形 西部は調査区域外に延びているため, 確認できたのは長軸(4.9)m, 短軸(4.4)mで, 平面形は不明である。



第43図 第13号住居跡実測図

主軸方向 [N-32'-E]

壁 壁高は42~46cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き、壁下を巡っている。上幅12~14cm、下幅4~6cm、深さ6~8cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。主柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。北東壁寄り及び南東壁寄りの床面を中心に、垂木と思われる炭化材が壁際から中央部に向かうような状態で遺存していた。

ピット 2か所 (P1・P2)。P1は径32cmの円形、深さ48cmで、規模や位置から主柱穴と考えられる。P2は径36cmの円形、深さ26cmで、性格は不明である。

竈 北東壁中央部に付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ138cm、両袖幅94cmで、壁外への掘り込みは掘り方まで含めて22cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を10cm掘りくぼめており、皿状をしている。燃焼部内には支脚として転用された土師器高環が遺存していた。煙道部の平面形は逆三角形で、緩やかに外傾しながら立ち上がり、煙道口部には厚さ14cmにわたって粘土と砂粒を混ぜたものを貼っている。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2	褐色	焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・砂粒少量
3	にぶい赤褐色	焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子少量
4	にぶい赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒多量、ローム粒子少量
5	赤褐色	焼土中・小ブロック・焼土粒子多量
6	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量
7	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量
8	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
9	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
10	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、ローム小ブロック少量
11	褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
12	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量

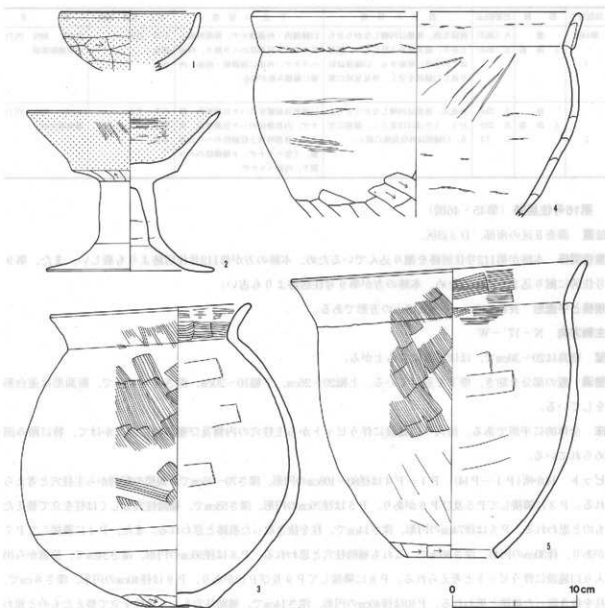
覆土 7層からなる。7層及び6層は含有物から竈が壊れて堆積したものと考えられる。5層から3層まではローム、焼土及び炭化物の含有状況から人為堆積と思われる、2層及び1層は自然堆積と思われる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
4	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
6	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量
7	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量

遺物 土師器及びその小破片175点が出土している。床面では、第44図1の坏及び4の甕が南東壁際から横位の状態、5の甕が竈の西側から壊れた状態でそれぞれ出土している。竈では、2の高環が燃焼部から支脚として転用された状態で、3の甕が掛口部に掛けられた状態(ほぼ完形)でそれぞれ出土している。

所見 本跡は、西部が調査区域外に延びているため、確認できたところが少なかったが、炭化材の検出状況や覆土の堆積状況から、焼失家屋と思われる。燃焼施設は、竈が導入された直後の初期竈である。その竈の燃焼部からは、高環が支脚として転用されたままの状態、甕が掛口部に掛けられたままの状態それぞれ出土しており、竈使用時の様子をうかがい知ることができる。本跡の時期は、出土遺物から5世紀第3四半期と考えられる。



第44図 第11号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第44図 1	土師器 碗	A 11.0 B (4.7)	底部欠損。体部は内彫しながら立ち上がり、口縁部との境に薄い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P150 50% PL70 南東段階床面
2	高土師器 環 上 脚 器	A 15.6 B 12.9 D 13.4 E 7.1	体部下流に稜をもち、体部は外彫しながら立ち上がり、口縁部に至る。脚部は中空で、エンタシス状を呈し、脚部はハの字状に固く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のハケ目調整後、ナデ。下流横位のヘラ削り。内面横位のハケ目調整後。ヘラナデ。脚部外面横位のヘラ置き。内面ナデ。脚部内面横ナデ。体部内・外面赤彩。	石英・長石 褐色 普通 (二次焼成)	P151 80% PL71 竈焼成部 龍支脚として転用
3	土師器 甕	A 16.0 B 24.5 C 5.0	平底。体部は下彫れ状を呈し、最大径を下位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に固く。	口縁部外面横位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面上位斜位のハケ目調整。下位ナデ。下流横位のヘラ削り。内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 暗赤褐色 普通	P152 95% PL71 甕脚口部

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図	壺 土 彫 器	A 26.2 B (16.5)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、最大径を土位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は折り返し口縁状を呈し、外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上ナデ。下位斜位のヘラ削り。内面ヘラナデ。外面に指頭痕・爪痕、内面に輪轆み痕が残る。	石英・長石 褐色 普通	P153 30% PL71 南東壁断面
5	瓶 土 彫 器	A 23.8 B 23.9 C 7.4	無底式。体部は内彎しながら立ち上がり、上半はほぼ直立し、頸部に至る。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面上位斜位のハケ目調整。下位ヘラナデ。下端横位のヘラ削り。内面ヘラナデ。	石英・長石 褐色 普通	P155 95% PL71 南西側床面

第16号住居跡 (第45・46図)

位置 調査Ⅱ区の南部、D3j3区。

重複関係 本跡が第112号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第112号住居跡よりも新しい。また、第9号住居に掘り込まれているため、本跡の方が第9号住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸5.40m、短軸5.18mの方形である。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は20~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き、壁下を巡っている。上幅20~26cm、下幅10~20cm、深さ4~8cmで、断面形は逆台形をしている。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 14か所(P1~P14)。P1~P4は径80~108cmの円形、深さ70~76cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P3に隣接してP5及びP6があり、P5は径76cmの円形、深さ53cmで、補助柱穴もしくは柱を立て替えたものと思われる。P6は径74cmの円形、深さ14cmで、柱を抜き取った痕跡と思われる。また、P4に隣接してP7があり、径30cmの円形、深さ36cmで、これも補助柱穴と思われる。P8は径50cmの円形、深さ24cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P8に隣接してP9及びP10があり、P9は径40cmの円形、深さ8cmで、柱を抜き取った痕跡と思われる。P10は径40cmの円形、深さ14cmで、補助柱穴もしくは柱を立て替えたものと思われる。P11~P14は径40~50cmの円形、深さ20~56cmで、性格は不明である。

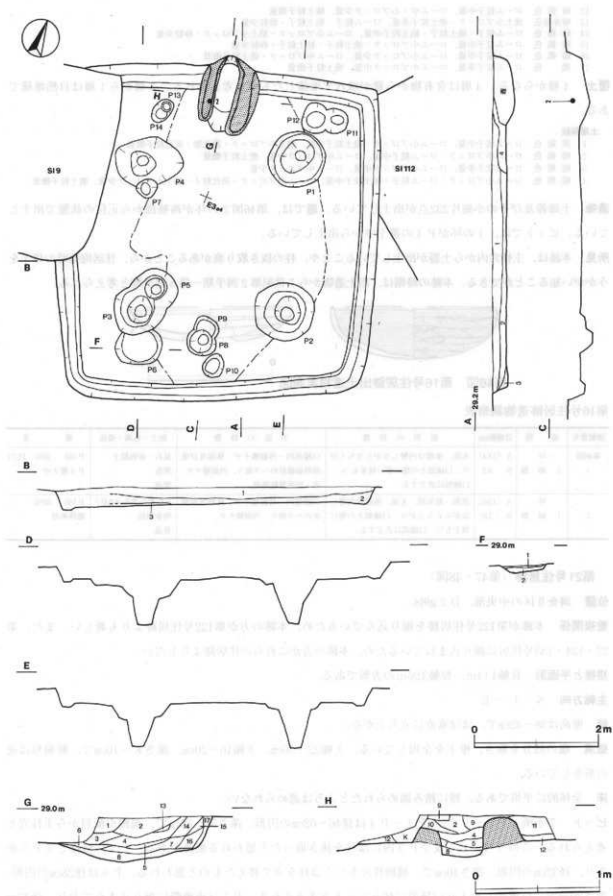
P6土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

竈 北西壁中央部に付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ124cm、両袖幅94cmで、壁外への掘り込みは20cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を16cmほど皿状に掘り込んだ後、埋め戻した上に形成されている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子多量、ローム小ブロック・粘土小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子・粘土中ブロック・砂粒少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・炭化粒子・粘土小ブロック・砂粒少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土小ブロック・砂粒少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 6 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子・炭化物・粘土粒子・砂粒少量
- 7 暗褐色 焼土粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 10 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・焼土小ブロック・粘土小ブロック中量、ローム小ブロック・焼土中ブロック・粘土小ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 11 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量



第45图 第16号住居跡実測图

- 12 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量, 焼土粒子微量
 13 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
 14 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子中量, ローム小ブロック・粘土小ブロック・砂粒少量
 15 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
 16 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・焼土粒子微量
 17 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子微量

覆土 4層からなる。4層は含有物から竈が壊れて堆積したものと考えられる。3層から1層は自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子中量, ローム中ブロック・炭化粒子・粘土小ブロック少量, 焼土粒子微量

遺物 土師器及びその小破片232点が出土している。竈では、第46図2の坏が西袖部から正位の状態でも出土している。ピットでは、1の坏がP4の覆土中から出土している。

所見 本跡は、主柱穴内から土器が出土していることや、柱の抜き取り痕があることから、住居廃棄時の様子をうかがい知ることができる。本跡の時期は、出土遺物から7世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。



第46図 第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡遺物観察表

図版番号	器 種	寸法(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第46図 1	坏	A [13.4]	丸底。体部は内押しながら立ち上がり、口縁部との境に深い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面横ナデ。内・外面黒色処理。	長石・赤色粒子 黒色 普通	P165 40% P4 覆土中
	土 師 器 B [4.2]					
2	坏	A [13.0]	底部一部欠損。丸底。体部は内押しながら立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面横ナデ。	石灰・長石・赤褐色粒子 明赤褐色 普通	P166 40% 甕西袖部
	土 師 器 B [2.8]					

第21号住居跡 (第47・48図)

位置 調査Ⅱ区の中央部, D 2 g9区。

重複関係 本跡が第122号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第122号住居跡よりも新しい。また、第22・124・153号住居に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸4.14m, 短軸3.96mの方形である。

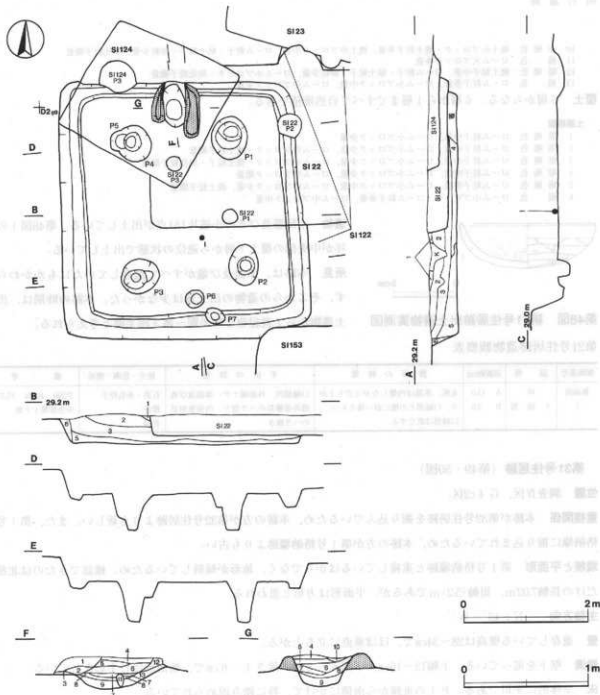
主軸方向 N-1°-E

壁 壁高は38~42cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き、壁下を全周している。上幅22~30cm, 下幅16~20cm, 深さ8~10cmで、断面形は逆台形をしている。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット 7か所 (P1~P7)。P1~P4は径46~62cmの円形, 深さ58~66cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。このうち、P1及びP3内には柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。P4に隣接してP5があり、径32cmの円形, 深さ40cmで、補助柱穴もしくは柱を立て替えたものと思われる。P6は径28cmの円形, 深さ20cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7は南壁際に掘り込まれており、径32cmの円形, 深さ34cmで、位置からP6に準ずる出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第47図 第21号住居跡実測図

竈 北壁中央部西寄りに付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ72cm、両袖幅78cmで、壁外への掘り込みはほとんどない。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を12cm掘りくぼめており、皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内部面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | |
|--------|--|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・粘土小ブロック・砂粒少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子中量、ローム小ブロック・粘土小ブロック・砂粒少量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子中量、ローム小ブロック・焼土中ブロック・粘土小ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 7 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量 |
| 8 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子・焼土小ブロック中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 9 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量 |

明石遺跡

- 10 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, 焼土中ブロック中量, ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量
- 11 褐色 ローム大ブロック多量
- 12 暗褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 13 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量

覆土 6層からなる。6層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量



0 5cm

第48図 第21号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器及びその小破片181点が出土している。第48図1の環が中央部の覆土下層から逆位の状態で出土している。

所見 本跡は、床面及び竈がすべて遺存していたにもかかわらず、そこからの遺物の出土量は少なかった。本跡の時期は、出土遺物から7世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

第21号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	環 土師器	A 11.0 B 3.6	丸底。体部は内脚しながら立ち上がり、口縁部との境に鋭い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り。内面放射状のヘラ磨き。	石英・赤色粒子 褐色 普通	P299 100% PL71 中央部覆土下層

第31号住居跡 (第49・50図)

位置 調査Ⅳ区, G4c2区。

重複関係 本跡が第32号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第32号住居跡よりも新しい。また、第1号格納壕に掘り込まれているため、本跡の方が第1号格納壕跡よりも古い。

規模と平面形 第1号格納壕跡と重複しているばかりでなく、地形が傾斜しているため、確認できたのは北部だけの長軸7.02m, 短軸(5.2)mであるが、平面形は方形と思われる。

主軸方向 [N-43°-W]

壁 遺存している壁高は28~34cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を巡っている。上幅12~16cm, 下幅6~8cm, 深さ4~6cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。P1の東側から南側にかけて、特に踏み固められている。

ピット P1は径34cmの円形, 深さ30cmで、規模や位置から主柱穴と考えられる。

炉 北西壁寄りには付設されており、長径90cm, 短径60cmの楕円形で、床面を6cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

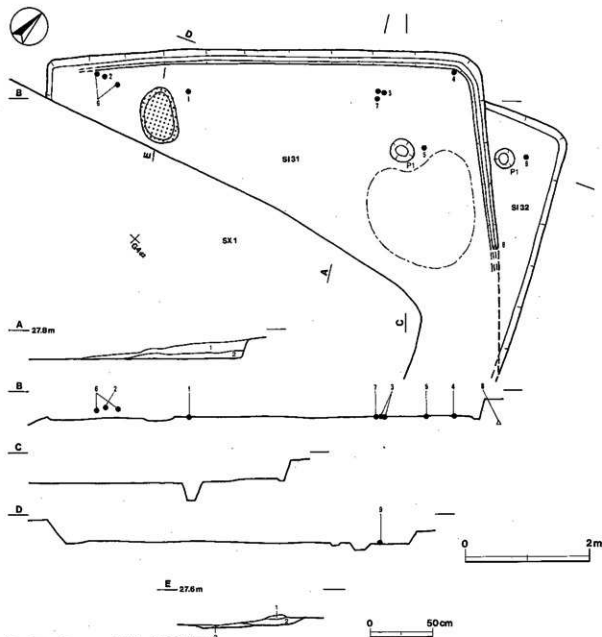
- 1 赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, ローム粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・焼土小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量

覆土 2層からなる。2層とも自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量

遺物 土師器及びその小破片417点, 球状土錘1点が出土している。覆土中層では、第50図2の台付甕が北西壁際から逆位の状態で、6の小形甕が北西壁際から壊れた状態でそれぞれ出土している。床面では、1の甕が炉の北側から正位の状態で、3の甕が北西壁際から壊れた状態で、4の甕が北コーナーから斜位の状態で、5

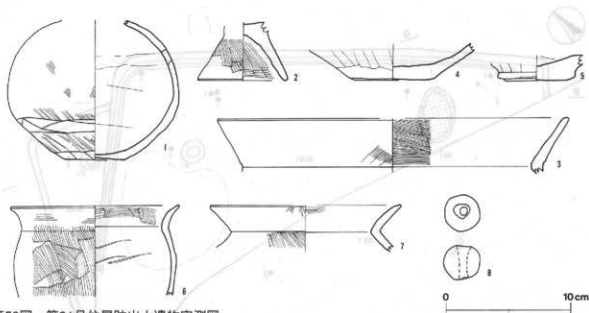


第49図 第31・32号住居跡実測図

の甕がP1の北側から斜位の状態、7の小形甕が北西壁際から逆位の状態それぞれ出土している。壁溝では、8の土玉が北東壁溝の底面から出土している。

第31号住居跡遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50回 1	甕 土師器	B (11.1)	底面から底部上半にかけての破片。 平底。体部は球形を呈し、最大径を 中位にもつ。	体部外面斜位のハケ目調整後、ナデ、 下端ヘラナデ、内面ヘラナデ。	石英・長石 褐色 普通	P551 70% PL71 炉北側床面
		C 5.0				
		A (28.2)				
2	台付甕 土師器	B (4.7)	台部片。台部はハの字状に開く。	台部外面縦位のハケ目調整、内面斜 位のハケ目調整。	石英・長石 黒色 普通	P567 10% 北西壁階遺土中層
		C 7.2				
		E 4.0				
3	甕 土師器	A (28.2)	口縁部片。L縁部は外傾して開く。	L縁部外面斜位のハケ目調整後、横 ナデ、内面縦位のハケ目調整。	石英・長石 明褐色 普通	P554 5% 北西壁階床面
		B (4.4)				



第50図 第31号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 4	甕 土 部 器	H (25) C 7.0	底片。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石 棕色 普通	P555 5% 北コーナー床面
5	甕 土 部 器	H (20) C 6.0	底形片。底部は突出する平底である。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 灰褐色 普通	P556 3% P1名厨床面
6	小形 土 部 器	A 13.4 B (7.2)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面横位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整。体部外面斜位のハケ目調整。内面ヘラナデ。	石英・長石 藍色 普通	P532 20% 北西壁階段上中層
7	小形 土 部 器	A (15.4) B (3.8)	口縁部片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面横位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整。横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整。内面ヘラナデ。	石英・長石 棕色 普通	P553 5% 北西壁階床面

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第50図8	球状土塊	2.9	2.8	1.2	20.6	北東壁溝底面	DP14 PL108

所見 本跡は、大部分を第1号格納壕に掘り込まれているため、遺存していたところが少なかったが、一辺が7m以上の比較的大形の住居跡と思われる。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第3四半期～第4四半期と考えられる。

第32号住居跡（第49・51図）

位置 調査IV区，G4b2区。

重複関係 本跡は第31号住居，第1号格納壕に掘り込まれているため，本跡の方がこれらの遺構よりも古い。

規模と平面形 第31号住居跡及び第1号格納壕跡と重複しているばかりでなく，地形が傾斜しているため，確認できたのは北部だけの長軸(4.2)m，短軸(1.5)mで，平面形は不明である。

主軸方向 [N-26°-W]

壁 遺存している壁高は20～28cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

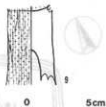
床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット P 1は径32cmの円形、深さ12cmで、規模や位置から主柱穴と考えられる。

覆土 土層断面観察用のベルトからずれていたため、覆土の堆積状況を確認することができなかった。

遺物 土師器及びその小破片21点が出土している。第51図9の高坏がP 1の北側の床面から横位の状態で出土している。

所見 本跡は、大部分を第31号住居及び第1号格納壕に掘り込まれているため、遺存していたところが少なかったが、床面から良好な状態で遺物が出土している。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第3四半期～第4四半期と考えられる。



第51図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡遺物観察表

図取番号	部 種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第51図 9	高 土 師 器	径 B (6.3) 高 E (6.2)	脚部片。脚部は中空で、柱状を呈する。	坏部内面へラ磨き。脚部外面縦位のへラ磨き。内部ナデ。外面及び坏部内面車彫。	灰石・雲母 赤褐色 普通	P338 3076 P 1北側床面

第34号住居跡 (第52・53図)

位置 調査Ⅳ区、G 3 e7区。

規模と平面形 地形が傾斜しているため南東部は遺存していないが、ピットの配列から長軸(6.3)m、短軸5.86mの方形と推定される。

主軸方向 (N-25°-W)

壁 遺存している壁高は10~12cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を巡っている。上幅10~12cm、下幅4~6cm、深さ2~6cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。P 1からP 4の内側及び炉周辺にかけて、特に踏み固められている。

ピット 12か所(P 1~P 12)。P 1~P 4は径46~56cmの円形、深さ38~54cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P 5~P 12は径34~56cmの円形、深さ14~56cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 炉の北東側に隣接するように付設されており、径80cmの円形、深さ24cmで、断面形は逆台形をしている。

炉 P 1とP 4を結ぶラインよりも中央部寄りに付設されており、長径86cm、短径54cmの楕円形で、床面を10cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

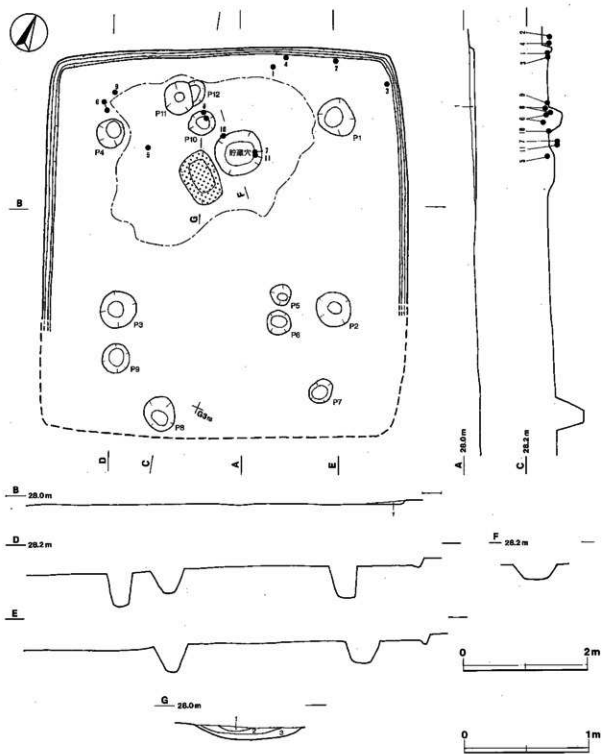
- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 赤 褐 色 焼土粒子多量、焼土中・小ブロック中量、ローム粒子少量
- 3 ぶい赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量

覆土 遺存していた覆土は単一層で、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

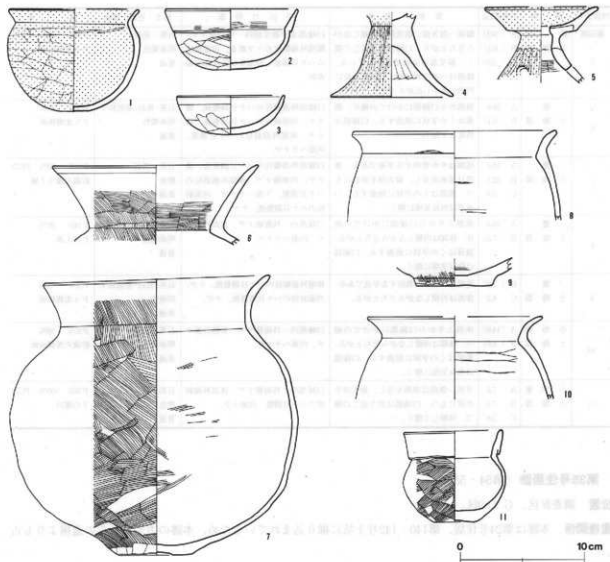
遺物 土師器及びその小破片151点が出土している。床面では、第53図1・2の碗が北西壁際から正位の状態で、3の碗が北コーナー部から逆位の状態で、4の高坏が北西壁際から横位の状態で、5の器台がP 4の東側から逆位の状態で、6の壺がP 4の北側から壊れた状態で、9の甕がP 4の北側から逆位の状態で、10の小形



第52図 第34号住居跡実測図

甕が貯蔵穴の西側から横位の状態でそれぞれ出土している。貯蔵穴及びピットでは、7の甕が貯蔵穴の覆土下層から横位の状態で、11の小形甕が7の甕の中に納まった入子のような状態で、8の甕がP10の上面から壊れた状態でそれぞれ出土している。

所見 本跡は、地形が傾斜しているため、南東部の壁及び床面が遺存していなかったが、長辺が6m以上の比較的大形の住居跡と思われる。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。



第53図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	碗 土器	A 10.4 B 8.2 C 2.6	平底。体部は内押しながら立ち上がる。口縁部はくの字状に屈曲し、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のハゲ削り、内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	石英・長石 明赤褐色 普通	P566 40% PL71 北西禮堂床面
2	碗 土器	A 10.6 B 4.9 C 3.0	平底。体部は内押しながら立ち上がる。口縁部は折り返し口縁で、外転し、内面下縁に襷をもつ。	口縁部内・外面横位のハゲ目調整後、横ナデ。体部及び底部外面横位のハゲ目調整後、横位のハゲ削り、内面ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P560 90% PL71 北西禮堂床面
3	小形碗 土器	A 8.6 B 3.2	丸底。体部は内押しながら立ち上がり、口縁部は外側する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P561 90% PL72 北コーナー部床面
4	高坏 土器	A (6.8) D 9.8 E 5.7	脚部片。脚部は中空で、裾部にかけてラッパ状に開く。	坏部内面ナデ。脚部外面横位のハゲ磨き、内面横位のハゲ目調整後、ナデ。裾部内面横ナデ。外面赤彩。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P562 50% PL72 北西禮堂床面

明石遺跡

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33段 5	特 土 師 器	A (9.2)	胴部一部欠損。器受部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反して開く。器受部中央は穿孔されている。胴部はハの字状に開く。胴部中央に円形の透かし孔が3つ空く。	口縁部及び器受部内・外面ナデ。胴部外面部位の外周巻き、内面横位のハケ目調整。外面及び器受部内面赤彩。	石英・長石 明赤褐色 普通	P563 60% FL71 P 4 東側床面
		B (6.1)				
		E (3.8)				
6	壺 土 師 器	A 16.6	胴部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反して開く。	口縁部外面斜位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 明赤褐色 普通	P567 20% P 4 北側床面
		B (6.1)				
7	壺 土 師 器	A 18.2	底部はやや突出する平底である。体部は球形を呈し、最大径を中央にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面部位のハケ目調整後、横ナデ。内面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、下縁ヘラナデ。内面斜位のハケ目調整後、ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P568 90% FL72 貯蔵穴複数付
		B 22.5				
		C 5.8				
8	壺 土 師 器	A 16.4	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内傾しながら立ち上がる。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P569 20% P10上面
		B (7.2)				
9	壺 上 師 器	B (2.2)	底部片。底部は突出する平底である。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面部位のハケ目調整後、ナデ。内面斜位のハケ目調整後、ナデ。	石英・長石・赤色粒子 明褐色 普通	P571 5% P 4 北側床面
		C 6.2				
10	小形 土 師 器	A [14.0]	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内傾しながら立ち上がる。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P570 10% 貯蔵穴複数床面
		B (4.6)				
11	小形 土 師 器	A 7.8	平底。体部は球形を呈し、最大径を中央にもつ。口縁部は折り返し口縁で、外傾して開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P565 100% PL71 P 7 の器内
		B 7.4				
		C 3.6				

第35号住居跡 (第54・55図)

位置 調査IV区、G 3e9区。

重複関係 本跡は第24号住居、第140・142号土坑に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺構よりも古い。

規模と平面形 地形が傾斜しているため南東部は遺存していないが、ピットの配列から長軸(5.0)m、短軸4.90mの方形と推定される。

主軸方向 (N-27°-W)

壁 遺存している壁高は14~18cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南西壁及び北西壁下を巡っている。上幅12~16cm、下幅4~6cm、深さ4~6cmで、断面形はU字形をしている。

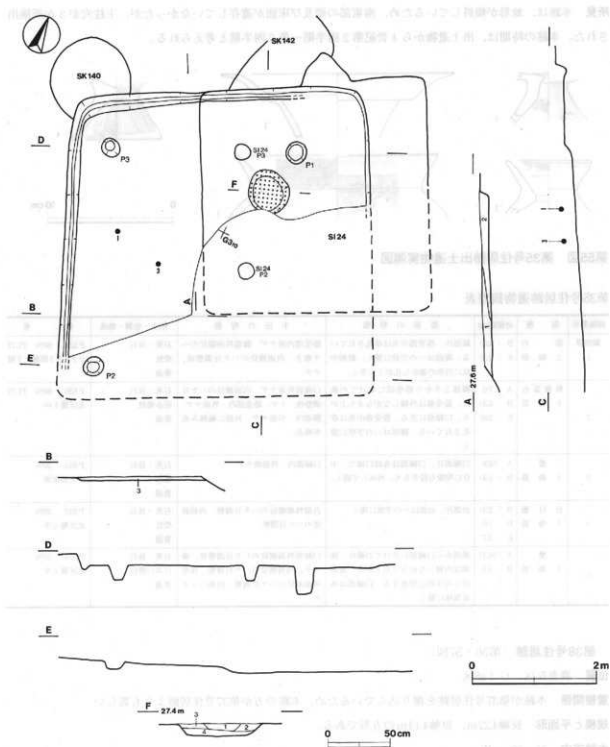
床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット 3か所(P1~P3)。P1及びP3は径30~32cmの円形、深さ24~44cmである。P2は径32cmの円形、推定の深さ22cmである。P1~P3は規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 P1とP3を結ぶラインよりも中央部北東寄りに付設されており、直径66cmの円形で、床面を14cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒少量
- 2 灰 褐色 ローム粒下・焼土粒子少量
- 3 灰 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 4 灰 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量



第54図 第35号住居跡実測図

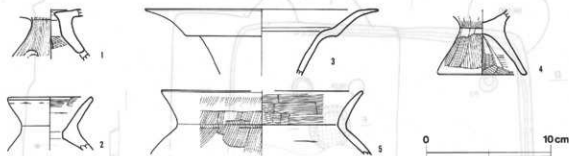
覆土 3層からなる。3層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器及びその小破片245点が出土している。覆土下層では、第55図1の器台がP2とP3の間から逆位の状態で出土している。床面では、3の甕が中央部から正位の状態で出土している。その他にも北区の覆土中から2の粗製器台、4の台付甕及び5の甕がそれぞれ出土している。

所見 本跡は、地形が傾斜しているため、南東部の壁及び床面が遺存していなかったが、主柱穴が3か所検出された。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。



第55図 第35号住居跡出土遺物実測図

第35号住居跡遺物観察表

図取番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	器台 土師器	B (4.0) E (3.3)	脚部片。器受部中央は穿孔されている。脚部はハの字状に開く。脚部中央に円形の透かし孔が3つ空く。	器受部内面ナデ。脚部外面縦位のハケ目調整後、ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P528 60% PL72 P2・P3間履土下層
2	粗製器台 土師器	A 7.0 B (4.3) E (2.0)	脚部上半から器受部にかけての破片。器受部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。器受部中央は穿孔されている。脚部はハの字状に開く。	口縁部外面ナデ。内面横位のハケ目調整後、ナデ。器受部内・外面ナデ。脚部内・外面ナデ。外面に輪轆痕が見える。	石英・長石 明赤褐色 普通	P530 60% PL72 北区履土中
3	器台 土師器	A 18.8 B (5.4)	口縁部片。口縁部は右段口縁で、中央に明瞭な段をもち、外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P533 20% 中央部床面
4	台付 土師器	B (5.3) D 7.0 E 3.7	台部片。台部はハの字状に開く。	台部外面縦位のハケ目調整。内面横位のハケ目調整。	石英・長石 棕色 普通	P535 20% 北区履土中
5	器台 土師器	A [16.2] B (5.1)	胴部から口縁部にかけての破片。体部は内傾しながら立ち上がる。器部はハの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整。体部外面斜位のハケ目調整。内面ヘラナデ。	石英・長石 内い褐色 普通	P534 10% 北区履土中

第38号住居跡 (第56・57図)

位置 調査IV区、G 3 a8区。

重複関係 本跡が第37号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第37号住居跡よりも新しい。

規模と平面形 長軸4.22m、短軸4.14mの方形である。

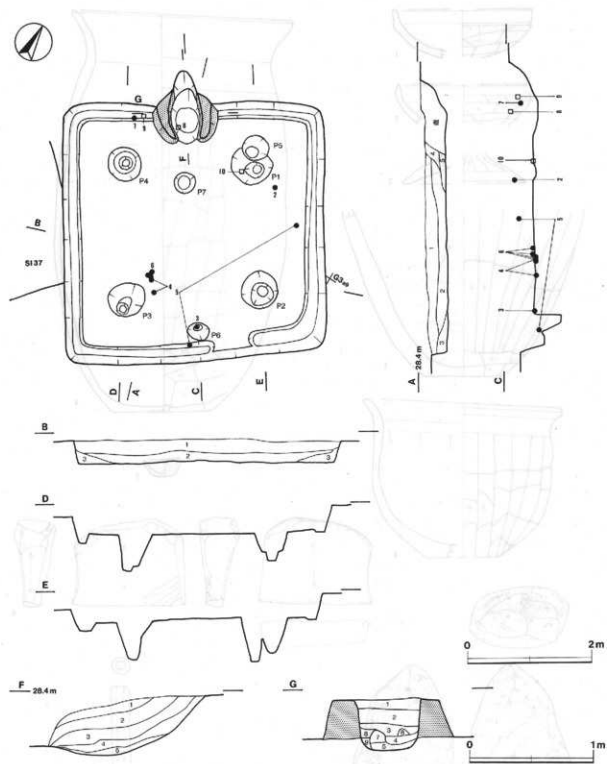
主軸方向 N-30°-W

壁 壁高は22～40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈及び南東壁中央部東寄りの部分を除き、壁下を巡っている。上幅18～32cm、下幅10～20cm、深さ4～14cmで、断面形は逆台形をしている。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。

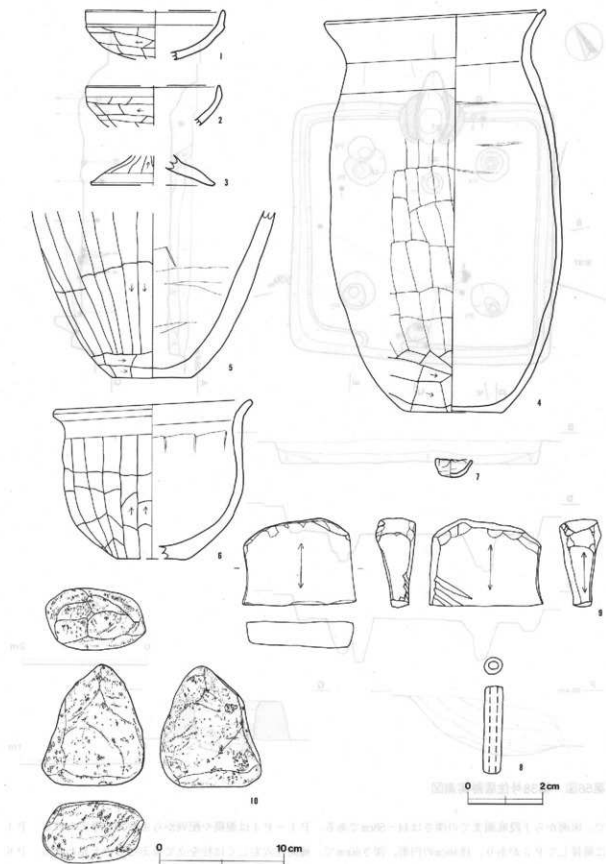
ピット 7か所(P1～P7)。P1及びP2は径58～66cmの円形、深さ58～70cmである。P3及びP4は二段掘り込みになっており、上段は径52～54cmの円形、深さ30～50cmで、下段は径18～20cmの円形、深さ8～14cm



第56図 第38号住居跡実測図

で、床面から下段底面までの深さは44~58cmである。P 1~P 4は規模や配列から主柱穴と考えられる。P 1に隣接してP 5があり、径46cmの円形、深さ60cmで、補助柱穴もしくは柱を立て替えたものと思われる。P 6は径30cmの円形、深さ46cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 7は径34cmの円形、深さ20cmで、性格は不明である。

縄文時代の住居跡の平面図と断面図



第57図 第38号住居跡出土遺物実測図

竈 北西壁中央部西寄りに付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ116cm、両袖幅106cmで、壁外への掘り込みは54cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を8cm掘りくぼめており、皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | |
|---|--------|-------------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量 |
| 2 | 灰褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子少量 |
| 6 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 7 | 灰褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子・砂粒少量、焼土粒子微量 |
| 8 | にぶい赤褐色 | 焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 9 | 灰褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量 |

覆土 5層からなる。5層及び4層は含有物から竈が壊れて堆積したものと考えられる。3層から1層は自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |

遺物 土師器及びその破片647点、滑石製管玉1点、砥石1点、軽石1点が出土している。覆土上層では、第57図2の坏がP1の東側から正位の状態、9の砥石が北西壁際からそれぞれ出土している。覆土中層では、7のミニチュア土器が北西壁際から斜位の状態で出土している。床面では、4の甕及び6の小形甕がP3の北側から壊れた状態でそれぞれ出土している。竈では、8の滑石製管玉が燃焼部から出土している。ピットでは、3の高坏がP6の上面から逆位の状態、10の軽石がP1の上面からそれぞれ出土している。また、5の甕が南東壁際の覆土下層及び北東壁際の覆土中層から散乱した状態で出土している。その他にも中央部付近の覆土中から1の坏が出土している。

所見 本跡の遺物としては、滑石製管玉や、ミニチュア土器が出土しており、注目される。中でも滑石製管玉は竈内から出土しており、住居を廃棄するに当たって、管玉を竈の中に埋納するという祭祀行為が行われた可能性が考えられる。本跡の時期は、出土遺物から7世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

第38号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徵	手仕の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	坏 土師器	A (11.0)	底部一部欠損。丸底。体部は内彎し ながら立ち上がり、口縁部との境に 明瞭な段をもつ。口縁部は直立す る。	口縁部内・外面積ナゲ。体部外面積 位のヘラ削り、内面積ナゲ。	長石・雲母 褐色 普通	P572 20% 覆土中
		B (4.4)				
2	坏 土師器	A (10.6)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち 上がり、口縁部との境に弱い段をも つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面積ナゲ。体部外面積 位のヘラ削り、内面積ナゲ。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P573 30% P1東側覆土上層
		B (3.3)				
3	高坏 土師器	D (9.8)	脚部片、甕部はハの字状に開く。	脚部外面積位のヘラ削り、内面積ナ ゲ。袖部内・外面積ナゲ。	長石・雲母・赤色粒子 明赤褐色 普通	P574 5% P6上面
		E (2.4)				
4	甕 土師器	A 17.6	平底。体部は長胴形を呈し、最大径 を中位にもつ。頸部は緩やかに屈曲 する。口縁部は外反気味に開き、踵 部をわずかにつまみ上げている。	口縁部及び頸部内・外面積ナゲ。体 部外側ヘラナゲ。下腹横位のヘラ削 り。内面ヘラナゲ。	石英・長石 浅黄褐色 普通	P576 70% P172 P3北側床面
		B 32.5				
		C 8.0				
5	甕 土師器	B (13.3)	底部から体部下半にかけての破片。 平底。体部は外傾しながら立ち上 がる。	体部外面積位のヘラ削り、下腹横位 のヘラ削り、内面ヘラナゲ。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P577 20% 南東壁際覆土下層、 北東壁際覆土中層
		C 6.6				

明石遺跡

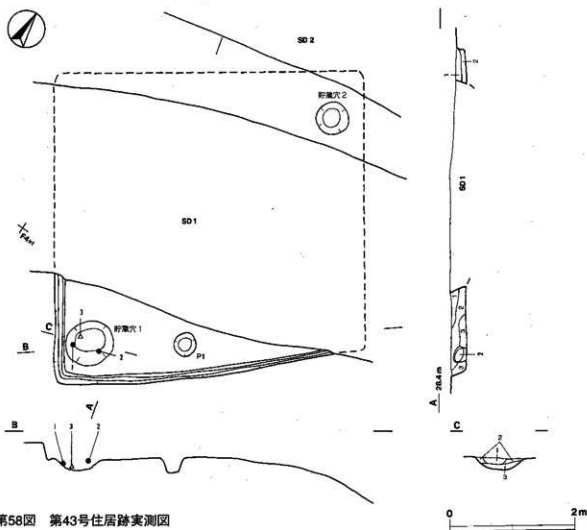
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 6	小形壺	A 15.6	底部一部欠損。平底。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。胴部は横やかに起曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び胴部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石灰・長石・燧石・赤色粒子 褐色 青濁	P575 70% PL72 P3北側床面
	土師器	B 12.8				
	C [5.8]					
7	ミチアハ土器	A 3.0	底部はやや丸みを帯びる平底である。体部は内壁しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	内・外面横ナデ。内・外面に指痕柄が残る。	石灰・長石 褐色 普通	P580 100% PL72 北西壁段覆土中層
	上野器	B 1.5				
	C 1.6					

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第57図8	管玉	2.3	0.5	0.2	1.1	滑石	竈内底部	Q18 PL112

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第57図9	砥石	(7.0)	9.2	3.2	(247.6)	泥岩	北西壁階覆土上層	Q19 PL111
10	不明石器	9.8	8.2	3.1	78.7	軽石	P1上面	Q20 PL112

第43号住居跡 (第58・59図)

位置 調査IV区, F4h1区。



第58図 第43号住居跡実測図

重複関係 本跡は第1・2号堀に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの堀よりも古い。

規模と平面形 第1・2号堀と重複しているため、南部しか遺存していないが、土層断面中の壁の立ち上がり及び2か所に付設された貯蔵穴の位置から、一辺(5.0)mの方形と推定される。

主軸方向 [N-35°-W]

壁 壁高は18~26cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を巡っている。上幅8~10cm、下幅4~6cm、深さ2~4cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット P1は径34cmの円形、深さ26cmで、位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南コーナー部に付設されており、径74cmの円形、深さ20cmで、断面形は逆台形をしている。貯蔵穴2は北コーナー部に付設されており、径54cmの円形、深さ24cmで、断面形は逆台形をしている。

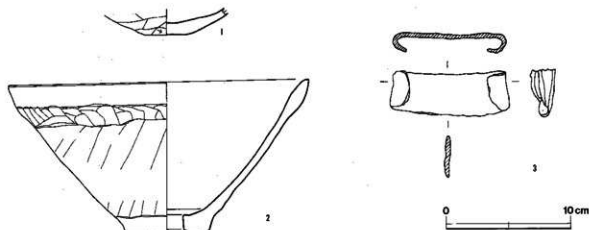
貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

覆土 3層からなる。3層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量



第59図 第43号住居跡出土遺物実測図

第43号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・炭成	備考
第59図 1	埴 土 印 器	B (2.0) C 3.7	底部片、平底。体部は内湾しながら立ち上がる。	体部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P622 5% 貯蔵穴1覆土上層
2	飯 土 加 器	A 23.4 B 12.2 C 6.8	単孔式で、底部は突出する。体部は鉢形を呈し、外傾しながら立ち上がる。口縁部は折り返し口縁で、外傾して開く。	口縁部内・外面横ナデ、体部内・外面ヘラナデ。外面に指頭痕が残る。	石英・長石・雲母・赤色粒子 に多い褐色 普通	P624 100% PL72 貯蔵穴上面

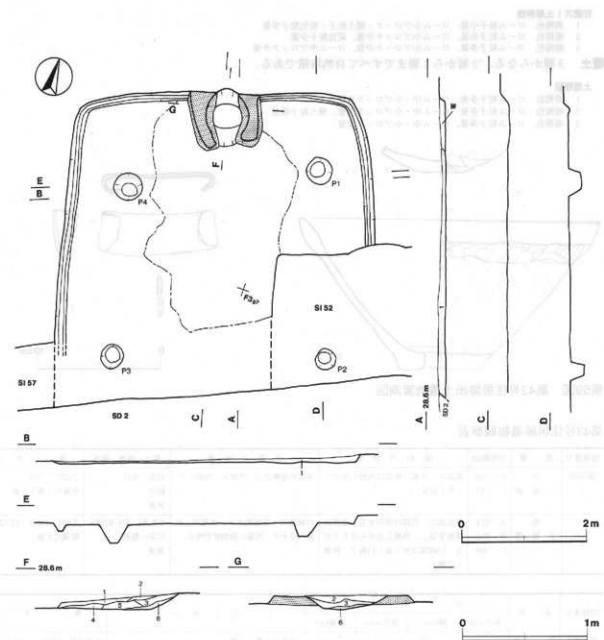
図版番号	種別	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第59図3	蓋	3.8	9.7	1.4	37.1	貯蔵穴1覆土下層	144号形 M29 PL113

遺物 土師器及びその小破片42点、鉄製鋤先1点が出土している。第59図1の増が貯蔵穴1の覆土上層から横位の状態、2の甔が貯蔵穴1の上層から正位の状態、3の鉄製鋤先が貯蔵穴1の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、大部分を第1号堀に掘り込まれているため、遺存していたところが少なかったが、貯蔵穴から良好な状態で遺物が出土している。中でも古い段階の鉄製農耕具である鋤先が出土しており、注目される。本跡の時期は、出土遺物から5世紀第1四半期と考えられる。

第50号住居跡 (第60図)

位置 調査Ⅲ区、F 3 f6区。
重複関係 本跡が第57号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第57号住居跡よりも新しい。また、第52号住居、第2号堀に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺構よりも古い。



第60図 第50号住居跡実測図

規模と平面形 南壁際は第2号堀と重複しているため、確認できたのは長軸5.08m、短軸(4.9)mであるが、平面形は方形と思われる。

主軸方向 [N-20°-W]

壁 壁高は4~12cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き、壁下を巡っている。上幅10~16cm、下幅4~8cm、深さ2~10cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。主柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 4か所(P1~P4)。P1~P4は径30~46cmの円形、深さ20~46cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部東寄りにつ設されており、焚口部から煙道口部までの長さ92cm、両袖幅120cmで、壁外への掘り込みはほとんどない。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面とほぼ同じレベルで、浅い皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量
- 2 灰褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量
- 3 灰褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量
- 4 にぶい赤褐色 焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・砂粒少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、粘土粒子・砂粒微量

覆土 遺存していた覆土は単一層で、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子少量、焼土中ブロック・炭化粒子微量

遺物 土師器の小破片110点が出土しているが、いずれも細片で、図示できるものはない。

所見 本跡は、大部分の床面及び竈が遺存していたにもかかわらず、そこからの遺物の出土量は少なかった。本跡の時期は、出土遺物及び重複関係から7世紀代と考えられる。

第51号住居跡 (第61・62図)

位置 調査Ⅲ区、F3d9区。

重複関係 本跡は第87号住居に掘り込まれているため、本跡の方が第87号住居跡よりも古い。

規模と平面形 西部は第87号住居跡と重複しているため、確認できたのは長軸3.98m、短軸(1.7)mであるが、平面形は方形と思われる。

主軸方向 [N-28°-W]

壁 壁高は8~20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

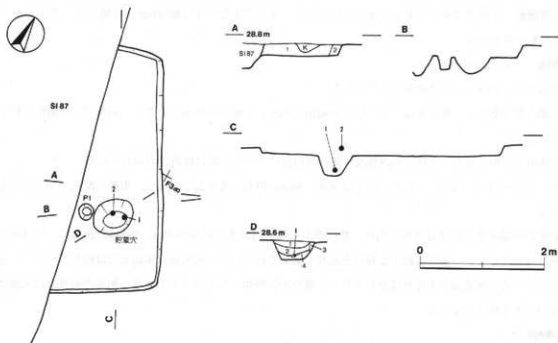
床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット P1は径24cmの円形、深さ22cmで、規模や位置から主柱穴と考えられる。

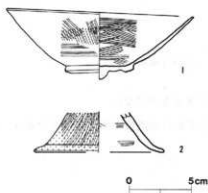
貯蔵穴 P1の東側に隣接するように付設されており、長径58cm、短径58cmの楕円形、深さ36cmで、断面形は逆台形をしている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量



第61図 第51号住居跡実測図



第62図 第51号住居跡出土遺物実測図

覆土 2層からなる。2層とも自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

遺物 土師器及びその小破片102点が出土している。覆土下層では、第62図2の器台が貯蔵穴の上部から正位の状態出土している。貯蔵穴では、1の高坏が貯蔵穴の覆土下層から正位の状態出土している。

所見 本跡は、西部が第87号住居に掘り込まれているため、遺存していたところが少なかったが、貯蔵穴から良好な状態で遺物が出土している。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

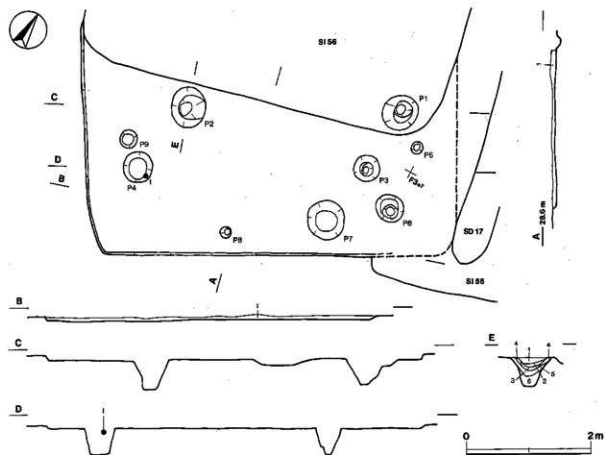
第51号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	高坏	A 150	頸部欠損。坏部下端に段をもつ。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横位のハケ目調整。体部外面上位斜位のハケ目調整、下位横位のハケ目調整、内面横位のハケ目調整。	長石・雲母・赤色粒子に多い橙色 普通	P675 40% PL72 貯蔵穴覆土下層
	土師器	B (6.0)				
2	器台	D (10.4)	頸部片。頸部はハの字状に開き、頸部は外気味に広がる。	頸部外面横位のヘラ磨き、内面横位のハケ目調整後、ナデ。裾部内面横ナデ。外面赤彩。	長石・雲母・赤色粒子 赤色 普通	P676 20% 貯蔵穴上部覆土下層
	土師器	E (3.2)				

第54号住居跡 (第63・64図)

位置 調査Ⅲ区, F 3 e6区。

重複関係 本跡が第53号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第53号住居跡よりも新しい。また、第56・164号住居に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの住居跡よりも古い。



第63図 第54号住居跡実測図

規模と平面形 北部は第56・164号住居跡と重複しているため、確認できたのは長軸(6.1)m、短軸(3.1)mであるが、平面形は長方形と思われる。

主軸方向 [N-27'-W]

壁 壁高は4~8cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット 9か所(P1~P9)。P1及びP2は径58~60cmの円形、深さ40~50cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。このうち、P1内には柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。P3及びP4は径42~50cmの円形、深さ44~46cmで、それぞれP1及びP2の南側に掘り込まれており、位置や配列から主柱穴に準ずる補助柱穴と考えられる。このうち、P3内には柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。P5~P8は径20~62cmの円形、深さ10~36cmで、性格は不明である。

P2土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量

覆土 遺存していた覆土は単一層で、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量



第64図 第54号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器及びその小破片261点が出土している。第64図1の高環がP4の覆土上層から横位の状態出土している。

所見 本跡は、北部が第56・164号住居に掘り込まれているため、遺存していたところが少なかったが、長辺が6m以上の比較的大形の住居跡と思われる。

本跡の時期は、出土遺物から5世紀第2四半期と考えられる。

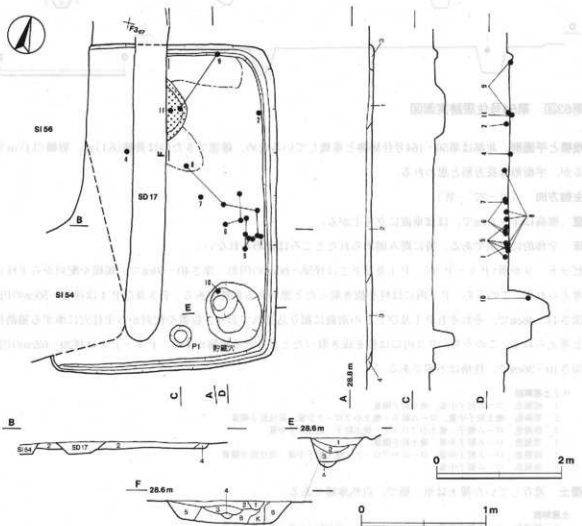
第54号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第64図 1	高環 土師器	B (5.4) E (3.9)	胴部片。胴部は中直で、胴部にかけてラッパ状に開く。	胴部内面ヘラナデ、胴部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラナデ。	石灰・長石 にふい黄棕色 普通	P605 10% P4覆土上層

第55号住居跡 (第65・66図)

位置 調査Ⅲ区、F3d7区。

重複関係 本跡は第54・56号住居、第17号溝に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺構よりも古い。



第65図 第55号住居跡実測図

規模と平面形 西部は第54・56号住居跡と重複しているため、確認できたのは長軸5.24m、短軸(3.5)mであるが、平面形は長方形と思われる。

主軸方向 [N-14'-W]

壁 壁高は4～6cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁東側、東壁及び南壁下を巡っている。上幅12～16cm、下幅4～6cm、深さ4～6cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。炉の南側から北側にかけて特に踏み固められている。

ピット P1は径32cmの円形、深さ36cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。二段掘り込みになっており、上段は径96cmの円形、深さ40cmで、下段は径44cm、深さ26cmで、床面から下段底面までの深さは66cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

炉 北壁寄りに付設されているが、西側は第17号溝によって壊されている。長径100cm、短径(32)cmの楕円形と思われ、床面を16cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子微量

覆土 4層からなる。4層から1層まですべて自然堆積である。

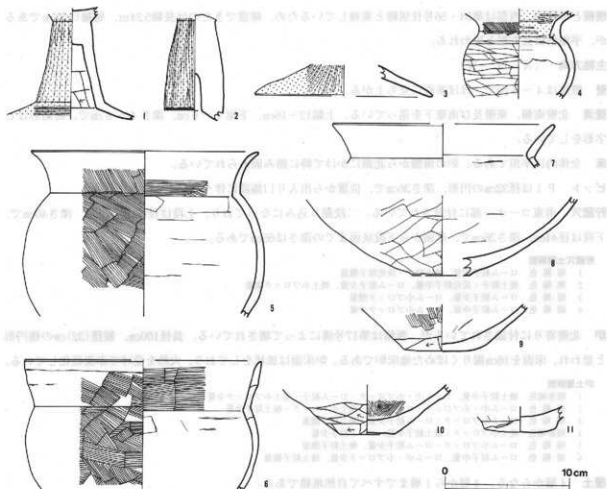
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量

遺物 土師器及びその小破片181点が出土している。覆土下層では第66図2の高坏が東壁際から横位の状態で、6の甕が東壁際から壊れた状態で、7の甕が中央部から横位の状態でそれぞれ出土している。床面では、1の高坏が東壁際から正位の状態で、4の小形甕が炉の南側から横位の状態で、5の甕が東壁際から壊れた状態でそれぞれ出土している。炉では、11の甕が覆土上層から正位の状態で出土している。貯蔵穴では、10の甕が覆土中層から逆位の状態で出土している。また、8の甕が東壁際の床面及び炉の南側の覆土下層から散乱した状態で、9の甕が炉の上面及び北壁際の床面から散乱した状態でそれぞれ出土している。その他にも北東区の覆土中から3の高坏が出土している。

第55号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 1	高坏	B (8.9)	脚部片。脚部は中空で、胴部にかけてフラップ状に開く。	坏部内面へう磨き。脚部外面縦位のへう磨き。内面縦位のへう磨き。内面横位のへう磨き。内面横ナデ。外面及び坏部内面赤彩。	石英・雲母 暗赤褐色 黄褐色	P696 30% PL72 東壁際床面
	土師器	E (7.9)				
2	高坏	B (8.5)	脚部片。脚部は中空で、エンタシス状を呈する。	脚部外面縦位のへう磨き。内面ナデ。外面赤彩。	雲母・赤色粒子 に濃い赤褐色 普通	P697 20% PL72 東壁際覆土下層
	土師器	E (7.8)				



第66図 第55号住居跡出土遺物実測図

図取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装成	備考
第66図 3	高土師器	高 D [14.0] 口径 E (2.5)	頸部片。頸部はハの字状に開く。	頸部外面縦位のヘラ磨き、内面横ナデ。外面赤彩。	雲母・赤色粒子にぶい赤褐色 普通	P 698 5% 北東区覆土中
4	小形土師器	口径 B (7.0)	底部及び口縁部欠損。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。底部はくの字状に屈曲する。	頸部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ、内面横位のヘラ磨き。体部外面横位のヘラ磨き、内面ナデ。頸部内面赤彩。内面に黒炭灰が残る。	石英・長石にぶい赤褐色 普通	P 700 30% PL72 伊南側床面
5	土師器	口径 A 18.4 口径 B (13.3)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ、内面横位のハケ目調整。体部外面斜位のハケ目調整。内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子にぶい赤褐色 普通	P 701 50% PL72 東側覆土床面
6	土師器	口径 A [19.0] 口径 B (10.5)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反して開く。	口縁部外面斜位のハケ目調整後、横ナデ、内面横位のハケ目調整。体部外面斜位のハケ目調整。内面ヘラナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P 702 20% 東側覆土下層
7	土師器	口径 A [17.8] 口径 B (3.5)	口縁部片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石・赤色粒子にぶい赤褐色 普通	P 703 5% 中央区覆土下層
8	土師器	口径 B (6.4) 口径 C (4.6)	底部から体部下半にかけての破片。底部はやや突出する平底である。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子にぶい赤褐色 普通	P 704 10% 東側覆土床面、 知市覆土下層
9	土師器	口径 B (3.8) 口径 C 5.8	底部片。平底。体部は外反しながら立ち上がる。	体部外面斜位のハケ目調整。下層横位のヘラ磨り、内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母にぶい赤褐色 普通	P 705 5% 伊上層、 北東側床面

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第66図 10	壺 土 師 器	B (4.0) C 4.4 C 5.6	底部片。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面ナデ、下腹横位のヘリ削り、内面斜位のハケ目調整後、ヘラナデ。	灰石・雲母・赤色粒子にぶい赤褐色 普通	P706 5% 貯蔵穴覆土中層
11	壺 土 師 器	B (2.1) C 5.6	底部片。底部は突出する平底である。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 暗赤褐色 普通	P707 5% 伊賀土層

所見 本跡は、西部が第54・56号住居に掘り込まれているため、遺存していたところが少なかったが、床面、炉及び貯蔵穴から良好な状態で遺物が出土している。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第3四半期～第4半期と考えられる。

第56号住居跡 (第67・68図)

位置 調査Ⅲ区、F 3 c5区。

重複関係 本跡が第49・54・55・59・164号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方がこれらの住居跡よりも新しい。

規模と平面形 長軸6.26m、短軸6.20mの方形である。

主軸方向 N-13°-W

壁 壁高は24～28cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き、壁下を全周している。上幅18～20cm、下幅10～12cm、深さ4～8cmで、断面形は逆台形をしている。

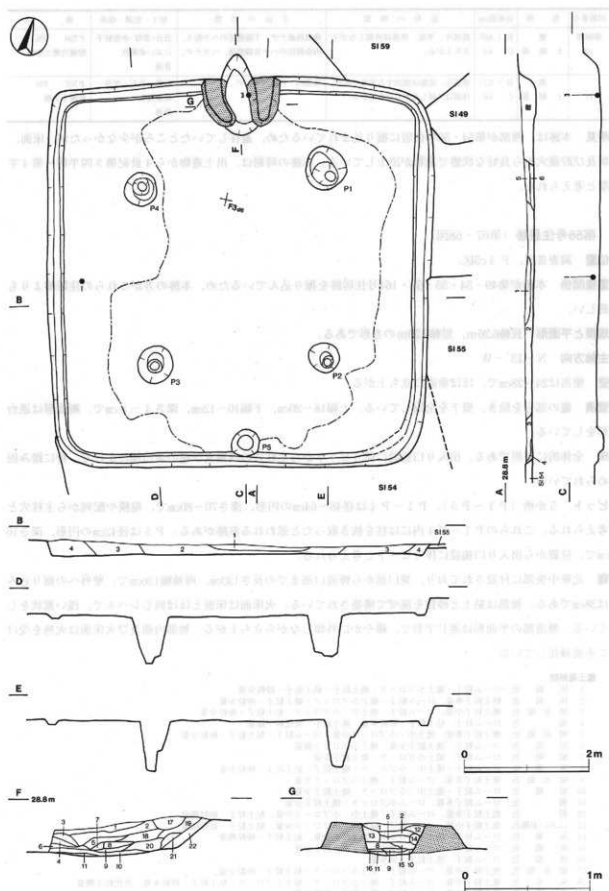
床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから柱柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 5か所(P1～P5)。P1～P4は径48～64cmの円形、深さ70～80cmで、規模や配列から柱柱穴と考えられる。これらのP1～P4内には柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。P5は径42cmの円形、深さ16cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ130cm、両軸幅126cmで、壁外への掘り込みは38cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面とほぼ同じレベルで、浅い皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 灰 褐色 色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 2 灰 褐色 色 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量
- 3 暗 赤 褐色 色 ローム粒子中量、ローム粒子・焼土中・小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
- 4 褐 赤 褐色 色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 明 赤 褐色 色 焼土粒子少量、焼土中・小ブロック中量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 6 暗 褐色 色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土小ブロック微量
- 7 暗 褐色 色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 8 灰 褐色 色 ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 9 暗 赤 褐色 色 焼土粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 10 暗 褐色 色 ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子少量
- 11 褐色 色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 12 褐色 色 焼土粒子少量、ローム粒子・焼土中・小ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量
- 13 にぶい赤褐色 色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土中・小ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量
- 14 灰 褐色 色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量、粘土粒子・砂粒微量
- 15 灰 褐色 色 ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子少量
- 16 黒 褐色 色 ローム粒子・焼土粒子・灰少量
- 17 暗 赤 褐色 色 焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 18 灰 赤 褐色 色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 19 赤 褐色 色 焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 20 暗 赤 褐色 色 焼土粒子中量、ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
- 21 暗 褐色 色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 22 暗 褐色 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量



第67图 第56号住居跡実測図

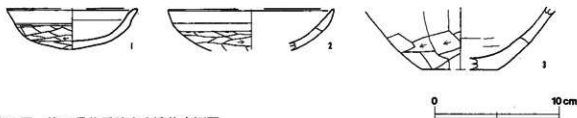
覆土 6層からなる。6層及び5層は含有物から甕が壊れて堆積したものと考えられる。4層から1層は自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 6 褐色 粘土小ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量

遺物 土師器及びその小破片263点が出土している。覆土下層では、第68図1の坏が西壁際から斜位の状態で出土している。甕では、3の甕が東軸部から正位の状態、2の坏が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、一辺が6m以上の比較的大形の住居跡である。また、重複している第164号住居跡と方向が近似し、時期的にも近いことから、この2軒は、第164号→本跡の順に、拡張されたものと想定される。本跡の時期は、出土遺物及び重複関係から7世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。



第68図 第56号住居跡出土遺物実測図

第56号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	貯蔵量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第68図 1	坏 土師器	A (10.6) B 3.3	丸底。体部は内巻しながら立ち上がり、口縁部との境に明瞭な段をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面横ナデ。	灰石・赤色粒子に多い褐色 普通	P708 30% 西壁際覆土下層
2	坏 土師器	A (13.4) B (3.3)	底部欠損。体部は内巻しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い段をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面横ナデ。外面に輪痕み痕が残る。	石英・長石 褐色 普通	P709 30% 覆土中
3	甕 土師器	B (5.1) C (6.0)	底部から体部下半にかけての破片。平底。体部は外巻しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ、下部横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。底部水筒痕。	石英・長石 赤褐色 普通	P710 10% 甕東軸部

第65号住居跡 (第69・70図)

位置 調査Ⅲ区、E3j0区。

重複関係 本跡が第77号住居跡、第56号土坑を掘り込んでいるため、本跡の方がこれらの遺構よりも新しい。

規模と平面形 東部は調査区域外に延びているため、確認できたのは長軸4.78m、短軸(4.3)mであるが、平面形は方形と思われる。

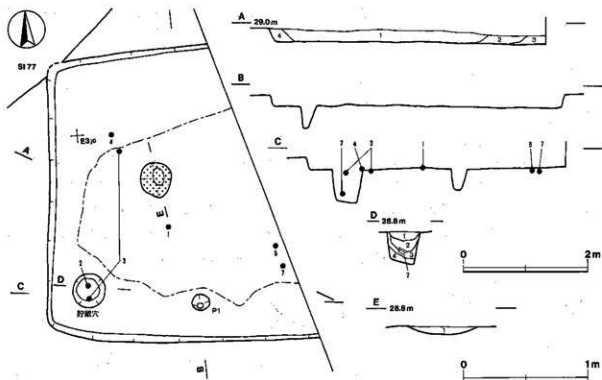
主軸方向 [N-4°-E]

壁 壁高は16～22cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから中央部にかけて、特に踏み固められている。

ピット P1は径26cmの円形、深さ34cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されており、径52cmの円形、深さ56cmで、断面形は逆台形をしている。



第69図 第65号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

炉 中央部に付設されており、径56cmの円形で、床面を6cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子微量

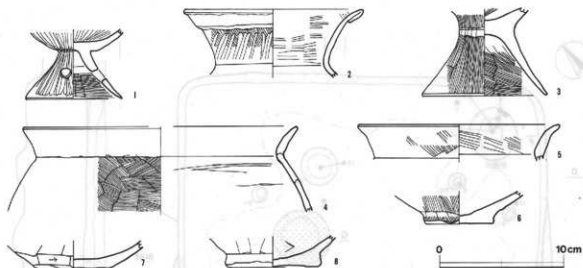
覆土 4層からなる。4層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒了微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器及びその小破片368点が出土している。覆土下層では、第70図1の高坏が炉の南側から正位の状態で、4の甕が炉の北側から横位の状態それぞれ出土している。床面では、5・7の甕がP1の東側から正位の状態それぞれ出土している。貯蔵穴では、2の甕が覆土中層から斜位の状態で出土している。また、3の台付甕が炉の北側の床面及び貯蔵穴の覆土上層から散乱した状態で出土している。その他にも南東区の覆土中から6の甕、南西区の覆土中から8の甕がそれぞれ出土している。

所見 本跡は、東部が調査区域外に延びているため、確認できたところが少なかったが、床面及び貯蔵穴から良好な状態で遺物が出土している。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。



第70図 第65号住居跡出土遺物実測図

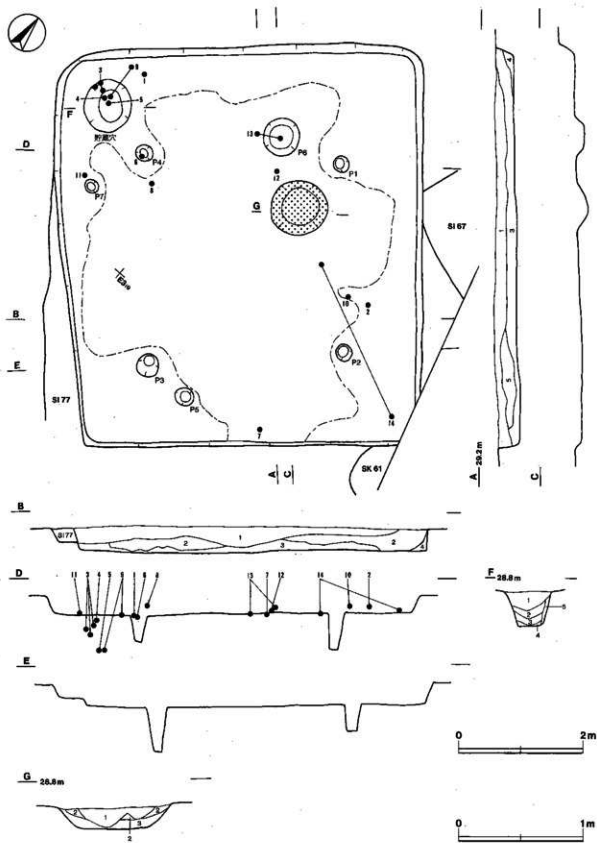
第65号住居跡遺物観察表

採取番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 1	高土師器	B (5.5) C 7.8 E 3.8	胴部から坏部下手にかけての破片。坏部下縁に強い稜をもつ。体部は内脣しながら立ち上がる。胴部は裾部にかけてハの字状に開く。胴部中央に円形の透かし孔が3つ空く。	坏部外面縦位のヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き。胴部外面縦位のヘラ磨き、内面横位のハケ目調整。	石英・長石 明赤褐色 普通	P736 70% PL73 伊南横土下層
2	土師器	A 14.2 B (5.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は折り返し口縁で、外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面縦位のハケ目調整後、縦位のヘラ磨き、内面横位のハケ目調整後、横ナデ。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P738 20% PL72 貯蔵穴覆土中層
3	台付土師器	B (7.0) D 10.0 E 5.5	底部片。台部はハの字状に開く。	台部外面縦位のハケ目調整、内面斜位のハケ目調整。	石英・長石・雲母 赤褐色 普通	P737 20% PL73 が北側床面、 貯蔵穴覆土上層
4	土師器	A (22.0) B (6.9)	胴部から口縁部にかけての破片。体部は内脣しながら立ち上がる。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	石英・長石 褐色 普通	P739 10% 伊北横土下層
5	土師器	A 16.2 B (2.9)	口縁部片。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ、内面横位のハケ目調整後、横ナデ。	石英・長石 暗褐色 普通	P740 10% P1東側床面
6	土師器	B (2.7) C 5.4	底部片。底部はやや突出する平底である。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面斜位のハケ目調整、内面ヘラナデ。	石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P741 10% 南東区覆土中
7	土師器	B (2.2) C 5.8	底部片。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面斜位のヘラ磨り、内面ヘラナデ。	石英・長石 赤褐色 普通	P742 10% P1東側床面
8	土師器	B (2.5) C 7.6	底部片。底部は突出する平底である。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P743 5% 南西区覆土中

第66号住居跡 (第71・72図)

位置 調査Ⅲ区, E 3h9区。

重複関係 本跡が第67・77号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方がこれらの遺構よりも新しい。また、第61号土坑に掘り込まれているため、本跡の方が第61号土坑よりも古い。



第71图 第66号住居跡実測图

規模と平面形 東コーナー部は調査区域外となっているが、長軸6.40m、短軸6.00mの方形と思われる。

主軸方向 N-42°-W

壁 壁高は24~34cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側にかけて、特に踏み固められている。

北西壁寄りの床面を中心に、垂木と思われる炭化材が壁際から中央部に向かうような状態で遺存していた。

ピット 7か所(P1~P7)。P1~P4は径26~34cmの円形、深さ44~76cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P5は径30cmの円形、深さ20cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6及びP7は径24~60cmの円形、深さ14~18cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 西コーナー部に付設されており、径76cmの円形、深さ62cmで、断面形は逆台形をしている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 5 極暗褐色 ローム粒子微量

炉 P1とP4を結ぶラインよりも中央部北寄りに付設されており、径90cmの円形で、床面を20cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

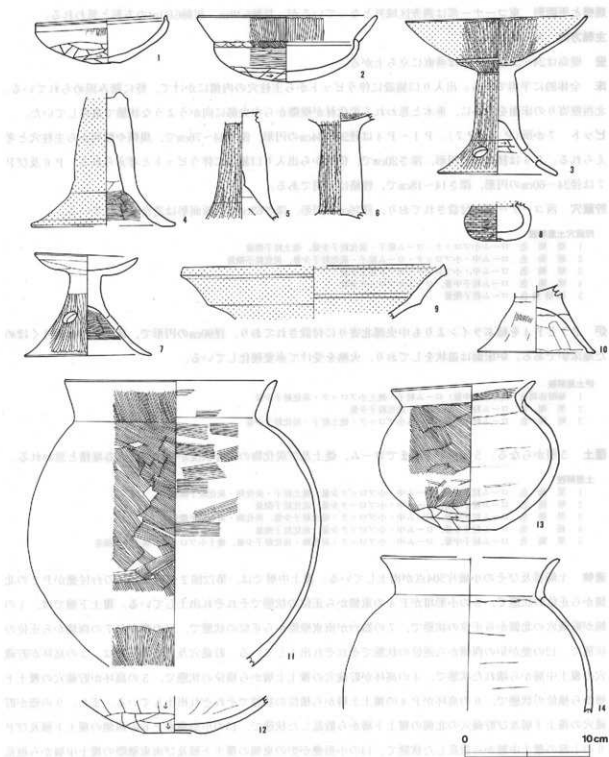
覆土 5層からなる。5層から1層までローム、焼土及び炭化物の含有状況からすべて人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化物・炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量

遺物 土師器及びその小破片504点が出土している。覆土中層では、第72図2の碗及び10の台付甕がP2の北側から正位の状態で、8の小形埴がP4の東側から正位の状態でそれぞれ出土している。覆土下層では、1の碗が貯蔵穴の北側から正位の状態で、7の器台が南東壁際から正位の状態で、11の甕がP7の西側から正位の状態で、12の甕が炉の西側から逆位の状態でそれぞれ出土している。貯蔵穴及びピットでは、3の高坏が貯蔵穴の覆土中層から壊れた状態で、4の高坏が貯蔵穴の覆土上層から横位の状態で、5の高坏が貯蔵穴の覆土下層から横位の状態で、6の高坏がP4の覆土上層から横位の状態でそれぞれ出土している。また、9の甕が貯蔵穴の覆土下層及び貯蔵穴の北側の覆土下層から散乱した状態で、13の小形甕がP6の西側の覆土下層及びP6の上部の覆土中層から散乱した状態で、14の小形甕が炉の東側の覆土下層及び南東壁際の覆土中層から散乱した状態でそれぞれ出土している。

所見 本跡は、一辺が6m以上の比較的大形の住居跡で、炭化材の検出状況や覆土の堆積状況から、焼失家屋と思われる。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第2四半期~第3四半期と考えられる。



第72図 第66号住居跡出土遺物実測図

第66号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図	碗	A 10.6	底唇は中央が小さく凹む丸底である。唇部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部は直立し、唇部がわずかに外反する。	口縁部内・外面稜位ナデ。唇部外面上位置位のハケ目調整後、ナデ。下位置位のへつ周り、内面ヘラナデ。	石灰・長石に灰白色普通	P744 60% P1.73 貯蔵穴北側層土下層
1	土製器	B 3.8				
		C 2.0				

図版番号	器種	片割番号(a)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 2	碗	A 146	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に深い段をもつ。口縁部は外傾し、内面下部に段をもつ。	口縁部内・外面縁位のヘラ磨き。体部外面縁位のヘラ磨き、内面ナデ。体部下部及び底部縁位のヘラ磨り。	石英・長石 に白い褐色 普通	P745 100% PL73 P 2 北朝野原土中部
	土師器	B 53				
3	高土師器	A 146	杯部下部に明確な段をもつ。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。頸部は中実で、柱状を呈し、頸部はハの字状に開く。肩部D位に円形の透かし孔が3つ空く。	口縁部及び体部外面縁位のヘラ磨き、内面縁位のヘラ磨き。肩部外面縁位のヘラ磨き。杯部外面縁位のヘラ磨き、内面縁位のヘラ磨り。頸部内面縁位ナデ。外面及び杯部内面赤彩。	長石・雲母 褐色 普通	P746 90% PL73 貯蔵穴横土下層
	環	B 128				
	土師器	D 94				
		E 82				
4	高土師器	D (11A)	脚部片。頸部は中実で、エンタシス状を呈し、頸部はハの字状に開く。	脚部縁位のヘラ磨き、内面縁位のハケ目調整。頸部内面縁位ナデ。外面赤彩。	石英・長石 褐色 普通 (二次焼成)	P748 40% PL73 貯蔵穴横土下層
	環	E (10A)				
5	高土師器	B (8A)	脚部片。頸部は中実で、柱状を呈し、頸部はハの字状に開く。	杯部内面ヘラ磨き。脚部外面縁位のヘラ磨き、内面縁位のヘラナデ。外面及び杯部内面赤彩。	石英・長石・雲母 赤色 普通	P749 20% 貯蔵穴横土下層
	環	E (7A)				
6	高土師器	B (8)	脚部片。頸部は中実で、柱状を呈し、頸部はハの字状に開く。	杯部内面ヘラ磨き。脚部外面縁位のヘラ磨き。外面及び杯部内面赤彩。	石英・長石・赤色粒子 に白い赤褐色 普通	P750 20% P 4 横土下層
	環	E (72)				
7	土師器	A 82	器受部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。頸部は頸帯にかけてラッパ状に開く。脚部中位に円形の透かし孔が3つ空く。	口縁部内・外面縁位ナデ。器受部外面ヘラナデ、内面縁位ナデ。脚部外面縁位のヘラ磨き、上面縁位ナデ。内面縁位のハケ目調整。頸部内面縁位ナデ。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P751 100% PL73 北朝野原土下層
	台	B 83				
	土師器	D 104				
		E 66				
8	小形土師器	B (32)	口縁部欠損。底部は中央が小さく凹み丸底である。体部は扁平気味の球形を呈し、最大径を中位にもつ。	体部外面縁位のヘラ磨き、内面ナデ。外面及び頸部内面赤彩。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P752 70% PL73 P 4 東野原土中部
	土師器	C 14				
9	土師器	A (21A)	口縁部片。口縁部は寄設口縁で、中に段をもち、外反気味に開き、端部がわずかに重なる。	口縁部内・外面縁位ナデ。内・外面赤彩。	石英・長石 褐色 普通	P747 10% 貯蔵穴横土下層、 貯蔵穴北朝野原土下層
	土師器	B (42)				
10	土師器	A (55)	台部片。各部はハの字状に開く。	台部外面縁位のハケ目調整後、ナデ。内面ヘラナデ。	石英・長石 明褐色 普通	P755 30% PL73 P 2 北朝野原土中部
	土師器	D 96				
	土師器	E 47				
11	土師器	A 170	底部欠損。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はハの字状に扇化する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面縁位のハケ目調整後、横ナデ。内面縁位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面縁位のハケ目調整、内面縁位のハケ目調整後、ナデ。	石英・長石 に白い褐色 普通	P758 40% PL73 P 7 西野原土下層
	土師器	B (231)				
12	土師器	B (30)	底部片。底部は中央がやや凹み平底である。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面縁位のヘラ磨き、内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 に白い褐色 普通	P759 5% 北朝野原土下層
	土師器	C 46				
13	土師器	A 114	平底。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はハの字状に扇化する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面縁位ナデ、内面縁位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面縁位のハケ目調整、下縁縁位のヘラ磨り、内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 に白い褐色 普通	P756 70% PL73 P 6 西野原土下層、 P 6 北朝野原土中部
	土師器	B 120				
	土師器	C 44				
14	土師器	A (14)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はハの字状に扇化する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面縁位ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英・長石 黒褐色 普通	P757 20% 北朝野原土下層、 東野原野原土中部
	土師器	B (124)				

第68号住居跡 (第73・74図)

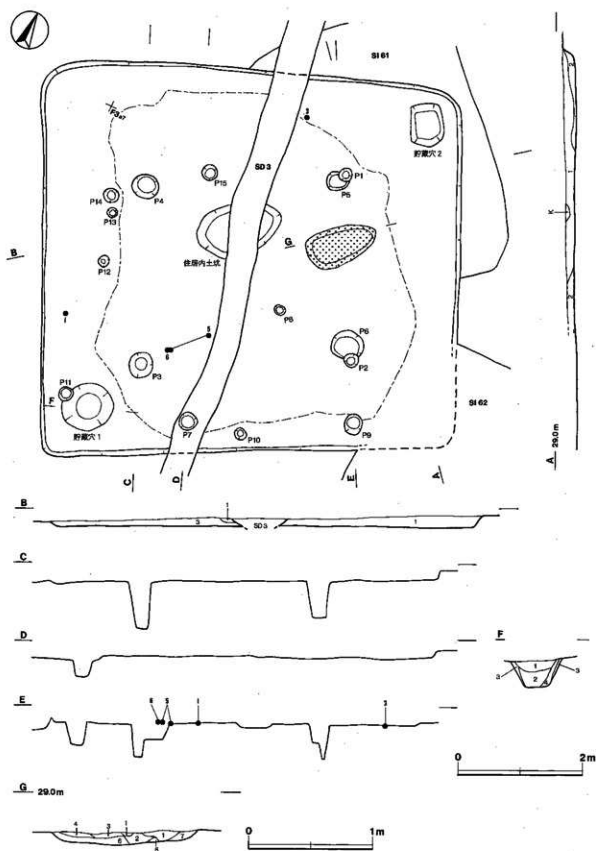
位置 調査Ⅲ区、F 3a7区。

重複関係 本跡が第61・62・70号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方がこれらの住居跡よりも新しい。また、第3号溝に掘り込まれているため、本跡の方が第3号溝よりも古い。

規模と平面形 長軸6.76m、短軸6.24mの方形である。

主軸方向 N-22°-W

壁 壁高は4~14cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。



第73図 第68号住居跡実測図

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側に於いて、特に踏み固められている。ピット 15か所(P1～P15)。P1～P4は径20～40cmの円形、深さ54～78cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P1及びP2に隣接してP5及びP6があり、径36～52cmの円形、深さ24～32cmで、いずれも柱を抜き取った痕跡と思われる。P7は径30cmの円形、深さ40cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P8～P15は径16～32cmの円形、深さ20～38cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南西コーナー部に付設されており、径84cmの円形、深さ48cmで、断面形は逆台形をしている。貯蔵穴2は北東コーナー部に付設されており、長辺70cm、短辺54cmの隅丸長方形、深さ14cmで、断面形は逆台形をしている。

貯蔵穴1土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

住居内土坑 中央部に掘り込まれており、長径140cm、短径80cmの楕円形、深さ8cmで、断面形はU字形をしている。性格は不明である。

炉 P1とP2を結ぶライン上のほぼ中央に付設されており、長径118cm、短径60cmの楕円形で、床面を10cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

覆土 3層からなる。3層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

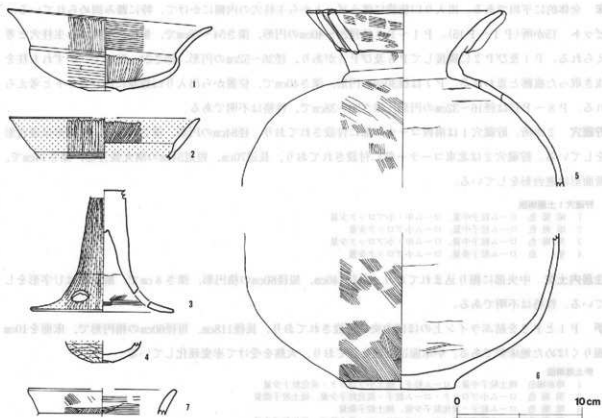
- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土器及びその小破片637点が出土している。床面では、第74図1の碗が西壁際から正位の状態、3の高坏が北壁際から横位の状態、5の壺がP3の東側から壊れた状態で、6の壺がP3の東側から正位の状態それぞれ出土している。なお、5の壺と6の壺とは互いに接合する箇所が確認できないが、同一個体と思われる。貯蔵穴及びピットでは、4の小形甕が貯蔵穴の覆土中から、2の碗がP4の覆土中からそれぞれ出土している。その他にも南東区の覆土中から7の小形甕が出土している。

所見 本跡は、一辺が6m以上の比較的大形の住居跡である。また、主柱穴内から土器が出土していることや、柱の抜き取り痕があることから、住居廃棄時の様子をうかがい知ることができる。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

第68号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	碗 土器	A 164	底部は中央が小さく凹む丸底である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に鋭い稜をもつ。口縁部は外反し、内面下層に稜をもつ。	口縁部外面横位のヘラ磨き、内面横位のヘラ磨き。体部外面横位のヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き。	長石・雲母 にぶい棕色 普通	P711 70% PL73 西壁際床面
		B 60				
		C 24				
2	碗 土器	A (154)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は外反し、内面下層に稜をもつ。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き。体部外面横位のヘラ磨き、内面ナデ。内・外面赤彩。	長石・雲母 赤色 普通	P714 10% P4覆土中
		B (33)				



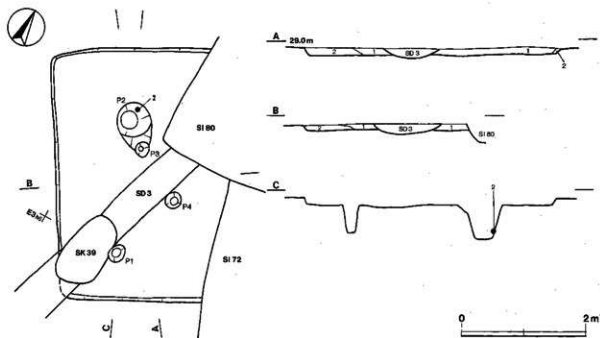
第74図 第68号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・施成	備考
第74図 3	高土脚器	B (9.5) D 11.4 E 9.1	脚部は中空で、柱状を呈し、裾部はハの字状に開く。脚部下位に円形の透かし孔が3つ空く。	坏部内面ヘラ磨き。臀部外面横位のヘラ磨き。内面横位のハケ目調整後、ナデ。裾部内面磨ナデ。外面及び坏部内面赤彩。	黄母・赤色乾子 赤色 普通	P712 40% PL73 北境赤土
4	小形土脚器	B (1.7) C 1.6	底部片。底部は中央が小さく凹む丸底である。体部は内磨しながら立ち上がる。	体部外面横位のヘラ磨き。内面ナデ。外面赤彩。	石英・長石・雲母 赤色 普通	P715 10% 貯蔵穴置土中
5	壺土脚器	A 15.8 B (14.1)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内磨しながら立ち上がる。肩部はくの字状に屈曲し、凸帯が1条走る。口縁部は折り返し口縁で、外反気味に開き。2本1単位の棒状浮きが3か所付く。	口縁部外面横位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整後、横ナデ。内面磨ナデ。体部外部斜位のハケ目調整後、ナデ。内面ヘラナデ。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P716 30% PL73 P 3 東側赤土 P717と同一?
6	壺土脚器	B (12.6) C 8.6	底部から体部下半にかけての破片。底部はやや突出する平底である。体部は球形を呈し、最大径を中位に持つ。	体部外面横位のハケ目調整後、ナデ。内面ヘラナデ。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P717 40% PL73 P 3 東側赤土 P716と同一?
7	小形土脚器	A (11.8) B (2.1)	口縁部片。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面横位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整後、横ナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P718 10% 南東区置土中

第69号住居跡 (第75・76区)

位置 調査Ⅲ区, E 3g7区。

重複関係 本跡は第72・79・80号住居跡, 第39号土坑, 第3号溝に掘り込まれているため, 本跡の方がこれらの遺構よりも古い。



第75図 第69号住居跡実測図

規模と平面形 北東部は第72・79・80号住居跡と重複しているため、確認できたのは長軸4.06m、短軸(2.8)mであるが、平面形は方形と思われる。

主軸方向 [N-28°-W]

壁 壁高は8~14cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット 4か所(P1~P4)。P1及びP2は径26~54cmの円形、深さ46~56cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。このうち、P2には隣接して柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。P3及びP4は径24~28cmの円形、深さ20~26cmで、性格は不明である。

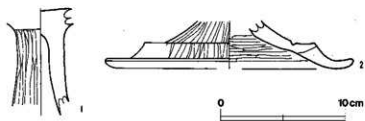
覆土 2層からなる。2層とも自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量

遺物 土師器及びその小破片12点が出土している。第76図2の高坏がP2の覆土下層から斜位の状態で出土している。また、北区の覆土中から1の高坏が出土している。

所見 本跡は、北東部が第72・79・80号住居に掘り込まれているため、遺存していたところが少なかったが、主柱穴から良好な状態で遺物が出土している。また、主柱穴内から土器が出土していることや、柱の抜き取り痕があることから、住居廃棄時の様子をうかがい知ることができる。本跡の時期は、出土遺物から5世紀第1四半期と考えられる。



第76図 第69号住居跡出土遺物実測図

第69号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	首径値(cm)	器形の特徴	手仕の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 1	高土師器 環脚器	E (6.9)	脚部は中空で、柱状を呈する。	坏部内面ヘラ磨き、脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	石英・長石・雲母に多い橙色 普通	P762 30% 北区覆土中
2	高土師器 環脚器	D (2.0) E (3.8)	脚部片。脚部と器部の境に明確な段をもつ。器部は外反気味に広がる。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面横位のヘラ磨き。器部内・外面横ナデ。外面に削痕が残る。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P763 30% PL74 P 2 覆土下層

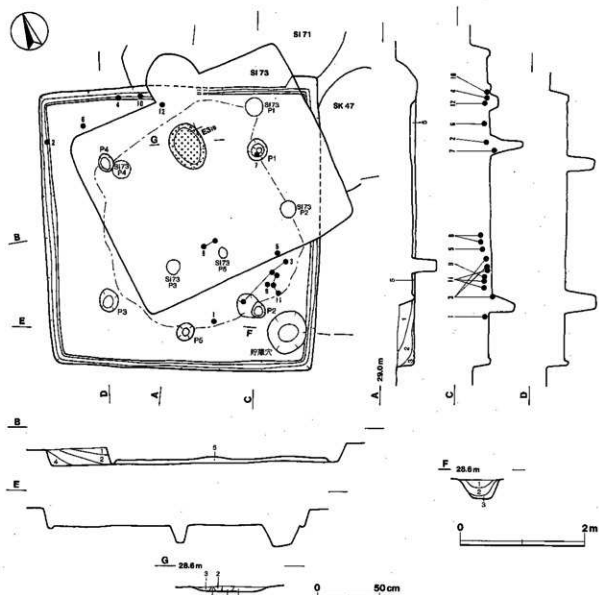
第74号住居跡 (第77・78図)

位置 調査Ⅲ区, E 315区。

重複関係 本跡が第71号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第71号住居跡よりも新しい。また、第73号住居、第47号土坑に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺構よりも古い。

規模と平面形 長軸4.54m、短軸4.52mの方形である。

主軸方向 N-20°-E



第77図 第74号住居跡実測図

壁 壁高は24～28cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を巡っている。上幅10～12cm、下幅4～6cm、深さ4～6cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側にかけ、特に踏み固められている。

西壁寄りの床面を中心に、垂木と思われる炭化材が壁際から中央部に向かうような状態で遺存していた。

ピット 5か所(P1～P5)。P1～P4は径22～38cmの円形、深さ42～52cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。このうち、P2には隣接して柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。P5は径28cmの円形、深さ28cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されており、径64cmの円形、深さ36cmで、断面形は逆台形をしている。

貯蔵穴1土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

炉 P1とP4を結ぶライン上のほぼ中央に付設されており、長径78cm、短径54cmの楕円形で、床面を4cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土中・小ブロック中量、ローム粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量

覆土 5層からなる。5層から2層まではローム、焼土及び炭化物の含有状況から人為堆積と思われる、1層は自然堆積と思われる。

土層解説

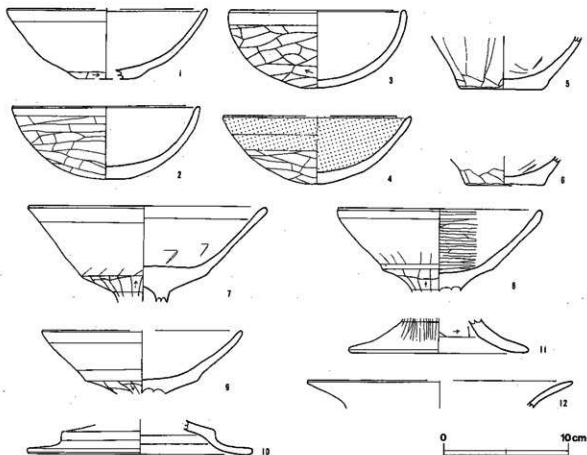
- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物 土師器及びその小破片52点が出土している。覆土下層では、第78図1の坏がP2の西側から逆位の状態で、2の坏が西壁際から正位の状態で、4の坏が北壁際から逆位の状態で、5の碗及び9の高坏が東壁際から正位の状態で、6の碗が北西コーナー部から正位の状態で、8の高坏が中央部から壊れた状態で、10の高坏が北壁際から正位の状態で、11の高坏が東壁際から壊れた状態で、12の甕が北壁際から斜位の状態でそれぞれ出土している。ピットでは、7の高坏がP1の覆土上層から正位の状態で出土している。また、3の坏がP2の覆土上層及び東壁際の覆土下層から散乱した状態で出土している。

所見 本跡は、炭化材の検出状況や覆土の堆積状況から、焼失家屋と思われる。また、主柱穴内から土器が出土していることや、柱の抜き取り痕があることから、住居廃棄時の様子をうかがい知ることができる。本跡の時期は、出土遺物から5世紀第3四半期と考えられる。

第74号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第78図 1	土師器	A 16.0	底部一部欠損。平底。体部は内彎し ながら立ち上がり、口縁部は外彎す る。	口縁部内・外面ナデ。体部外面ナ デ、内面ヘラナデ。体部下端及び底 部外面彎位のヘラ削り。	石英・長石 褐色 普通	P773 30% P2西側覆土下層
		B 5.6				
		C (4.8)				
2	土師器	A 15.0	丸底。体部は内彎しながら立ち上 がり、口縁部は外彎する。	口縁部内・外面ナデ。体部及び底 部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 褐色 普通	P771 100% PL74 西壁際覆土下層
		B 5.8				



第78図 第74号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第78図 3	坏	A 14.0	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子にふい焼色 普通	P 772 95% FL74 P 2 覆土上層、 東壁階覆土下層
	土師器	B 6.3				
4	坏	A (15.0)	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。口縁部から体部上半にかけての外面及び内面赤彩。	石英・長石・赤色粒子 赤褐色 普通	P 774 40% FL74 北壁階覆土下層
	土師器	B 5.4				
5	碗	B (4.3)	口縁部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。底部外面ヘラナデ。	石英・長石 にふい焼色 普通	P 781 20% 東壁階覆土下層
	土師器	C 6.6				
6	碗	B (2.3)	底部から体部下半にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ナデ。内面ヘラナデ。体部下層及び底部外面ヘラナデ。	石英・長石 にふい焼色 普通	P 782 10% 北西コーナー部覆土下層
	土師器	C 6.4				
7	高土師器	A 19.2	脚部欠損。坏部下端に稜をもつ。体部は外彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。坏部下端横位のヘラ削り。	石英・長石・赤色粒子 にふい焼色 普通	P 775 50% FL74 P 1 覆土上層
	土師器	B (7.8)				
	土師器	E (0.9)				
8	高土師器	A 16.4	脚部欠損。坏部下端に稜をもつ。体部は外彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部外面横ナデ。内面横位のヘラ磨き。体部外面ヘラナデ。内面横位のヘラ磨き。坏部下端横位のヘラ削り。外面に削痕が残る。	石英・長石 焼色 普通	P 776 40% FL74 中央部覆土下層
	坏	B (6.6)				
	土師器	F (0.1)				
9	高土師器	A (16.0)	脚部欠損。体部下端に稜をもつ。体部は外彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面ヘラナデ。坏部下端横位のヘラ削り。	石英・長石 褐色 普通	P 777 20% 東壁階覆土下層
	土師器	B (5.0)				
10	高土師器	D 18.2	脚部片。脚部と体部の境に明瞭な稜をもつ。脚部は外反気味に広がる。	脚部外面横ナデ。内面ナデ。体部内・外面横ナデ。	石英・長石 にふい赤褐色 普通	P 778 20% 北壁階覆土下層
	土師器	E (3.8)				

探検番号	器種	寸法(cm)	跡形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第78回 11	高 土 師 器	D 146 E (28)	脚部片。脚部はハの字状に開く。	脚部外面脚位のヘラ削き、内面脚位のヘラ削り。器部内・外面横ナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P 779 30% PL74 東郷原履土下層
12	覆 土 師 器	A (21.0) B (22)	口縁部片。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 明褐色 普通	P 780 35% 北郷原履土下層

第78号住居跡 (第79図)

位置 調査Ⅲ区, E 3 g81区。

重複関係 本跡が第72号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第72号住居跡よりも新しい。また、第79・80号住居跡に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの住居跡よりも古い。

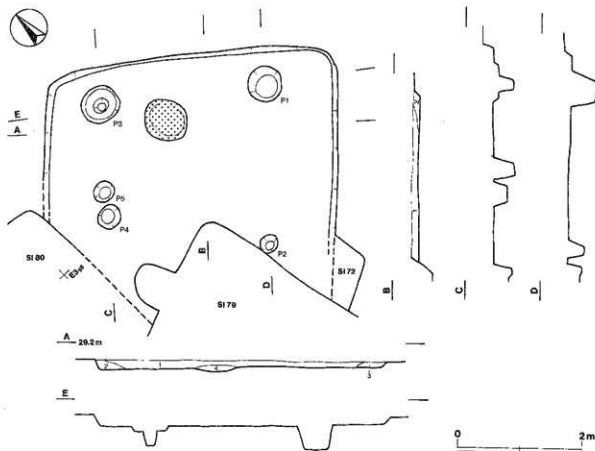
規模と平面形 西南部は第79・80号住居跡と重複しているため、確認できたのは長軸4.76m、短軸(4.3)mであるが、平面形は方形と思われる。

主軸方向 [N-39°-E]

壁 壁高は12~18cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット 5か所(P1~P5)。P1及びP2は径30~58cmの円形、深さ28~44cmである。P3は二段掘り込みになっており、上段は径62cmの円形、深さ10cmで、下段は径24cmの円形、深さ24cmで、床面から下段底面までの深さは34cmである。P1~P3は規模や配列から支柱穴と考えられる。P4及びP5は径34~42cmの円形、深さ24~34cmで、性格は不明である。



第79図 第78号住居跡実測図

炉 P1とP3を結ぶラインよりも中央部寄りに付設されており、長径76cm、短径66cmの楕円形で、床面を8cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量

覆土 3層からなる。3層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量

遺物 土師器の小破片40点が出土しているが、いずれも細片で、図示できるものはない。

所見 本跡は、南西部が第79・80号住居に掘り込まれているため、遺存していたところが少なく、出土遺物も少なかった。本跡の時期は、出土遺物及び重複関係から5世紀代と考えられる。

第84号住居跡（第80・81図）

位置 調査Ⅲ区、E36区。

重複関係 本跡が第82・83・85・86号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方がこれらの住居跡よりも新しい。また、第42号土坑に掘り込まれているため、本跡の方が第42号土坑よりも古い。

規模と平面形 北コーナー部は調査区域外となっているが、長軸(4.4)m、短軸4.34mの方形と推定される。

主軸方向 N-28°-W

壁 壁高は18~28cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦である。貯蔵穴とP3の間から主柱穴の内側に、特に踏み固められている。

ピット 3か所(P1~P3)。P1及びP2は径30~34cmの円形、深さ60~68cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P3は径48cmの円形、深さ22cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東壁際中央部南寄りに付設されており、径100cmの円形、深さ40cmで、断面形は逆台形をしている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 炭化物・炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

炉 P1の北西側に付設されており、径68cmの円形で、床面を12cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

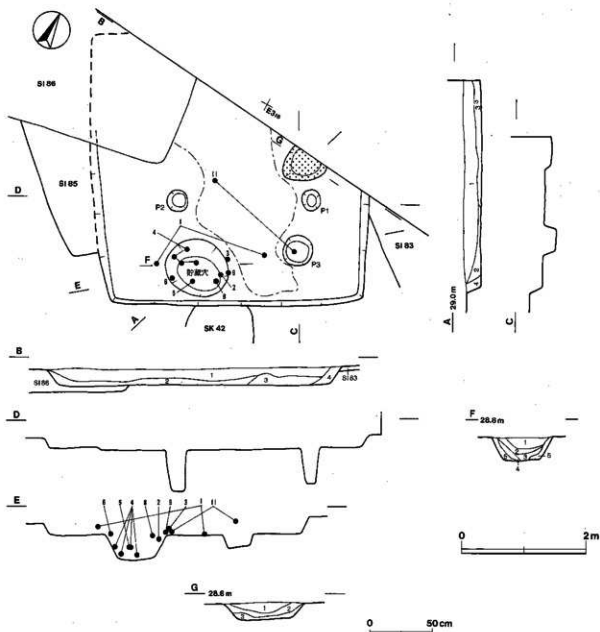
炉土層解説

- 1 に近い赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 灰褐色 ローム粒子・粘土小ブロック・焼土粒子中量、焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 4層からなる。4層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

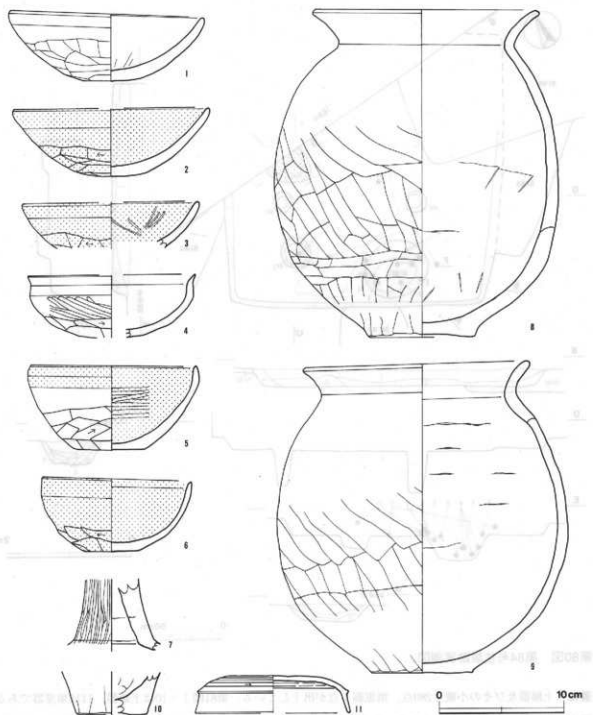
- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子微量



第80図 第84号住居跡実測図

遺物 土師器及びその小破片280点、須恵器1点が出土している。第81図1～10は土師器、11は須恵器である。覆土下層では、3の坏が貯蔵穴の東側から斜位の状態で、6の碗が貯蔵穴の上部から横位の状態で、9の甕が貯蔵穴の東側から正位の状態でそれぞれ出土している。貯蔵穴では、2の坏が覆土上層から逆位の状態で、4の坏が覆土下層から壊れた状態で、5の碗が覆土中層から正位の状態で、8の甕が上面から正位の状態でそれぞれ出土している。また、1の坏がP3の西側の床面及び貯蔵穴の西側の覆土中層から散乱した状態で、11の坏蓋が中央部の覆土下層及びP3の上部の覆土上層から散乱した状態でそれぞれ出土している。その他にも中央部付近の覆土中から7の高坏及び10の手捏土器がそれぞれ出土している。

所見 本跡の遺物としては、手捏土器、TK216型式段階の須恵器坏蓋が出土しており、注目される。本跡の時期は、貯蔵穴の出土遺物から5世紀第3四半期と考えられる。



第81図 第84号住居跡出土遺物実測図

第84号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 1	土器 杯	A 15.4	底部はやや丸みを帯びる平底である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外転する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面ヘラナデ。体部下端及び底部外面ヘラナデ。	石英・長石 に多い黄褐色 普通	P780 80% PL74 P.3 西側床面。 貯蔵穴西側覆土中層
		B 5.9				
		C 4.4				
2	土器 杯	A [15.8]	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外転する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面ヘラナデ。体部下端及び底部外面横位のヘラ削り。内・外面赤彩。	石英・長石・赤色粒子 に多い赤褐色 普通	P790 50% PL74 貯蔵穴覆土上層
		B 5.5				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地蔵	備考
第81図 3	坏 土師器	A (14.0) B (3.6)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面割位のヘラ磨き。体部下端横位のヘラ削り。内・外面赤影。	石英・長石 赤褐色 普通	P792 10% 貯蔵穴東側覆上下層
4	坏 土師器	A (13.4) B (5.0)	底部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に斜い稜をもつ。口縁部は外傾し、内面下層に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面割位のヘラ磨き、内面ヘラナデ。体部下端横位のヘラ削り。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P791 40% PL74 貯蔵穴覆土下層
5	陶 土師器	A 13.4 B 6.9 C 5.6	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に高い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面上位割位のヘラ磨き、下位ヘラナデ。体部下層及び底部外面横位のヘラ削り。口縁部から体部上半にかけての外面及び内面赤影。	石英・長石・赤色粒子 明赤褐色 普通	P787 100% PL74 貯蔵穴覆土中層
6	陶 土師器	A 12.0 B 6.0 C 4.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に高い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。体部下層及び底部外面ヘラ削り。内・外面赤影。	石英・長石 明赤褐色 普通	P788 10% PL74 貯蔵穴上部覆土下層
7	高 土師器	E (5.6)	胴部片。胴部は中受で、胴部にかけてラッパ状に開く。	胴部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。胴部内面横ナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P793 10% 覆土中
8	菓 土師器	A 17.8 B 26.4 C 8.4	底部はやや突出する平底である。体部はやや下開れ気味の球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石 外反割色 普通	P794 95% PL74 貯蔵穴上面
9	菓 土師器	A 17.6 B 25.2 C 8.0	底部はやや突出する平底である。体部はやや下開れ気味の球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 褐色 普通	P795 90% PL74 貯蔵穴東側覆土下層
10	手 土師器	B (3.5) C (5.8)	口縁部欠損。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P797 20% 覆土中
11	坏 須恵器	A (12.6) B 3.1	天弁部はわずかに丸みを帯び、口縁部との境に明確な稜をもつ。口縁部はわずかに外傾して開く。	口縁部内・外面ロクロナデ。外周部及び天弁部外面回転ヘラ削り、内面ロクロナデ。	長石 灰色 良好	P798 60% PL74 485117E P118製土下層 TK216型式段階

第86号住居跡 (第82・83図)

位置 調査Ⅲ区、E35区。

重複関係 本跡が第82・85号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方がこれらの住居跡よりも新しい。また、第84号住居跡に掘り込まれているため、本跡の方が第84号住居跡よりも古い。

規模と平面形 北部は調査区域外に延びているため、確認できたのは長軸4.20m、短軸(2.7)mであるが、平面形は方形と思われる。

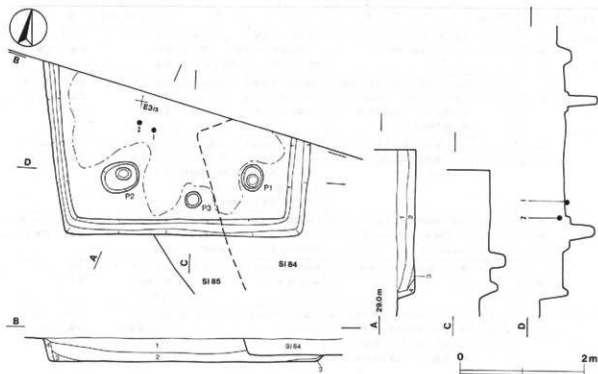
主軸方向 [N-11°-W]

壁 壁高は30~38cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を巡っている。上幅14~26cm、下幅6~16cm、深さ8~12cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側に於いて、特に踏み固められている。

ピット 3か所(P1~P3)。P1及びP2は二段掘り込みになっており、上段は径36~58cmの円形、深さ6~10cmで、下段は径18~28cmの円形、深さ40~46cmで、床面から下段底面までの深さは50~52cmである。P1及びP2は規模や配列から主柱穴と考えられる。P3は径26cmの円形、深さ28cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第82図 第86号住居跡実測図

覆土 4層からなる。4層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量, 焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量



第83図 第86号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器及びその小破片52点が出土している。

覆土下層では、第83図2の高坏がP2の北側から横位の状態で出土している。床面では、1の高坏がP2の北側から横位の状態で出土している。

所見 本跡は、北部が調査区域外に延びているため、確認できたところが少なかったが、床面から覆土下層にかけて良好な状態で遺物が出土している。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第3四半期～第4四半期と考えられる。

第86号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 1	高土師器 高土師器	E (7.6)	胴部片。胴部は中空で、柱状を呈する。	胴部外面縦位のヘラ磨き。外面赤彩。	石英・長石・赤色粒子 赤色 普通	P 801 10% P 2北側床面
2	高土師器 高土師器	E (7.4)	胴部片。胴部は中空で、胴部にかけてワッパ状に開く。	胴部外面縦位のヘラ磨き。内面横位のヘラ磨り。外面に削痕が残る。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P 802 10% P 2北側覆土下層

第97号住居跡 (第84・85図)

位置 調査Ⅱ区の南部, E3c7区。

重複関係 本跡は第98・101・102号住居, 第130・133~135号土坑に掘り込まれているため, 本跡の方がこれらの遺構よりも古い。

規模と平面形 東コーナー部は調査区域外となっているが, 長軸9.46m, 短軸8.36mの長方形と思われる。

主軸方向 N-46°-W

壁 壁高は18~30cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を巡っている。上幅12~18cm, 下幅6~10cm, 深さ4~12cmで, 断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦であるが, 貯蔵穴1周辺の床は他の部分よりも8~10cmほど低く, 貯蔵穴2周辺の床は他の部分よりも4~6cmほど高くなっている。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側及び貯蔵穴にかけて, 特に踏み固められている。また, 床には溝が北東壁, 南東壁及び北西壁に平行してコの字状に巡っている。北東溝は長さ(4.9)m, 南東溝は長さ(4.2)m, 北西溝は長さ3.00m, 3条とも上幅24~36cm, 下幅18~28cm, 深さ4~6cmで, 断面形は逆台形をしている。その他にも南東壁際から住居内土坑1にかけて, 溝が1条付設されており, 長さ100cm, 上幅26cm, 下幅14cm, 深さ4cmで, 断面形は逆台形をしている。

ピット 26か所(P1~P26)。P1及びP4は二段掘り込みになっており, 上段は径80~86cmの円形, 深さ54~60cmで, 下段は径22~26cmの円形, 深さ6~8cmで, 床面から下段底面までの深さは60~68cmである。P2及びP3は径64~66cmの円形, 深さ64~66cmである。P1~P4は規模や配列から主柱穴と考えられる。P2に隣接してP5があり, 径90cmの円形, 深さ52cmで, 補助柱穴もしくは柱を立て替えたものと思われる。P6は二段掘り込みになっており, 上段は径48cmの円形, 深さ24cmで, 下段は径28cmの円形, 深さ20cmで, 床面から下段底面までの深さは44cmである。P6は位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7は径28cmの円形, 深さ24cmで, P6と同じ主軸線上に掘り込まれており, 位置や配列からP6に準ずる出入り口施設に伴うピットと考えられる。P8~P26は径20~56cmの円形, 深さ12~40cmで, 性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南コーナー部の床面よりも一段低くなったところに付設されており, 径78cmの円形, 深さ60cmで, 断面形は逆台形をしている。貯蔵穴2は北西壁際中央部西寄りのU字状の隆起帯の内側に付設されており, 長径78cm, 短径58cmの楕円形, 深さ26cmで, 断面形は逆台形をしている。

貯蔵穴1土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量

貯蔵穴2土層解説

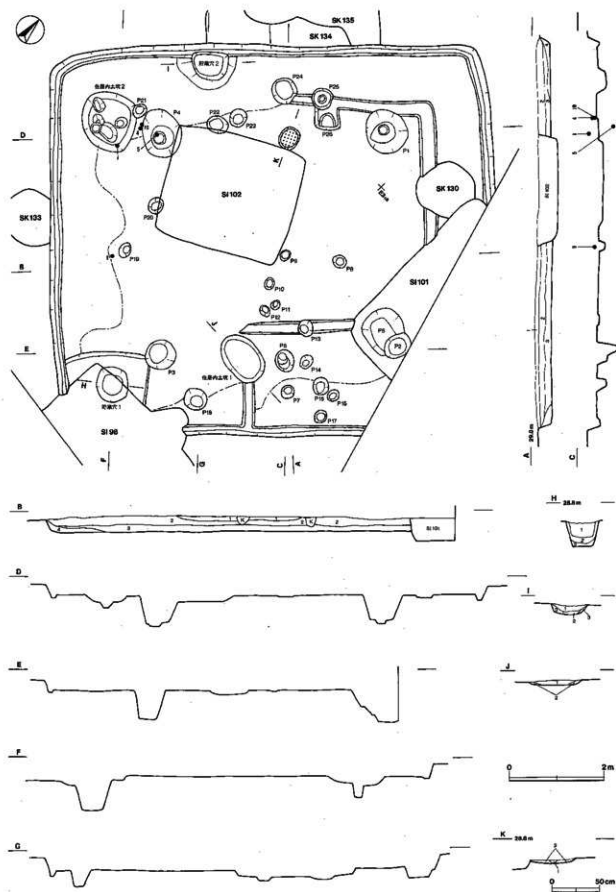
- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量

住居内土坑 2か所。住居内土坑1は中央部南東壁寄りに掘り込まれており, 長径110cm, 短径74cmの楕円形, 深さ10cmで, 断面形はU字形をしている。住居内土坑2は西コーナー部に掘り込まれており, 径132cmの円形, 深さ22cmで, 断面形はU字形をしている。住居内土坑2の底面には, 径26~44cmの円形, 深さ10~36cmで, ピット状の掘り込みが5か所ある。住居内土坑1及び2とも性格は不明である。

住居内土坑1土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量

炉 P1とP4を結ぶライン上のほぼ中央に付設されており, 長径48cm, 短径42cmの楕円形で, 床面を4cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており, 火熱を受けて赤変硬化している。



第84图 第97号住居跡実測图

炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量

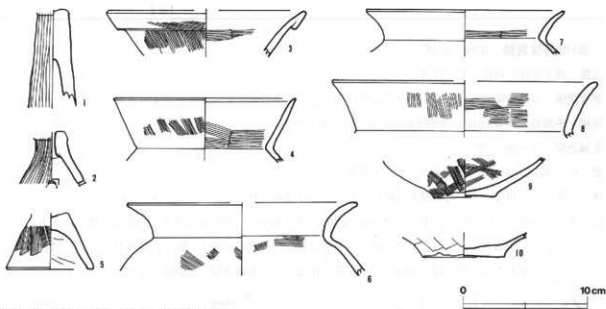
覆土 4層からなる。4層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

遺物 土師器及びその小破片1320点が出土している。覆土中層では、第85図1の高坏が住居内土坑2の上部から横位の状態で出土している。覆土下層では、4の壺がP4の西側から横位の状態で出土している。床面では、9の甕がP19の南側から逆位の状態で、10の甕がP4の西側から斜位の状態でそれぞれ出土している。ピットでは、5の台付甕がP4の覆土下層から逆位の状態で出土している。その他にも東区の覆土中から2の器台、南区の覆土中から8の甕、西区の覆土中から3の壺、6・7の甕がそれぞれ出土している。

所見 本跡は、長辺が9m以上、短辺でも8m以上の大形の住居跡で、内部施設としていわゆる「間仕切り溝」と呼ばれる壁溝以外の溝を有しているなど、いくつか特徴的なものが見られる。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第3四半期～第4四半期と考えられる。



第85図 第97号住居跡出土遺物実測図

第97号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第85図 1	高土師器 坏	B (7.5) E (7.4)	脚部片。脚部は中空で、柱状を呈する。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子に多い褐色普通	P171 20% 住居内土坑2上部覆土中層
2	器台 土師器	B (4.2) E (3.5)	脚部片。胎受部中央は穿孔されている。唇部はハの字状に開く。脚部中に円形の透かし孔が3つないし5つ開く。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ。	石英・長石・雲母 褐色普通	P174 10% 東区覆土中
3	壺 土師器	A (15.6) B (3.7)	口縁部片。口縁部は折り返し口縁で、外反気味に開く。	口縁部外面横位のハケ目調整後、横ナデ。内面横ナデ。胎部外面縦位のハケ目調整、内面縦位のハケ目調整後、横ナデ。	石英・長石 に多い褐色普通	P183 5% 西区覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第85図 4	甕 土師器	A 14.6 B (5.2)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は、外反して開く。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ。内面縦位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子にふい・赤褐色 普通	P 175 10% P 4 西側覆土下層
5	台付甕 土師器	A (4.5) D 7.0 E 3.8	台部片。台部はハの字状に開く。	台部外面縦位のハケ目調整。内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子にふい・褐色 普通	P 176 10% P 4 覆土下層
6	甕 土師器	A (18.4) B (5.9)	胴部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面縦位のハケ目調整後、ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P 177 10% 西区覆土中
7	甕 土師器	A 16.0 B (3.5)	口縁部片。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面横ナデ、内面縦位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P 178 10% 西区覆土中
8	甕 土師器	A (21.4) B (4.5)	口縁部片。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ。内面縦位のハケ目調整後、横ナデ。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P 179 10% 南区覆土中
9	甕 土師器	B (3.1) C 5.0	底部片。底部は突出する平底である。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面縦位のハケ目調整後、ナデ。	石英・長石・雲母 にふい・赤褐色 普通	P 180 5% P 19南側床面
10	甕 土師器	B (2.0) C 6.6	底部片。底部はやや突出する平底である。体部は外彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P 181 5% P 4 西側床面

第102号住居跡 (第86・87図)

位置 調査Ⅱ区の南部，E 3 C7区。

重複関係 本跡が第97号住居跡を掘り込んでいるため，本跡の方が第97号住居跡よりも新しい。

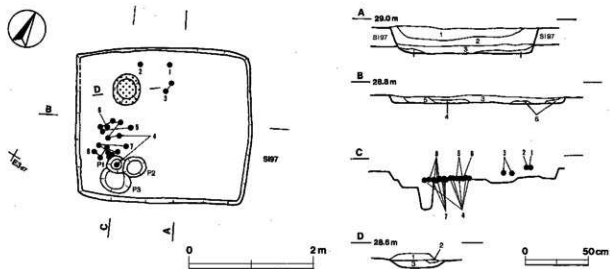
規模と平面形 長軸2.84m，短軸2.48mの長方形である。

主軸方向 N-30°-W

壁 壁高は36～44cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット 3か所(P 1～P 3)。P 1は径30cmの円形，深さ46cmで，位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 1に隣接してP 2及びP 3があり，P 2は径36cmの円形，深さ12cmで，補助柱穴もしくは柱を立て替えたものと思われる。P 3は径50cmの円形，深さ16cmで，柱を抜き取った痕跡と思われる。



第86図 第102号住居跡実測図

炉 西コーナー寄りに付設されており、長径52cm、短径46cmの楕円形で、床面を8cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は風状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

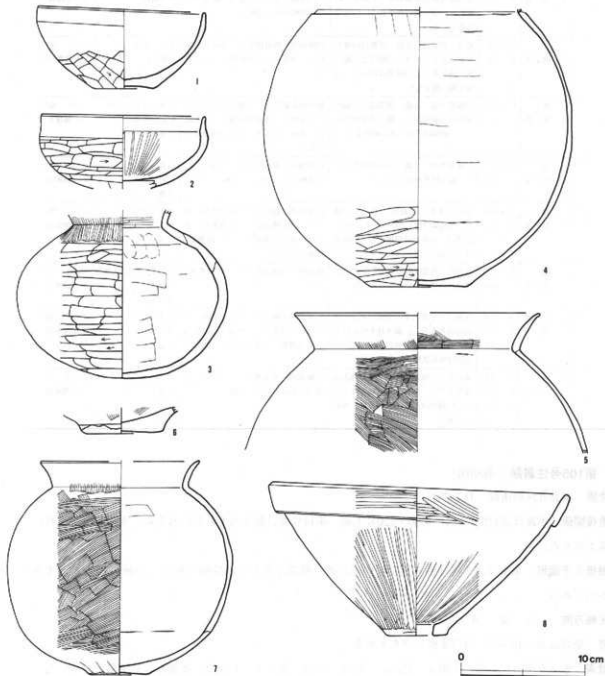
炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土粒子中量、焼土小ブロック少量

覆土 6層からなる。6層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量



第87図 第102号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器及びその小破片148点が出土している。覆土中層では、第87図1の坏が北西壁際から正位の状態
で、2の坏が炉の北側から正位の状態それぞれ出土している。覆土下層では、3の罎が炉の東側から横位
の状態出土している。床面では、4の壺、5の甕、7の小形甕及び8の甎が炉の南側から壊れた状態で、6
の甕が炉の南側から逆位の状態それぞれ出土している。

所見 本跡は、一辺が3m未満の小形の住居跡で、ピットが3か所検出されたが、主柱穴は1か所も検出され
なかった。本跡の時期は、出土遺物から5世紀第1四半期と考えられる。

第102号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第87図 1	坏 土師器	A 13.4	底部は中央がやや円凸平底である。 体部は内彎しながら立ち上がり、口 縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部 は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナ デ、内面ヘラナデ。体部下端及び底 部外面横位のヘラ張り。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P184 90% PL74 北西側覆土中層
		B 6.7				
		C 5.0				
2	坏 土師器	A 13.2	底部・部欠損。丸底。体部は内彎し ながら立ち上がり、口縁部との境に 弱い稜をもつ。口縁部は直立し、内 面下層に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横 位のヘラ張り、内面放射状のヘラ磨 き。	石英・雲母 赤褐色 普通	P185 90% PL74 伊北側覆土中層
		B (6.0)				
3	罎 土師器	B (13.6)	口縁部欠損。丸底。体部はやや扁平 気味の球形を呈し、最大径を中位に もつ。頸部はくの字状に屈曲する。	頸部外面横位のヘラ磨き、内面横位 のヘラ磨き、体部外面横位のヘラ磨 り、内面ヘラナデ。内面に指痕が 残る。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P186 60% PL75 伊東側覆土下層
		B (13.6)				
4	壺 土師器	B (22.3)	口縁部欠損。平底。体部は球形を呈 し、最大径を中位にもつ。	体部外面上端ヘラナデ、中位ナデ、 下層横位のヘラ張り、内面ヘラナデ。	石英・長石 褐色 普通	P187 30% PL75 伊南側床面
		C 8.0				
5	甕 土師器	A (19.8)	体部上半から口縁部にかけての破 片。体部は内彎しながら立ち上がる。 頸部はくの字状に屈曲する。口縁部 は外反気味に開く。	口縁部外面横位のハケ目調整後、横 ナデ、内面横位のハケ目調整後、横 ナデ。体部外面斜位のハケ目調整、 内面ヘラナデ。	石英・長石 褐色 普通	P189 20% 伊南側床面
		B (11.2)				
6	甕 土師器	B (2.1)	底部片。底部は突出する平底である。 体部は外彎しながら立ち上がる。	体部内・外面斜位のハケ目調整後、 ナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 明赤褐色 普通	P190 5% 伊南側床面
		C 6.8				
7	小形甕 土師器	A (12.8)	底部はやや突出する平底である。体 部は球形を呈し、最大径を中位にも つ。頸部はくの字状に屈曲する。口 縁部は外反気味に開く。	口縁部外面横位のハケ目調整後、横 ナデ、内面横ナデ。体部外面斜位 のハケ目調整、下層ヘラナデ、内面ヘ ラナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P188 60% PL75 伊南側床面
		B 17.3				
		C 5.0				
8	甎 土師器	A 23.8	単孔式で、底部は突出する。体部は 鉢形を呈し、外彎しながら立ち上 がる。口縁部は折り返し口縁で、外縁 して開く。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き。体 部内・外面横位のヘラ磨き。	石英・長石 赤褐色 普通	P192 60% PL73 伊南側床面
		B 12.3				
		C 5.0				

第105号住居跡 (第88図)

位置 調査Ⅱ区の南部、D 3j7区。

重複関係 本跡は第110号住居、第50・120号土坑、第14号溝に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺
構よりも古い。

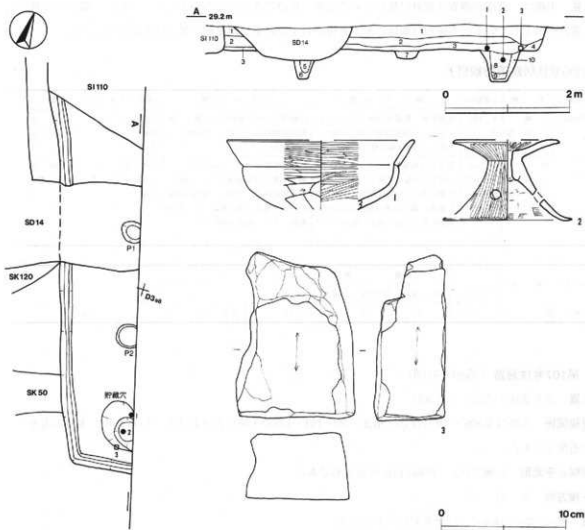
規模と平面形 東部は調査区域外に延びているため、確認できたのは長軸(5.8)m、短軸(1.6)mで、平面形は
不明である。

主軸方向 (N-18°-W)

壁 壁高は38~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を巡っている。上幅8~12cm、下幅4~6cm、深さ4~6cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。



第88図 第105号住居跡・出土遺物実測図

ビット 2か所(P1・P2)。P1は径34cmの円形、深さ46cmで、規模や位置から主柱穴と考えられる。P2は径38cmの円形、深さ16cmで、性格は不明である。

P1土層解説

- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

P2土層解説

- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土粒子少量

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されており、径74cmの円形、深さ54cmで、断面形は逆台形をしている。

貯蔵穴土層解説

- 8 暗褐色 ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 10 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量

覆土 4層からなる。4層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

遺物 土師器及びその小破片72点、礫石1点が出土している。第88図1の碗が貯蔵穴の上面から横位の状態で、2の器台が貯蔵穴の覆土中層から横位の状態で、3の礫石が貯蔵穴の上面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、東部が調査区域外に延びているため、確認できたところが少なかったが、貯蔵穴から良好な状態で遺物が出土している。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

第105号住居跡遺物観察表

図版番号	種 別	寸法(cm)	形 状 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・地成	備 考
第88回 1	横 土 師 器	A (15.0)	底部欠損。体部は内唇しながら立ち上がる。口縁部は折り返し口縁で、外傾し、内面下端に條をもつ。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き。体部外面横位のヘラ磨り。内面横位のヘラ磨き。	石英・長石 赤褐色 普通	P198 20% PL75 貯蔵穴上層
		B (5.5)				
2	餅 上 師 器	A (8.6)	唇受部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反して開く。唇受部中央は穿孔されている。唇部はハの字状に開き、裾部は外反気味に広がる。脚部中央に円形の透かし孔が3つ並ぶ。	口縁部外面横ナデ、内面横位のヘラ磨き。唇受部外面横位のヘラ磨き。内面放射状のヘラ磨き。脚部外面横位のヘラ磨き。内面横位のハケ目圓整紙。ナデ。裾部内面横ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P199 60% PL75 貯蔵穴覆土中層
		B 6.5				
		D 10.4				
		E 5.0				

図版番号	種 別	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第88回3	瓶 石	13.3	9.6	5.4	987.6	砂 岩	貯蔵穴上層	Q 5 PL111

第107号住居跡 (第89～91図)

位置 調査Ⅱ区の南部、E 3 a6区。

重複関係 本跡は第106・108号住居、第26・50・134・135号土坑に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺構よりも古い。

規模と平面形 長軸5.20m、短軸4.12mの長方形である。

主軸方向 N-41°-E

壁 壁高は26～34cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を全周している。上幅12～20cm、下幅6～10cm、深さ4～10cmで、断面形はU字形をしている。

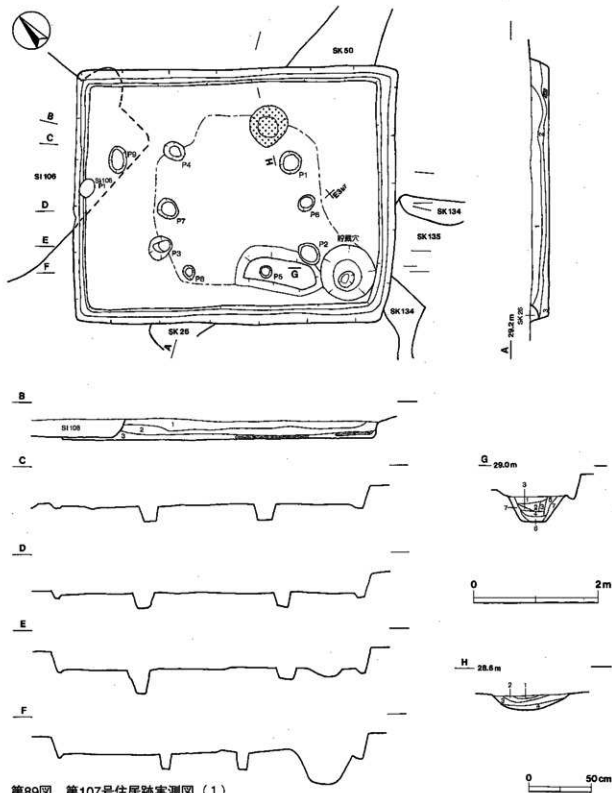
床 全体的に平坦であるが、P 5周辺の床は他の部分よりも4～6cmほど高くなっている。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側及び炉にかけて、特に踏み固められている。床面全体に、垂木と思われる炭化材が壁際から中央部に向かうような状態で遺存していた。

ピット 9か所(P 1～P 9)。P 1～P 4は径32～36cmの円形、深さ22～42cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。このうち、P 3内には柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。P 5は南西壁際中央部南寄りの楕円状の隆起帯の内側に掘り込まれており、径20cmの円形、深さ30cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6及びP 7は径26～34cmの円形、深さ26～30cmで、それぞれ主柱穴の中間に掘り込まれており、位置や配列から主柱穴に準ずる補助柱穴と考えられる。P 8は径20cmの円形、深さ28cmで、南西壁際中央部北寄りに掘り込まれており、位置や配列からP 5に準ずる出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 9は径38cmの円形、深さ10cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー部に付設されている。二段掘り込みになっており、上段は径88cmの円形、深さ42cmで、下段は径32cmの円形、深さ10cmで、床面から下段底面までの深さは52cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック中量、炭化物・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量



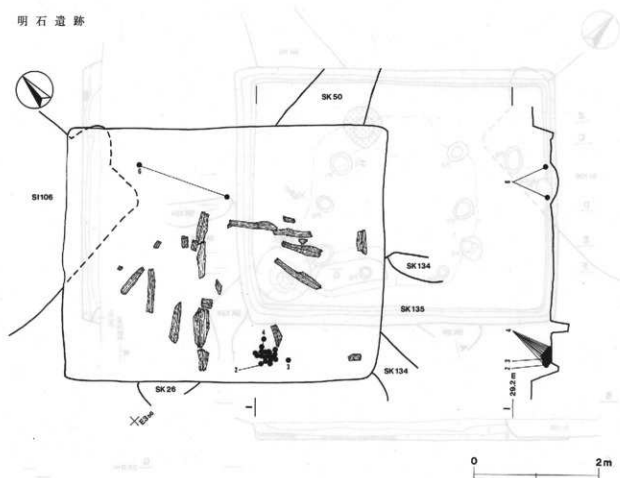
第89図 第107号住居跡実測図(1)

- 5 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子少量
- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、炭化粒子少量

炉 P1とP4を結ぶラインよりも北東壁寄りのほぼ中央に付設されており、長径66cm、短径58cmの楕円形で、床面を12cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子中量、焼土小ブロック少量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土粒子少量



第90図 第107号住居跡実測図(2)

覆土 3層からなる。3層はローム、焼土及び炭化物の含有状況から人為堆積と思われる、2層及び1層は自然堆積と思われる。

土層解説

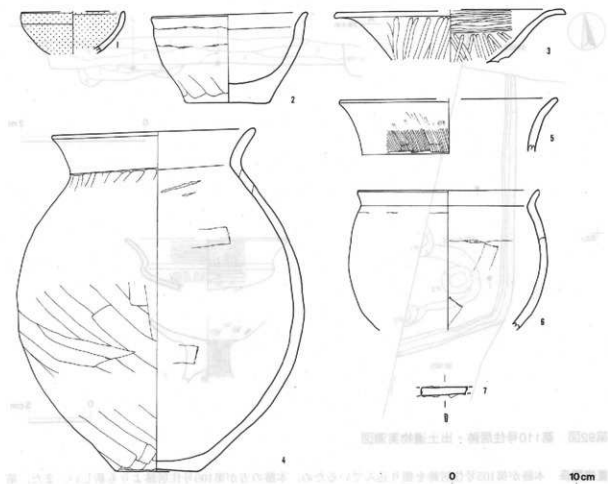
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化材・炭化物・炭化粒子中量、ローム中・小ブロック・ローム粒子少量

遺物 土師器及びその小破片356点、刀子1点が出土している。覆土下層では、第91図2の椀が南西壁際から斜位の状態で、3の高杯が南西壁際から逆位の状態でそれぞれ出土している。床面では、4の甕が南西壁際から壊れた状態で出土している。また、6の小形甕が床面の西側の床面及び北東壁際の床面から散乱した状態で出土している。その他にも南区の覆土中から7の刀子、中央部付近の覆土中から1の小形杯及び5の甕がそれぞれ出土している。

所見 本跡は、炭化材の検出状況や覆土の堆積状況から、焼失家屋と思われる。本跡の時期は、出土遺物から5世紀第2四半期と考えられる。

第107号住居跡遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第91図 1	小形杯 土師器	A (R4)	底部欠損。体部は内唇しながら立ち上がり、口縁部との境に鋭い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。内・外面赤彩。	石英・長石 明赤褐色 普通	P246 10% 覆土中
		B (3.0)				
2	椀 土師器	A 12.4	平底。体部は内唇しながら立ち上がり、口縁部は外傾し、内面下縁に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面ヘラナデ。体部下縁及び底部外面ヘラナデ。外面に輪積み痕が残る。	石英・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P245 90% PL75 南西壁際覆土下層
		B 7.3				
		C 6.6				



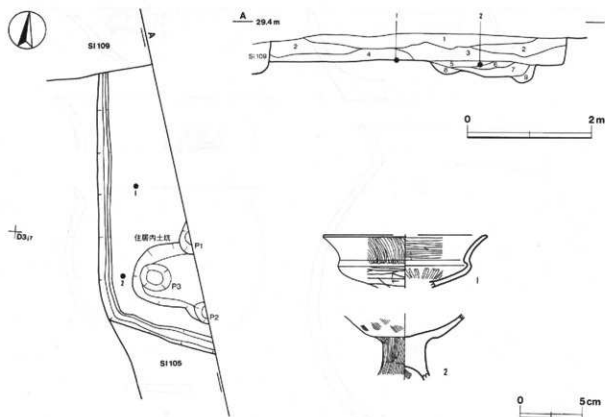
第91図 第107号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 3	高坏 土 部 器	A 18.4 B (4.3)	坏部上半から口縁部にかけての破片。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反して開く。	口縁部外面横ナデ、内面縦位のヘラ磨き。坏部外面縦位のヘラ磨き、内面ナデ後、斜位のヘラ磨き。	長石・雲母 にふい赤褐色 普通	P247 20% 南西壁際段土下層
4	壺 土 部 器	A 16.2 B 27.7 C 6.6	平底。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P248 96% PL75 南西壁際段土面
5	壺 土 部 器	A 17.4 B (4.4)	口縁部片。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面縦位のハケ目調整後、横ナデ、内面横ナデ。	石英・長石・赤色粒子 にふい褐色 普通	P250 5% 覆土
6	小形壺 土 部 器	A 14.6 B (11.2)	底部欠損。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は広く外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P249 40% PL76 伊西壁床面、 北西壁際段土面

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第91図7	刀 子	(3.8)	1.0	0.3	(2.4)	南区覆土中	冢部片 M7 PL113

第110号住居跡 (第92図)

位置 調査Ⅱ区の南部、D 317区。



第92図 第110号住居跡・出土遺物実測図

重複関係 本跡が第105号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第105号住居跡よりも新しい。また、第109号住居に掘り込まれているため、本跡の方が第109号住居跡よりも古い。

規模と平面形 東部は調査区域外に延びているため、確認できたのは長軸(4.4)m、短軸(1.7)mで、平面形は不明である。

主軸方向 [N-4°-W]

壁 壁高は32~44cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を巡っている。上幅10~20cm、下幅6~10cm、深さ4~6cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット 3か所(P1~P3)。P1は径54cmの円形、深さ22cmで、規模や位置から支柱穴と考えられる。P2及びP3は径38~46cmの円形、深さ32~62cmで、性格は不明である。

P1土層解説

8 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

P2土層解説

9 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

住居内土坑 南西コーナー部に掘り込まれており、長径(122)cm、短径54cmの楕円形、深さ28cmで、断面形はU字形をしている。性格は不明である。

住居内土坑土層解説

5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

6 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土粒子少量

覆土 4層からなる。4層及び3層はローム、焼土及び炭化物の含有状況から人為堆積と思われる、2層及び1層は自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器及びその小破片192点が出土している。第92図1の碗が西壁際の床面から横位の状態で、2の高坏が南西コーナー部の床面から逆位の状態でそれぞれ出土している。

所見 本跡は、東部が調査区域外に延びているため、確認できたところが少なかったが、床面から良好な状態で遺物が出土している。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

第110号住居跡遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・装束	備 考
第92図 1	碗 土 師 器	A (13.0) B (4.2)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との間に弱い稜をもつ。口縁部は内反し、内面下縁に稜をもつ。	口縁部外面縦位のヘラ磨き、内面横位のヘラ磨き。体部外面横位のヘラ磨り、内面放射状のヘラ磨き。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P200 30% FL76 西壁際床面
2	高 土 師 器	高 坏 B (5.0) E (2.6)	脚部上半から坏部下半にかけての破片。坏部下縁に弱い稜をもつ。体部は内彎しながら立ち上がる。脚部は中空で、脚部にかけてラッパ状に開く。	坏部外面縦位のハケ目調整後、ナデ、内面ヘラナデ。脚部外面縦位のハケ目調整、内面横位のハケ目調整。	石英・長石 にぶい黄褐色 普通	P201 20% 南西コーナー部床面

第111号住居跡 (第93～96図)

位置 調査Ⅱ区の南部、D3h6区。

重複関係 本跡が第110・112号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方がこれらの住居跡よりも新しい。また、第109・114号住居、第68・117・118・122・124号土坑、第14号溝に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺構よりも古い。

規模と平面形 北東コーナー部は調査区域外となっているが、長軸6.60m、短軸6.58mの方形と思われる。

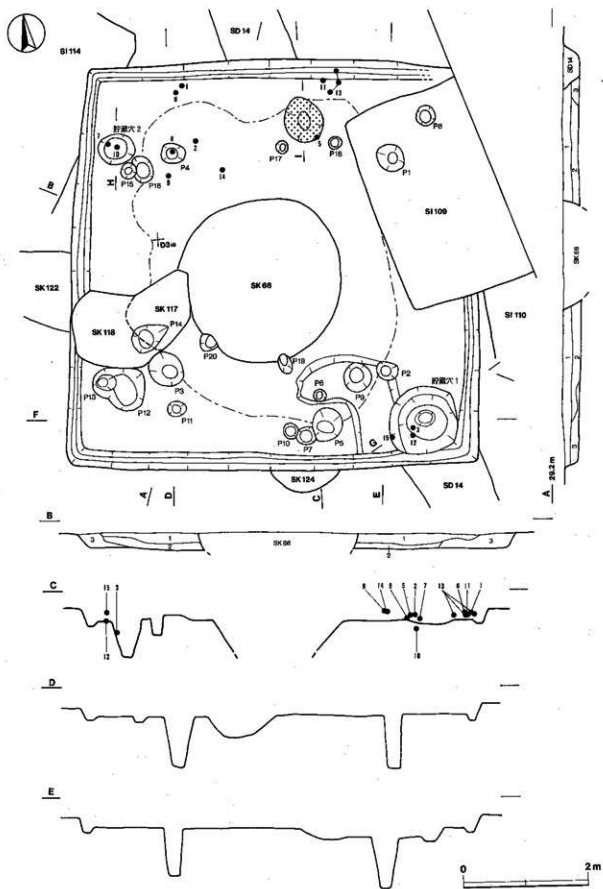
主軸方向 N-6°-E

壁 壁高は14～20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

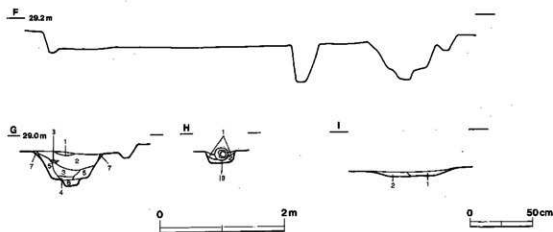
壁溝 壁下を巡っている。上幅16～22cm、下幅6～10cm、深さ6～10cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平埤であるが、P5周辺の床は他の部分よりも4～6cmほど高くなっている。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側及び炉にかけて、特に踏み固められている。東壁寄りの床面を中心に、垂木と思われる炭化材が壁際から中央部に向かうような状態で遺存していた。

ピット 20か所(P1～P20)。P1～P4は径30～50cmの円形、深さ80～98cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P5は南壁際中央部東寄りの逆L字状の隆起帯の内側に掘り込まれており、径50cmの円形、深さ60cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は径20cmの円形、深さ30cmで、逆L字状の隆起帯の上面のP5と同じ主軸線上に掘り込まれており、位置や配列からP5に準ずる出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5に隣接してP7があり、径30cmの円形、深さ10cmで、補助柱穴と思われる。P8～P16は径22～68cmの円形、深さ10～48cmで、性格は不明である。P17及びP18は径22cmの円形、深さ22～24cmで、炉を挟むように掘り込まれており、位置から炉に関連するピットと考えられる。P19及びP20は径28～30cmの円形、深さ10～22cmで、本跡に伴うピットと判断したが、第68号土坑に伴うピットの可能性も否定できない。いずれにせよ、P19及びP20の性格は不明である。



第93図 第111号住居跡実測図(1)



第94図 第111号住居跡実測図(2)

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南東コーナー部に付設されている。二段掘り込みになっており、上段は径118cmの円形、深さ46cmで、下段は径32cmの円形、深さ10cmで、床面から下段底面までの深さは56cmである。貯蔵穴2は北西コーナー部に付設されており、長径58cm、短径50cmの楕円形、深さ22cmで、断面形は逆台形をしている。

貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量
- 6 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

貯蔵穴2土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量

炉 P1とP4を結ぶラインよりも北壁寄りのほぼ中央に付設されており、長径82cm、短径64cmの楕円形で、床面を6cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

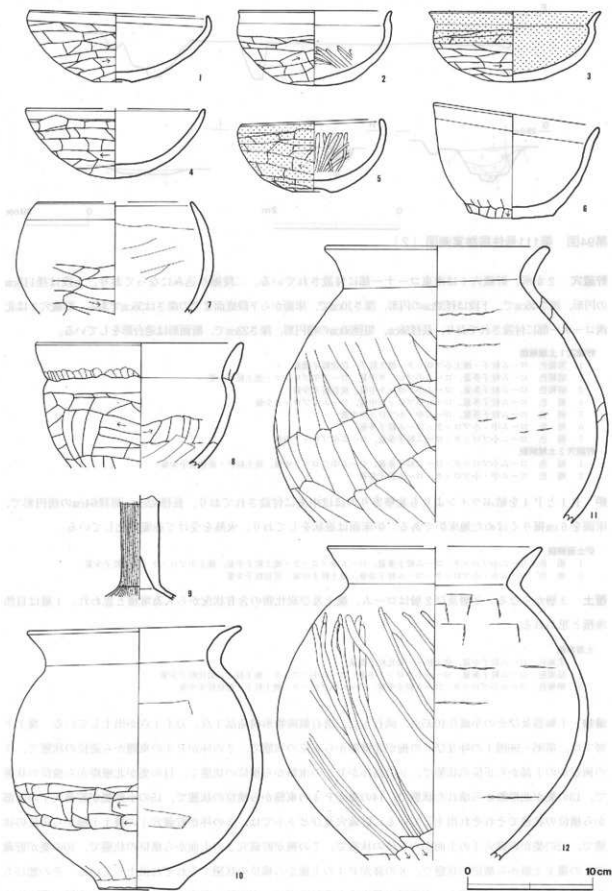
- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量

覆土 3層からなる。3層及び2層はローム、焼土及び炭化物の含有状況から人為堆積と思われる、1層は自然堆積と思われる。

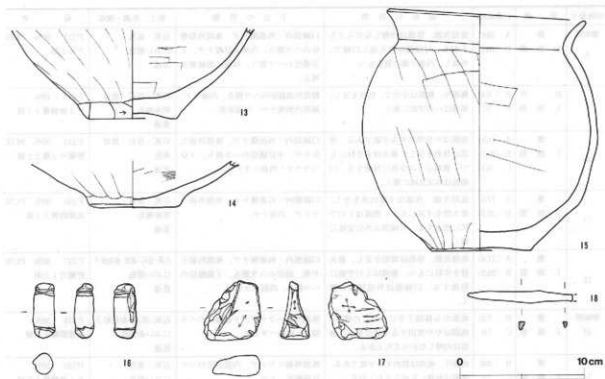
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器及びその小破片1095点、砥石1点、滑石製陶物形模造品1点、刀子1点が出土している。覆土下層では、第95・96図1の坏及び6の碗が北壁際から正位の状態で、2の坏がP4の東側から逆位の状態で、5の碗が炉の上部から正位の状態で、9の高坏がP4の南側から横位の状態で、11の甕が北壁際から横位の状態で、13の甕が北壁際から壊れた状態で、14の甕がP4の東側から横位の状態で、15の小形甕が貯蔵穴1の上部から横位の状態でそれぞれ出土している。貯蔵穴及びピットでは、3の坏が貯蔵穴1の覆土上層から正位の状態で、12の甕が貯蔵穴1の上面から正位の状態で、7の碗が貯蔵穴2の上面から横位の状態で、10の甕が貯蔵穴2の覆土上層から横位の状態で、8の鉢がP4の上面から横位の状態でそれぞれ出土している。その他にも北東区の覆土中から17の砥石、南東区の覆土中から18の刀子、南西区の覆土中から4の坏、北西区の覆土中から16の滑石製陶物形模造品がそれぞれ出土している。



第95図 第111号住居跡出土遺物実測図(1)



第96図 第111号住居跡出土遺物実測図(2)

第111号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地成	備考
96図 1	土 師 器	A 14.6 B 5.7 C 3.0	底部は中央がやや円凸平底である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に横をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石 棕色 普通	P205 100% PL76 北笠原複土下層
	土 師 器	A 12.2 B 6.0 C 5.8	底部はやや丸みを帯びる平底である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に斜い横をもつ。口縁部は外傾し、内面下側に横をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面ナデ後、測位のヘラ磨き。	石英・長石・赤色粒子 棕色 普通	P207 100% PL76 P4東側複土下層
	土 師 器	A 13.8 B 5.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は外傾し、内面下側に横をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。口縁部から体部上半にかけての外面及び内面赤彩。	石英・長石 赤色 普通	P208 90% PL76 野崎穴1復土上層
4	土 師 器	A [14.4] B 5.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・雲母 明赤褐色 普通	P209 90% PL76 南西区複土中
	土 師 器	A 11.4 B 6.0 C 3.0	底部は中央がやや円凸平底である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に横をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き、外面赤彩。	石英・長石 にぶい棕色 普通	P206 95% PL76 卯上層複土下層
6	土 師 器	A 13.4 B 9.3 C 7.0	底部はやや丸みを帯びる平底である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾し、内面下側に横をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。体部下層及び底部外面横位のヘラ削り。	石英・長石 明赤褐色 普通	P211 95% PL76 北笠原複土下層
	土 師 器	A [12.4] B (9.0)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ、下位横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通 (二次地成)	P210 30% 野崎穴2上層
	土 師 器					

明石遺跡

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 8	鉢 土師器	A 16.6	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は折り返し口縁で、外傾し、内面下側に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面上位横ナデ、下位横位のヘラ削り。外面に唇直度が残る。	石英・炭石 に灰い棕色 普通	P212 60% PL76 P4 上層
		B (10.1)				
9	高坏 土師器	B (8.4)	胴部はハの字状に開く。	脚部外面横位のヘラ磨き、内面ナデ。胴部内面横ナデ。外面赤粉。	石英・炭石・雲母 明赤褐色 普通	P213 10% P4 南側覆土下層
		E (7.7)				
10	瀬十加器	A 16.8	底部はやや突出する平底である。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ、中位横位のヘラ削り、下位ヘラナデ、内面ヘラナデ。	石英・炭石・雲母 赤色 普通	P214 95% PL76 貯蔵穴2覆土上層
		B 21.3				
		C 6.4				
11	瀬十加器	A 17.6	底部欠損。体部は下脚状を呈し、最大径を下位にもつ。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	石英・炭石 明赤褐色 普通	P216 40% PL76 北側覆土下層
		B (22.2)				
12	堿土師器	A (17.4)	底部欠損。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ兼、斜位のヘラ磨き、下層横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・炭石・雲母・赤色粒子 に灰い棕色 普通	P217 40% PL76 貯蔵穴1上層
		B (25.2)				
第96図 13	土師器	B (7.2)	底部から体部下半にかけての破片。底部はやや突出する平底である。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ、下層横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・炭石・赤色粒子 に灰い褐色 普通	P218 20% 北側覆土下層
		C 7.0				
14	甕 土師器	B (3.8)	底部片。底部は突出する平底である。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ、内面斜位のハケ目調整後、ナデ。	石英・炭石 に灰い褐色 普通	P219 10% P4 東側覆土下層
		C 7.4				
15	小形 土師器	A 15.8	底部はやや突出する平底である。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石英・炭石・赤色粒子 褐色 普通	P215 80% PL77 貯蔵穴1上部覆土下層
		B 18.5				
		C 7.8				

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第96図16	埴物形模造品	4.4	1.7	1.6	18.4	滑石	北西区覆土中	Q7 PL112
17	砥石	(4.9)	4.7	2.4	(43.3)	凝灰岩	北西区覆土中	Q6 PL111

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第96図18	刀子	(8.5)	0.9	0.5	(60)	南東区覆土中	基部一帯欠損 M4 PL113

所見 本跡は、一辺が6m以上の比較的大形の住居跡で、炭化材の検出状況や覆土の堆積状況から、焼失家屋と思われる。遺物としては、滑石製埴物形模造品が出土しており、注目される。本跡の時期は、出土遺物から5世紀第3四半期と考えられる。

第112号住居跡 (第97・98図)

位置 調査Ⅱ区の南部、D3j5区。

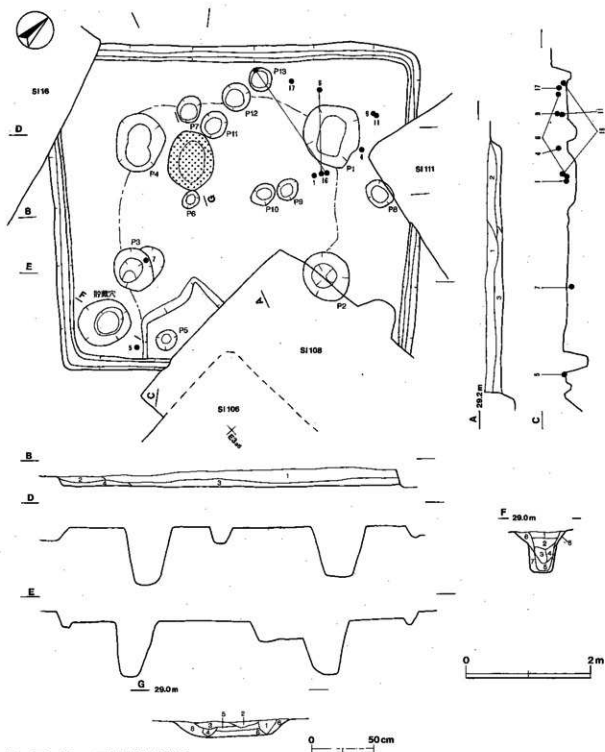
重複関係 本跡は第16・106・108・111号住居に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸5.92m、短軸5.22mの長方形である。

主軸方向 N-48°-W

壁 壁高は12~24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を巡っている。上幅16~20cm、下幅6~12cm、深さ6~8cmで、断面形はU字形をしている。



第97図 第112号住居跡実測図

床 全体的に平坦であるが、P 5 周辺の床は他の部分よりも 4～6 cm ほど高くなっている。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側にかけて、特に踏み固められている。

ピット 13か所(P 1～P 13)。P 1及びP 4は長径94～96cm、短径80～90cmの楕円形、深さ82～96cmで、それぞれ底面が二つに分かれており、柱を立て替えたものと思われる。P 2及びP 3は径70～74cmの円形、深さ88～92cmである。P 1～P 4は規模や配列から主柱穴と考えられる。このうち、P 3には隣接して柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。P 5は南東壁際中央部南寄りの逆U字状の隆起帯の内側に掘り込まれており、径32

cmの円形、深さ38cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6及びP 7は径30～44cmの円形、深さ14～20cmで、炉を挟むように掘り込まれており、位置から炉に関連するピットと考えられる。P 8～P 13は径38～46cmの円形、深さ16～28cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー部に付設されている。二段掘り込みになっており、上段は径86cmの円形、深さ20cmで、下段は径46cmの円形、深さ50cmで、床面から下段底面までの深さは70cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、炭化粒子少量

炉 P 1 と P 4 を結ぶラインよりも中央部寄りに付設されており、長径92cm、短径74cmの楕円形で、床面を14cm掘りこぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子多量、炭化物中量、ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 3 暗褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・焼土小ブロック中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量
- 5 暗褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土小ブロック少量

覆土 4層からなる。4層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

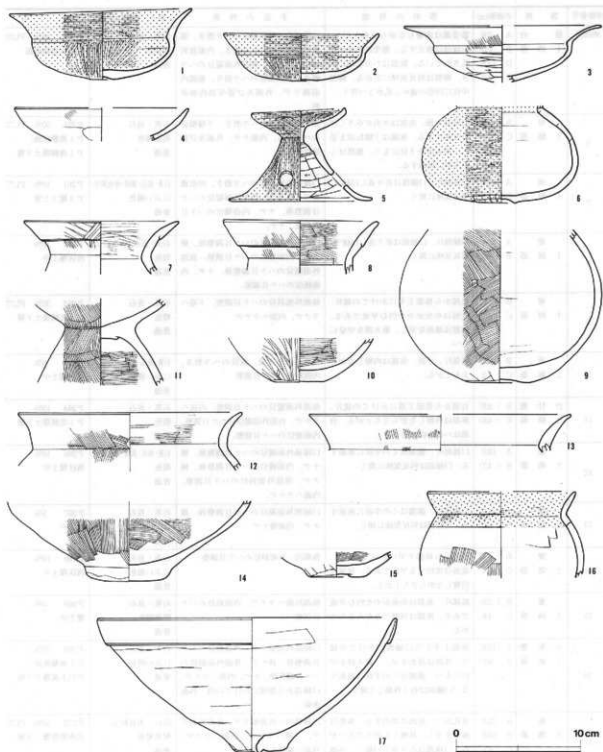
- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土粒子少量

遺物 土師器及びその小破片657点が出土している。覆土下層では、第98図4の碗がP 1の東側から横位の状態で、9の壺及び11の台付甕がP 1の北側から正位の状態で、17の甗が北西陸際から横位の状態でそれぞれ出土している。床面では、1の碗がP 1の南側から正位の状態で、5の器台が貯蔵穴の東側から横位の状態でそれぞれ出土している。ピットでは、2の碗がP 1の覆土中から、7の壺がP 3の覆土上層から横位の状態でそれぞれ出土している。また、6の埴がP 1の南側の床面及びP 1の西側の覆土下層から散乱した状態で、16の小形甕がP 1の南側の床面及びP 13の上部の覆土下層から散乱した状態でそれぞれ出土している。その他にも東区の覆土中から10の壺、南区の覆土中から3の碗、西区の覆土中から8の壺及び12・14の甕、中央部付近の覆土中から13・15の甕がそれぞれ出土している。

所見 本跡は、主柱穴内から土器が出土していることや、柱の抜き取り痕があることから、住居廃棄時の様子うかがい知ることができる。本跡の時期は、出土遺物から4世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

第112号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	土師器 碗	A 14.8	底部は中央が小さく凹む丸底である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い段をもつ。口縁部は外反し、内面下縁に横をもつ。	口縁部内・外面横位のへら磨き。体部外面横位のへら磨き。内面放射状のへら磨き。内・外面赤彩。	石黄・蜜緑 明赤褐色 普通	P252 80% PL76 P1南側床面
		B 5.8				
		C 2.0				
2	土師器 碗	A 12.6	底部は中央が小さく凹む丸底である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い段をもつ。口縁部は外反し、内面下縁に横をもつ。	口縁部内・外面横位のへら磨き。体部外面横位のへら磨き。内面横位のへら磨き。内・外面赤彩。	黄赤・赤色粒子 明赤褐色 普通	P253 80% PL76 P1覆土中
		B 3.8				
		C 2.0				



第98図 第112号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 3	碗 土器	A (15.8) B (4.6)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外反し、内面下縁に稜をもつ。	口縁部外面腹位のハケ目調整後、横ナデ、内面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	長石・赤色粒子にふい橙色 普通	P254 30% 南区覆土中
4	高土器 杯	A (14.0) B (2.7)	杯部上半から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部外面腹位のハケ目調整後、横ナデ、内面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石・雲母にふい橙色 普通	P255 10% P1 東横置土下層

明石遺跡

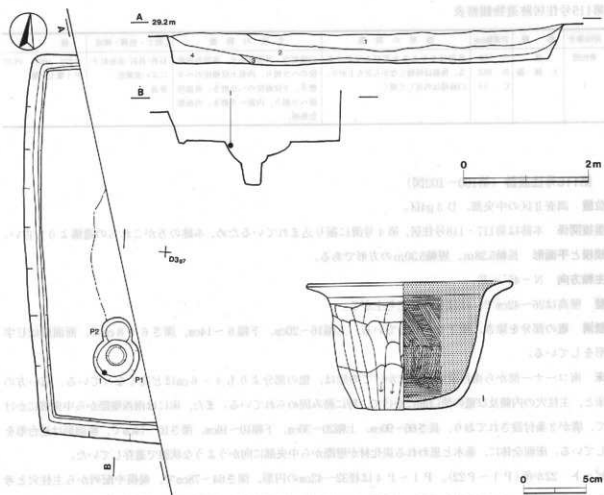
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図	土 師 器	A 7.6	器受推は内尊しながら立ち上がり、口縁部は直立する。器受部中央は穿孔されている。胴部はハの字状に開き、着部は外反気味に広がる。胴部中に円形の透かし孔が3つ空く。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き。器受部外面横位のヘラ磨き。内面放射状のヘラ磨き。胴部外面横位のヘラ磨き。内面横位のヘラ磨り。着部内面横位のヘラ磨り。外蓋及び器受部内面赤彩。	石英・長石 赤褐色 普通	P256 95% PL77 約歳丈米糠床面
		B 7.5				
		D 11.6				
		E 5.3				
		B (7.9)				
6	土 師 器	C 2.4	口縁部欠損。底部は中央が小さく凹む丸底である。体部は下膨れ状を呈し、最大径を下位にもつ。胴部はくの字状に開曲する。	器受部外面横位のヘラ磨き。下膨れ横位のヘラ磨り。内面ナデ。外蓋及び胴部内面赤彩。	石英・長石 明赤褐色 普通	P257 50% PL77 P-1 南側床面、 P-1 西側覆土下層
		A 12.4	口縁部片。口縁部は折り返し口縁で、外反気味に開く。	口縁部外面横位のヘラ磨き。内面横位のヘラ磨き。胴部外面横位のハケ目調整後、ナデ。内面横位のハケ目調整後、ナデ。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P261 10% PL77 P-3 覆土上層
B (4.3)						
8	土 師 器	A 12.4	口縁部片。口縁部は折り返し口縁で、外反気味に開く。	口縁部外面横位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整。胴部外面横位のハケ目調整後、ナデ。内面横位のハケ目調整。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P262 10% 西区覆土中
		B (4.2)				
9	土 師 器	B (12.3)	底部から体部上半にかけての破片。底部は中央がやや凹む平底である。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。	体部外面横位のハケ目調整。下膨れナデ。内面ヘラナデ。	石英・長石 褐色 普通	P263 30% PL77 P-1 北側覆土下層
		C 5.0				
10	土 師 器	B (3.5)	底部片。平底。体部は内尊しながら立ち上がる。	体部外面横位のハケ目調整。内面横位のハケ目調整。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P258 5% 西区覆土中
		C 4.2				
11	土 師 器	B (6.9)	台部から体部下層にかけての破片。体部は外傾しながら立ち上がる。台部はハの字状に開く。	体部外面横位のハケ目調整。内面ヘラナデ。台部外面横位のハケ目調整。内面横位のハケ目調整。	石英・長石 褐色 普通	P254 10% P-1 北側覆土下層
		E (4.6)				
12	土 師 器	A 18.0	口縁部片。胴部はくの字状に開曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面横位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面横位のハケ目調整。内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P266 10% 西区覆土中
		B (4.7)				
13	土 師 器	A (21.0)	口縁部片。胴部はくの字状に開曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面横位のハケ目調整後、横ナデ。内面横ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P267 5% 覆土中
		B (3.0)				
14	土 師 器	B (6.4)	底部から体部下手にかけての破片。底部は突出する平底である。体部は内尊しながら立ち上がる。	体部内・外面横位のハケ目調整。	石英・長石 褐色 普通	P268 10% 西区覆土中
		C 6.4				
15	土 師 器	B (2.0)	底部片。底部は中央がやや凹む平底である。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ。内面横位のハケ目調整。	石英・長石 明赤褐色 普通	P269 5% 覆土中
		C 4.6				
16	小 形 土 師 器	A (15.8)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。胴部はくの字状に開曲する。口縁部は短く外傾して開く。	口縁部外面横ナデ。内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面横位のハケ目調整後、ナデ。内面ヘラナデ。口縁部から胴部にかけての内・外面赤彩。	石英・長石 明赤褐色 普通	P265 20% P-1 南側床面、 P-13 北側覆土下層
		B (6.9)				
17	土 師 器	A 22.2	穿孔式で、底部は突出する。体部は球形を呈し、外傾しながら立ち上がる。口縁部は折り返し口縁で、外傾して開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。下膨れナデ。内面ヘラナデ。外面に絵柄み痕が残る。	長石・赤色粒子 明赤褐色 普通	P272 40% PL77 北西側階層下層
		B 10.8				
		C 4.2				

第115号住居跡 (第99図)

位置 調査Ⅱ区の中央部、D 3 f6区。

規模と平面形 東部は調査区域外に延びているため、確認できたのは長軸6.12m、短軸(1.9)mであるが、平面形は方形と思われる。

主軸方向 [N-7°-W]



第99図 第115号住居跡・出土遺物実測図

壁 壁高は44～50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝 壁下を巡っている。上幅14～16cm、下幅6～8cm、深さ4～6cmで、断面形はU字形をしている。床 全体的に平坦である。主柱穴の内側が、特に踏み固められている。ピット 2か所(P1・P2)。P1は二段掘り込みになっており、上段は径68cmの円形、深さ36cmで、下段は径34cmの円形、深さ34cmで、床面から下段底面までの深さは70cmである。P1は規模や位置から主柱穴と考えられる。P1に隣接してP2があり、径50cmの円形、深さ20cmで、柱を抜き取った痕跡と思われる。穴 覆土 4層からなる。4層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・粘土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

遺物 土器及びその小破片101点が出土している。第99図1の鉢がP1の覆土上層から横位の状態出土している。

所見 本跡は、東部が調査区域外に延びているため、確認できたところが少なかったが、一辺が6m以上の比較的大形の住居跡と思われる。また、主柱穴内から土器が出土していることや、柱の抜き取り痕があることから、住居廃棄時の様子をうかがい知ることができる。本跡の時期は、出土遺物から7世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

第115号住居跡遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第99図	鉢	A 16.8	底部はやや丸みを帯びる平底である。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反して開く。	口縁部内・外側横ナデ。体部外面縦位のへう削り、内面上位横位のへう削き、下位縦位のへう削き。底部外面へう削り、内面へう削き。内面黒色処理。	石英・長石・赤色粒子にふい黄褐色。普通	P273 100% FL77 P1 覆土上層
1	上 脚 部	B 10.2				
		C 5.4				

第116号住居跡 (第100~102図)

位置 調査Ⅱ区の中央部, D 3 g4区。

重複関係 本跡は第117・118号住居, 第4号溝に掘り込まれているため, 本跡の方がこれらの遺構よりも古い。

規模と平面形 長軸5.38m, 短軸5.30mの方形である。

主軸方向 N-45°-E

壁 壁高は26~42cmで, はほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き, 壁下を全周している。上幅16~20cm, 下幅8~14cm, 深さ6~8cmで, 断面形はU字形をしている。

床 南コーナー部から南西壁中央部にかけての床は, 他の部分よりも4~6cmほど高くなっている。高い方の床と, 主柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて, 特に踏み固められている。また, 床には南西壁際から中央部にかけて, 溝が2条付設されており, 長さ66~90cm, 上幅20~30cm, 下幅10~16cm, 深さ10~14cmで, 断面形は逆台形をしている。床面全体に, 垂木と思われる炭化材が壁際から中央部に向かうような状態で遺存していた。

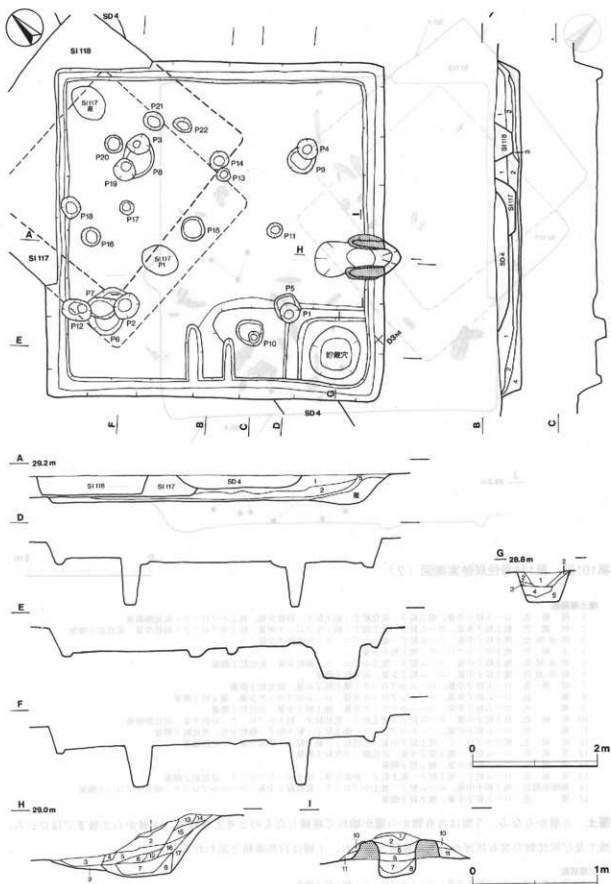
ピット 22か所(P1~P22)。P1~P4は径32~42cmの円形, 深さ64~78cmで, 規模や配列から主柱穴と考えられる。P1~P4に隣接してP5及びP6, P8及びP9があり, 径42~80cmの円形, 深さ8~12cmで, いずれも柱を抜き取った痕跡と思われる。また, もう一つP2に隣接してP7があり, 径44cmの円形で, 深さ22cmで, 補助柱穴もしくは柱を立て替えたものと思われる。P10は二段掘り込みになっており, 上段は径40cmの円形, 深さ14cmで, 下段は径18cmの円形, 深さ16cmで, 床面から下段底面までの深さは30cmである。P10は位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P11~P14は径22~46cmの円形, 深さ12~50cmで, 性格は不明である。P15~P22は径24~40cmの円形, 深さ12~34cmで, 本跡に伴うピットと判断したが, 第117・118号住居跡に伴うピットの可能性も否定できない。いずれにせよ, P15~P22の性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー部の逆L字状の隆起帯の内側に付設されており, 径84cmの円形, 深さ52cmで, 断面形は逆台形をしている。

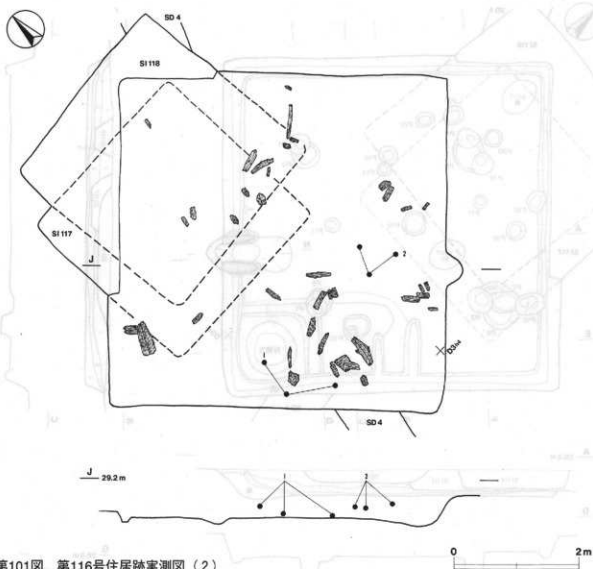
貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量

竈 南東壁中央部南寄りに付設されており, 焚口部から煙道口部までの長さ140cm, 両幅72cmで, 壁外への掘り込みは26cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を12cm掘りくぼめており, 皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で, 緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変酸化している。



第100图 第116号住居跡实测图(1)



第101図 第116号住居跡実測図(2)

覆土層解説

- | | | |
|----|-------|---|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土小ブロック・炭化物微量 |
| 2 | 灰褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック中量、粘土中ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 | 赤褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子多量 |
| 5 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 6 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 8 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 9 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック微量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 10 | 暗褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・砂粒少量、炭化物微量 |
| 11 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 12 | 暗褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化物微量 |
| 13 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物・炭化粒子微量 |
| 14 | 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 15 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土中・小ブロック・炭化粒子微量 |
| 16 | 暗暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土中ブロック微量 |
| 17 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |

覆土 5層からなる。5層は含有物から窺が壊れて堆積したものと考えられる。4層から2層まではローム、焼土及び炭化物の含有状況から人為堆積と思われ、1層は自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|---|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化材・炭化物微量 |
| 3 | 暗褐色 | 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、ローム中ブロック・炭化材・炭化物微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、炭化材・炭化物微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、焼土小ブロック・粘土小ブロック微量 |

遺物 土師器及びその小破片222点が出土している。覆土下層では、第102図2の鉢が竈の北側から壊れた状態で出土している。床面では、1の碗が南西壁際から壊れた状態で出土している。

所見 本跡は、炭化材の検出状況や覆土の堆積状況から、焼失家屋と思われる。構造は、南西方向に出入口口部を、南東方向に竈を有する住居跡で、内部施設としていわゆる「ベッド状施設」と呼ばれる一段高い床や、いわゆる「間仕切り溝」と呼ばれる壁溝以外の溝を有しているなど、いくつか特徴的なものが見られる。焼焼施設は、竈が導入された直後の初期竈である。本跡の時期は、出土遺物から5世紀第3四半期と考えられる。



第102図 第116号住居跡出土遺物実測図

第116号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 1	土師器	A 14.2	底部は中央がやや凹み平底である。体部は内壁しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面ナデ後、縦位及び横位のヘラ磨き。口縁部外面及び口縁部から体部上半にかけての内面赤彩。	石灰・雲母 藍色 青褐色	P274 95% PL77 西壁部床面
		B 7.5				
		C 3.0				
2	鉢	A [18.0]	底部欠出。体部は内壁しながら立ち上がる。口縁部は折り返し口縁で、直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石灰・長石 にふい赤褐色 青褐色	P275 10% 東北側覆土下層
		B (7.5)				

第119号住居跡 (第103・104図)

位置 調査Ⅱ区の中央部、D3d4区。

重複関係 本跡は第4号溝に掘り込まれているため、本跡の方が第4号溝よりも古い。

規模と平面形 長軸4.04m、短軸4.00mの方形である。

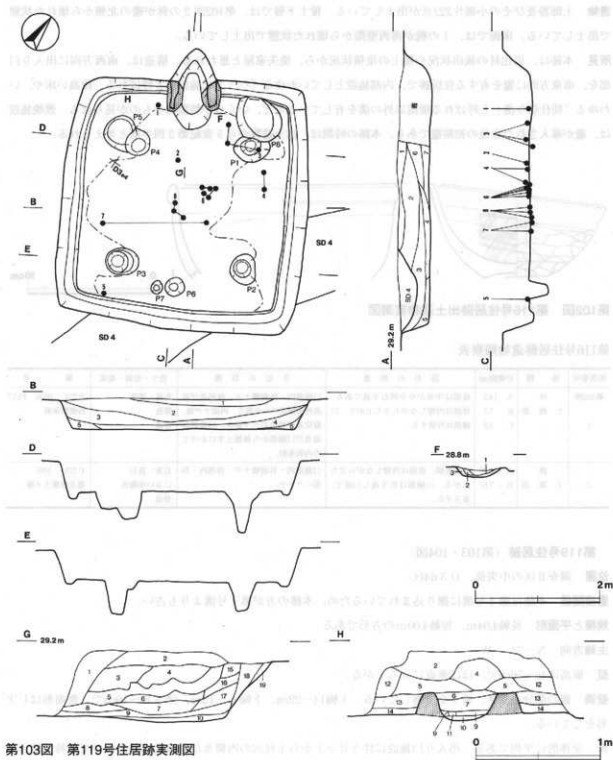
主軸方向 N-31°-W

壁 壁高は46~56cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き、壁下を全周している。上幅14~22cm、下幅8~12cm、深さ6~10cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。出入口口施設に伴うピットから主柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 8か所(P1~P8)。P1~P4は径36~58cmの円形、深さ44~68cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。このうち、P3内には柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。また、P4に隣接してP5があり、径56cmの円形、深さ30cmで、これも柱を抜き取った痕跡と思われる。P6は径32cmの円形、深さ32cmで、位置から出入口口施設に伴うピットと考えられる。P7は南東壁際に掘り込まれており、径22cmの円形、深さ10cmで、位置からP6に準ずる出入口口施設に伴うピットと考えられる。P8は径74cmの円形、深さ26cmで、北東コーナー部に掘り込まれているが、性格は不明である。

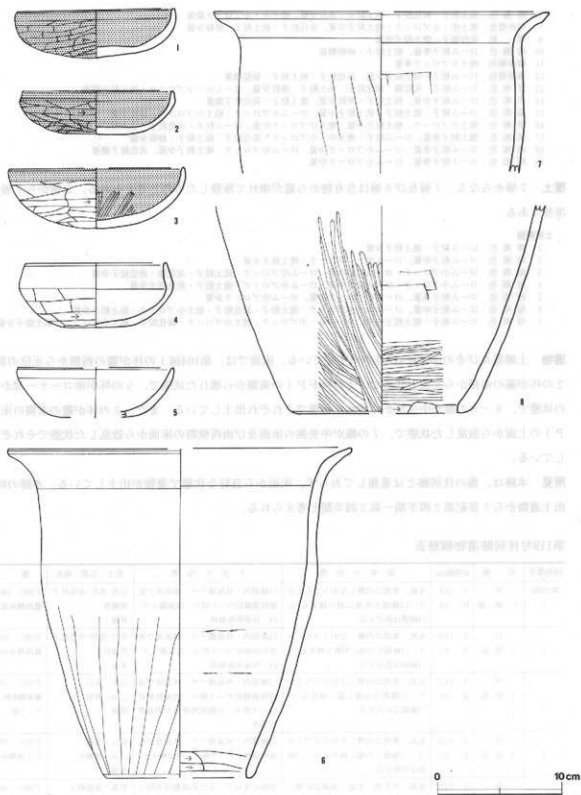


第103図 第119号住居跡実測図

P 8 土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量

竈 北西壁中央部に付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ132cm, 両袖幅86cmで、壁外への掘り込みは52cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を6cm掘りくぼめており、皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。



第104図 第119号住居跡出土遺物実測図

甗土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 粘土粒子中量、砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土小ブロック微量

- 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量, 焼土中・小ブロック微量
 8 暗赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子中量, 炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
 9 黒色 炭化粒子・焼土粒子中量
 10 暗褐色 ローム粒多量, 粘土粒子・砂粒微量
 11 暗赤褐色 焼土大ブロック多量
 12 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
 13 黒褐色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量, ローム中・小ブロック・焼土粒子微量
 14 黒褐色 ローム粒中量, 粘土粒子・砂粒少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
 15 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子中量, ローム小ブロック・粘土小ブロック・砂粒少量
 16 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, 焼土中ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
 17 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
 18 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
 19 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量

覆土 7層からなる。7層及び6層は含有物から竈が壊れて堆積したものと考えられる。5層から1層は自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
 2 暗褐色 ローム粒中量, ローム中・小ブロック・焼土粒子少量
 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒中量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒中量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
 5 暗褐色 ローム粒多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
 6 暗褐色 ローム粒中量, ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量
 7 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量

遺物 土師器及びその小破片428点が出土している。床面では、第104図1の坏が竈の西側から正位の状態、2の坏が竈の南側から正位の状態、4の坏がP1の東側から壊れた状態で、5の坏が南コーナー部から横位の状態、6・8の甔が中央部から壊れた状態でそれぞれ出土している。また、3の坏が竈の東側の床面及びP1の上面から散乱した状態で、7の甔が中央部の床面及び南西壁際の床面から散乱した状態でそれぞれ出土している。

所見 本跡は、他の住居跡とは重複しておらず、床面から良好な状態で遺物が出土している。本跡の時期は、出土遺物から7世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

第119号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計量値(cm)	器形の特徵	手法の特徵	新土・色調・焼成	備考
第104図 1	坏 土師器	A 12.8	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘリ削り、内面横ナデ。内・外面黒色焼成。	石英・長石・赤色粒子 黒褐色 普通	P280 100% PL77 竈西側床面
		B 3.8				
2	坏 土師器	A 12.0	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘリ削り、内面横ナデ。内・外面黒色焼成。	石英・雲母・赤色粒子 黒褐色 普通	P281 80% PL77 竈西側床面
		B 3.5				
3	坏 土師器	A [14.2]	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘリ削り、内面放射状のヘリ磨き。口縁部外面及び内面黒色焼成。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P282 70% PL77 竈東側床面、 P1上面
		B 4.8				
4	坏 土師器	A 11.2	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘリ削り、内面横ナデ。普通	石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P283 70% PL77 P1東側床面
		B 5.2				
5	坏 土師器	A [12.6]	底面一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	器面が荒れているため調整は不明であるが、口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘリ削り、内面横ナデと見られる。	石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通(二次焼成)	P284 30% PL77 南コーナー部床面
		B 4.0				
6	甔 土師器	A [27.6]	無底式。体部は外傾しながら立ち上がり、上半はほぼ直立し、底部に直る。口縁部は外反尖味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横ナデ、内面横ナデ、下層横位のヘリ削り。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P286 40% PL77 中央部床面
		B 26.5				
		C (11.8)				

図版番号	器種	貯蔵値(cm)	器形の特徴	手仕の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第104図	瓶 土 師 器	A (27.0) B (13.0)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部はほぼ直立しながら立ち上がり、頸部に至る。口縁部は外反気味に開き、肩部をわずかにつまみ出している。	口縁部内・外蓋痕ナダ。体部内・外面ヘラナダ。	石英・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P285 10% 中央部床面 南西壁跡床面
8	瓶 土 師 器	B (16.7) C (14.4)	底部から体部下半にかけての破片。無底式。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面上位ナダ、下位部位のヘラ磨き、内面上位ヘラナダ、下位部位のヘラ磨き、下端部位のヘラ磨り。	石英・長石等・赤色粒 にぶい黄色 普通	P287 20% 中央部床面

第122号住居跡（第105～107図）

位置 調査Ⅱ区の中央部、D 2 g0区。

重複関係 本跡は第20～23・120・121・152・153号住居、第78～80号土坑に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺構よりも古い。

規模と平面形 長軸6.50m、短軸6.42mの方形である。

主軸方向 N-15°-E

壁 壁高は18～24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁下を巡っている。上幅16～26cm、下幅8～14cm、深さ4～12cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。また、床には北壁際から中央部にかけて、西壁に平行する溝が1条付設されている。長さ(160)cm、上幅26～30cm、下幅10～14cm、深さ4～8cmで、断面形は逆台形をしている。

ピット 26か所(P1～P26)。P1～P4は径26～36cmの円形、深さ40～56cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。このうち、P1内には柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。P5～P26は径24～54cmの円形、深さ10～42cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1と貯蔵穴2は重複関係にあり、貯蔵穴1の方が貯蔵穴2よりも新しい。貯蔵穴1は南東コーナー部に付設されており、径84cmの円形、深さ32cmで、断面形は逆台形をしている。貯蔵穴2は貯蔵穴1の東側に付設されており、一辺84cmの隅丸方形、深さ46cmで、断面形は逆台形をしている。

貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

貯蔵穴2土層解説

- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 6 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

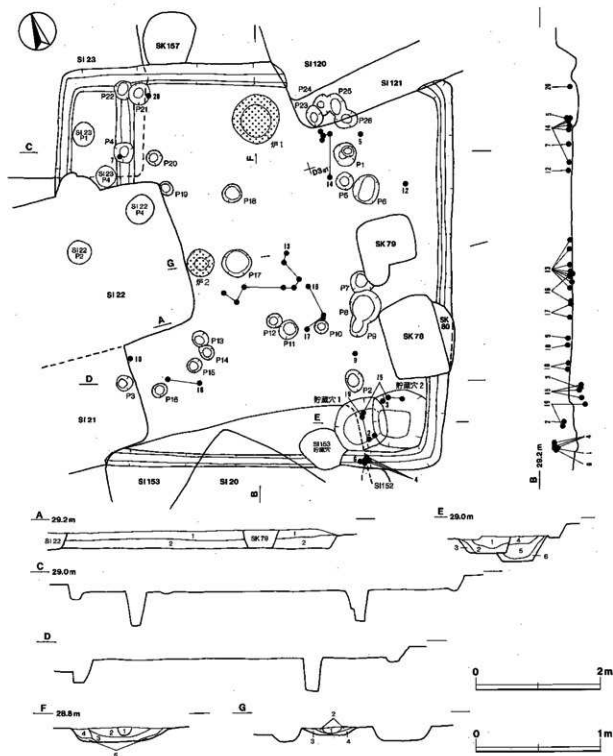
炉 2か所。炉1はP1とP4を結ぶラインよりも北壁寄りのほぼ中央に付設されており、直径80cmの円形で、床面を12cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。炉2は中央部に付設されており、直径46cmの円形で、床面を6cm掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状をしており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉1土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック中量
- 3 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土粒子多量、ローム小ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子微量

炉2土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子微量

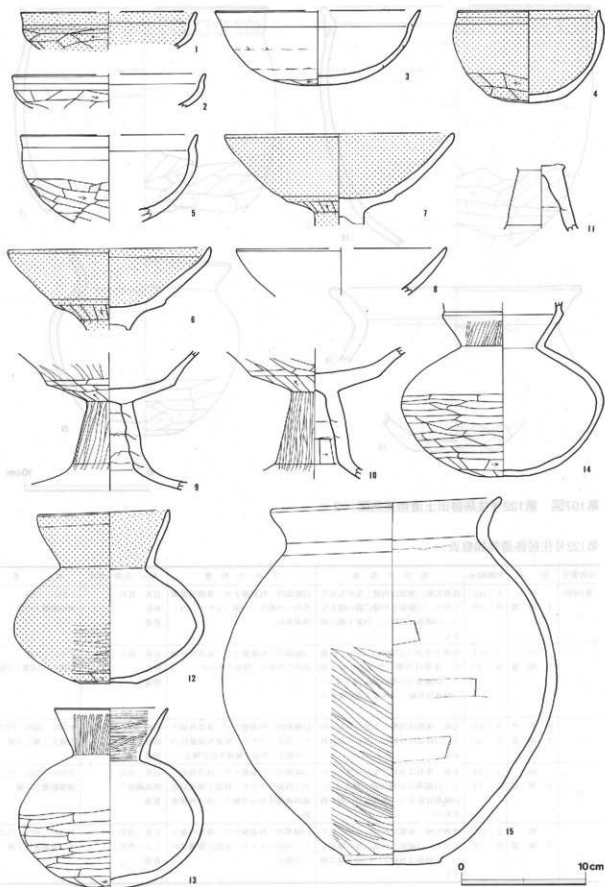


第105図 第122号住居跡実測図

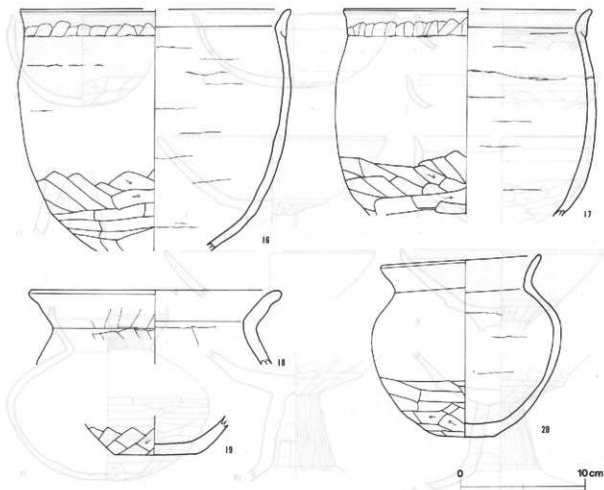
覆土 2層からなる。2層とも自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・流石粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量



第106图 第122号住居跡出土遺物実測図(1)



第107図 第122号住居跡出土遺物実測図(2)

第122号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 1	坏	A [14.2]	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外傾し、内面下端に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘリ削り、内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	石灰・長石 赤色 普通	P317 10% 海層際覆土中層
	土器器	B (3.0)				
2	坏	A [15.4]	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外傾し、内面下端に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘリ削り、内面ヘラナデ。	石灰・長石・雲母 褐色 普通	P318 10% 貯蔵穴1上部覆土下層
	土器器	B (2.7)				
3	大形坏	A [16.6]	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は外傾し、内面下端に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。底部外面横位のヘリ削り。外面に輪積み痕が残る。	石灰・長石・赤色粒子 褐色 普通	P315 50% PL77 貯蔵穴2覆土中層
	土器器	B 6.6				
4	碗	A 11.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立し、内面下端に弱い稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。体部下端及び底部外面横位のヘリ削り。内・外面赤彩。	石灰・長石 明赤褐色 普通	P319 60% PL78 南側際覆土中層
	土器器	B 7.4				
5	碗	A [14.2]	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外傾し、内面下端に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。体部下端横位のヘリ削り。	石灰・長石 白・灰色 普通	P316 40% PL78 P1東側覆土下層
	土器器	B (7.0)				

図版番号	器種	針番制(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 6	高土師器	環 A 16.2 B (6.6) E (1.4)	脚部欠損。坏部下端に稜をもつ。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立的。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面ヘラナデ。坏部下端稜位のヘラ削り。内・外面赤彩。	石英・長石・雲母 暗赤色 普通	P320 60% PL78 南朝群層土中層
	高土師器	環 A 18.4 B (7.4) E (1.2)	脚部欠損。坏部下端に稜をもつ。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面ヘラナデ。坏部下端稜位のヘラ削り。内・外面赤彩。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P321 50% PL78 P 4 上部覆土下層
	高土師器	環 A [16.8] B (3.8)	坏部上半から口縁部にかけての破片。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面ヘラナデ。	石英・長石 褐色 普通	P322 10% 北東区覆土中
9	高土師器	環 B (11.1) E (7.2)	脚部から坏部下平にかけての破片。坏部下端に稜をもつ。体部は外傾しながら立ち上がる。脚部は中空で、エンタシス状を呈し、裾部はハの字状に開く。	体部内・外面ヘラナデ。坏部下端稜位のヘラ削り。脚部外面稜位のヘラ磨き。内面ナデ。裾部内面横ナデ。	石英・長石・雲母 暗赤褐色 普通	P323 70% PL78 P 2 北部覆土下層
	高土師器	環 B (10.5) E (7.0)	脚部から坏部下平にかけての破片。坏部下端に稜をもつ。体部は外傾しながら立ち上がる。脚部は中空で、エンタシス状を呈し、裾部はハの字状に開く。	体部内・外面ヘラナデ。坏部下端稜位のヘラ削り。脚部外面稜位のヘラ磨き。内面横位のヘラ削り。脚部内面横ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P324 60% PL78 P 3 東朝群土下層
11	高土師器	環 B (5.5) E (5.0)	脚部片。脚部は中空で、エンタシス状を呈する。	器面が欠れているため調整は不明であるが、脚部外面稜位のヘラ磨き。内面ナデと思われる。	石英・長石 暗赤褐色 普通 (二次焼成)	P325 10% 南西区覆土中
12	増上師器	A 10.6 B 13.9 C 4.6	平底。体部はやや扁平気味の球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外傾して開き、裾部は直立的。	口縁部外面上位横ナデ。下位ナデ。内面上位横ナデ。下位ヘラナデ。体部外面上位ナデ。下位横位のヘラ磨き。下層横位のヘラ削り。内面ナデ。外面及び口縁部内面赤彩。	石英・長石 赤色 普通	P326 100% PL78 東朝群層土下層
	増上師器	A 9.2 B 14.5	丸底。体部はやや扁平気味の球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外傾して開く。	口縁部外面稜位のヘラ磨き。内面稜位のヘラ磨き。体部外面上位ナデ。下位横位のヘラ削り。内面ナデ。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P327 60% PL79 中央部東側
	増上師器	B (14.0)	丸底。体部はやや扁平気味の球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外傾して開き、上位に稜を有する。	口縁部外面稜位のヘラ磨き。内面ヘラナデ。体部外面上位ナデ。下位横位のヘラ削り。内面ナデ。	石英・長石 褐色 普通	P328 80% PL79 P 1 南朝群土 P 1 南朝群土
15	壺土師器	A 18.2 B 29.6 C 7.8	底部は突出する平底である。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ヘラナデ。下位斜位のヘラ磨き。下層ヘラナデ。内面ヘラナデ。	石英・長石 褐色 普通	P340 100% PL78 貯蔵穴1 覆土中層 貯蔵穴2 覆土中層
	壺土師器	A (21.8) B (19.4)	底部欠損。体部は内傾しながら立ち上がり、最大径を上位にもつ。頸部は緩やかに屈曲する。口縁部は折り返し口縁状を呈し、外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ。下位斜位のヘラ削り。内面ヘラナデ。外面に輪模み裏・指痕が残る。	石英・長石・赤色粒子 明赤褐色 普通	P331 30% P10北朝群土 P10上層
	壺土師器	A [20.0] B (16.6)	底部欠損。体部は内傾しながら立ち上がり、最大径を中位にもつ。頸部は緩やかに屈曲する。口縁部は折り返し口縁状を呈し、外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ。下位斜位のヘラ削り。内面ヘラナデ。外面に指痕が残る。	石英・長石 褐色 普通	P330 30% PL78 P10南朝群土 P10上層
18	壺土師器	A 20.0 B (6.0)	底部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲する。体部は内傾しながら立ち上がる。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面ヘラナデ。横ナデ。内面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P332 20% PL78 P15南朝群土 P16北朝群土

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 19	甕 土師器	B (32) C 6.8	底部片。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P333 10% 貯蔵穴1 覆土下層 貯蔵穴1 上部覆土下層
20	小形甕 土師器	A 12.6 B 14.6 C 5.0	平底。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ、下位横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P329 100% PL78 P21上面

遺物 土師器及びその小破片300点が出土している。覆土中層では、第106・107図1の甕及び6の高坏が南壁際から横位の状態で、4の甕が南壁際から壊れた状態でそれぞれ出土している。覆土下層では、2の甕が貯蔵穴1の上部から横位の状態で、5の甕がP1の東側から横位の状態で、7の高坏がP4の上部から正位の状態で、9の高坏がP2の北側から横位の状態で、10の高坏がP3の東側から横位の状態で、12の甕が東壁際から正位の状態でそれぞれ出土している。床面では、13の甕が中央部から壊れた状態で出土している。貯蔵穴及びピットでは、3の甕が貯蔵穴2の覆土中層から斜位の状態で、20の小形甕がP21の上面から横位の状態でそれぞれ出土している。また、14の甕がP1の北側の床面及びP1の南側の床面から散乱した状態で、15の甕が貯蔵穴1の覆土中層及び貯蔵穴2の覆土中層から散乱した状態で、16の甕がP10の北側の床面及びP10の上面から散乱した状態で、17の甕がP10の西側の床面及びP10の上面から散乱した状態で、18の甕がP15の南側の床面及びP16の北側の床面から散乱した状態で、19の甕が貯蔵穴1の覆土下層及び貯蔵穴1の上部の覆土下層から散乱した状態でそれぞれ出土している。その他にも北東区の覆土中から8の高坏、南西区の覆土中から11の高坏がそれぞれ出土している。

所見 本跡は、一辺が6m以上の比較的大形の住居跡で、内部施設としていわゆる「間仕切り溝」と呼ばれる壁溝以外の溝を有しているなど、いくつか特徴的なものが見られる。本跡の時期は、出土遺物から5世紀第2四半期と考えられる。

第160号住居跡（第108・109図）

位置 調査Ⅱ区の中央部、D 2 a0区。

重複関係 本跡は第155・163号住居に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸4.36m、短軸4.18mの方形である。

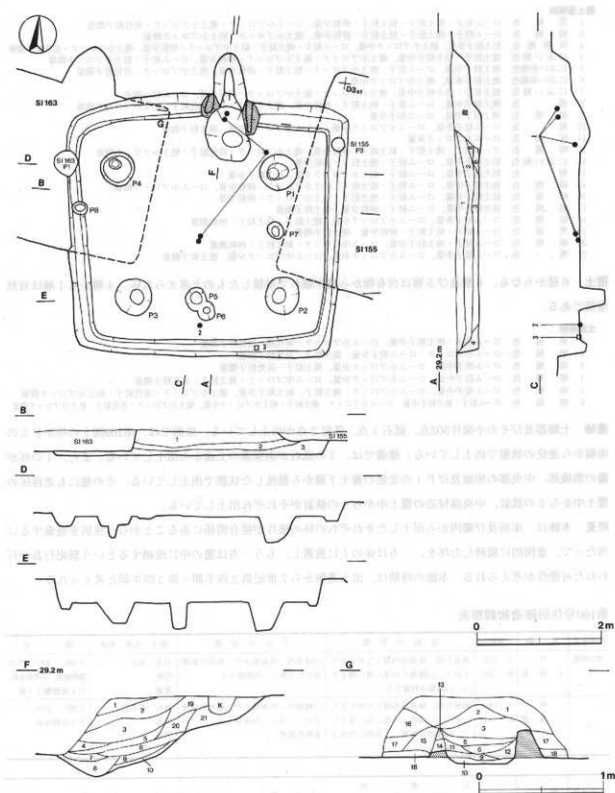
主軸方向 N-6°-W

壁 壁高は36~38cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き、壁下を全周している。上幅16~24cm、下幅10~16cm、深さ6~12cmで、断面形は逆台形をしている。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット 8か所(P1~P8)。P1~P3は径56~60cmの円形、深さ36~46cmである。P4は二段掘り込みになっており、上段は径56cmの円形、深さ20cmで、下段は径20cmの円形、深さ26cmで、床面から下段底面までの深さは46cmである。P1~P4は規模や配列から主柱穴と考えられる。P5は径38cmの円形、深さ44cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5に隣接してP6があり、径32cmの円形、深さ30cmで、補助柱穴もしくは柱を立て替えたものと思われる。P7及びP8は径24~28cmの円形、深さ12~30cmで、性格は不明である。



第108図 第160号住居跡実測図

竈 北壁中央部東寄りに付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ170cm、両袖幅96cmで、壁外への掘り込みは70cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を20cmほど皿状に掘り込んだ後、埋め戻した上に形成されている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

電土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量, 焼土小ブロック・粘土小ブロック微量
3	灰黄褐色	粘土粒子多量, 粘土小ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子・粘土中ブロック・砂粒少量, 焼土小ブロック・炭化粒子微量
4	にぶい褐色	焼土粒子・粘土粒子中量, 焼土小ブロック・粘土小ブロック・砂粒少量, ローム粒子・粘土中ブロック微量
5	にぶい赤褐色	焼土粒子中量, ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量, 焼土中ブロック・炭化粒子微量
6	にぶい褐色	焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量
7	にぶい褐色	焼土粒子・粘土粒子中量, 焼土小ブロック・粘土小ブロック・砂粒少量, ローム粒子微量
8	褐色	焼土粒子中量, ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量, 焼土小ブロック・粘土小ブロック微量
9	暗褐色	焼土粒子中量, ローム粒子少量
10	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子微量
11	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量, 焼土小ブロック・炭化粒子・粘土小ブロック微量
12	暗褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量
13	にぶい褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・粘土小ブロック少量, 焼土粒子少量
14	暗褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・粘土小ブロック少量, 焼土粒子少量
15	暗褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック・砂粒少量, ローム小ブロック微量
16	暗褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック・砂粒少量
17	暗褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・砂粒少量, 焼土粒子微量
18	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量
19	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量, 焼土粒子微量
20	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, ローム小ブロック・粘土粒子・砂粒微量
21	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子微量

覆土 6層からなる。6層及び5層は含有物から竈が壊れて堆積したものと考えられる。4層から1層は自然堆積である。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子・粘土小ブロック微量
6	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・粘土小ブロック少量, 焼土小ブロック・炭化粒子・粘土中ブロック微量

遺物 土師器及びその小破片502点, 砥石1点, 鉄釘2点が出土している。床面では, 第109図2の坏がP5の南側から逆位の状態出土している。壁溝では, 3の砥石が南壁溝の上面から出土している。また, 1の坏が竈の燃焼部, 中央部の床面及びP1の北側の覆土下層から散乱した状態で出土している。その他にも北西区の覆土中から5の鉄釘, 中央部付近の覆土中から4の鉄釘がそれぞれ出土している。

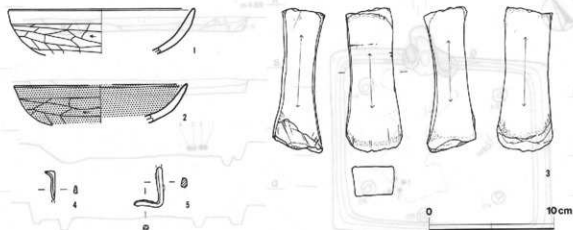
所見 本跡は, 床面及び竈内から出土したそれぞれの坏の破片が接合関係にあることから, 住居を廃棄するに当たって, 意図的に破砕した坏を, 一方は床の上に放置し, もう一方は竈の中に埋納するという祭祀行為が行われた可能性が考えられる。本跡の時期は, 出土遺物から7世紀第2四半期~第3四半期と考えられる。

第160号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第109図1	土師器	A 15.0 B (3.6)	底部欠損, 腰部は内脣しながら立ち上がり, 口縁部との境に鋭い稜をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ, 腰部外面横位のヘラ削り, 内面横ナデ。	石灰・灰石 棕色 普通	P306 30% P179 龍地焼成, 中央部床面 P1北側覆土下層
	土師器	A (14.0) B (3.1)	底部欠損, 腰部は内脣しながら立ち上がり, 口縁部との境に鋭い稜をもつ。口縁部は外傾し, 腰部に内脣が状の稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ, 腰部外面横位のヘラ削り, 内面横ナデ。内・外面黒色処理。	灰石・赤色粒子 黒色 普通	P397 10% P5南側床面

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第109図3	砥石	11.6	2.4	4.0	245.1	凝灰岩	南壁溝上面	Q9 PL111

図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	太さ(cm)	重量(g)		
第109図4	鉄釘	(2.4)	0.9×0.7	(1.3)	覆土中	基部欠損 M19 PL113
5	鉄釘	(3.5)	0.7×0.7	(2.7)	北西区覆土中	基部欠損 M20 PL113



第109図 第160号住居跡出土遺物実測図

第161号住居跡 (第110・111図)

位置 調査I区, C 2 a0区。

規模と平面形 長軸3.52m, 短軸2.96mの長方形である。

主軸方向 N-35°-W

壁 壁高は18~28cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き, 壁下を全周している。上幅14~24cm, 下幅6~14cm, 深さ6~12cmで, 断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて, 特に踏み固められている。南東壁寄りの床面を中心に, 垂木と思われる炭化材が壁際から中央部に向かうような状態で遺存していた。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は径20~24cmの円形, 深さ16~24cmで, 規模や配列から主柱穴と考えられる。P5は径22cmの円形, 深さ16cmで, 位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北西壁中央部北寄りに付設されており, 焚口部から煙道口部までの長さ78cm, 両袖幅88cmで, 壁外への掘り込みは42cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を8cm掘りくぼめており, 皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で, 緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

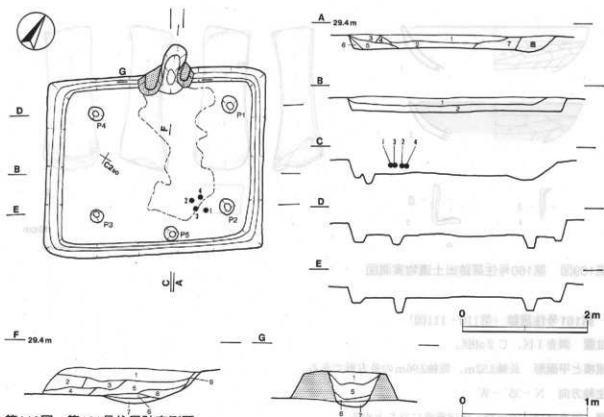
竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量
- 2 灰褐色 粘土小ブロック・粘土粒子中量, ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量
- 3 灰褐色 ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 灰褐色 粘土小ブロック・粘土粒子中量, ローム粒子・砂粒少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子微量

覆土 7層からなる。7層は含有物から竈が壊れて堆積したものと考えられる。6層から1層まではローム, 焼土及び炭化物の含有状況から人為堆積と思われる。

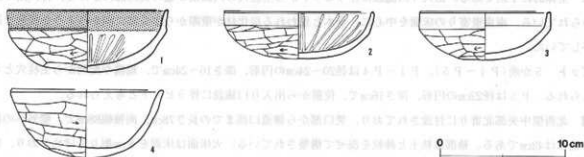
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック・炭化粒子少量



第110図 第161号住居跡実測図

- 5 黒褐色 炭化物・炭化粒子中量, ローム中・小ブロック・ローム粒子少量, 粘土粒子微量
 6 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
 7 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量, 粘土粒子微量



第111図 第161号住居跡出土遺物実測図

第161号住居跡遺物観察表

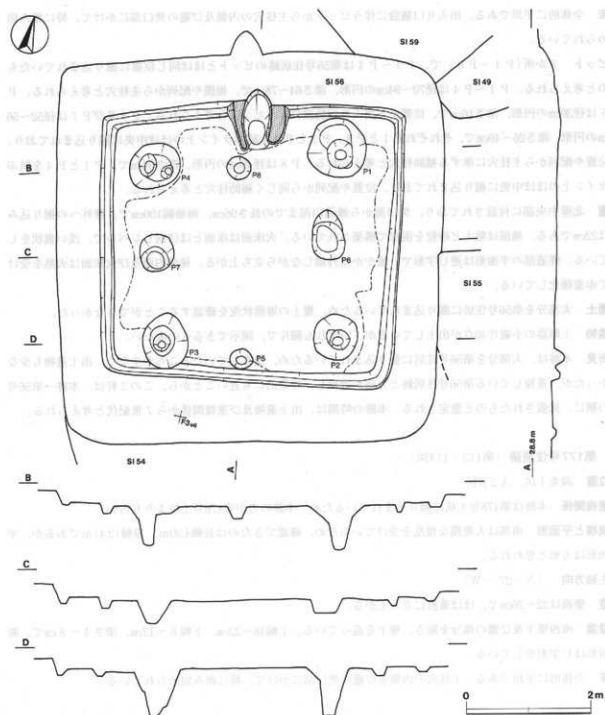
図版番号	部 類	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第111図 1	環	A 13.0	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り。内面放射状のヘラ磨き。口縁部内・外面黒色処理。	石英・長石・雲母 赤灰色 普通	P 818 90% PL79 P 2 西側覆土下層
	土 器 器 B	5.0				
2	環	A 11.8	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り。内面横ナデ。内面放射状のヘラ磨き。	石英・長石 赤褐色 普通	P 819 95% PL79 P 2 西側覆土下層
	土 器 器 B	3.8				
3	環	A 10.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り。内面横ナデ。	石英・雲母・赤色粒子 赤灰色 普通	P 820 60% PL79 P 2 西側覆土下層
	土 器 器 B	3.9				
4	環	A (12.2)	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り。内面ナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 赤褐色 普通	P 821 60% PL79 P 2 西側覆土下層
	土 器 器 B	3.5				

遺物 土師器及びその小破片54点が出土している。第111図1・2・3・4の坏がP2の西側の覆土下層から正位の状態ですれぞれ出土している。

所見 本跡は、炭化材の検出状況や覆土の堆積状況から、焼失家屋と思われる。本跡の時期は、出土遺物から7世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

第164号住居跡（第112図）

位置 調査Ⅲ区，F3c5区。



第112図 第164号住居跡実測図

重複関係 本跡が第54号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第54号住居跡よりも新しい。また、第56号住居に掘り込まれているため、本跡の方が第56号住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸4.84m、短軸4.52mの方形である。

主軸方向 N-14°-W

壁 壁上部が第56号住居に掘り込まれており、現存している壁高は2～6cmである。床面から遺構確認面までは24～30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がっていたものと考えられる。

壁溝 竈の部分を除き、壁下を全周している。上幅16～22cm、下幅6～12cm、深さ6～12cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから支柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 8か所(P1～P8)で、P1～P4は第56号住居跡のピットとほぼ同じ位置に掘り込まれていたものと考えられる。P1～P4は径70～94cmの円形、深さ64～78cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。P5は径30cmの円形、深さ16cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6及びP7は径52～56cmの円形、深さ26～40cmで、それぞれP1とP2、P3とP4を結ぶライン上のほぼ中央に掘り込まれており、位置や配列から支柱穴に準ずる補助柱穴と考えられる。P8は径40cmの円形、深さ34cmで、P1とP4を結ぶライン上のほぼ中央に掘り込まれており、位置や配列から同じく補助柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ96cm、両袖幅100cmで、壁外への掘り込みは22cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面とほぼ同じレベルで、浅い皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 大部分を第56号住居に掘り込まれているため、覆土の堆積状況を確認することができなかった。

遺物 土師器の小破片40点が出土しているが、いずれも細片で、図示できるものはない。

所見 本跡は、大部分を第56号住居に掘り込まれているため、遺存していたところが少なく、出土遺物も少なかったが、重複している第56号住居跡と方向が近似し、時的にも近いことから、この2軒は、本跡→第56号の順に、拡張されたものと想定される。本跡の時期は、出土遺物及び重複関係から7世紀代と考えられる。

第177号住居跡(第113・114図)

位置 調査Ⅰ区、A2j7区。

重複関係 本跡は第178号土坑に掘り込まれているため、本跡の方が第178号土坑よりも古い。

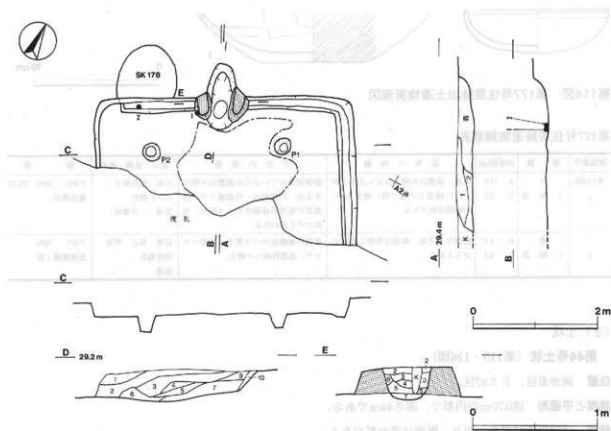
規模と平面形 南部は大規模な擾乱を受けているため、確認できたのは長軸4.20m、短軸(2.4)mであるが、平面形は方形と思われる。

主軸方向 [N-27°-W]

壁 壁高は22～26cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南西壁下及び竈の部分を除き、壁下を巡っている。上幅18～22cm、下幅8～12cm、深さ4～8cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。支柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。



第113図 第177号住居跡実測図

ピット 2か所 (P1・P2)。P1及びP2は径28cmの円形、深さ24~28cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

竈 北西壁中央部に付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ106cm、両袖幅88cmで、壁外への掘り込みは56cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面とほぼ同じレベルで、浅い皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | |
|----|------|--------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量 |
| 3 | 灰褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 5 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| 8 | 赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子少量 |
| 9 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 10 | 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子微量 |

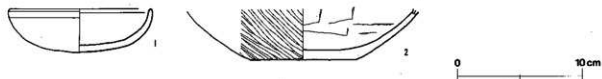
覆土 2層からなる。2層とも自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-----|---------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量 |

遺物 土師器及びその小破片42点が出土している。壁溝では、第114図2の壺が北西壁溝の上面から正位の状態で出土している。竈では、1の坏が南西袖から逆位の状態で出土している。

所見 本跡は、南部が大規模な擾乱を受けているため、遺存していたところが少なかったが、床面及び竈から良好な状態で遺物が出土している。本跡の時期は、出土遺物から7世紀第2四半期~第3四半期と考えられる。



第114図 第177号住居跡出土遺物実測図

第177号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	浅鉢 土師器	A 11.6 B 3.5	丸底。体部は内壁しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	器面が荒れているため調整は不明であるが、口縁部内・外面横ナゲ、体部及び底面外面横位のヘラ削り、内面ナゲと思われる。	石灰・赤色粘土に灰い藍色 普通（二次焼成）	P 870 80% PL79 東西縁部
2	浅鉢 土師器	B (4.1) C 3.4	底部片。平底。体部は外壁しながら立ち上がる。	体部外面横位のヘラ磨き、内面ヘラナゲ。底面外面ヘラ磨き。	石灰・長石・雲母 明赤褐色 普通	P 871 10% 北西壁面上面

(2) 土坑

第44号土坑（第115・116図）

位置 調査Ⅲ区、E 3 h7区。

規模と平面形 径0.70mの円形で、深さ44cmである。

壁面 ほゞ垂直に立ち上がり、断面は逆台形である。

底面 平坦である。

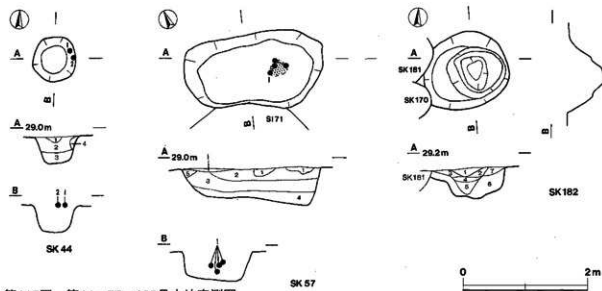
覆土 4層からなる。ロームブロックの含有量が多いことや不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器及びその小破片7点が出土している。第116図1の高杯は横位の状態で、2の小形甕は逆位の状態で、ともに東側壁際の覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から前期の4世紀後半と考えられる。



第115図 第44・57・182号土坑実測図

第57号土坑 (第115・116図)

位置 調査Ⅲ区, E 3 h6区。

重複関係 第71号住居跡を掘り込んでおり, 第71号住居跡より新しい。

規模と平面形 長径2.22m, 短径1.11mの楕円形で, 深さ61cmである。

長径方向 N-67°-W

壁面 ほほ垂直に立ち上がり, 短径方向の断面は逆台形である。

底面 平坦である。

覆土 5層からなる。ロームブロックの含有量が多いことや不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|---------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム大ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム大ブロック少量, ローム小ブロック微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム大ブロック少量, ローム中ブロック微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム大ブロック少量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子多量, ローム大ブロック少量 |

遺物 土師器及びその小破片37点が出土している。第116図1の土師器甕は, 中央部からやや東側壁寄りの覆土上層から壊れた状態で出土している。

所見 本跡の時期は, 出土土器から前期の4世紀後半と考えられる。

第182号土坑 (第115・116図)

位置 調査Ⅱ区の中央部, D 2 d8区。

重複関係 第170・181号土坑に掘り込まれており, これらの土坑より古い。

規模と平面形 長径1.35m, 短径1.22mの楕円形で, 深さ56cmである。

長径方向 N-73°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 7層からなる。焼土粒子, 炭化粒子及びロームブロックの含有状況やブロック状の堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

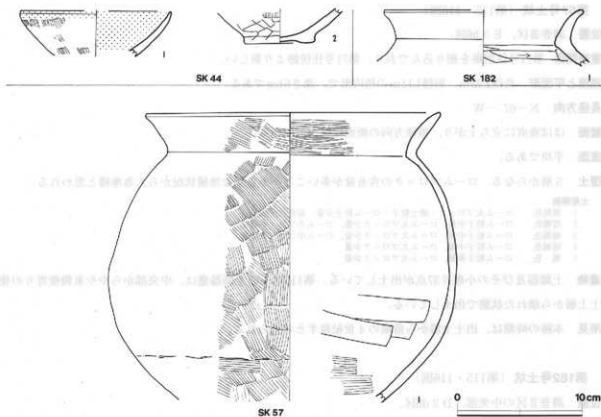
- | | | |
|---|-----|-----------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 | 黒褐色 | 灰多量, 焼土粒子・ローム粒子少量, 焼土大ブロック微量 |
| 3 | 灰色 | 炭化粒子多量, 炭化物中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム大・小ブロック中量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子多量, ローム大・小ブロック中量, ローム中ブロック少量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 |

遺物 土師器及びその小破片37点が出土している。第116図1の土師器甕は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土土器から後期の7世紀後半と考えられる。

第44号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	高土師器	A (12.0)	坏部片。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナゲ。坏部外面斜依のハケ目調整。内面横ナゲ。口縁部外面及び内面塗彩。	石灰・炭石・雲母 黒褐色	P1118 30%
		B (3.6)				
2	小形土師器	B (2.7)	底部片。底部は平底で, 突出する。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ハケ目調整。内面ナゲ。体部外面下端ヘラ削り。	石灰・炭石・雲母・白色粒子 灰褐色	P1119 5%
		C 5.4				



第116図 第44・57・182号土坑出土遺物実測図

第57号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	甕 土 部 器	A 23.6 B (23.4)	底部は平底で、やや突出する。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。胴部はくの字状に縮曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面斜位のハケ目調整後、横ナデ。内面横位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整。内面ヘラナデ。体部下位内面ハケ目調整。	石灰・長石・雲母 普通	P1120 60% P1.79 中央部東寄り覆土上層 土層

第182号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	甕 土 部 器	A [15.8] B (4.5)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。胴部はくの字状に縮曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び胴部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面横位のヘラ削り。	石灰・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P1103 5% 覆土中

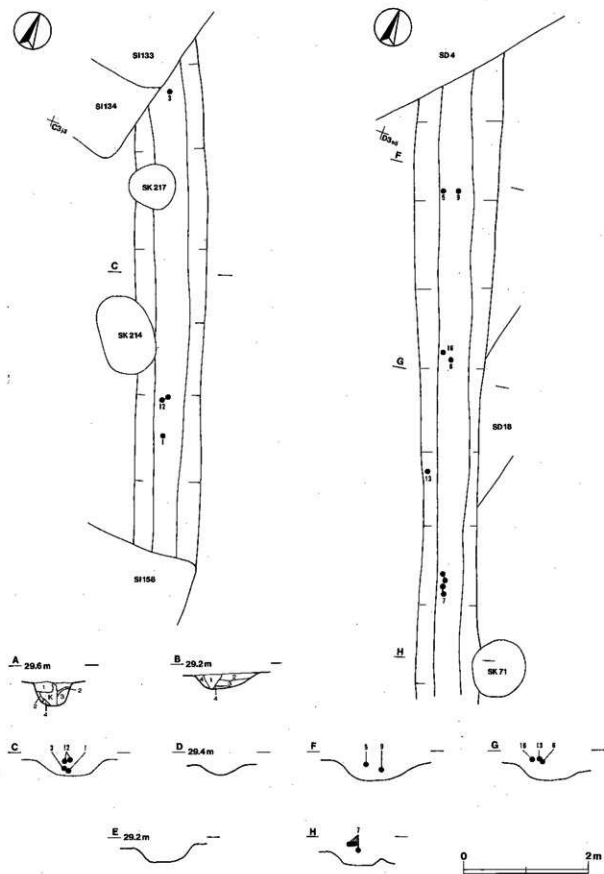
(3) 溝

古墳時代の溝は、第14号溝の1条だけである。平面図は付図に示し、別に遺物出土状況について部分図を掲載する。

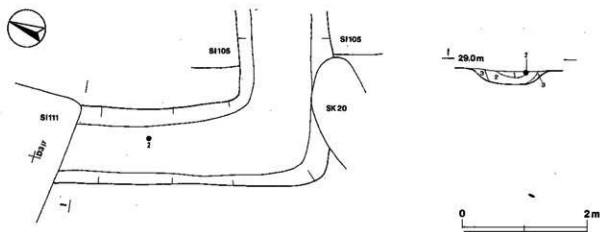
第14号溝 (第117～120図・付図)

位置 調査Ⅱ区北部、B 2j0～D 3j7区。

重複関係 本跡が、第105・111号住居跡を掘り込んで構築されており、これらの住居跡より新しい。また、第



第117图 第14号清淤测图(1)



第118図 第14号溝実測図(2)

131・133・134・136・138・144・158号住居，第2号大形土坑，第71・119・199・120・214・217号土坑，第4・5・18号溝に掘り込まれており，これらの遺構より古い。

規模と形状 北側は攪乱されており，また，東側は調査区域外になるため規模は不明であるが，北から南へ延び，確認された長さは93.0mである。上幅0.60～1.40m，下幅0.40～1.00m，深さ14～48cmである。断面はU字形であり，底面はほぼ平坦である。

方向 B2j0区から南東(N-22°-W)へ89.5mほど直線的に延び，D3j7区付近で東方向(N-71°-E)へほぼ直角に曲がり，調査区域外に続く。

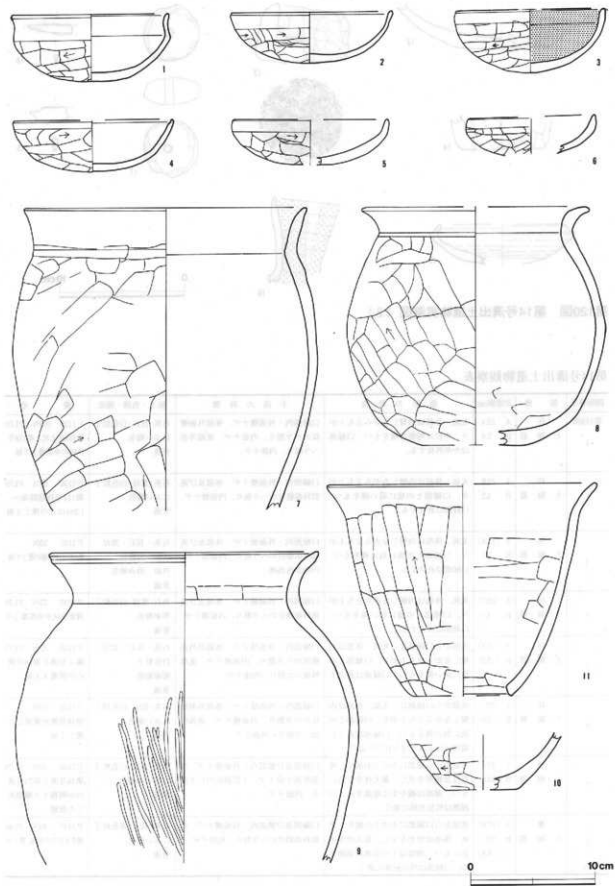
覆土 4層からなり，自然堆積である。

土層解説

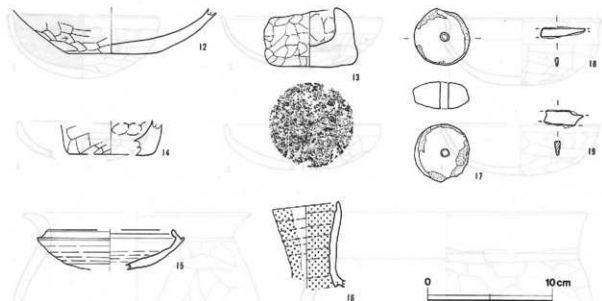
- 1 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量

遺物 土師器及びその小破片735点，須恵器及びその小破片136点，灰釉陶器片1点，陶器片4点，磁器片2点，土製品2点，鉄製品2点が出土している。土器類は細片のため，図示できたものは土師器，須恵器，鉄製品のみにあつた。第119・120図1～14は土師器で，15・16は須恵器である。1の環と12の甕は溝と重複している第214号土坑と第158号住居跡の中間に位置し，1は覆土下層から正位の状態，12は覆土上層から斜位の状態出土している。3の環は，第133号住居跡付近の覆土中層から逆位の状態出土している。4の環，8・10の甕，11の甕，14の手捏，15の環，第120図17の紡錘車は，調査Ⅱ区の中央部の覆土中から出土している。5の環と9の甕は，重複している第4号溝と第18号溝の中間で，5の環は覆土上層から逆位の状態，9の甕は覆土中層から横位の状態それぞれ出土している。6の環と16の平瓶は，第18号溝と重複した北側の，覆土上層からともに逆位の状態出土している。13の手捏土師器は，第18号溝と重複した中間の覆土上層から正位の状態出土している。7の甕は，第18号溝と第71号土坑の中間の覆土上層から散乱した状態で出土している。2の環は，第111号住居跡から南へ1.2mほどの覆土上層から正位の状態出土している。第120図18・19の刀子は覆土中から出土している。

所見 出土土器の多くは7世紀代のもので，本跡は古墳時代の後期に掘られ使用されたものと思われる。また，8世紀の土器も細片ながら覆土上層から出土しているため，本跡は奈良時代まで埋り切らなかつた可能性も考えられる。



第119图 第14号清出土遗物实测图(1)



第120図 第14号溝出土遺物実測図(2)

第14号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 1	環	A 12.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、中位に明瞭な稜をもつ。口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のへら削り、内面ナデ。底部外面へら削り、内面ナデ。	石英・長石・白色粒子にふい褐色 普通	P1129 100% PL79 第214号土坑と第158号住居の中間層上下層
	土 師 器	B 3.4				
2	環	A 12.8	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のへら削り、内面横ナデ。	石英・長石・白色粒子にふい褐色 普通	P1130 98% PL79 第111号住居跡南へ1.2mほどの覆土上層
	土 師 器	B 4.2				
3	環	A [11.8]	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のへら削り、内面横ナデ。内面黑色処理。	石英・長石・雲母 内面：黒褐色 外面：暗赤褐色 普通	P1131 55% 第103号住居跡の覆土上層
	土 師 器	B 5.1				
4	環	A [12.7]	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のへら削り、内面横ナデ。	石英・雲母・白色粒子 明赤褐色 普通	P1132 75% PL79 調査Ⅱ区中央部層土中普通
	土 師 器	B 4.1				
5	環	A [2.3]	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外部横位のへら削り、内面横ナデ。底部外面へら削り、内面ナデ。	石英・長石・雲母・白色粒子 明赤褐色 普通	P1133 33% PL79 第4号溝と第18号溝の中間層土上層
	土 師 器	B [3.2]				
6	環	A [10.1]	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立し、底部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のへら削り、内面横ナデ。底部外面へら削り、内面ナデ。	石英・長石・白色粒子にふい褐色 普通	P1134 15% 第18号溝が重畳した覆土上層
	土 師 器	B [3.0]				
7	壺	A 22.8	体部から口縁部にかけての破片。体部は長頸形を呈し、最大径を上位にもつ。頸部は緩やかに屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面斜位のへら削り、内面ナデ。	石英・長石・白色粒子にふい赤褐色 普通	P1136 40% PL79 第18号溝と第71号溝の中間層土上層敷底した状態
	土 師 器	B [24.8]				
8	壺	A [17.6]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はく字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面斜位のへら削り、内面ナデ。	石英・長石・赤色粒子にふい褐色 普通	P1137 45% PL80 調査Ⅱ区の中央部、覆土上層
	土 師 器	B 19.1				
		C [8.8]				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 9	土師器 A 21.7 B (26.1)		体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び胴部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ。下段斜位のヘラ削き。内面ナデ。	石英・長石・雲母 にふい黄褐色 普通	P1133 60% PL80 第4号溝と第18号溝 の中実覆土中層
10	土師器 A (4.5) B 17.0 C 5.9		底部から体部下半にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面横位のヘラ削り。内面横ナデ。	石英・長石・雲母・白色粒子 明赤褐色 普通	P1138 5% 調査Ⅱ区中央部覆土中 普通
11	土師器 A (21.6) B 17.0 C (8.0)		無底式。体部は内彎しながら立ち上がり。上半部には直立し胴部に至る。口縁部は外反気味に開く。	口縁部及び胴部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り。下段斜位のヘラ削り。内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 にふい赤褐色 普通	P1141 30% PL79 調査Ⅱ区中央部覆土中 普通
第120図 12	土師器 A (3.6) B (7.1)		底部分。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面横位のヘラ削り。内面横ナデ。	石英・長石 にふい褐色 普通	P1139 5% 第214号土坑と第158号 住居跡間。覆土上層
13	手捏土師器 A 4.5 B 4.8 C 6.8		平底。体部は直立し口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。内・外面に指痕。	長石・赤色粒子 褐色 普通	P1142 95% 第18号溝と重複した 中層。覆土上層
14	手捏土師器 A (4.8) B (6.8)		底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は直立して立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。内面に指痕。	石英・長石・白色粒子 にふい褐色 普通	P1142 95% PL79 調査Ⅱ区中央部覆土中 普通
15	坏 A (10.0) B (3.1)		底部から受け部にかけての破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり。受け部に至る。	体部内・外面クロコロナデ。底部回転ヘラ削り。	石英・長石 灰色 良好	P1144 30% 調査Ⅱ区中央部覆土中 良好
16	平須 A 5.4 B (6.9)		胴部から口縁部にかけての破片。口縁部内側に段をもつ。胴部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び胴部内・外面クロコロナデ。内・外面自然釉。	石英・長石 灰色 良好	P1145 20% PL79 第18号溝と重複した 北側。覆土上層

図版番号	種別	計 面 値				出土地点	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第120図17	土製紡輪	(4.7)	0.7	2.2	(2.6)	調査Ⅱ区中央部。覆土中	DF101 PL108

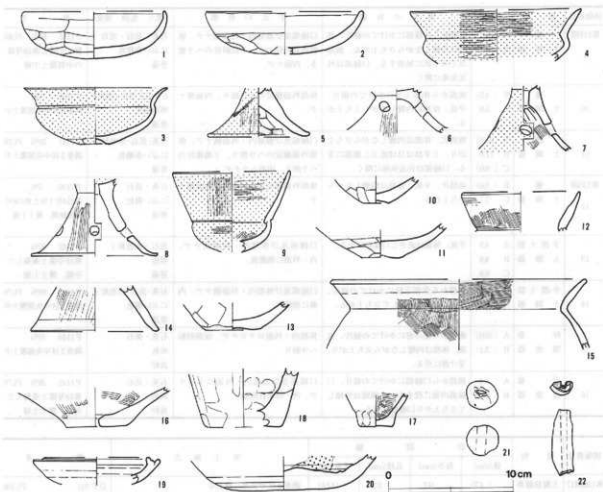
図版番号	種別	計 面 値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第120図18	刀	(3.6)	0.8	0.3	(1.7)	覆土中	基部片 M105 PL113
19	刀	(3.1)	1.2	0.4	(3.7)	覆土中	刃部片 M106 PL113

(4) 遺構外出土遺物

今回の調査で、表土層、遺構確認面及び駆穴住居跡などの遺構覆土中から、遺構に伴わない古墳時代の遺物が出土している。ここでは、古墳時代の特徴的な遺物について実測図及び拓影図を掲載し、解説は一覧表等に記載した。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 1	土師器 A (11.3) B 3.8		丸底。体部は内彎しながら立ち上がり。口縁部との境に弱い段をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り。内面横ナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 明赤褐色 普通	P1193 60% PL80 IV区表土中
2	土師器 A (12.6) B (3.4)		底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり。口縁部との境に弱い段をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 にふい黄褐色 普通	P1159 20% II区表土中



第121図 遺構外出土遺物実測図

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第121図 3	土 器 鉢	A 11.7	底部は中央が小さく凹む丸底である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に鋭い稜をもつ。口縁部は外反気味に開き、内面下縁に稜をもつ。	器面が荒れているため調整は不明であるが、口縁部外面横位のへら磨き、内面横位のへら磨きと思われる。底部下高横位のへら磨り。内・外面赤彩。	石灰・長石・雲母・赤色粒子 棕色 普通	P1189 70% PL80 N区表土中
		B 4.7				
		C 2.1				
4	土 器 鉢	A [13.8]	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に鋭い稜をもつ。口縁部は外反気味に開き、内面下縁に稜をもつ。	口縁部内・外面横位のへら磨き。体部外面横位のへら磨き。内・外面赤彩。	石灰・白色粒子 明赤褐色 普通	P1190 10% N区表土中
		B (4.2)				
5	高 土 器 杯	B (3.9)	脚部片。脚部は中空で、器部にかけてラッパ状に開く。	脚部外面横位のへら磨き、内面ハゲ目調整。器部内面横ナデ、外面に麻筋が残る。外面赤彩。	石灰・雲母・白色粒子 赤褐色 普通	P660 30% Ⅲ区表土中
		D [8.2]				
		E (3.9)				
6	土 器 器	B (3.6)	脚部片。脚部はハの字状に開く。器受部に孔を有さず、脚部上位に円形の孔3を穿孔している。	脚部外面横位のへら磨き、内面ナデ。	石灰・雲母・白色粒子 黄褐色 普通	P1195 30% N区表土中
		E (3.0)				
7	土 器 器	E (5.2)	脚部片。脚部はハの字状に開く。器受部中央に円形の孔1、脚部中位に円形の孔4を穿孔している。	器面が荒れているため調整は不明であるが、脚部外面横位のへら磨きと思われる。内面にハゲ目調整。脚部外面及び器受部内面赤彩。	石灰・長石 にぶい褐色 普通	P1196 40% PL80 N区表土中
		B (6.3)				
8	土 器 器	D [10.2]	脚部片。脚部はハの字状に開き、器部は外反気味に広がる。器受部中央に円形の孔1、脚部中位に円形の孔4を穿孔している。	脚部外面横位のへら磨き、内面ナデ。器部横ナデ。器受部内面赤彩。	石灰・長石・雲母・白色粒子 にぶい褐色 普通	P1186 30% N区表土中
		E 8.1				

図版番号	器 種	寸法(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・施成	備 考
第121図 9	埴 土 師 器	A (9.4) B (6.5)	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部外面傾位のヘナ磨き、内面傾位のヘナ磨き、体部外面傾位のヘナ磨き、内面放射状のヘナ磨き。内・外面赤彩。	石英・赤色粒子 赤色 普通	P1201 30% Ⅱ区表土中
	埴 土 師 器	B (2.1) C (2.0)	底破片。底部は中央が小さく凹む丸底である。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部下端傾位のヘナ磨り。内面ナデ。	石英・長石・雲母・白色粒子 黄褐色 普通	P1197 10% Ⅳ区表土中
11	埴 土 師 器	B (2.8) C 3.1	底部から体部片。底部は中央が小さく凹む丸底である。体部は内彎して立ち上がるものと思われる。	体部内・外面ナデ。体部下端傾位のヘナ磨り。	雲母・赤色粒子 明赤褐色 普通	P1164 5% Ⅱ区表土中
	壺 土 師 器	A (9.4) B (3.2)	口縁部片。口縁部は外傾して開く。	口縁部外面傾位のハケ目調整後、横ナデ、内面横ナデ。	石英・長石 にぶい黄褐色 普通	P1165 10% Ⅱ区表土中
13	壺 土 師 器	B (2.2) C (4.5)	底部から体部下手にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部下端傾位のヘナ磨り。内面ナデ。	石英・長石・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	P1198 10% Ⅳ区表土中
	台 付 壺 土 師 器	D [10.2] E (3.6)	台部片。台部はハの字状に開く。	台部外面傾位のハケ目調整。内面横ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P1165 5% Ⅱ区表土中
15	壺 土 師 器	A [20.4] B (5.6)	体部上平から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。胴部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面傾位のハケ目後、横ナデ。内面傾位のハケ目調整後、横ナデ。体部外面上位傾位のハケ目調整。	石英・長石・白色粒子 灰褐色 普通	P662 5% Ⅲ区表土中
	瓶 土 師 器	B (3.2) C 4.9	底部から体部下手にかけての破片。單孔式で、底部は突出する。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面傾位のハケ目調整。内面傾位のハケ目調整後、ナデ。	石英・長石・白色粒子 明赤褐色 普通	P663 5% Ⅱ区表土中
17	ミニチュア壺 土 師 器	B (2.7) C 2.7	底部から体部下手にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面指ナデ。外側に指頭痕が残る。内面縦横にハケ目調整。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P1199 30% PL80 Ⅳ区表土中
	手 提 土 師 器	B (4.7) C (5.9)	底部から体部片。体部は外傾して立ち上がる。	体部内面ヘナナデ。外面ヘナ磨り。内面放射状有り。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P1170 10% Ⅱ区表土中
19	杯 須 恵 器	A (8.2) B (2.1)	体部片。体部は内彎しながら立ち上がり、受け部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。	石英・白色粒子 灰色 良好	P1171 5% Ⅱ区表土中
	壺 須 恵 器	B (2.7) C (7.0)	底破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端傾位ヘナ磨り。内面自然釉。	石英・長石・白色粒子 灰黄褐色 良好	P1179 5% Ⅱ区表土中

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第121図21	埴状土師	2.5	2.5	0.5	14.2	Ⅳ区覆土中	D P111 PL108
22	管状土師	1.7	(5.3)	0.5	(7.5)	Ⅱ区覆土中	D P106 PL108



作業風景



作業風景

5 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査では、調査区のほぼ全域から当該期の堅穴住居跡106軒、大形土坑2基、土坑8基を検出した。大半の堅穴住居跡は、他の遺構との重複が激しく、住居跡の中には遺構及び遺物の遺存状況が良好とはいえないものもある。以下、検出した遺構と遺物について記載する。

なお、ここでいう奈良時代には、実年代でいうところの7世紀第4四半期～8世紀第1四半期も含めるものとする。

(1) 堅穴住居跡

第1号住居跡(第122・123図)

位置 調査Ⅱ区の南部、E3c1区。

重複関係 本跡が第2号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第2号住居跡よりも新しい。

規模と平面形 長軸3.82m、短軸3.34mの長方形である。

主軸方向 N-7°-W

壁 壁高は30～44cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈及びP6の部分を除き、壁下を全周している。上幅12～18cm、下幅4～6cm、深さ6～12cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 6か所(P1～P6)。P1～P4は径26～38cmの円形、深さ44～48cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。このうち、P2～P4には隣接して柱を抜き取ったと思われる痕跡がある。P5は径24cmの円形、深さ26cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は径66cmの円形、深さ24cmで、竈の東袖部の東側に掘り込まれており、位置から竈に関連するピットと考えられる。

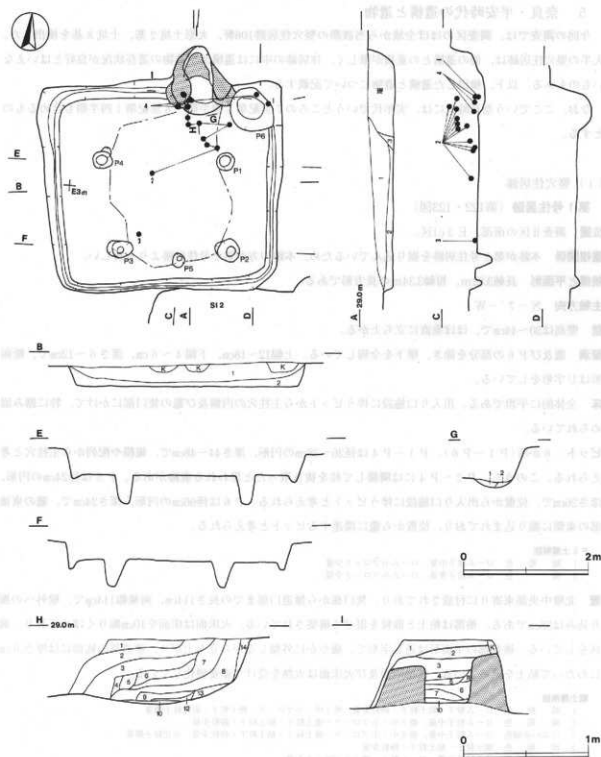
P6土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

竈 北壁中央部東寄りに付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ114cm、両袖幅114cmで、壁外への掘り込みは58cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を10cm掘りくぼめており、皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がり、煙道部の底面には厚さ6cmにわたって粘土を貼っている。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 3 にぶい赤褐色 ローム粒子中量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 5 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 6 にぶい赤褐色 粘土粒子多量、砂粒少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子微量
- 7 暗赤褐色 粘土粒子多量、砂粒少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子微量
- 8 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒・灰少量、炭化粒子微量
- 9 にぶい赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒・灰少量
- 10 暗褐色 ローム粒子・灰中量、粘土粒子・砂粒少量
- 11 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 12 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 13 明褐色 粘土中・小ブロック・粘土粒子多量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量
- 14 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量



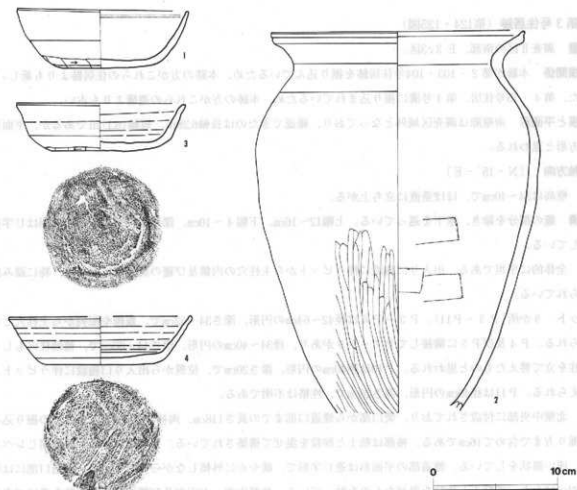
第122図 第1号住居跡実測図

覆土 3層からなる。3層は含有物から竈が壊れて堆積したものと考えられる。2層及び1層は自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量

遺物 土師器及びその小破片272点、須恵器及びその小破片32点が出土している。第123図1・2は土師器、3・4は須恵器である。床面では、3の坏がP3の北側から正位の状態出土している。ピットでは、1の坏がP6の上から正位の状態出土している。また、2の甕が竈の燃焼部と西袖部及び竈付近の床面から覆土中層にかけて散乱した状態で、4の坏が竈の火床面及びP6の上から散乱した状態でそれぞれ出土している。



第123図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡遺物観察表

図取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第123図 1	土師器	A 13.6	平底。体部下端は丸みを帯び、内縁しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面横ナデ。体部下端及び底部手持ちへつ削り。口縁部内面に1条の沈線が走る。	石英・長石・雲母・赤鉄子 灰黄褐色 普通	P1 95% P6上面
		B 4.5				
		C 4.8				
2	甕	A 20.2	底部欠損。体部は長頸形を呈し、最大径を上位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開き、頸部をわずかにつまみ上げている。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ。下部屈位のへつ削り。内面へつナデ。	石英・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P2 50% P1.80 燃焼部・西袖部。 竈付近床面～覆土中層
		B (30.6)				
3	須恵器	A 13.6	平底。体部下端は丸みを帯び、下半に傾をもち、外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面クロコナデ。底部縦線手持ちへつ削り。底部回転へつ削り後、手持ちへつ削り。	石英・長石・雲母 黄灰色 普通	P3 80% P3北側床面
		B 3.8				
		C 8.0				
4	須恵器	A [14.6]	平底。体部下端は丸みを帯び、下半に傾をもち、外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面クロコナデ。底部手持ちへつ削り。	石英・長石・雲母 黄灰色 普通	P4 70% P1.80 竈火床面。 P6上面
		B 2.9				
		C 8.0				

所見 本跡は、P6の上面及び竈内から出土したそれぞれの坏の破片が接合関係にあることから、住居を廃棄するに当たって、意図的に破砕した坏を、一方は埋め戻されたP6の上面に放置し、もう一方は竈の中に埋納するという祭祀行為が行われた可能性が考えられる。本跡の時期は、出土遺物から8世紀第1四半期～第2四半期と考えられる。

第3号住居跡(第124・125図)

位置 調査Ⅱ区の南部、E3c3区。

重複関係 本跡が第2・103・104号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方がこれらの住居跡よりも新しい。また、第4・15号住居、第4号溝に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺構よりも古い。

規模と平面形 南壁際は調査区域外となっており、確認できたのは長軸6.28m、短軸(6.1)mであるが、平面形は方形と思われる。

主軸方向 [N-15°-E]

壁 壁高は34～40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き、壁下を巡っている。上幅12～16cm、下幅4～10cm、深さ4～6cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから支柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 9か所(P3～P11)。P3～P6は径42～64cmの円形、深さ34～62cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。P4及びP5に隣接してP7～P9があり、径34～40cmの円形、深さ44～60cmで、補助柱穴もしくは柱を立て替えたものと思われる。P10は径40cmの円形、深さ20cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P11は径40cmの円形、深さ26cmで、性格は不明である。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ118cm、両袖幅122cmで、壁外への掘り込みは掘り方まで含めて16cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面とはほぼ同じレベルで、浅い皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がり、煙道口部には厚さ32cmにわたって粘土と砂粒を混ぜたものを貼っている。袖部内面、火床面及び煙道口部は火熱を受けて赤変硬化している。

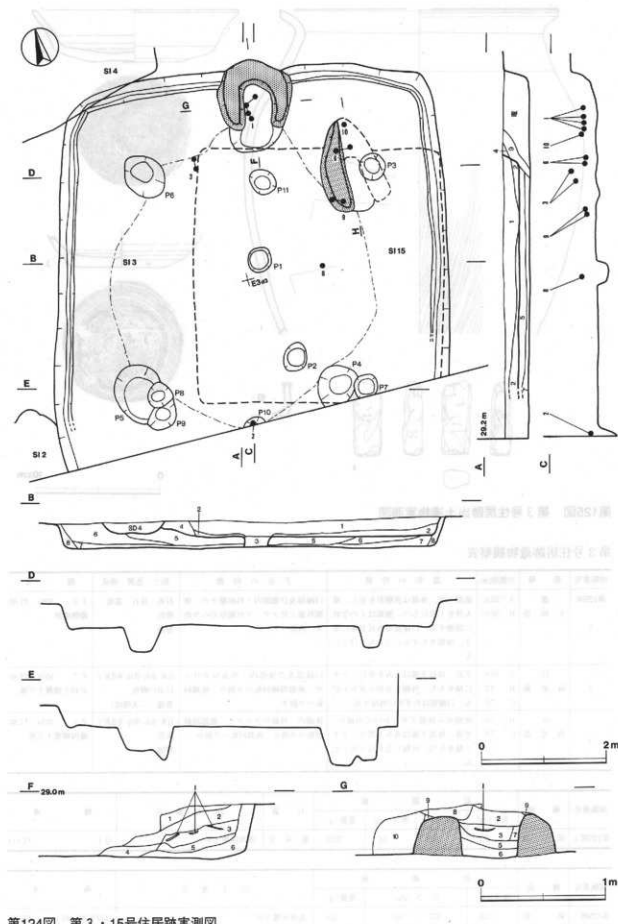
竈土層解説

- | | |
|----------|---|
| 1 灰 褐色 | 粘土粒子多量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・砂粒少量 |
| 2 にぶい赤褐色 | 粘土粒子多量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 |
| 3 にぶい赤褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子・粘土粒子中量、炭化粒子・砂粒少量 |
| 4 暗 褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・砂粒少量 |
| 5 暗 赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子・焼土中・小ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 6 にぶい赤褐色 | ローム粒子中量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 7 にぶい赤褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量 |
| 8 暗 褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 9 暗 褐色 | ローム粒子・粘土中・小ブロック・粘土粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・砂粒少量 |
| 10 暗 褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック中量、ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・砂粒少量 |

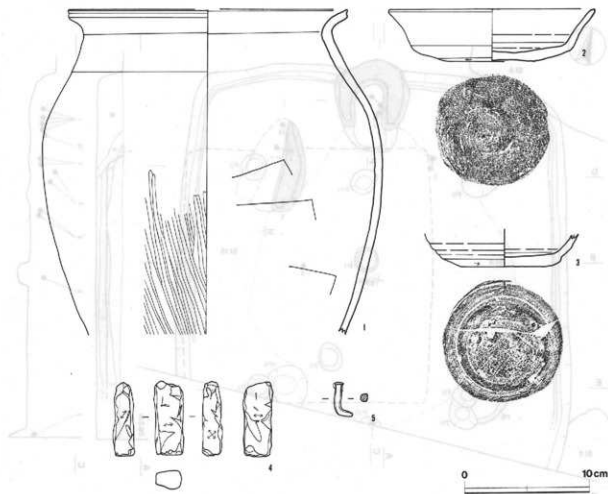
覆土 6層からなる。9層は含有物から竈が壊れて堆積したものと考えられる。8層から4層は自然堆積である。

土層解説

- | | |
|--------|---|
| 4 黒 褐色 | ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化物・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 5 暗 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 6 暗 褐色 | ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 暗 褐色 | ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子少量 |
| 8 暗 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量 |
| 9 暗 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |



第124图 第3·15号住居跡実測図



第125図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第125図 1	甕 土 甕	A [22.4] B (20.2)	底部欠損。体部は長胴形を呈し、最大径を上位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開き、肩部をわずかにつまみ上げている。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面上段ナデ。下位段位のヘリ開き、内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P 6 50% PL80 甕内底部
2	坏 須恵 器	A 16.4 B 4.2 C 7.0	平底。体部下端は丸みを帯び、下半に稜をもち、外細しながら立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面口クロナデ。底部周縁回転ヘラ開り。底部回転ヘラ開り。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にふいひ色 普通(二次焼成)	P 7 95% PL80 P 10上層覆土下層
3	坏 須恵 器	B [2.6] C 7.0	底部から体部下半にかけての破片。平底。体部下端は丸みを帯び、下半に稜をもち、外細しながら立ち上がる。	体部内・外面口クロナデ。底部周縁回転ヘラ開り。底部回転ヘラ開り。	石英・長石・雲母・赤色粒子 灰色 普通	P 8 30% PL80 甕内側覆土上層

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第125図4	砥石	(6.0)	2.5	1.6	(32.5)	凝灰岩	南西区覆土中	Q 1 PL111

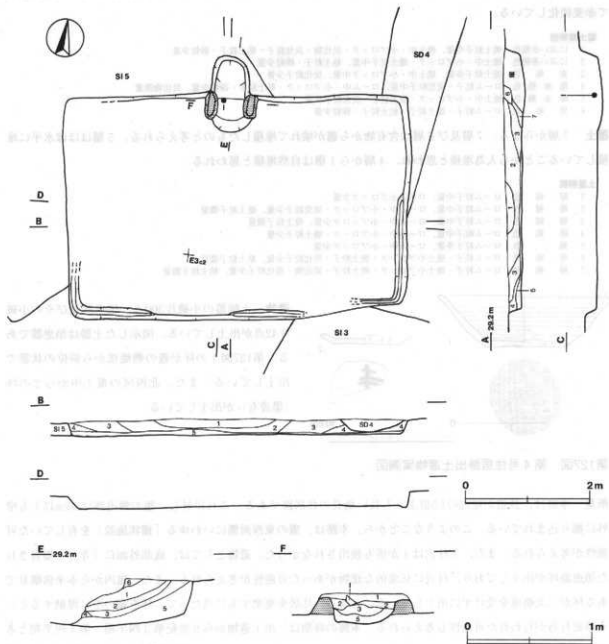
図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	太さ(cm)	重量(g)		
第125図5	鉄釘	2.8	0.7 × 0.6	2.5	北東区覆土中	1212完形 M 1 PL113

遺物 土師器及びその小破片651点、須恵器及びその小破片92点、砥石1点、鉄釘1点が出土している。第125図1は土師器、2・3は須恵器である。覆土上層では、3の坏が甕の西側から壊れた状態で出土している。覆土下層では、2の坏がP10の上部から正位の状態で出土している。竈では、1の甕が燃焼部から壊れた状態で出土している。その他にも北東区の覆土中から5の鉄釘、南西区の覆土中から4の砥石がそれぞれ出土している。

所見 本跡は、一辺が6 m以上の比較的大形の住居跡と思われる。また、重複している第103・104号住居跡と方向が近似し、時期的にも近いことから、この3軒は、第103号→第104号→本跡の順に、一度縮小された後、拡張されたものと想定される。本跡の時期は、出土遺物から8世紀第1四半期～第2四半期と考えられる。

第4号住居跡 (第126・127図)

位置 調査Ⅱ区の南部、E 3b2区。



第126図 第4号住居跡実測図

重複関係 本跡が第3・5号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方がこれらの住居跡よりも新しい。また、第4号溝に掘り込まれており、本跡の方が第4号溝よりも古い。

規模と平面形 長軸5.52m、短軸3.66mの長方形である。

主軸方向 N-8°-W

壁 壁高は16~22cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。
壁溝 南東コーナー及び南西コーナーの壁下を巡っている。上幅12~16cm、下幅4~6cm、深さ4~6cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ120cm、両袖幅84cmで、壁外への掘り込みは58cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を10cm掘りくぼめており、皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

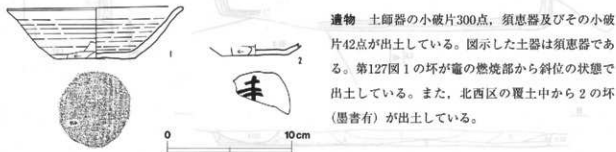
竈土層解説

- | | | |
|---|--------|---|
| 1 | にぶい赤褐色 | 焼土粒子中量、焼土中・小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 | にぶい赤褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子中量、粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 | 赤褐色 | 焼土粒子多量、焼土中・小ブロック中量、炭化粒子少量 |
| 4 | 暗赤褐色 | ローム粒子・炭化粒子中量、ローム中・小ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化物微量 |
| 5 | 暗赤褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 6 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量 |

覆土 7層からなる。7層及び6層は含有物から竈が壊れて堆積したものと考えられる。5層はほぼ水平に堆積していることから人為堆積と思われ、4層から1層は自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--------------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子少量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量、粘土粒子微量 |



第127図 第4号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は、長辺が短辺の1.5倍よりも長い横長の住居跡である。これに対し、竈の煙道部は50cm以上も壁外に掘り込まれている。このようなことから、本跡は、竈の東西両側にいわゆる「棚状施設」を有していた可能性が考えられる。また、支柱穴は1か所も検出されなかった。遺物としては、底部外面に「寺」と墨書された須恵器坏が出土しており、付近に仏教的な建物があつた可能性が考えられる。また、竈内から本来供膳具である坏が二次焼成を受けずに出土していることから、住居を廃棄するに当たって、坏を竈の中に埋納するという祭祀行為が行われた可能性も考えられる。本跡の時期は、出土遺物から9世紀第3四半期~第4四半期と考えられる。

第4号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	背面幅(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第127図 1	坏 須臾器	A 142	平底。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。	石英・長石・雲母 陶灰色 普通	P14 100% PL&I 甕縁残部
		B 4.1				
		C 6.2				
2	坏 須臾器	B (09)	底面片。平底。体形は外傾しながら立ち上がる。	体部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。	石英・長石・雲母 灰キリーブ色 普通	P15 10% PL&I 北西区覆土中 底部外面甕蓋「等」
		C 5.4				

第6号住居跡 (第128・129図)

位置 調査Ⅱ区の南部、E 2a0区。

重複関係 本跡が第113号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第113号住居跡よりも新しい。

規模と平面形 長軸2.48m、短軸2.36mの方形である。

主軸方向 N-1°-E

壁 壁高は36~44cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈及び南壁中央部東寄りの部分を除き、壁下を巡っている。上幅12~16cm、下幅6~8cm、深さ6~8cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。特に踏み固められたところは認められない。

ピット 2か所(P1・P2)。P1は径28cmの円形、深さ32cmで、竈の火床面に掘り込まれており、位置から竈に関連するピットと考えられる。P2は長径60cm、短径38cmの楕円形、深さ16cmで、中央部に掘り込まれているが、性格は不明である。

P1土層解説

16 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

P2土層解説

1 黒褐色 炭化粒子多量、ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量

2 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

竈 北東コーナーに付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ124cm、両袖幅80cmで、壁外への掘り込みは22cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を10cm掘りくぼめており、皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

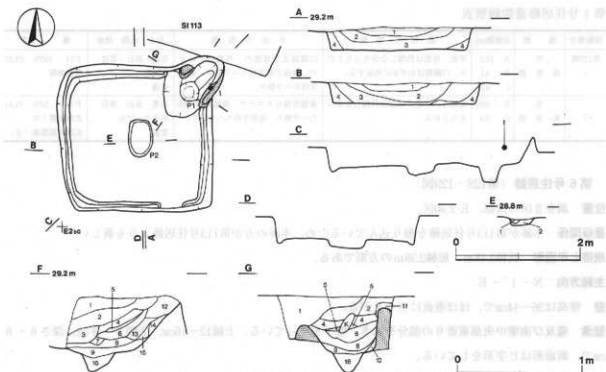
甕土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 粘土粒子多量、焼土粒子中量、焼土中・小ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 7 灰褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量
- 8 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・灰少量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 10 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・灰少量
- 11 灰褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 12 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 13 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 14 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 15 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量

覆土 4層からなる。4層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量



第128図 第6号住居跡実測図



第129図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第129図 1	須恵器 B	A 13.8	平底。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへう削り。底部手持ちへう削り。	石英・長石・雲母 灰青褐色 普通	P32 90% PL81 畿南東部 口縁部内面油曜行者
		C 7.8				
		F [3.8]				
2	須恵器 G	0.6	ボタン状のつまみ片。	つまみ起ロクロナデ。	石英・長石・雲母 灰色 普通	P33 5% 覆土中

遺物 土師器の小破片60点、須恵器及びその小破片7点が出土している。図示した土器は須恵器である。第129図1の環が竈の南東袖部から斜位の状態出土している。また、中央部付近の覆土中から2の蓋が出土している。

所見 本跡は、コーナー部に竈を有する一辺が3m未満の小形の住居跡で、ピットが2か所検出されたが、主柱穴は1か所も検出されなかった。本跡の時期は、出土遺物から8世紀第3四半期～第4四半期と考えられる。

第7号住居跡 (第130・131図)

位置 調査Ⅱ区の南部, D3j1区。

重複関係 本跡は第8号住居に掘り込まれているため, 本跡の方が第8号住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸3.24m, 短軸3.06mの方形である。

主軸方向 N-4°-W

壁 壁高は36~40cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き, 壁下を全周している。上幅12~22cm, 下幅8~14cm, 深さ4~8cmで, 断面形はU字形をしている。

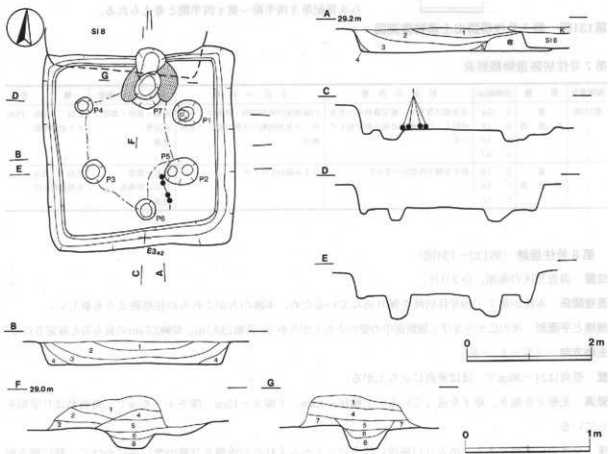
床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから主柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて, 特に踏み固められている。

ピット 7か所(P1~P7)。P1~P4は径30~44cmの円形, 深さ23~42cmで, 規模や配列から主柱穴と考えられる。P2に隣接してP5があり, 径38cmの円形, 深さ26cmで, 補助柱穴もしくは柱を立て替えたものと思われる。P6は径36cmの円形, 深さ22cmで, 位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7は径44cmの円形, 深さ22cmで, 竈の火床面下に掘り込まれており, 位置から竈に関連するピットと考えられる。

P7土層解説

8 陶色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量

竈 北壁中央部に付設されているが, 基部しか遺存していない。焚口部から煙道口部までの長さ100cm, 両袖幅88cmで, 壁外への掘り込みは12cmである。付近の覆土の含有物から, 袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されて



第130図 第7号住居跡実測図

いたものと思われる。火床面は床面を10cm掘りくぼめており、皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。遺存状況や覆土の堆積状況から、本跡の竈は人為的に壊されたものと思われる。

覆土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック・砂粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム中ブロック・焼土中ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量

覆土 5層からなる。5層は含有物から竈が壊されて堆積したものと考えられる。4層から1層は自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量



遺物 土師器の小破片220点、須恵器及びその小破片82点が出土している。図示した土器は須恵器である。第131図1の蓋がP6の北側の床面から壊れた状態で出土している。また、北西区の覆土中から2の蓋が出土している。

所見 本跡は、竈が人為的に壊されていることから、住居廃棄時の様子をうかがい知ることができ。本跡の時期は、出土遺物から8世紀第3四半期～第4四半期と考えられる。

第131図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡遺物観察表

図番	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第131図 1	蓋	A 15.4	大弁形は半形で、蓋定珠状のつまみが付く。口縁部は短く折り返している。	口縁部及び内側部内・外面ロクロナデ。大弁部回転へう開り後、つまみ接合。	石英・長石・雲母 灰白色 普通	P34 70% PL1 P6北側床面
	須恵器	B 2.8				
		F 3.0 G 0.7				
2	蓋	B (18)	扁平な蓋定珠状のつまみ片。	つまみ部ロクロナデ。	長石・雲母 におい黄褐色 普通	P35 5% 北西区覆土中
	須恵器	F 3.6				
		G 1.5				

第8号住居跡(第132～134図)

位置 調査Ⅱ区の南部、D3ii区。

重複関係 本跡が第7・10号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方がこれらの住居跡よりも新しい。

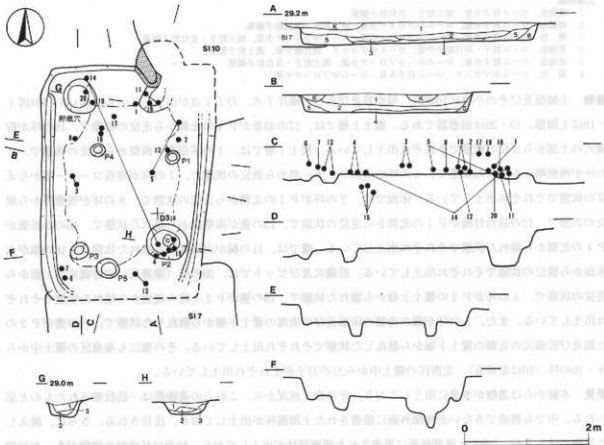
規模と平面形 床の広がり及び土層断面中の壁の立ち上がりから、長軸(3.8)m、短軸2.74mの長方形と推定される。

主軸方向 (N-1°-E)

壁 壁高は24～36cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

段溝 北壁下を除き、壁下を巡っている。上幅16～18cm、下幅8～12cm、深さ4～6cmで、断面形はU字形をしている。

床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから支柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。



第132図 第8号住居跡実測図

ピット 5か所 (P1～P5)。P1, P3及びP4は径22～30cmの円形、深さ24～26cmである。P2は二段掘り込みになっており、上段は径68cmの円形、深さ22cmで、下段は径18cmの円形、深さ22cmで、床面から下段底面までの深さは44cmである。P1～P4は規模や配列から主柱穴と考えられる。P5は径32cmの円形、深さ18cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

P2土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量

貯蔵穴 北西コーナー部に付設されており、径58cmの円形、深さ34cmで、断面形は逆台形をしている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

竈 北壁中央部東寄りに付設されているが、東側は擾乱を受けている。焚口部から煙道口部までの長さ(120)cm、両袖幅(80)cmで、壁外への掘り込みは(40)cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を12cm掘りくぼめており、皿状をしている。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 6層からなる。6層から2層まではローム、焼土及び炭化物の含有状況や遺物の投棄状況から人為堆積と思われ、1層は自然堆積と思われる。

土層解説

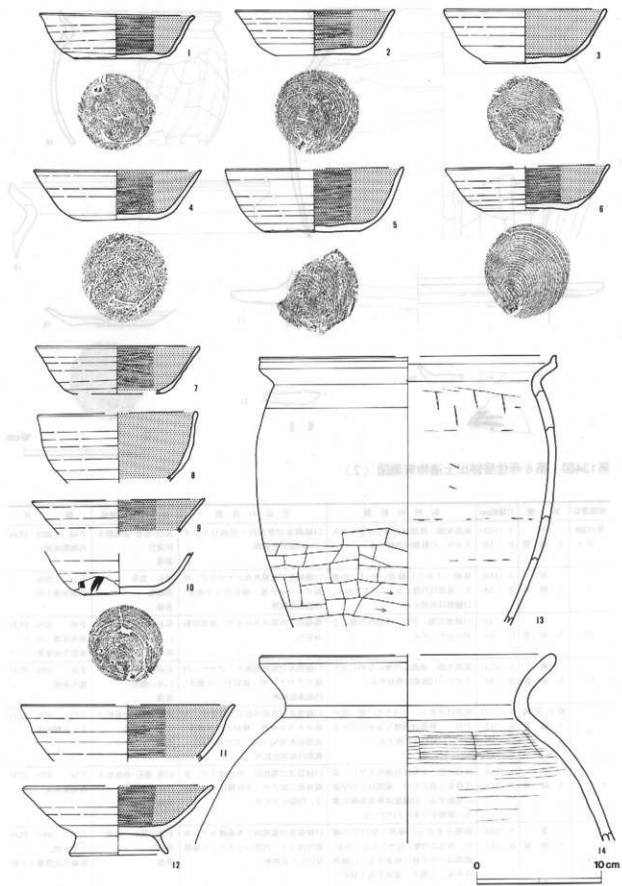
- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
 3 黒色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量
 5 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量

遺物 土師器及びその小破片1048点, 須恵器及びその小破片7点, 刀子1点が出土している。第133・134図1～18は土師器, 19・20は須恵器である。覆土上層では, 17の羽釜がP4の北側から正位の状態, 19の坏が貯蔵穴の上部から正位の状態とそれぞれ出土している。覆土下層では, 1の坏が竈の西側から正位の状態, 3の坏が西壁際から壊れた状態で, 6の坏が南西コーナー部から斜位の状態, 7の坏が南西コーナー部から正位の状態とそれぞれ出土している。床面では, 2の坏がP1の北側から正位の状態, 8の坏が西壁際から横位の状態, 12の高台付碗がP1の北側から逆位の状態, 13の甕が南壁際から壊れた状態で, 16の小形甕がP4の北側から壊れた状態でそれぞれ出土している。竈では, 11の甕が火床面から壊れた状態で, 18の甕が火床面から横位の状態とそれぞれ出土している。貯蔵穴及びピットでは, 20の坏(墨書有)が貯蔵穴の上面から逆位の状態, 4の坏がP2の覆土上層から壊れた状態で, 15の甕がP2上段の底面から壊れた状態でそれぞれ出土している。また, 5の坏が竈の南側の床面及び中央部の覆土下層から散乱した状態で, 14の甕がP2の上面及び貯蔵穴の北側の覆土下層から散乱した状態でそれぞれ出土している。その他にも南東区の覆土中から9・10の坏(10は墨書有), 北西区の覆土中から21の刀子がそれぞれ出土している。

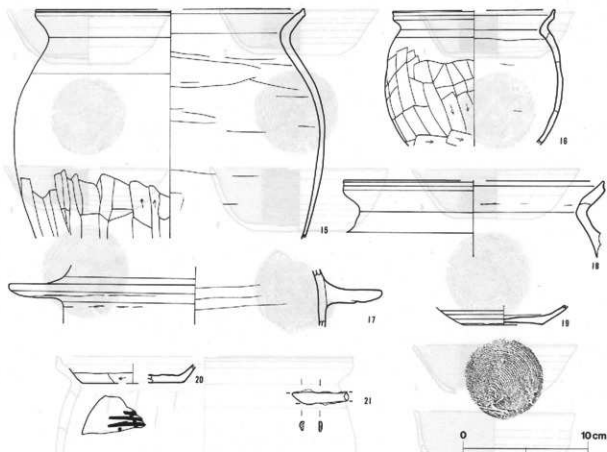
所見 本跡からは遺物が多量に出土しており, その出土状況から, これらの遺物群は一括投棄されたものと思われる。中でも判読できないが体部外面に墨書された土師器坏が出土しており, 注目される。さらに, 混入した遺物ではあるが, 「寺」と底部外面に墨書された須恵器坏が出土しており, 付近に仏堂的な建物があった可能性が考えられる。また, 竈内から本来供養具である碗が二次焼成を受けずに出土していることから, 住居を廃棄するに当たって, 碗を竈の中に埋納するという祭祀行為が行われた可能性も考えられる。本跡の時期は, 一括投棄された遺物群とあまり差はないものと思われ, 10世紀第1四半期～第2四半期と考えられる。

第8号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色割・焼成	備考
第133図 1	土師器 坏	A 12.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面ロクロナデ, 内面ロクロナデ後。横位のへら磨き。底部回転未切り。内面黒色処理。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P36 90% PL81 竈内覆土下層
		B 3.6				
		C 7.0				
2	土師器 坏	A 13.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部及び体部外面ロクロナデ, 内面ロクロナデ後。横位のへら磨き。底部回転未切り。内面黒色処理。	長石・雲母・赤色粒子 黒褐色 普通	P37 80% PL81 P1北側土層
		B 4.4				
		C 6.8				
3	土師器 坏	A 13.0	平底。体部は下半に狭をもち, 内彎しながら立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。底部回転未切り。内面黒色処理。	長石・雲母 淡黄色 普通	P38 80% PL81 西側覆土下層
		B 4.4				
		C 6.6				
4	土師器 坏	A 13.6	平底。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部及び体部外面ロクロナデ, 内面ロクロナデ後。横位のへら磨き。底部回転未切り。内面黒色処理。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P39 80% PL81 P2覆土上層
		B 4.0				
		C 6.0				
5	土師器 坏	A [14.2]	平底。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部及び体部外面ロクロナデ, 内面ロクロナデ後。横位のへら磨き。底部回転未切り。内面黒色処理。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P40 50% PL81 甕南側土層
		B 5.1				
		C 7.2				
6	土師器 坏	A [12.6]	平底。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部及び体部外面ロクロナデ, 内面ロクロナデ後。横位のへら磨き。底部回転未切り。内面黒色処理。	長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P41 60% PL81 南西コーナー部覆土下層
		B 3.6				
		C 7.0				
7	土師器 坏	A 13.0	底部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部及び体部外面ロクロナデ, 内面ロクロナデ後。横位のへら磨き。底部回転未切り。内面黒色処理。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P42 50% PL81 南西コーナー部覆土下層
		B 3.8				
		C [7.4]				



第133图 第8号住居跡出土遺物実測図(1)



第134図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第133図 8	環 土 脚 器	A (13.0) B (5.6)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。内面黒色処理。	長石・雲母・赤色粒子 灰黄色 普通	P 43 30% PL81 西濃郡赤面
9	環 土 脚 器	A (14.0) B (2.8)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部及び体部外面ロクロナデ、内面ロクロナデ後、横位のヘラ磨き。内面黒色処理。	長石・雲母 黒褐色 普通	P 44 20% 南東区履土中
10	環 土 脚 器	B (3.2) C 6.0	口縁部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	長石・雲母・赤色粒子 に深い褐色 普通	P 48 20% PL81 南東区履土中 体部外面黒書「□」?
11	碗 土 脚 器	A (17.4) B (4.6)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部及び体部外面ロクロナデ、内面ロクロナデ後、横位のヘラ磨き。内面黒色処理。	長石・雲母・赤色粒子 に深い褐色 普通	P 51 30% PL81 龍火庫面
12	高台付 土 脚 器	A (15.0) B 5.5 D 7.6 E 1.6	底部は平底で、ハの字状に深く高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部及び体部外面ロクロナデ、内面ロクロナデ後、横位のヘラ磨き。底部回転糸切り後、高台貼り付け。碗部内面黒色処理。	長石・雲母・赤色粒子 に深い褐色 普通	P 52 60% PL82 P 1北垣床面
13	壺 土 脚 器	A (24.0) B (21.8)	底部欠損。体部は長筒形を呈し、最大径を上位にもつ。頸部はくの字状に弯曲する。口縁部は外反気味に開き、頸部をつまみ上げている。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ。下位横位のヘラ磨り。内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 に深い褐色 普通	P 54 50% PL81 南濃郡赤面
14	壺 土 脚 器	A (23.6) B (15.1)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反して開き、端部を丸く収めている。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面ヘラナデ。上縁横位のハケ目調整。	石英・長石・雲母 黒色 普通	P 55 20% PL81 P 2上面。 野蔵穴北側履土下層

図版番号	部 類	計測値(cm)	形 状 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・構成	備 考
第134図 15	変形土器 上 部 部	A (226) B (18.4)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は長筒形を呈し、最大径を上位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開き、端部をわずかにつまみ上げている。	口縁部及び頸部内・外縦横ナデ。体部外面上段ナデ。下位段位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P56 20% PL82 P 2 上段底面
16	小形変形土器 上 部 部	A (13.0) B (10.9)	底部欠損。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開き、端部をつまみ上げている。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面上段ナデ。中位段位のヘラ削り、下位段位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石・赤色・褐色粒子 に白い微色 普通	P57 30% PL82 P 4 北側腹上層
17	別葉土器 土 器 器	B (4.2)	環状の碎部片。	頸部上・下面ナデ。碎部横ナデ。上面に指痕状、下面に彫り付け痕が残る。	石英・長石 褐色 普通	P59 5% PL81 P 4 北側腹上層
18	瓶土器 土 器 器	A (20.8) B (6.1)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲し、下部に把手を彫り付けた痕跡が認められる。口縁部は外反気味に開き、端部をつまみ上げている。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。頸部外面下縁横ナデ後、把手彫り付け。	石英・長石・赤色粒子 褐色 普通	P58 10% 瓶火床面
19	環状土器 土 器 器	B (1.6) C 6.2	底部片。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部内・外面口コロナデ。底部回転糸切り。	石英・雲母 灰白色 普通	P60 20% 貯蔵穴上部腹上層
20	環状土器 土 器 器	B (1.5) C (8.2)	底部片。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部内・外面口コロナデ。体部下縁手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。	石英・雲母 瑤灰黄色 普通	P61 5% PL82 貯蔵穴上面 底部外面掛帯「等」

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第134図21	刀 子	(4.7)	1.4	0.4	(4.1)	北西区腹七中	差部片 M2 PL113

第9号住居跡 (第135・136図)

位置 調査Ⅱ区の南部、D3j3区。

重複関係 本跡が第16号住居跡を掘り込んでいたため、本跡の方が第16号住居跡よりも新しい。また、第67号土坑、第4号溝に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺構よりも古い。

規模と平面形 長軸3.70m、短軸3.06mの長方形である。

主軸方向 N-9°-W

壁 壁高は50～62cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

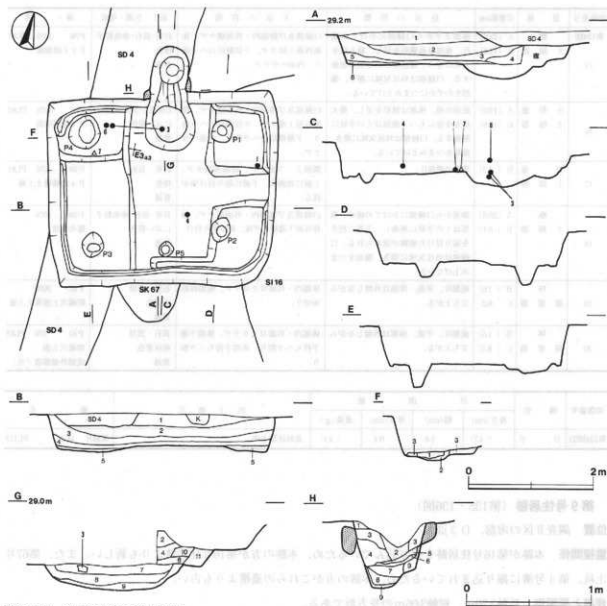
壁溝 竈及び東壁中央部を除き、壁下を巡っている。上幅10～14cm、下幅4～8cm、深さ2～4cmで、断面形はU字形をしている。

床 北東コーナー部付近、南東コーナー部付近及び西側3分の1の床は、他の部分よりも4～6cmほど低くなっており、北西コーナー部付近はさらに6cmほど低くなっている。高い方の床全体が、特に踏み固められており、竈の焚口部及び火床部も人為的に埋められ、床として使用されている。

ピット 5か所(P1～P5)。P1～P3は径36～38cmの円形、深さ24～30cmである。P4は径52cmの円形、深さ14cmである。P1～P4は規模や配列から主柱穴と考えられる。P5は径24cmの円形、深さ16cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

P4土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量



第135図 第9号住居跡実測図

竈 北壁中央部東寄りに付設されているが、基部しか遺存していない。また、焚口部及び火床部は人為的に埋められ、床として使用されている。焚口部から煙道口部までの長さ168cm、両袖幅[130]cmで、壁外への掘り込みは78cmである。付近の覆土の含有物から、袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されていたものと思われる。火床面は床面を22cmほど皿状に掘り込んだ後、埋め戻した上に形成されている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がるが、煙道部の底面には直径44cmの円形、深さ16cmのビット状の掘り込みがある。遺存状況や覆土の堆積状況から、本跡の竈は人為的に壊されたものと思われる。

竈土層解説

- | | |
|----------|--|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 褐色 | 粘土中・小ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 |
| 3 暗褐色 | 粘土粒子多量、粘土小ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量 |
| 4 暗褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・砂粒少量 |
| 5 によい赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量 |
| 6 暗赤褐色 | 炭化物・炭化粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子中量 |
| 7 暗褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子・粘土小ブロック中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土中ブロック・砂粒少量 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 9 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量 |
| 10 によい褐色 | 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 11 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

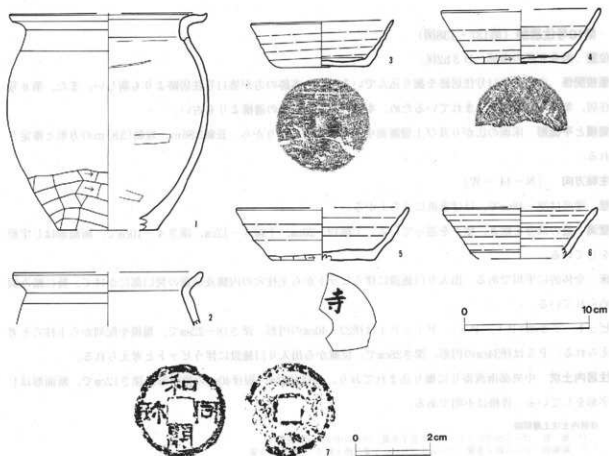
覆土 6層からなる。6層及び5層はほぼ水平に堆積していることから人為堆積と思われ、4層から1層は自然堆積と思われる。

土層解説	色	土質	特徴
1	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量	
2	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	
3	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	
4	褐色	ローム粒子中量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量	
5	黒褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	
6	褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	

遺物 土師器及びその小破片332点、須恵器及びその小破片64点、灰釉陶器の小破片3点、和同開珎1点が出土している。第136図1・2は土師器、3～6は須恵器である。覆土中層では、6の坏がP4の東側から横位の状態が出土している。覆土下層では、1の小形甕が東壁際から横位の状態、4の坏が中央部から逆位の状態それぞれ出土している。床面では、7の和同開珎がP4の南側から表を上に向けた状態で出上している。また、3の坏が甕の焚口部の覆土上層及びP4の東側の床面から散乱した状態で出上している。その他にも北東区の覆土中から5の坏（墨書有）、北西区の覆土中から2の小形甕がそれぞれ出上している。

所見 本跡は、甕の袖部が人為的に壊され、焚口部及び火床部も人為的に埋められて、床として使用されていることや、床が段状を呈していることから、住居として使用された後、何らかの建物として使用されていたものと思われる。それについては、「寺」と底部外面に墨書された須恵器坏や、和同開珎が出上していることから、仏堂的な建物として使用されていた可能性が考えられる。時期は、出土遺物から8世紀第3四半期～第4四半期と考えられる。

図番	品名	出土位置	出土状況	出土層	出土時期	出土数量	出土状態
1	土師器	北西区	東壁際	下層	8世紀	1	横位
2	土師器	北西区	中央部	下層	8世紀	1	逆位
3	須恵器	北東区	床面	中層	8世紀	1	散乱
4	須恵器	北東区	中央部	中層	8世紀	1	横位
5	須恵器	北東区	床面	中層	8世紀	1	墨書有
6	須恵器	北東区	P4東側	中層	8世紀	1	横位
7	和同開珎	北東区	P4南側	床面	8世紀	1	表を上



第136図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	前測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図	小形壺 土師器	A (16.0)	底部一部欠損。平底。体部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はコノ字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開き、肩部をわずかにつまみ上げている。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。下踵横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P159 80% PL82 東郷郡履土下層
		B 17.4				
		C (8.0)				
2	小形壺 土師器	A (15.0)	口縁部片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開き、肩部に稜をもつ。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 灰褐色 普通	P160 10% 北内区履土中
		B (4.4)				
3	坏 須恵器	A 11.4	平底。体部下端は丸みを帯び、外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面クロコロナデ。体部下端ヘラ削り後、ナデ。底部手持ちヘラ削り。	石英・長石・雲母 黄灰色 普通	P161 95% PL82 亀茨門部置土上層、 P4東郷床面
		B 3.7				
		C 7.4				
4	坏 須恵器	A (12.8)	平底。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面クロコロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。	石英・長石・雲母 灰色 普通	P162 40% PL82 中央部履土下層
		B 4.5				
		C 7.4				
5	坏 須恵器	A (13.8)	平底。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面クロコロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。	石英・長石・雲母 灰褐色 普通	P163 40% PL82 北東区履土中 底部外周部置「寺」
		B 4.2				
		C (8.2)				
6	坏 須恵器	A (12.2)	底部一部欠損。平底。体部下端は丸みを帯び、外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面クロコロナデ。体部下端ヘラ削り後、ナデ。底部手持ちヘラ削り。	石英・長石・雲母 灰色 普通	P164 20% P4東郷履土中層
		B (4.1)				
		C (7.0)				

図版番号	種別	計測値				出土地点	初検年代(西暦)	備考
		径(cm)	孔(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第136図7	和魂銅鏝	2.6	0.27×0.27	0.2	1.9	P4南郷床面	和銅元年(708年)	M3 PL114

第10号住居跡(第137・138図)

位置 調査Ⅱ区の南部、D3h2区。

重複関係 本跡が第11号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第11号住居跡よりも新しい。また、第8号住居、第4号溝に掘り込まれているため、本跡の方がこれらの遺構よりも古い。

規模と平面形 床面の広がり及び土層断面中の壁の立ち上がりから、長軸3.86m、短軸(3.8)mの方形と推定される。

主軸方向 (N-14'-W)

壁 壁高は38~48cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き、壁下を巡っている。上幅12~20cm、下幅8~12cm、深さ4~10cmで、断面形はU字形をしている。

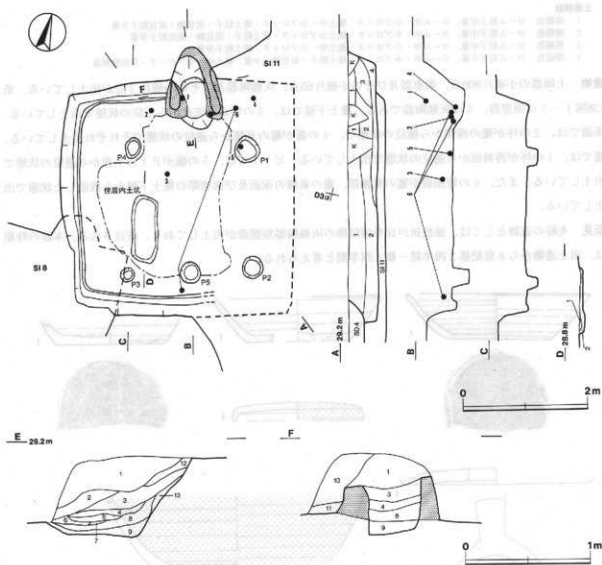
床 全体的に平坦である。出入り口施設に伴うピットから支柱穴の内側及び竈の奥口部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は径22~40cmの円形、深さ18~22cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。P5は径34cmの円形、深さ28cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

住居内土坑 中央部南西寄りに掘り込まれており、長径108cm、短径40cmの楕円形、深さ12cmで、断面形はU字形をしている。性格は不明である。

住居内土坑土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量



第137図 第10号住居跡実測図

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ114cm、両袖幅94cmで、壁外への掘り込みは掘り方まで含めて50cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床面は床面を14cm掘りくぼめており、皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がり、煙道口部には厚さ12cmにわたって粘土と砂粒を混ぜたものを貼っている。袖部内面及び火床面は火熱を受けて亦変硬化している。

竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
3	暗褐色	焼土粒子多量、焼土小ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量
4	にぶい赤褐色	焼土中・小ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子中量、ローム粒子少量
5	にぶい赤褐色	焼土粒子・灰多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子少量
6	黒褐色	炭化粒子・灰中量、焼土粒子少量
7	暗赤褐色	焼土中・小ブロック・焼土粒子多量
8	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量
9	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
10	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
11	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
12	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子中量、焼土粒子・砂粒少量
13	暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子中量、ローム中ブロック少量

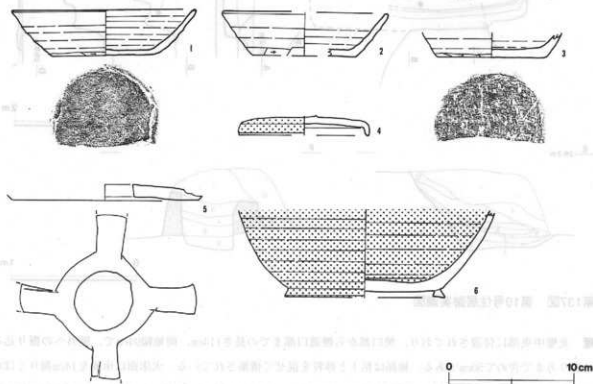
覆土 4層からなる。4層から1層まですべて自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、焼土中・小ブロック・炭化物微量

遺物 土師器の小破片900点、須恵器及びその小破片65点、灰釉陶器及びその小破片3点が出土している。第138図1～5は須恵器、6は灰釉陶器である。覆土下層では、3の坏が中央部から正位の状態出土している。床面では、2の坏が竈の西側から横位の状態、4の蓋が竈の東側から逆位の状態それぞれ出土している。竈では、1の坏が西袖部から逆位の状態出土している。ピットでは、5の甗がP1の上面から逆位の状態出土している。また、6の短頸壺が竈の東袖部、竈の東側の床面及び南壁際の覆土下層から散乱した状態で出土している。

所見 本跡の遺物としては、猿投折戸10号窯段階の灰釉陶器短頸壺が出土しており、注目される。本跡の時期は、出土遺物から8世紀第3四半期～第4四半期と考えられる。



第138図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	須恵器	A 14.8	平底。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへつ削り。底部手持ちへつ削り。	石灰・長石・雲母・赤色粒子に多い黄褐色	P62 60% PL82 竈西側部
		B 3.7				
		C 8.4				
2	須恵器	A (13.2)	底部一部欠損。平底。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへつ削り。底部手持ちへつ削り。	石灰・長石・雲母 灰色 普通	P63 30% PL82 竈西側床面
		B 3.5				
		C (8.0)				
3	須恵器	B (2.0)	底部片。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへつ削り。底部回転へつ削り。	石灰・長石・雲母 黄灰色 普通	P64 20% 中央部覆土下層
		C 8.8				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の装飾	絵土・色調・焼成	備考
第138図 4	蓋 灰 磁 器	A (10.4)	つまみ部欠損。天井部はわずかに丸みを帯びる。口縁部は直角に折り返している。	口縁部内・外面ロクロナデ。天井部内面ロクロナデ。天井部外面に自然釉が掛かる。	石英・長石 緑青オリブ色。 粘土灰白色 良好	P65 40% PL82 龍東製陶所 東海原
		B (1.6)				
5	甕 須 恵 器	B (1.2)	底部中央に円形の孔1、周縁に台形の孔4を穿孔する5孔式。	底部下端横位のへう割り。穿孔面へう割り。	石英・長石・雲母 灰色 普通	P66 5% P 1 上田
		C (15.0)				
		D (12.8)				
6	短頸甕 灰 磁 陶 器	B (7.0)	底部から外部下半にかけての破片。 底部は平底で、前面台形の低い高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部短頸へう割り状、高台貼り付く。高台部内・外面ロクロナデ。内・外面に灰釉を施施。	長石 褐灰黄色。 粘土灰白色 良好	P67 10% PL82 龍東製陶所、龍東製陶所、 阿曇郡豊土下層 狭投野戸10号窯産
		D (12.8)				
		E 0.8				

第12号住居跡 (第139～145図)

位置 調査Ⅱ区の南部、D 2j0区。

重複関係 本跡が第113号住居跡を掘り込んでいるため、本跡の方が第113号住居跡よりも新しい。

規模と平面形 長軸3.70m、短軸3.50mの方形であるが、竈の西側は70cmほど北側に掘り込まれている。

主軸方向 N-12°-E

壁 壁高は26～38cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。棚状施設の南西端に当たる竈の東側の北壁には、長さ50cmにわたって粘土を貼っている。

壁溝 北壁下を除き、壁下を巡っている。上幅28～40cm、下幅14～24cm、深さ10～16cmで、断面形は逆台形をしている。

床 全体的に平坦である。壁溝の内側全体は粘土を混ぜた貼床になっており、特に踏み固められている。

貼床土層解説

- | | | |
|---|------|--|
| 5 | 暗 褐色 | ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子多量、ローム小ブロック・粘土中ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 6 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、粘土粒子少量 |
| 7 | 暗 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量 |
| 8 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量 |
| 9 | 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |

ピット 8か所(P1～P8)。P1～P6は二段掘り込みになっており、上段は径36～70cmの円形、深さ20～26cmで、下段は径12～22cmの円形、深さ12～34cmで、床面から下段底面までの深さは34～56cmである。このうち、P1及びP2は規模や配列から主柱穴と考えられ、P3は位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P4～P6は補助柱穴もしくは柱を立て替えたものと思われる。P7及びP8は径30cmの円形、深さ30cmで、それぞれ東・西両壁際に掘り込まれており、位置や配列から主柱穴に準ずる補助柱穴と考えられる。

P1土層解説

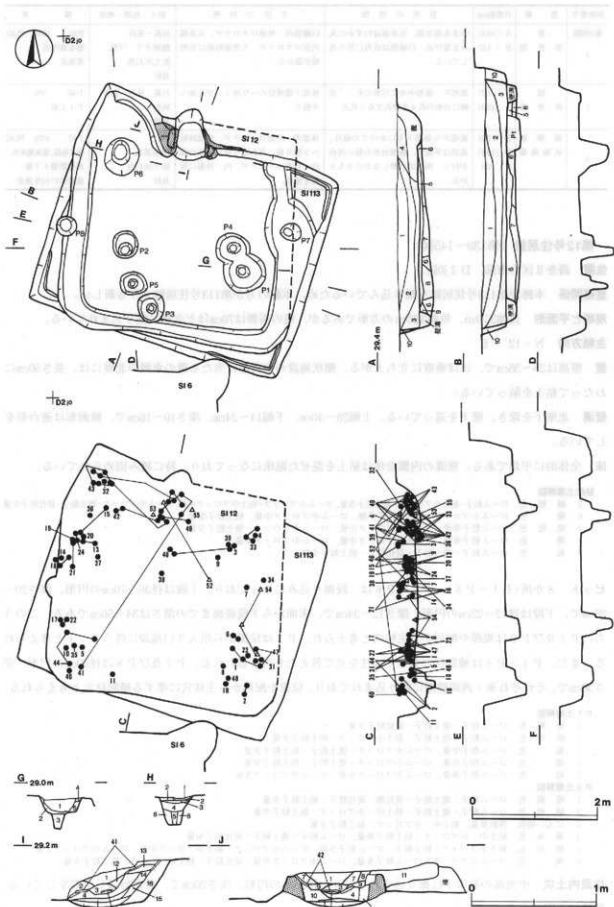
- | | | |
|---|------|-------------------------------|
| 1 | 暗 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 | 暗 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量 |

P6土層解説

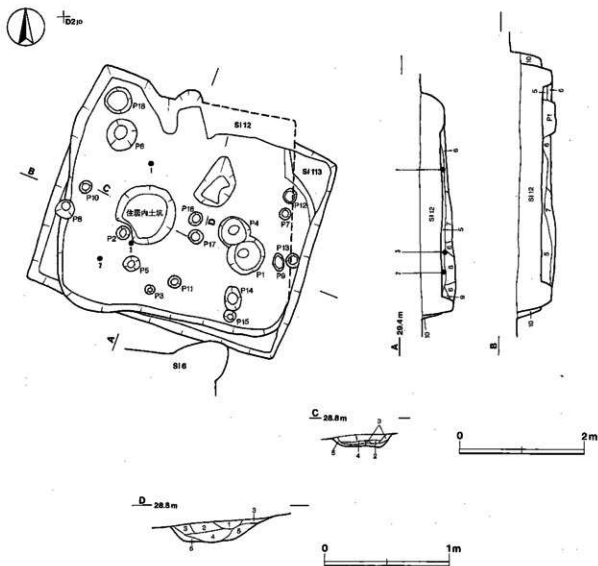
- | | | |
|---|-------|--|
| 1 | 暗 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 2 | 暗 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土中・小ブロック・粘土粒子少量 |
| 3 | いぶい褐色 | 砂粒多量、粘土中・小ブロック・粘土粒子少量 |
| 4 | 褐色 | 粘土中・小ブロック・粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 | 褐色 | 粘土小ブロック・粘土粒子・ローム粒子多量、ローム小ブロック・粘土中ブロック中量、ローム中ブロック少量 |
| 6 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量 |

住居内土坑 中央部の貼床下に掘り込まれており、径96cmの円形、深さ20cmで、断面形はU字形をしている。

性格は不明である。



第139图 第12・113号住居跡実測图(1)



第140図 第12・113号住居跡実測図(2)

住居内土層解説

- | | | |
|---|-----|---|
| 1 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、燻土粒子・炭化物・炭化粒子少量 |
| 2 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・燻土小ブロック・燻土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 | 黒褐色 | ローム粒子・燻土粒子・炭化粒子中量 |
| 5 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、燻土粒子少量 |

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道口部までの長さ82cm、両袖幅96cmで、壁外への掘り込みは56cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されており、東西両袖部とも補強材として置き竈の破片を使用している。火床面は床面を8cm掘りくぼめており、皿状をしている。煙道部の平面形は逆U字形で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。袖部内面及び火床面は火熱を受けて赤変硬化している。また、竈の東側は掘り込みが確認できないが、床面からの高さ30cm、長さ150cm、奥行き30cm、面積0.45㎡ほどの棚状施設になるものと考えられる。

竈土層解説

- | | | |
|---|-----|---------------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・燻土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量、ローム小ブロック・燻土粒子・炭化粒子・砂粒少量 |
| 3 | 褐灰色 | 粘土中・小ブロック・粘土粒子多量、ローム粒子・燻土粒子・炭化粒子・砂粒少量 |
| 4 | 黒褐色 | 炭化粒子多量、炭化物中量、燻土小ブロック・燻土粒子少量 |